
パワーショック・ジェネレーション

あずまや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パワーショック・ジェネレーション

【Nコード】

N5172F

【作者名】

あずまや

【あらすじ】

2016年より28年以上も続いている謎の電気消失状態「パワーショック」は、世界中を混乱と飢餓の底に陥れていた。国立工ネルギー研究開発局長のルウ子は、長年パワーショックの原因を解明できずにいたが、元地下賊を名乗る少年バクと出会ったことで、あつけなくその秘密を解いてしまう。これで人々は救われる……そう思ったのもつかの間、復活した電気をめぐって日本は存亡の危機にさらされていく。

ブローグ

2016年10月1日

『優先席付近では電源をお切りください』

車内放送がむなしく響いた。

席がなかば埋まり、ほどよく人が散った電車の三両目。優先席のど真ん中。

なに食わぬ顔でケータイと向きあう女子高生がいた。

橋本ルウ子、十六歳。

ルウ子は残像が見えるほどの勢いで親指を動かしていた。

『せっかくの日曜だってのに、なんであたしらだけガッコ行かなきゃなんないの？』

ルウ子は同志に短いメールを送る。

窓の外はとづくに日が落ち、今は帰りの電車だ。

今日は文化祭の重要な打ちあわせがあるとかで、しかたなく登校したのだった。日頃の夜更かしが祟ったのか、行きの電車では爆睡よだれをふきふき終点で折り返してくるとすでに一時間の遅刻。降りた駅の改札をボーリング玉のごとく駆け抜け、道ゆく人々を三連続ストライク（ターキー）で跳ね飛ばし、近寄ってくる校門番にガン飛ばし、教室のドアを突き飛ばし、男子二名を保健室送りにした。で、煮つまることのない会議が終わるまでそこに缶詰。ケータイにさわる時間などなかった。まったくもって今さらなのだが、それだけは言わせて欲しかった。

数日前のホームルーム。開始早々、重い沈黙が漂っていた。文化祭の実行委員をクラスで一名以上選出しなければならない。この面倒極まりない役目をきつと自分以外の誰かがやってくれるだろう。そんな顔、顔、顔。いつまでたってもお見あいが続いた。責任ある委員を選ぶときはいつもこうだ。

それが我慢ならなかった。

挙手。教室のざわめき。黒板にルウ子の名前。黄色いまなざし。

「どうよ！」と言わんばかりの得意顔。

そのときはそれでよかった。そのときは。

同志から返信があった。

『だったら立候補なんかするんじゃないよ！』

予想通りのキレ気味回答。

『ところでさ、決まったばかりのイインチョ（委員長）がいきなり長期病欠ってなんか怪しくない？』

ルウ子が発信すると、すぐに返事がきた。

『先輩が言ってたけど毎年のことらしいよ。お次は副委員長だろうね』

ルウ子は指先に力をこめた。

『つたく、どいつもこいつも！　じゃあ、あたしがイインチョやるよ』

『どうぞご勝手に』

ルウ子は勢いよくケータイを閉じた。

ため息をつき、ふと車内を見まわす。

向かいあうロングシートの面々は、ちよつとした見世物だった。

くたびれたカバンを携えたメタボ腹。全身偽物ブランドで固めた似非セレブ。イケメンカップル。イケナイカップル。ギャルゲーの紙袋を抱えるチョンマゲ。貧乏揺すり上等のヤンキー等々。

皆、ちがう顔をしている。ちがう服を着ている。ちがうことを考えている。ちがう人生を歩んでいる。でも……彼らはなぜか、同一のプログラムをインストールした汎用ロボットのように通の作業にいそしんでいた。首を前に突き出し、眉間にしわを寄せ、寄り目で画面を見つめ、ときに口を尖らせ、ときに半笑いで、あわただしく親指を動かしている。

ルウ子は正面の窓に映った自分を見つめた。

ソフトクリームを逆さにしたような天然くせ毛が、顔の左右にぶ

らさがっている。

うん、可愛い。

いや、そうじゃなくて。

自分も彼らのような愚かしい姿でケータイに食いついてるんだろ
うか？ そうだとしたらなんか嫌。どんなに粧しても、その小さな
物体に関わっているとき、人々はあまりに無防備だ。せいぜい気を
つけねば。

不要な着信履歴を消そうとしたとき、突如、画面が暗転した。

予告もなしに電池切れ？ ま、いつか。家に帰って充電すれば。

ルウ子はケータイを閉じてカバンにしまい、退屈しのぎに中刷り
広告に目をやろうとした。天井の蛍光灯がやけにまぶしい。

床下のモーターがうなりをあげた。原油価格が高騰しているとい
うのに、無駄に速い電車。

中刷りは料理雑誌のものだった。手作りプリンの写真。

う、よだれが……。

ルウ子はそれで一つ思い出した。三日前、自宅の冷蔵庫が故障し
た。奥に隠したまま忘れていたかぼちゃプリンは諦めるしかなさそ
うだ。

別のことも思い出した。

しまった、ドラマの留守録忘れた！ ケータイは電池切れで遠隔
操作できない。両親の機転が利いたとしても、二人は機械音痴だし。
チイツ、最終回だったのに！

便利な世の中になったと誰もが言うけれど、配線一つ、電池一つ
切れただけで、生活の質は一気に急降下する。

二年前の夏、ネオ・フランシスコ市大停電のニュース。あれはひ
どかった。世界をリードするハイテク都市がわずか数日で一転、不
衛生な難民キャンプと化した。もし、それが世界同時に起こったと
したらどうなるんだろう？

ルウ子が想像をめぐらせていると、今度は視界ぜんぶが暗転した。
床下で吼えていた電動獣は、情けない吐息をもらしながら萎んで

いく。

「え？ マジ！？」

ルウ子は思わず座席を立った。

乗客たちはざわつくものの、パニックまでは至らない。男の舌打ちがいくつか聞こえるだけだ。街灯やビル群の窓からもれる光はいつもと変わらない。どうやら停電したのは電車だけのようだ。

「ったく！」

ルウ子はどかっと着席。

こういうときは不安よりも不満のほうが大きくなる。

夕食を温め直したら味が変わるだの、『小僧の使い』（お笑い番組）まで見逃してしまうだの、とぶつぶつ言っていると、いつしか車内が異様な焦燥感に包まれていることに、ルウ子は気づいた。

乗客たちはこの状況を家族や知人に伝えようとケータイを握りしめているのだが、しきりに同じキーを押しては、電源が入らない入らないと腹を立てている。

ルウ子は眉をひそめた。

これだけの人数がいつせいに電池切れ？ ありえねー。

情性を失った電車がついに止まった。

ルウ子は力無くふり向き、電車を追い抜いていく車を恨めしそうに見送……るつもりだったが、線路沿いの幹線道路は写真のように静かだった。渋滞があるわけでも、事故や検問があるわけでもない。信号は煌々と青ランプを灯しているというのに。

ヘッドライトが消えたのをきっかけに、車の中からドライバーたちが出てきた。ボンネットを開けバッテリーを調べている。

不思議なことが続くものだと思っていたら、今度は街灯が消えていった。近くから遠くへ、まるで誰かがバースデーケーキのロウソクでも吹いているかのような、およそ電気らしくないふるまいが、地上のスポンジの上に広がっていくのだった。

ルウ子はさっと立ち上がると、正面のシートに膝立ち、窓にへばりついた。

こっちもだ！ あ、今度は信号もビルの明かりも……。ルウ子は自分の目と脳を疑った。まるでこの電車を震源として闇が広がっていくように見えるのだ。しかもそれは震源から遠ざかるほどに加速していくのだった。

車窓はあつという間に一面の暗黒で塗りつぶされてしまった。

ルウ子だけではなく、誰もがこう思ったことだろう。

……これはただの停電なんかじゃない。

世間がそれを理解したのは、事件からひと月も後のことだった。

世間が『絶望』という言葉を使いはじめたのも、ちょうどその頃だった。

2019年X月X日

「ハアハア……」

ある廃家の庭先。ルウ子は夕暮れのひつじ雲を呆然と見つめていた。

右手に血のしたたる包丁。左手には煮豆の缶詰一つ。

豆缶は庭の物置で見つけたものだ。

だが、先に見つけたのはルウ子ではなかった。

左胸を赤く染めた仰向けの死体。

ルウ子がつぶやいた。

「また……殺しちゃった……」

捨てられた倉庫を漁ったのか、それとも誰かから奪ったものか、真新しい白のセーターを着た同い年くらいの少女。

ルウ子は包丁と缶詰を傍らに置くと、少女の服を脱がしていった。下着までぜんぶ剥ぎ取ると、今度は自分が素っ裸になった。

古びてどす黒くなった返り血。饅えたような異臭。川で何度洗っ

ても落ちなかった。ずっと着ているつもりだったが、いつかは限界がくる。母校のブレザーともこれでお別れだ。

血染めのセーターにジーンズ姿となったルウ子は、その場で豆缶を開け、包丁の先を使って中身を一気に口へ流しこんだ。

たいした塩気もないというのに、胃袋にひどく滲みる。この前、味のあるものを口にしたのはいつだったろう。

ルウ子は血と汁の入り混じった包丁を見つめた。

汁は半分残した。ルウ子はその缶を少女の青ざめた口の前にそっと置き、涙を一粒だけこぼした。

「今日のこと、無駄にはしない」

ルウ子は懷から電源の入らなくなったケータイを取り出し、少女に見せた。

「これが使える世界……絶対、取りもどすから」

第一章 地下賊

2044年10月1日

その坂には無人の雑居ビルが立ちならんでいた。通りに面したシヨウインドウはどれも欠け、残りカスがかろうじて窓枠にしがみついている。歩道はガラクタだらけで足の踏み場もない。窓ガラスの破片。墜落した極彩色の看板。照明器具の残骸。骨組みだけの車。そこでは街路樹だけがすすくと育ち、アスファルトを突き破って太い根を這わせていた。

坂の途中。路地に身を隠す二人の少年がいた。

背の高いほう。先が破れて七分袖と化したパーカーの少年は、バクといった。黒い髪に黒い瞳。それらの表面はなめらかでありながら、まるで光沢というものがない、不思議な質感の持ち主だった。デクスチャー

バクは丸刈りで二キビ顔の少年に指示した。

「若い奴にはかまうな。老いばれを狙うんだ。いいな？」

ニツキは親指を突き立てた。

「オツケ」

バクはビルの角から顔をのぞかせ、坂下の交差点を見つめた。

かつて、この国のあらゆる流行がこの街ではじまったという。その煌びやかな街は、日が昇り日が沈み、また日が昇るまで若者であふれていた。天災と老朽化で崩れた一部の建物を除けば、その面影は色濃く残っている。だが現在、そこに人間らしい人間はほとんど住んでいない。

その交差点を、老若男女の小さな集団が一つ二つと横切っていく。彼らはその手や背中にふくれたカバンを携えていた。

中身は見えないがバクにはわかっていた。あれは新政府による配給品、その本日分なのだ。こここのところ不作続きでロクなものがまわってこないそうだが、彼らの表情は他のグループとちがって明る

い。

バクはピンときた。収穫があつたのだ。

このゴーストタウンのあちこちに、人知れず眠っている食料品があるという。その多くは缶詰やレトルトパックや干物などの加工食品だ。他にも、酒から菓子までなんでも出てくる。どれも三十年くらい前の代物だ。賞味期限などつくに切れているが、調味料不足のせいで味のない雑炊やイモやカボチャばかりの毎日に比べれば、それはもう宮廷料理のようなものだ。収穫をそのまま食してつかの間の快楽に浸るのもいいだろう。闇市にくり出し、スーパープレミアム価格で売りさばく手もある。

最後尾の集団がぼつと一つだけ遅れていた。脚の悪い者が混じつた老人ばかりの一団だ。ざつと見て二十人。痩せたナイフを片手に、なにかの幻影に怯えながら歩いている。

今日は獲物なしと諦め、バクたちは獵場に行っている隣町から予定より早めに帰ってきたところだった。そこへ、縄張りのど真ん中を横切ろうとする愚か者がやってきたのだ。

いや、あと一分、こちらの判断が遅ければ連中は逆に英雄となつただろう。都合上、わずか十分間だがこの界隈の見張りがいなくなる空白がある。彼らはその情報をつかんでいたにちがいない。

坂通りをはさんで向かいの路地。

バクはそこに潜んでいる十人余りの少年少女たちに合図を送つた。先頭に立つ、穴あきベストを着たおさげの少女がうなずく。

バクたちは持っていたスケボーに飛び乗り、いつせいに坂道を下つていった。

五感の鈍った老人たちに身がまえる時間はなかった。

バクたちはスケボーに乗つたまま、発掘品おたからで満載のカバンをひつたくと、奇声を発しながら交差点を駆け抜けていった。

「全員ついてきてるか？」

バクは顔を左右にふつた。

一人足りない。チーム最年少のニツキだ。

ニツキが狙ったのは大きなリュックを背負った老婆だった。ニツキは体に密着した荷物を強引にひったくろうとして、老婆ともども派手に転んでいた。

「あんのバカ！」

バクはスケボーを捨て、交差点へダッシュでもどった。幸いニツキは額のすり傷だけで、すぐに立ち上がった。

一方、老婆は放置された土嚢のように、車線の上で動かなくなっていた。

「死んだ」

老婆を診ていた禿頭の男がうなだれた。

老婆は心臓を患っていた。ニツキの急襲に驚き発作を起こしたのだろう。何度胸をたたいても、彼女が息を吹き返すことはなかった。老人たちは少年二人を取り囲んだ。皺の谷底にたたえた瞳を赤くし、ふるえる手でナイフをかける。

バクは眉一つ動かさず言った。

「これは事故だ。殺す気はなかった」

「盗人がなにを言うか！」ニット帽の老人が怒鳴った。「おまえたちは人様に迷惑をかけてまで食いつなぎたいのか!？」

「ライオンが老いた鹿を狩るとき、いちいちそんなことを考えると思うか？」

「ライオンでも鹿でもない。我々は人間だ！」

「見た目は同じでも、生き方がちがうんだよ。俺たち地下人とあんたら地上人は、すでに別の生き物なのさ」

「別の生き物……だと？」

老人はナイフの切っ先を下げた。魚の干物のように涸れた唇をなかに開き、白みかかった瞳でバクと見つめあう。

地下人の瞳は光を返さない。まるで乾ききった墨のようだ。

老人は目を伏せた。

言葉の意味を理解したのだろう。

「とにかく、この罪は償ってもらおうぞ」

老人たちの包囲網がじりじりと狭まっていく。

「殺^やりあおうって言うなら……」

バクは笑みを浮かべた。

その背後には引き返してきたチームの面々。ナイフやハンマー、スリングなどで待ちかまえている。

「無駄な殺生をしないのが狩人の流儀。だが、今はこの限りじゃない」

数は互角。だが勝負は見えている。バクのチームは平均で十五歳。バクが最年長で十六。育ち盛りの孫と足腰きしんだ祖父母が戦うようなものだ。

「くぬ……地下賊めが」

老人たちは包囲を解き、遺体を数人で抱えると、恨めしい顔を残して去っていった。

「行っただか……」

バクはほつと息をついた。

婆さんの他は誰も死なずにすんだ……。

バクはニツキの頭をゲンコツで小突いた。

「生き残ったかったら欲張るな」

「ごめんなさい」

ニツキは小さくなった。

「奴らがあと二十若かったら、今頃どうなっていたか……」
バクはそこで言葉を切った。

交差点を囲む廃墟ビル群の一つ。その屋上に誰がいる。

「武警^{ぶけい}だ！ 殺^{ぶけい}しを見られた！」

少年少女たちはあわてて辺りの物陰に散った。

武装警察。通称『武警』。賊やテロ組織などの武装勢力を取り締まるべく結成された、新政府の一組織だ。普通のお巡りとちがい、彼らには特権があった。現行殺人犯とその一味は、逮捕の代わりにその場で全員殺してもかまわないというのだ。

バクたち地下人には戸籍も人権もなかった。国民の飢えを少しで

も減らしたい政府にとってその存在は、人々の配給品を横取りして
いようがいまいが、甚だしく不都合なものらしい。

武警の男は弓をかまえていた。

なぜ銃ではないのか。今どきそんな疑問を持つ者などいない。こ
の街が遺跡となる少し前の『ある日』から、そうするしかないのだ。
他の仲間是要領よく逃げおおせたようだが、ニツキだけは一人顔
をしかめ足もとがおぼつかなかった。転んだときの頭のダメージが
まだ残っているようだ。

バクはニツキに肩を貸すと、逃げ場所を探した。

五十メートルほど前方に地下鉄の出入口がある。かつてはこのひ
び割れたアスファルトの下を、鉄の塊が連なつて疾走していたとい
う。今はバクたち地下人の住居や通路となっている。

武警の男は弓をかまえたまま、こちらを見据えていた。

いつでも狙い撃ちできたはずなのに、あの黒ずくめの男はなにを
考えている。どちらを先に狙うか迷っているのか？ そうであれば
チャンスだ。

「あそこだ！」

バクは地下鉄口を指すと、ニツキの背中をひっぱたいて気合いを
入れた。

目が覚めたニツキはバクとならんで駆け出す。

あと三十メートル。瓦礫とガラクタで半分塞がった地下への階段
が迫ってくる。アジトに帰ってしまえばこっちのもの。暗闇の迷宮
は地下人のホームグラウンドだ。新政府の狂犬といえども、そこだ
けは本能的に足を踏み入れようとしなかった。

あと十メートル。空からはなにも降ってこない。逃げ切れるとバ
クは思った。男は諦めたにちがいない。あの正確無比で知られる武
警のスナイパーがだ。遠くから動く的にあてるといのはそれほど
難しい。

だが、常識は覆った。

「ガアアアッ！」

ニツキの右肩は無惨に貫かれていた。

「ニツキ！」

バクは負傷したニツキを励ましつつ、背後に鋭い視線を送った。男はすでに二の矢を継ごうとしている。

バクはうずくまるニツキを引つ張り上げて肩を貸し、重い足どりで一歩、また一歩と進んでいった。

「バク兄……先……行って」

ニツキは絞り出すように言った。

「……」

ニツキはさらに訴えた。

「これじゃアニキまで……」

「俺にあたれば二人とも助かるかもしれない。たとえ奴が魔神でも一度に二本は引けないからな」

バクは笑顔を作ってみせたが、内心は絶望感でいっぱいだった。

さっきの一射。急所を狙ってわずかに逸れたのだとしたら、こんな牛歩ではもう外すことはないだろう。もし二人とも殺すつもりなら、先に狙うのは……。

バクは半身でビルを見上げた。

男は今まさに弦から手を離そうとしている。

バクはニツキを放り出し、一人逃げ出したい衝動に駆られた。

バカな……。

バクは苦笑した。

仲間を犠牲にしてまで生きのびても、自分に課したあの『誓い』

を……唯一の生きがいとしているあの誓いを守ったことにはならない。

これまでか……。

バクは敵に背を向けた。少しの間そのままだった。苦痛も死の闇もなかなかやってこない。

「？」

バクはおそるおそるふり返った。

「こら、そこーっ！ 調査の邪魔！」

紺色のブレザー。チェック柄のスカート。時代錯誤な格好の少女が一人、狙撃線上で仁王立ちしている。少女は虎縞のメガホンを武警の男に向け、甲高い声でなにやらわめきはじめた。

黄金色に染まった長い髪。竜巻の襲来を思わせる派手な巻き毛を左右に装備。短すぎるスカートの下で露わになった太腿には、生々しい傷痕が縦横に走っている。

バクはこれまで地上地下と多くの人間を見てきたが、これほど違和感のある女ははじめてだった。なにかこう、同じ時代に生まれたはずの自分とはかけ離れた、まぶしさと哀しみを秘めているように感じるのだ。

「……」

屋上の男は射的体勢のまま微動だにしない。

「あっそう」少女は右肩にかかる竜巻毛をバツと払った。「あたしが誰だか知ってて弓を引いてるワケね！」

「！」

男はさつとかまえを解いた。

バクが次の瞬きをしたとき、男の姿はもうそこにはなかった。

「ったく！ 賊を狩ってるヒマがあつたら、電源探し手伝えつての！」

少女の部下らしき者たちが、物陰から続々と集まってくる。その間、少女は延々と武警への批判を口にしていた。少女はバクたちの存在にはいっさい気をとめず、二十三十は年上の部下どもにせつせと指示を出している。

なんだかわからないが、とにかく助かった。

バクは意識のなくなったニツキを背負うと、地下への階段を降りていった。

10月8日

武警の襲撃から一週間たった。

夕刻。バクはアジトの出入口で見張りをしていた。

中年男が階段を上がってきて交代を告げた。

バクは男と入れちがいに階段を降りていった。

地下一階。通路の左右にずらりとならぶ小さな区画たち。地下街の名残だ。当時は衣装やカバンや下着専門店などが入っていたというが、その面影は色あせた看板くらいのもので、多くはバクが属する武闘系チームの住処となっている。

三段ベッドがひしめく部屋のところで、ランタンの炎が揺れている。地上人ならかるうじて本が読めるほどの明るさだが、『夜目』のモードに入ったバクには、これでも少しまぶしい。地下人は昼目と夜目（視覚以外に発達した感覚を含めてそう呼んでいる）を使い分けることができるのだ。

バクは行き交う仲間たちに声をかけつつ、奥へ進んだ。

わがチームの部屋はもぬけの殻だった。メンバーたちは食堂へ行ってしまったようだ。

部屋の隅の事務机に、小柄な少女が一人だけ残っていた。バクの右腕、ミーヤだ。彼女はまだ十四。どちらかといえば年少のほうだが、チームにとっては貴重な頭脳^{ブレイン}だ。

机の隅に積み上がった手作りノートを見ると、食料庫に預けた日々の収穫、安全かつ効率的な狩りの新しい戦術、武警から逃げるルートの研究、修理中の武器のリストなどが几帳面にまとめてある。彼女なしにはバクのチームは機能しないといっても過言ではない。

おさげの少女は狩りの日誌を書き終えると、イスを半分だけまわした。

「バクの分はあたしが代わりにもらっておくから」

ミーヤは床をちょんちょんと指した。

「悪い^{わり}」

バクはミーヤの肩をポンとたたくと、近くの階段からさらに下へ

降りていった。

地下二階は、かつて地下鉄の改札やきつぷ売り場があった場所。旧地下街のような細かい区画は少なく、広々とした通路が空間の多くを占めている。人々は各自でそこに屋台や東屋のようなものを建て、わが家としていた。ときどき天井からゴキブリやネズミ、劣化したコンクリートや錆びたパイプなどが降ってくるため、地下でも屋根は必要なのだ。

この階層では、サービス系と呼ばれるチームが主役だ。仕立て屋、鍛冶屋、雑貨屋、交易所、図書室などなど、アジトの生活を内から支える非戦闘員が集まっている。

バクは騒がしいメインストリートから少し離れた、元『定期券売り場』へ足を運んだ。

その小さな区画は今、医務室となっている。無数のヒビを無数のビニールテープで補修したガラス張りの部屋。その中では、煤けた白衣を着た初老の男が、ベッドに横たわる患者たちの間を忙しそうに行ったり来たりしている。

口を開けたまま文化遺産と化した自動ドア。バクはその縁に立ち、白衣の男に声をかけた。

「先生。ニッキ、大丈夫なのか？」

バクは包帯でふくらんだニッキの右肩に目を落とした。

ニッキはあれから一度だけ意識を取りもどしたものの、手術の後で高熱を出し、再び寝こんでしまった。

「運がよかった。抗生剤を切らしていたんだが……つい昨日だよ。病院に忍びこんだ夜盗チームがやってくれた」

白髪混じりの頬髭が弾んだ。

男の名は百草林太郎^{もくさりんたろう}。肩書きは医師だが免許はない。医大は卒業^でているし証書もあるが、戸籍を失っているため世間では通用しなかった。二年前、百草はこのアジトへふらりとやってきた。以前は別のアジトや地上のバラック街、限界集落にいたこともあるという。

「そっか……」

バクはほつと息をつく、ベッドの縁に腰かけた。すると百草は笑顔を萎ませ、ため息をついた。

「なにか問題でもあるのか？」

「うん？ うーん……」

百草は腕を組み、うなるばかりだ。

ニッキの容態のことで悩んでいるわけではなさそうだ。

あれかこれかとバクが問い続けていくと、百草は重かった口を動かしはじめた。

「抗生剤を盗んだせいで、代わりに命を落とす者がいると思うとな」

「俺たちは……生きるためにやってるんだ」

「今日を生きるだけならそれもいいかもしれん。だが、明日は必ずやってくる」

百草は子供たちに視線を送った。

バクは彼につられて他のベッドを眺めた。

肋が浮き出し腹のふくれた子供ばかりだ。素人が診ても重い栄養失調だとわかる。

今からちょうど二十八年前、世界中で電気に関わるものがすべて使えなくなった。一時の大混乱が収まった後、学者たちはこの非常事態を『パワーショック』と名づけた。その原因も解決法も、未だ手がかりさえつかめていないという。

パワーショックが始まると、人々の生活レベルは一気に中世へ逆もどりした。電気のない生活は武士や貴族の時代にもあったが、あの頃とは人口がちがう。特に、科学文明に頼り切っていた先進諸国の食糧難は深刻なものだった。

わが国は配給制度を導入し、これまでなんとか持ちこたえてきたが、状況は決して芳しくはなかった。配給に依存する地上が貧窮すれば、地上に依存する地下も自動的にダメージを受ける。地下人は長い間、地上人がもたらす物資をあてにしてきたが、これ以上の略

奪は自分で自分の首を絞めることに等しかった。

明日のためにバクたちができそうなことは、ライバルを減らすか、ターゲットを変えるか、あるいは社会のしくみを根本からひっくりかえすことだった。ライバルを減らすということは、すなわち同業者を討つということ。手の内を知った者同士の抗争は共倒れとなることが多かった。また、かつては革命を夢見て新政府に楯突く者もいたようだが、狂犬どものオモチャにされるだけだった。

バクは哀れな子供たちを見つめたまま言った。

「農村や漁村に遠征するっていう手はどうか？」

「交渉するにしても略奪に走るにしても、配給生産者と会うだけでも至難の業だよ。彼らのバックでは、新政府の狂犬、武装警察が目を光らせている。その道のプロでもない限り命がいくつあっても足りないな」

「じゃあ、俺たちはこのままジリ貧かよ」

バクはうなだれた。

「……」

「結界とか神々に守られた秘密の田園とかさ……どこかにないのかな？」

言っつてすぐ、バクは赤くなつてうつむいた。

我ながらなんてガキ臭い妄想だ。

百草はぼそつと口にした。

「まあ、守っているのは神々ではないが……」

「どこだ！」

バクは顔を上げた。

百草はハッとした。

「わ、忘れてくれ。ただの勘違いだ」

「下手な芝居はよせよ。話すまでは帰らないからな」

百草は観念したようにため息をつくと言った。

「日本各地の秘境には、飢えと流血の時代を無傷で生きのびてきた農民の土地があるという」

「それはどこにある」

「……」

百草は首を横にふった。

バクは低く言った。

「帰らねえって言ったはずだ」

「ダメだ」

「なんでだよ！」

「賊でもなく、政府の保護も受けていない彼らが、その土地を何十年も守り続けてこられたのはなぜだと思う？」

「……」

バクは難しい顔を返すだけだった。

「ひと言でいうならば、天然の要害に囲まれた小さな小さな独立国だ。住民は至っておおらかで、放っておけばなんの害もない。だが、従わせようとすると痛い目に遭う。彼らは農民であると同時に戦士でもあるんだ」

秘境の民は再三の命令にもかかわらず、配給用作物の提供を拒み続けていた。新政府は武力制圧を試みたが、堅固な守りに跳ね返されるとあっさり諦めてしまった。新政府がくり出す戦力は、都市や農地を賊やテロから守るだけで精一杯だった。山や谷が一つちがう色の地図になったところで、いちいち騒いでいる場合ではないのだ。「でも、そこにはたっぷり食い物があるんだろ？」

「凶作続きでも一定の人口を維持できるということは、それなりの蓄えはあると見ていいだろう。農業研究も熱心に進めているにちがいない」

「そっか……あるところにはあるのか……」

バクは口もとを緩めた。

「まさかおまえ……」

百草は刺すような目でバクを睨みつけた。

「やらないよ」バクは苦笑を見せつつ、出口のほうへ逃げ腰で退いていった。「ハリネズミに進んで噛みつくこうとするバカな獣はいな

い」

「ならいいがな」

バクは医務室を出ると、独りつぶやいた。

「どうしようもなく飢えていたら、バカにもなるさ」

それからすぐ、バクは同じ階層にある図書室（旧書店）を訪ねた。カウンターに小柄な老司書が一人。イスに腰かけたままうたた寝している。

バクは老人を揺り起こすと、さっそく武装農民の地について尋ねた。

老人は話の半分も聞かないうちに瞼を閉じ、言った。

「死ぬぞ」

「よかったじゃないか。ほんの少しだが、あんたの食い分が増える」

老人はシミだらけの額に手をやると、ため息をついた。

「お主、自分の立場がわかっておらんようだの。有能な狩人が一人減れば、子供の三人四人はたやすく逝ってしまうのだぞ」

「なら、今までのように暮らしていれば、アジトは豊かになるのか

？」

「つく……」

老人は返す言葉につまった。

このまま地上の不況が続けば、我々は次の春を迎えられないだろう。そのことを進んで口にする者はいなかったが、誰もが実感していることだった。

「ちよつと偵察に行くだけさ。隙がなければ諦める」

老人は机の引き出しから一冊の手帳を取り出すと、バクに放った。「各地の情報屋から集めた話をまとめたものだ。地図はともかく、真偽の程はいつさい保証できんからな」

バクは手帳のページをめくってみた。

『コミュニティー』という、自給自足共同体についての散漫な記述があった。少々頼りないが、資料らしきものはこの一冊しかない。

バクは懷からタバコの小箱（現在は一本「黄金一グラムの貴重品」を取り出し、老人の手にそつと忍ばせると、その場を後にした。

深夜。

仮眠から目覚めたバクは、仲間を起こさぬようこっそり部屋を出ると、一人地上の出口へ上っていった。

出口を守っている大男が、疑いの目でバクを見下ろした。

バクは夜襲の助っ人だと告げた。

男はあっさり納得し、バクを闇の中へ送り出した。

ミーヤには一週間以内に必ずもどると、書き置きをしてきた。

バクはアジトを背にしたまま、低く言った。

「悪いな。少しの辛抱だ」

10月9日

バクは朝から目眩がしていた。

毒々しい黒煙を噴き上げる鋼鉄の火山。大巨人の背骨のようなマスト。

それまで書物の中の出来事ではなかったことが、今まさにこの足もとにあった。大きな物体なら街中でいくらかでも目にしてきたが、それが動くとなると話は別だ。

バクが乗ったのは、パワーショック時代では初となる動力つきの船。あくあ丸。新政府下のある科学機関が、無用の長物だったフエリーを改造し、蒸気船として試験的に運行していた。船は統京湾トウキョウ湾の二つの主要港を週に二度ほど結んでいる。

あくあ丸の前後には小さな帆船がついていた。海上警察の護衛船だ。車も飛行機も使えないこの時代、海運は唯一の大量輸送手段といえた。統京湾は一攫千金を狙う海賊の巢窟だった。

バクは屋上デッキの欄干にへばりつき、幼い子供のように首をめ

ぐらせた。

遠くに霞む朽ちかけた摩天楼。

バクはそれを眺めているうち、ひとりでに口が動いた。

「あんな狭っ苦しい檻の片隅しか知らないくせに、俺は偉そうなことを……」

バクはまだ若かったが、アジトの生活を支えている自負は強かった。アジトの中では英雄三傑の一人だ。

「英雄……か」バクは苦笑した。「鳥籠の中でチャンピオンになったって、世の中はたぶんなにも変わらない。アジトの連中をつかの間食いつながせたって結局は……」

バクはため息で独り言をしめくくった。

欄干にうつ伏せようとしたそのとき、背後から男の声がした。

「人生、あまり深刻に考えすぎないほうがいい」

「！」

バクの肩がびくつと跳ねた。

気配がなかった。まともにバックを取られた。相手は素人じゃない。武警か？ それとも海警か？

さつと身を翻すと……拍子抜けした。

そこには、小ぎれいなスーツ姿の中年男が立っていた。

サインペンで一本だけ引いたような細い目。薄い唇。常に笑っているような顔で感情が読み取りにくい。狩人に怯える街の地上人とちがって余裕がうかがえる。左の袖が風にたなびいている。事故かなにかで腕を失ったのだろうか？

バクは男の真の実力をはかりかねていた。トラブルで殴りあいになってもまず負ける気がしない。だが、本能は油断するなとささやいている。

バクはとぼけた。

「俺、なんか言った？」

「いいや、なにも」

「嘘をつくな」

「では、なんと云ったのかね？」

「……」

無意識に口から出た言葉だ。イメージは浮かぶものの、実はあまり覚えていなかった。

男は不意に顔を突き出し、バクの純黒の瞳をのぞきこんだ。

「君はいい目をしているね。なにもかも吸いこんでしまいそうだ」

「どういう意味だよ」

「そのままの意味だよ」

「……」

バクは口を閉ざした。

なにか言えば言っただろう、男の術中にはまってしまいそうな気がする。

男は笑った。

「誤解を招く表現だったかな？ 教えればどんなことでもできそうだと、言いたかったんだよ」

「どんなことでも？ たとえば？」

「たとえば……」男は遠い目をして、中身のない左袖を右手でぐつと握りしめた。「天地をひっくり返すこととかね」

「……」

返す言葉がすぐに思いつかなかった。

「私、おかしなことを言ったかい？」

「あんた、革命家かなんかか？」

「まさか。私はこういう者だよ」

男はバクに名刺を差し出した。

「N・E・X・A？」

「ネクサと読む。国立エネルギー研究開発局だ」

男の名は孫英次^{そんえいじ}。肩書きはNEXAの副局長（兼電力開発部長）とある。

「NEXAか……。そういえばこの船の切符にもそんな名前が書いてあったな」

孫は苦笑した。

「本来はパワーショックそのものを終わらせるために持ち上げた組織なんだが……。現実には皮肉にも、電気に依らない古い機械文明の掘り起こしに力を傾けざるを得ないところだね」

「そもそもさ、パワーショックってなんで起きたんだ？」

孫はちらと腕時計に目をやった。

「おっと、打ちあわせの時間か。我々はその今世紀最大の難問を解き明かしてくれる、優れた人材を求めている。門は狭いが試験は随時行っているよ。では私はこれで」

孫は近くの階段から下層デッキへ駆け下りていった。

バクはぐつたりと欄干にもたれかかった。

「ま、小学校も出てない俺には縁のない話か」

あくあ丸 がめざす港町、木更塚きしづかは南関東の要所だ。そこはパワーショック以後の復興が最も著しい都市といわれ、荒れ果てた都心から数多くの企業や官庁が移転してきていた。条件さえ整えば遷都するのではないか、という噂がちらほらと聞こえる。

なかなか好奇心をくすぐる街だが、そこで遊んでいる暇はない。

バクは木更塚港で船を降りると市街地には入らず、雑草と陥没だらけの旧国道を南へ歩いた。しばらく道なりに行くと、柄が錆びて折れ曲がった標識が目に入った。青地に白で『国道16 ROUTE』と書いてある。

倒れた電柱の下敷きになり、ひしゃげた軽自動車。外れかかった運転席のドア。

中をのぞくと、形や大きさがふぞろいの白い棒や穴の開いた器が散乱していた。

これといった感情は湧いてこなかった。地下ではカルシウムが慢性的に不足している。バクたちは死んだ仲間のそれを粉にして、あらゆる食材にふりかけていた。それを野蛮だと地上人は言うが、地下人は逆に、貴重な栄養を土に埋めておきながらミルクが足りない

と不平ばかり言う地上人を軽蔑していた。

地を這う電線の切れ端に光はなかった。アスファルトを突き破って生えた小さな花のまわりを、つがいのモンシロチョウが舞う。

パワーシヨック時代に入って何年か後、観測史上最大の台風『エリカ』がこの坊総半島ぼっそうを襲った。再開発計画からもれたこの地区にはもう誰もいない。なにもない。遠くのテトラポットが砕くかすかな波音だけがあった。

そこから少し行くと、潰れかかった物置の中に錆だらけのママチャリを一台見つけた。チューブに空気は入っているものの、古くなつたゴムがいつ裂けるかわからない。

バクはチャリにまたがると、雑草を避けながら慎重に走った。やがて目印となる川を見つけ、流れに沿って緩い上り坂を行った。道路は途中、崖崩れで寸断されていた。バクはその場にチャリを捨てると、河原へ降りて巨石や倒木の上を跳び伝っていった。

再び道路にもどってしばらく歩くと、霧がちな峡谷の先にダムを見つけた。

「あれか？」

バクは道の終点まで行き、ダムを見上げた。

絶壁の高さはビル十階分、およそ三十メートルといったところか。壁の下のほうに大きな穴が開いており、ちよつとした滝になっている。このダムは水瓶としての機能はすっかり失っているようだ。

手帳の地図が正しければ、この壁が富谷ふたにコミュニティ唯一の玄関、富谷関ふこくかんだ。角度にして六十度はあるつかというコンクリートの壁。並の装備ではよじ登れそうにないが、よく見ると堤上に向かって一筋のタラップがのびている。壁の頂は霧で隠れていて様子かわからない。

バクは堤の底へ近寄り、タラップに手をかけた。三段上つてすぐにやめた。

見張りらしき人の気配がした。見つかったら弓矢の的になるだけだ。

バクは夜を待つことにした。

日が沈むと、ダムの上にかがり火がならんだ。その頃には霧はすっかり晴れ、提頂に控えている戦力が露わになった。

欄干に張りついている弓兵が十人、その背後に同数の歩兵らしき気配。タラップの延長線を軸に布陣を敷いている。闇に乗じて正面から行くつもりでいたバクは、富谷関からの侵入を諦めざるを得なかった。

ダムを避けるとすれば、あとは村を包んでいる険しい山々を行くしかない。バクは川下のほうへ歩きながら登れそうな場所を探したが、どこまで行っても河原の左右は富谷関より数段高い断崖が連なるばかりだった。

ダムが見えなくなるほど離れたところで、ようやく崖は低く緩やかになってきた。だが、今度は密集した木々が行く手を阻んだ。山へ入ったのはいいが、アスファルトの平たく固い地面しか知らない筋肉は、すぐに悲鳴をあげてしまう。十歩進むごとに息を整える。夜行性の獣どもが不気味なうめき声をあげ、そのたびに手足が止まる。

バクは小山を一つ登りきったところで頂上の大木にもたれかかり、改めて越えるべき山岳のスケールをたしかめた。

本当だ。富谷関はやはり、あの村唯一の玄関だった。

ダムにもどつて一か八かの強行突破をするか、それとも尻尾を巻いてアジトへ帰るか。バクは悩みに悩んだ。なかなか決断できない。気分を変えようと、手前の高山の麓を見下ろしたときだった。

杉林のすき間、斜面の途中にぽっかり口を開けた水道管の切れ端が目に入った。草木をかぶせてカムフラージュしてあるが、バクの目はごまかせない。それにしても大きな管だ。大人でも屈むことなく通れるだろう。

水道管の直径よりは小さい、黒い影が三つ。富谷の警備兵とみた。あそこにはなにかある。

バクは風が強まるのを待ちながら、音を立てぬよう小山を下っていった。

水道管口まであと五十歩というとき。

パキッ！

不覚にも枯れ枝を踏んでしまった。バクはあわてて木陰に隠れた。

「うん？　なんだ？」

若者は短剣を片手に、音がしたほうへ足を進めた。

「猪かなんかだろう？」「ビビりすぎだぜ」

中年の二人が冷やかす。

「どんな小さな異変も見逃すな。隊長の言葉を忘れたんスか？」

若き兵は、サク……サク……と慎重な足どりで枯葉の道に行く。

「わかったわかった」「ったく、そんなに隊長に気に入られたいのかね」

二人はランタン片手にのろのろと持ち場を離れた。

「あんたらだつてそうでしょうが」

「バレてたか」「ま、富谷で隊長に惚れない男はいないからな」

「あ……」

「どうした？」「熊の腹でも踏んづけたか？」

そのとき、バクと若き兵は木陰で向きあっていた。

若者がすうつと息を吸いこんだ瞬間、バクは鳩尾に一発入れた。

中年どもは何度か若者を呼んだ。応答はなかった。異変に気づいた二人は駆け出し、バクとうつ伏せの男を見つけると、ぱつと半歩

退いて叫んだ。

「き、貴様！」「山賊だな！」

「なあ、夜中にこんなところでなにやってんだ？」

兵士たちは答えず、近くの小枝に明かりを引っかけると、短剣を抜き、血走った目でバクにつめ寄った。

彼らは若者が殺されたものと勘ちがいしているようだ。

「ち、ちよつと待った……」

二人はかまわずバクに斬りかかった。

「おっと」

二つの刃は、半身で避けたバクをサンドイッチにした。二人が次撃のために剣を引くと、バクはダンと地を蹴って彼らの頭に両手を突き、宙を舞い、一瞬で背後にまわった。

普段ならこんな芝居じみた戦い方はしない。無駄に余裕が湧き出すのは夜のせいだ。この心と体の昂ぶりは、長く地下で暮らす者には自然と備わるらしい。なかでもバクはそのピークが飛び抜けていた。

兵士たちは身を翻すと、しゃにむに剣をふるった。

バクはそれらを巧みに避けながら後退していった。

水道管の口が真横に來ると、バクはぴたりと足を止めた。

二人は気合いもろとも剣を突き出す。

バクは両手の指先だけでこれをはっしと受け止めた。

「なあ、この穴はいつたいたいなんだ？ 奥になんかあるのか？」

男どもは必死に剣を引き抜こうとするが、万力で押さえた鉄板のようにびくともしない。

「は、放せ！」「貴様には関係ないことだ！」

「そうか。なら、しかたがない」

バクが持ち手をぐいと手前に引くと、二人の手からするりと剣が抜けた。

二刀流となったバクは、空をX字に切って威嚇した。

男どもはひきつった顔で見あうと、水道管の中へ駆けこんでいった。

バクは管を伝って反響する足音を聞きながら後を追った。地下水道管のトンネルは川のように蛇行をくり返しながら、少しずつ勾配を登っていた。ずっとこの調子なら楽に追いつけると思っていたら途中でいきなりすべり台のように急になった。しかも傾斜の部分に限って管の内面が氷のようになめらかになっており、バクは一步踏み出せば、べしゃっとうつ伏してすべり落ちるのだった。

バクはIの字に伏しながら考えた。逃げた連中はロープを持って

いなかったし、特別な靴を履いているようにも見えなかった。とすれば……。

立ち上がって管の表面をよく調べてみると、坂の起点から二メートルほど上ったところから先に、小さな穴が点々と掘ってあるのが目に入った。なるほど、それをガイドに登っていけばいいようだ。ガイドの穴は上下や左右の間隔をランダムに散らしてあった。常人ならば視界はまったく見えないはずだから、先に行く二人はきっと体で覚えたのだろう。

坂を登りきると、トンネルはまた緩やかになった。二人の足音は小さくなってしまったが、バクはあわてなかった。『夜の脚』ならいつでも追いつける自信があった。

勾配の緩急を何度か越えると通路は平らになり、先のほうにかすかな星明かりを認めるようになった。縦穴がある。あそこが出口のようだ。

バクはぐんと加速した。追尾するミサイルのごとく一気に間をつめ、短剣の柄で兵士たちの背中を強打。二人は出口まであと一歩というところで倒れ伏した。

「相手が悪かったな」

縦穴の中心にすわる丸太をよじ登っていくと外に出た。コンクリートの壁や錆びた鉄橋の断片が、出口を取り囲むように散乱している。間道の終点は取水塔の跡地だった。

どこからともなく、薄甘い香りがしてきた。

なんだろうと、バクは遠くを見た。

取水塔跡地をぐるりと囲む木々のすきまから、山あいの湖のような広がりがある。風が吹くとそこはゆらゆら波立つのだが、なぜか水面は澄んだ星空を映していない。

バクは目をこらした。夜のせいで色がよくわからない。

ぐるるる！

腹の虫がなった。なるほどそういうことか。

あぜ道をしばらく歩いていくと、石造りの建物の一群を見つけた。

どの建物も窓がほとんどなく、住居にしてはあまりに無骨な造りだ。きつと倉庫かなにかなう。辺りに人の気配はない。

近づいて鉄扉を引いてみるとあつまり開いた。中は真っ暗だが、地下人バクには関係ない。

農具でもしまつてあるのかと思いきや、所狭しと積んであるのは米俵だった。この飢餓の時代、黄金に値するほど大事なものを、こんな鍵も見張りもない場所で無造作に保管してあるとは。そういえば田畑も無人だった。村の防衛には絶対の自信を持っている、ということなのか。

バクは俵の一つに短剣を突き刺すと、すき間からこぼれだした米粉を両手ですくってバツクバツクにつめていった。

ひとまず今回の目的は達成した。これを証拠に保守派を説得し、食料を奪う計画を立てるのはアジトに帰ってからだ。

袋が一杯になり、バクは喜々としてその肩ベルトに手をかけた。空気の爆ぜる音。

「！」

バクはさつと身を翻した。

「あの間道を一晩かからず突破する者がいたとはな」

倉庫の戸口。上背のある若い女が松明をかざした。

バクは反射的に目を細めながらも、女の美しさに時を奪われた。

眉の上で切りそろえた長めのおかっぱ頭。日本人離れた長い手足と整った顔立ち。ドレスを着せて舞台や銀幕の中心に立たせたらさぞかし見映えがするだろうに……。なんの因果か彼女の身を包んでいるのは、上下で柄のちがうつぎはぎだらけの迷彩服だった。

バクは袋から手を離し短剣を拾うと、切っ先を女へ向けた。

「死にたくなければ、俺に関わらないほうがいい。特に月のない夜はな」

「夜がどうかしたのか？」

女は身じろぎ一つせずと言った。

腰の左には鞘に収まった短剣。右手に松明。どう見ても利き腕が

塞がっている。

「百姓の女と遊んでいる暇はない。失せろ」

「いいだろう。だが、その米を一粒残らず俵にもどしてからだ」

バクは身の程を知らない女にイラついていた。あの松明のせいで、村人がなにごとかと集まってきたら厄介だ。

「そんなに死にたいか！」

バクは一步踏みこむと、女の鼻先へ剣を突き出した。

女はそれを目で追うだけだ。

「どうした？ それでおしまい？」

バクは舌打ちすると短剣を脇に放り、女めがけて突進した。

拳はたしかに女の鳩尾をとらえた……はずだった。感触がまるでない。

女はバクを見据えている。

「！」

バクはハツとして飛び退き、短剣を拾った。

地面の土に残ったわずかな足跡……利き腕がどうかという問題ではなかった。遊ばれているのはこちらのほうなのだ。だが、あの松明さえなければ……。

バクは女の右手を狙って短剣をふり上げた。

炎は左へ右へ、上へ下へとたなびく。

何度やっても、動いたのは女の肩から下だけだった。

バクはついに息を切らし、膝に手を置いた。

「ハアハア……」

「筋は悪くないが……私と出遭うのが早すぎたようだな」

「クッ！」

バクは女を睨め上げた。

「その目……ただの山賊ではないな」女はバクを見下ろした。「だが、おまえがたとえ一国の王だろうと掟は厳守せねばならない。おまえの犯した罪はここでは死に値するのだ。覚悟してもらおう」

女は松明を左手に持ちかえ、右拳を固く握った。

バクはこみ上げる幾多の衝動を抑えつつ、固い笑みを作った。

「まさか、腕一本で殺^やれるとでも？」

「心配無用だ。せめて苦痛のないよう、一撃で葬^{くわ}ってやろう」

女はすつと一歩踏み出した。

バクはわが目を疑った。女の拳がクレーンにつないだ鉄球に見えてならない。

こんなところで人生を諦めたくはなかった。たとえ頭蓋を割られようとも、見届けなければならないことが一つ、あるのだ。

ふと松明に目が行った。ひらめいた。持っていた短剣を女に投げつけた。

女は苦もなくそれをかわす。

その隙にバクは俵山の裏へ駆けこんだ。

女は言った。

「なんの真似だ」

「どうせ肥やしにするんなら、臭わないほうがいいだろ？」

「む……」

女は倉庫の隅の用水バケツに松明を放り投げた。

倉は闇に包まれ、バクを探す女の視線が曖昧になった。

「これで満足か？」

「へへ。火の用心火の用心、と」

バクは俵をガサガサ引つかいて喜びを表した。

「自分の土俵で力を出し切れれば、悔いもあるまい」

女は戸口で待ちかまえている。

バクは女の手の内が読めた。足音が近づいてきたところを、その長い脚でなぎ払うつもりなのだ。

ならばと、バクは『夜の脚』で俵山の傾斜を駆け上がり、頂の俵を蹴ると、突き出した右脚に全霊をこめた。

「！」

女はバクの飛び蹴りを肩に食らい、仰向けに吹っ飛んだ。着地したバクは驚かずにいらなかった。狙ったのは首の骨なの

だ。

「こいつ！ 気配だけでかわしやがった！」

女は星空の下に横たわったまま低く言った。

「邪念のない、いい蹴りだった。殺すには惜しい……」

バクの心と体は一瞬にして樹氷と化した。

身がまえたときにはすでに遅く……鳩尾に女の拳がめりこんでいた。いつ跳ね起きたのかさえわからなかった。

薄れゆく意識の中、女のつぶやきが聞こえた。

「受け損なったのは、わが師を除けばおまえがはじめて。その生への執着……おまえ一人のものではあるまい」

10月10日

雲上へつながる階段を上りつめると、そこは針の筵だった……。
童という名の凶悪な毒針だ。

「み、見るな！ あっちいけ！」

バクは好奇の目で見上げる子供たちに唾を吐きかけた。

目覚めたとき、バクは全裸で礫にされていた。広場の中心にある小さな丘の頂で。

すぐ横の立て札を、幼い少女が読んでいる。

「このみにくいいきものは『ちかぞく』といます。ひとのものをうばったりころしたりするわるいけだものです」

「シヨンベン引っかけるぞコラア！」

バクが吠えると、子供たちは奇声を発しながら散っていった。

まったく、なんて恐ろしい刑を考えつく連中だ。どっちがケダモノだかな。

「ばあいによつては、このままひあぶりになります」

さつきよりは大人びた声が背中に聞こえた。

「な、なに！？」

バクはかんじがらめでふり返ることさえできない。

女は地声にもどして続けた。

「フフ、冗談だ」

「クツ、昨日の迷彩女……俺が地下の者だと、どうしてわかった？」

「あれほど夜目の効く人種は他にはあるまい。だが、私が不覚を取ったのは闇に目が眩んだせいではない」

「なんだと？」

「死地に立ったときのあの気迫……本能以外のものを感じた。おまえは己以外のなにかのために、どうしても生き続けなければならぬ。そうだな？」

「……」

「フン、まあいい。ともかく、おまえごときがこんな危険を冒すほど、地下賊の生活は追いこまれているということだ。その理由がわかるか？」

「地上の連中が受ける配給が減ってるからだろ？ まったく迷惑な話さ」

「そうか……」

女は悲しげに目を細め、空を見上げた。

長い沈黙があった。

女は続けた。

「人間を狩るのは楽しいか？」

「……」

「どうした？ なぜ答えない？」

「心から望んでやってるわけじゃない。食い物がもっと楽に手に入るなら、それにこしたことはないさ」

「楽、とは言い難いが……もっと人間らしいやり方がある」

「どういふのが人間らしいんだよ」

「ここですばらく暮らせばわかる」

「冗談じゃない。アジトじゃ飢えたガキどもが待ってるんだ」

「ま、気が変わったらいつでも呼んでくれ。じゃあな」

「お、おい！ 待てよ！」

女が広場を去った後、バクは連日、村民の注目を浴び続けた。威嚇や唾攻撃にすっかり慣れ、朝から晩まで広場を離れようとしない子供たち。ある一点ばかりを指し、それを表す単語を飽きもせず連発する。

遠くの木陰で談笑する若い女ども。会話が止んだときは、必ず直後に失笑の嵐が待っている。

冷やかし半分に近くを通る中年の農夫たち。女はからから笑い、男はちらちら下を向く。

催したときはその場にたれ流しだった。秋雨が心の傷にしみた。寒さと飢えと極度の羞恥に耐えかね、バクは三日目に観念した。「従う！ 従うから……人並みの扱いをしてくれ！」

すると例の迷彩女が現れ、憔悴しきったバクを毛布でくるむと、診療所へかついでいった。

第二章 富谷コミュニティ

11月3日

「……ハッ!?」

バクは三秒だけ記憶が飛んだ。

富谷関の警備は睡魔ばかりが襲ってくる。動かない景色と睨めっこしてなにがおもしろいというのか。

提頂にはバクの他に兵士が九人いる。その誰もがあくび一つせず、頬を紅潮させつつ下界を見張っている。なぜなら、そこに例の迷彩女……高森昭乃^{たかもりあきの}が見まわりに来ているからだ。彼女が隊長だからということもあるが、もう一つの『理由』のほうが彼らにとって重要らしい。

バクが礫にされている間、村の有力者たちによる裁きがあった。本来、富谷において食料窃盗犯は極刑なのだが、唯一の目撃者である昭乃の計らいでバクは死を免れ、彼女の下に就くことになった。

昭乃は二十五歳。富谷コミュニティ防衛の全権を握る、若き警備隊長だ。自給自足社会である富谷では、なにをにおいても農畜業に人手を割かねばならず、警備隊は慢性的に人員不足だった。賊の者を村に入れるなど前代未聞のことだったが、昭乃はバクの才を惜しんで長老たちに嘆願したのだった。

バクは命を助けられた恩と、仲間の貧窮との板ばさみとなった。しばらくは従ったフリをして、富谷の食料をこっそり流すことはできないか。そんな虫のいいことを考えていた。

バクは双眼鏡から目を離すと、おかまいなしに大あくびした。

「こんな高い絶壁、誰が上ってくるっていうんだよ。見張りなら二人も置けば充分だろ?」

昭乃は言った。

「おまえは上ろうとした。ちがうか?」

「すぐに諦めたよ」

「そう判断させた理由はなんだ？」

「数、だけどさ……」

「弓や刀をふるうだけが兵士の役目ではない。血を流さずにすめばそれでいいのだ」

「……」

バクは不満げに口を尖らせた。

「わかったのなら、もっと仕事に集中しろ」

昭乃はその長い脚で、バクの尻を蹴り上げた。

「！」

バクはあまりの痛さに跳び上がった。

先日、格闘術の訓練でバクは昭乃と正式に手合わせした。結果は惨憺たるもの。プロレス流の力比べでは指を折られそうになり、柔術では絞め落とされて失禁、ムエタイではキック用のサンドバックにされた（尻の負傷はそのときのものだ）。ついでに習った弓術の模範演技では、百メートル先の的に連続ピンホールショット。まるで戦うために生まれてきたような女だ。

昭乃はここ富谷で生まれ育った。小さな頃はひ弱な少女だったが、道場で体を鍛えるようになると、兄弟子たちをこぼう抜きにして、十代のうちに師範代まで上りつめた。現在、道場の師範は昭乃である。道場を開いた彼女の師は、ある事件がきっかけで失踪したらしいのだが、村人は詳しく語ろうとはしなかった。彼らにとってバクはまだ昭乃の弟子ではなく、賊上がりの少年でしかなかった。

午後三時の鐘（廃寺の鐘を拝借している）がなった。

交代の時間。これで今日の仕事は終わりだ。

「やーれやれ」

バクが大きいのびをしながらその場を離れようとすると、昭乃の手がバクの襟首をつかんだ。

「おまえはここで特別授業だ」

昭乃は見張るべき峡谷とは反対側、富谷の慎ましくも豊かな田畑

や、その先に広がる薄黄葉色の山海を指した。

バクはそばにあった木箱に腰かけた。

「またその話かよ」

「なにを言ってる。初等の子供らと一緒に受けるのが嫌だというから、こうして貴重な時間を割いてやっているんだぞ」

バクの富谷における教養レベルは七歳児以下だった。自然と共生することが人間にとっていかに大切か、などと言われてもさっぱりわからない。

「俗っぽい話の一つくらい、ないのかよ」

「なら、今日は趣向を変えて、現代史にしよう」昭乃は小さくせき払いした。「さて、今から二十八年前、原因不明の電気消失事件が起こった。いわゆるパワーショツクのことだ。それまで人々の生活を支えてきた電化文明や自動車文明は一夜にして崩壊した。その後の過酷な食糧難の末に起こった秩序なき暴動……俗に言う『飢餓闘争』のことだが、それによって旧政府が倒れると、日本人は四つの種族に分かれた。一つは我々のようなコミュニティー、一つは離島連盟、一つは賊、そして人口の九割以上を占める一般市民だ。電気を失った人々は、それまでの消費社会を反省し、かつてのように自然とともに生きる道へ還っていくと思われた。

ところがだ。正しい道を選んだのはコミュニティーと離島連盟だけだった。大多数の国民は、豊かだった時代をいつまでも懐かしみ、光に満ちあふれていた当時の物語を語り継いで、親子ともども電気の復活を信じてやまない。彼らは新政府による欠陥だらけの配給制度にすがりつき、どうにか今日まで生きのびてきたというが、地域によっては配給が滞り、餓死者は十万とも百万とも言われている」

「ふーん」

バクは一応は話を聞いている、という返事をした。

「それでも、私はこのまま電気のない世界であってくれればいいと思う。少々不便かもしれないが、長い目で見れば、より多くの人々に平和をもたらすはずなのだ」

「じゃあ、今まさに飢餓の淵で苦しんで多くの市民は放つといいのかよ。できることなら電気が復活してくれたほうがいいんじゃないのか？」

「人類は自らを育んでくれた自然を破壊していった。パワーシヨックはその報いだと我々は考えている。その大罪を償おうともせず、電気を復活させようというのなら、私が身をもってそれを阻止する！」

「何万人が餓死しようが疫病にかかろうが、あんたには関係ないわけだ」

「自業自得だ」

「それってさ、あんたらの嫌いな賊となにも変わらないぜ？」

「なんだと？」

「結局、自分のことしか考えてないのさ。賊は仲間が食っていければそれでいい。市民が腹ぺこでのたうちまわろうと知ったこつちやない。あんたらだって同じだろう。富谷を残してこの国が滅んでもなんとも思わない。俺たちと同じ、獣だよ。クッ!？」

昭乃はバクの胸ぐらをつかみ上げた。

「それ以上言ったら……」

「殺すかい？」バクは息苦しさに顔を歪めつつも笑ってみせた。「なら、あんたは獣以下だ」

「……」

「そんなに怒るなよ。もしパワーシヨックが本当に人類への罰なら、あんたの望み通り、要らない人間の屍がいい肥やしになる世界になつていくさ」

昭乃は手を放し、低く言った。

「宿舎に帰れ」

翌日、バクは警備隊から外され、しばらく田畑で働くことになった。

11月11日

「どうだい坊主。百姓も悪かあないだろう？」

真っ黒に日焼けした老農夫が大根の収穫に取りかかっている。

バクは大根の茎に手をかけた。要領が悪いのか、なかなか抜けない。

「強制労働じゃなければな」

バクは苦笑いを返した。

バクは昭乃の命令でこの老人の助手となった。農作業というのは無駄な動きを極力減らさないと、思いのほか体力を消耗する。長期の栄養不足でスタミナのなかったバクは早々に根を上げた。宿舎に帰って夕食をすませると、あとはもう寝ることしかできなかった。

だが、食欲が満たされる喜びを考えたら、どんなに疲れていても翌日は自然と体が動いた。アジトの仲間にはとても見せられない恥ずかしい野良着も、三食がそろっていることに比べたらなんとも思わなくなってきた。人間、飢えたときにはどんな誇りも捨ててしまうらしい。食うためなら盗賊もやるが、百姓にだってなれる。配給をもらうだけなんて半端な態度だ。今は誰もが飢えている時代なのだから、皆が畑や海に出るようになれば少しは満たされるのではないか、そんな発想が浮かんた。

「なあ、爺さん」

「ん？」

「この国をぜんぶ富谷のようになんできたとしたら、飢えも争いもなくなるかな？」

老人は力かと笑った。

「それができりやおめえ、人間はこんなに苦労しねえって。協力しなけりや死ぬしかねえ。そこまで追いつめられてやっと、すべての『一人』が全員のために動く……それが人間ってやつよ」

「……」

バクの脳裏に、アジトの老司書が語った小説のイメージが浮かんだ。

イジメ軍団に抗う少女たちの話。大国に屈しなかった小国の話。宇宙人に侵略された地球人の話。実話もあればSFもあるが共通しているのは、一つまちがえば死、というところまで追いつめられて、ようやく皆が己を捨てて手を結びあうところだった。

「それにな、オイラたちのような生活を実践するにや、この国は土地が全然足りねんだ。富谷の人口、知ってつか？」

バクはうなずいた。

「二千…… たった二千でこんなに広い土地が必要だったのか？」

土地の名前こそ『富谷』だが、小さな盆地といってもいいほど利用できそうな平地は多い。住むだけなら今の十倍の人数は収容できるはずだ。

「自然に負担をかけず、ともに生きる。つてのがここでの流儀だからよ。そうなると、そこに平地があるからって、むやみに耕すわけにはいかねえのよ」

「そっか……」

富谷のやり方では、この国の人口を支えることなど到底できそうにない。

バクは大根の茎に手をかけた。要領が悪いのか、なかなか抜けない。

2045年2月9日

バクが富谷にやってきてから、五ヶ月がすぎた。

バクは富谷関の堤上でふるえていた。真冬の地下もそれなりに寒かったが、そこが常春の楽園に思えるほど、乾いた北風が吹きさらすコンクリートの上は冷える。

こここのところインフルエンザが流行っており、警備兵に欠員が多

く出た。そこで、バクが臨時で駆り出されることになったというわけだ。

昭乃は白い息を吐くだけで、身じろぎ一つせず監視を続けている。バクは人影一つない峡谷を見つめながらつぶやいた。

「女はいいよな。コートを余分に一枚着てるようなもんだ」

「なにが言いたい」

昭乃は下界を見つめたまま言った。

「その体脂肪、俺によこせよ」

バクは昭乃のわずかな腹の肉をつまんでやろうと、片手を差し出した。

すかさず昭乃は手刀をふり下ろす。

バクはさつと手を返してそれを受け止める。思わず笑みがこぼれた。

昭乃は鼻をならした。

「フン、少しはやるようになったな」

バクは農夫となってからも昭乃の道場には通っていた。この間の暴言を根に持っているのか、昭乃はバクを直接指導することはなかったが、道場をうるついても追い出すことはしなかった。バクは昭乃の技を盗むべく目を凝らすのと同時に、耳も凝らしていた。

昭乃はときどき、齒がゆい胸の内を友人たちに明かしていた。殻に閉じこもらなければ維持できない、ひ弱な社会の発想では、この腐りかけた世の中は変わらない。なんとかしたい気持ちはあるのだが、自分の立場ではこれ以上どうすることもできない、と。

「なんだ、またおまえか！」

そばにいた兵士の大声に耳を打たれ、バクは記憶の海底から浮上した。

左右の兵たちの矢尻がそろって下界を向いている。

何事かと欄干から身を乗り出すと、バクは堤下の川辺に瘦せかけた少女を認めた。

それまで死人のようだった少女の瞳に光がもどっていく。

「バク！」

「ミーヤ！？ ミーヤなのか？」

ミーヤは胸に両手を重ねて吐息をついた。

「よかった……元氣そうで……」

バクはミーヤの哀れな姿から目が離せなかった。

糠床で暮らしていたのかと見紛うほど汚れきったコート。フードの下からのぞいたかつての幼顔は今や、棺の中で千年の時をすごした生け贄のようだ。いったいアジトでなにがあったというのか。

バクは富谷で暮らすようになって以来、小さな無理を積み重ねてきていた。昭乃の監視からは逃れられないと知り、残してきた仲間への憂いを意識の地底に溜めこんでいたのだ。

煮えたぎった地底の湖水は洞穴を埋め尽くし、ついに地上へ噴き上げた。

バクは無断で壁のトラップを降りていった。

「待て！」

弓兵たちは狙いをバクに変えた。

昭乃はそれを片手で制す。

「私が行く」

谷底に降り立ったバクがミーヤと互いに駆け寄ろうとしたとき、二人の間に昭乃が立ちはだかった。

バクは今降りてきたばかりの壁を呆然と見上げた。

わずかな取っかかりしかない三十メートルの絶壁を、あいつは足一つで駆け下りたつていうのか？

バクは気を取り直し、短剣の柄に手をかけた。

「また、と言ったな。どういうことだ」

昭乃はそれに答えず、ミーヤに言った。

「何度来ても無駄と言ったはずだ。バクはもう富谷の人間なのだからな」

ミーヤは昭乃を睨め上げた。

「本気でそう思ってるの？」

「本気かどうかは問題ではない。我々の機密を知った者が誰の許しもなく村を出ることは、人生の終わりを意味する」

「なら、許可をくれ」バクは短剣を抜くと、切っ先を昭乃に向けた。「恩を忘れたわけじゃない。ただ、俺は……やっぱり……家族同然の仲間を見捨てることはできない。ここで暮らすあんたなら、俺の気持ちかわかるはずだ」

「今すぐ私とともに帰るなら、今日のことは不問にしよう。だが、掟に背くというのなら、私はおまえを裁かねばならない」

昭乃は短剣を抜いた。

闘神の化身のような女と、まともにやりあうのはバカげている。

バクは剣を下ろすと、頭をたれた。

「わかったよ。俺はここに残ってもいい」

「バク！」

ミーヤの叫び。

「その代わり、ほんの少しだけでいい。アジトの仲間に食料を分けてやってくれないか」

昭乃は言った。

「私にそのような権限などない。仮に私が富谷の長だったとしても、賊になにかを施してやる理由など一つもない」

「助けてくれたっていいだろ？ 同じ人間じゃないか！」

「都合のいいときだけ同族意識を持ち出すな。地上の市民を動物並に見なしていた、おまえの言えたことか！」

「クッ……」

悔しいが反論できない。そうなのだ。カラスが鷹を説得しようとしても無駄なのだ。これで腹は決まった。

バクは昭乃が目を離れた隙に、そっと目配せした。

ミーヤは前髪の先にすつと手をやる。

バクは持っていた剣をしばらく見つめ、やがて昭乃の足もとへ放り投げた。

「それでいい」

昭乃が目もとの険を解き、刃を収めようとしたそのとき。

「む！？」

昭乃は剣を取り落とし、力無く片膝を地につけると、その体勢のまま動かなくなった。

「クスリ、効いたみたいだね」

ミーヤは結んでいた手を開いて種を明かした。

先端を折った小さな褐色アンプルの底。わずかに残った液体。

風下にいた昭乃は、揮発性の毒を気づかぬうちに吸ってしまったのだ。手の内を心得ているバクは息を止めていた。

もともとは医者百草が開発した『薬』なのだが、濃度が高いと『毒』になる。彼には内緒で外部の者に作らせた、二人の切り札だった。

バクは剣を拾うと、苦悶する昭乃を見下ろした。

「もしもこの世界が、富谷だけだったらよかったのにな。世話になった」

バクとミーヤは川沿いの雑草道を駆けていった。

2月12日

「追っ手の気配がなくなった。諦めたか？」

バクはブルーシートのすき間を塞いだ。口にしていた干し肉を引きちぎり、切れ端をミーヤに差し出す。

「……」

床で膝を抱えるミーヤは、首を小さく横にふった。

バクたちは三日間の逃避行の末、ある捨てられた町の廃工場に忍びこむと、崩落した屋根の下にできたわずかな空間に身をすべらせて一夜を明かした。この食肉工場はずいぶん前に略奪に遭ったようだが、運よく二人の腹を数回満たすだけの干物が残っていた。

助かったという確信はあるにはあるのだが、バクにはどうしても

腑に落ちないことがあった。逃げ切った、というより、逃がしてくれた、という気がしてならないのだ。掟や規律に厳格な連中にしては執念が足りない。

と、ここである一つの可能性を思い描いた。

「フフ……まさかな」

バクは尻の古傷をさすった。

それはともかく、ミーヤには感謝するしかない。

バクの右腕として常に傍らにいたミーヤ。彼女と離ればなれになったのは、知りあって以来、まったくはじめてのことだった。再会したばかりのときは必死でなにもわからなかったが、こうして落着きを取りもどしてみると、どういっわけか気恥ずかしくてしかたがない。

「その……久々の割にはいい連携だったな」

「うん」

ミーヤはそう答えたものの、目は虚ろだ。

「あ、あの、なんていうか、その……」

バクは顔を赤らめ、口ごもった。

「うん？」

ミーヤはバクを見上げた。

「迷惑かけちゃったな」

「ううん」ミーヤは微笑んだ。「生きててくれて……ほんとによかった」

生きててくれて……その物言いが妙に引っかった。

「アジトでなんかあったのか？」

「……」

ミーヤは激しくかぶりをふるだけだ。

「ミーヤ……」

バクはミーヤの傍らにすわると、そっと肩を抱いた。

するとミーヤは堰を切ったようにわっと泣き出し、バクの胸に顔をうずめた。

バクはおさげ髪をなでながら、ひたすら待つだけだった。

言葉は要らない。ミーヤもそれをわかつている。仲間が死んだときはいつもこうしていた。

しばらくしてミーヤはふと顔を上げ、ときおり鼻汁をすすりながら、シヨックで混乱した記憶を一つ一つ整理するように語っていた。

それは去年の暮れのことだった。

「新政府がね、治安対策として武警に地下賊掃討作戦を指示したの。武警は見せしめとして、まずあたしたちのアジトを選んだ。血に飢えた狂犬どもは、ここぞとばかりにアジトの入口に大挙してきた。あたしたちは明かりをぜんぶ消して地底に立て籠もった。武警は闇からの反撃に為す術なく、早々に撤退していった。あたしたちは勝利の美酒に酔いしれた。でも……」

ミーヤはうつむいた。

「でも？」

「それから数日もしないうちに、アジトの仲間全滅してしまった」
「な……」

バクはそれしか言えなかった。

「武警が送りこんだスパイが地底で火をおこしたの。煙でいぶり出された仲間たちは一人また一人と矢の雨を浴びていった。せつかく元気になったニツキの背中にも……」

ミーヤは両手で顔を覆った。

バクはミーヤの昂ぶりが引くのを待ってから訊いた。

「ミーヤは……なんで助かった？」

ミーヤは顔を上げた。

「あたしはその日、武器と食料を交換するために、別のアジトに出かけていた。帰ってきたときはもう、武警の奴らがみんなの遺体をどこかへ運び出そうとしてるところだった。それを見つけたあたしは逆上して、一番近くの男に斬りつけようとした」

「……」

バクは生唾を飲んだ。

相手はプロだ。叶うはずがない。

「それを、百草先生が引きとめてくれた」

「先生が？」

「先生は無医アジトへ往診に行つて、あたしより一足早く歸つてきたところだったの。先生は興奮するあたしを粘り強く説得して、一緒にそこから逃げ出した。逃亡の途中、あたしがどうしてもって催促すると、先生は目撃した虐殺の一部始終を語ってくれた。なかでも黒ずくめの男の話は……」

ミーヤはそこで言葉を切り、牛の生き血をはじめて口にする人のような顔をした。

「……」

「たしか、先生はこう言つてた。あの男の行動は常軌を逸していた。武装した者には目もくれず、無抵抗の子供ばかりを狙つていた。子供をしとめたときの男の顔は狂喜に歪んでいた。冷酷非情な武警の連中もさすがにそれには引いていた。氣に入つた子供は生かして奴隷にすることも妾にすることもできたはずだ。なにも皆殺しにすることはないだろう、と」

人権のない賊は国民の頭数に入っていない。武警が賊を退治してくれるなら、市民は願つたり叶つたりなのだ。だが、武警も人の子。幼い子供を無差別に虐殺することには、さすがに抵抗があるようだった。

「その後は？」

「あたしと先生は、それから蒸気船に乗つて木更塚まで逃れた。栄養不足が足に祟つた先生は、これ以上遠くへは行けないと言つて、橋の下のレストラン街に入つていった。医者が続けるつて。あたしは年越しを機にそこで先生と別れ、一人で富谷を訪ねることにした」

復興著しい都市の裏では悲惨な現実があつた。木更塚の郊外には、二十年以上も前の台風や震災ですべてを失つたまま、未だにまともな住居を得られない不幸な人々が大勢いたのだ。新政府は配給問題

の対応に手一杯で、この事実を看過していた。

ミーヤは微笑んだ。

「十回目から先はもうわからなくなっちゃったけど、諦めなくてほんによかった」

ミーヤがその間どうやって飢えをしのいだのか、バクはあえて訊かなかった。微妙な年頃の女の子に、冬眠する獣や樹皮や草の根……毒でないものならなんでも口にした、などとは言わせたくなかった。

ミーヤの話を聞き終えたバクは、かける言葉を探せないでいた。生きていてくれて本当によかった。そう言いたいのはこっちのほうだ。一人ぼっちの野宿でどれほど寂しい思いをしてきたのか、想像しただけで目頭が熱くなった。とにかく再会できてよかったと、ここは笑顔を見せてやるべきなのだが……。

バクが固い顔を崩せずにいると、ミーヤはいつにない笑顔を見せた。

「あたしはもう大丈夫だよ」
「たまらなくなった。」

「ミーヤ！」

バクはミーヤをがばと抱きしめた。

「バク？」

ミーヤはバクのなすがままだ。

「はじめて会った日のこと、覚えてるか？」

「うん」

バクとミーヤともに孤児だった。バクは生まれながらの地下人だが、ミーヤは地上の生まれだ。

数年前のある日、バクはビルの崩落事故で瓦礫の下敷きとなっていた少女を助け出した。少女は奇跡的にかすり傷だけですんだが、ショックで記憶のほうを失っていた。少女は事故より前のことをほとんど覚えていなかった。両親が自らを犠牲にして守ってくれたことさえ、彼女は知らない。

「絶対おまえを一人にはさせない。俺はたしかそう言った」

「……」

「俺は……嘘つきだ」

「バクのせいじゃないよ」

「ミーヤはバクの背中に腕をまわした。」

「ミーヤ……」

「バクはミーヤを放すと、うつむいた。」

「うん？」

「なぜこんなことになっちまった」

「……」

「なにがいけない！ 誰のせいだ！」

「世の中は複雑すぎて……誰か一人だけを責めることなんてできないよ」

「いや……ちょっと待てよ」

「？」

神々の裁きか悪戯か、それとも何者かの陰謀か、それはわからないが、かつて人々を決定的に支配していた『なにか』が失われたせいではなかったか？ ある日を境に、それは突然なくなったというが、手品じゃあるまいし、たしかにそこに在ったものが突然無に帰すなんてバカげている。正解はどこにある。それを覆う布を、今までの知恵では取り除けないだけだ。正解には至らないまでも、努力を続けている者はいるはずだ。そんな奴に一度どこかで会ったような気が……。

悶々と考えているバクを見かねたのか、ミーヤが声をかけた。

「どうしたの？」

「NEXAだ！」

バクはバツと立ち上がると、ミーヤの手を引っつかんで外へ駆け出した。

「え？ あ、ちょっと！ バク！？」

第三章 NEXA

3月16日

「研究主任、動物実験の結果はどうなってるの？」

橋本ルウ子は手中のケータイをしきりに開け閉めしていた。

白衣の男は言った。

「生体電流に関しては、これといった異常はありませんでした」

「ケータイはウンともスンともいわないくせに、なんで生体だけに電気が流れるのよ」

「現段階ではまだ、その……申し訳ありません」

男は持っていたクリップボードに目を落とした。

「そう……」ルウ子はパチッとケータイを閉じ、スカートのポケットにしまった。「持ち場にもどって」

部屋のドアが閉まった。

ルウ子は後ろへ向き直ると、窓外に広がる夕暮れの統京を見つめた。

すぐ目の前には天を貫く尖塔、新統京タワーがある。

統京。あの頃この時間この街は、もうとつくに光の粒であふれていた。今はまるで、黄色い紙にモノクロ刷りしただけの無粋なチラシのようだ。

「あたしは諦めない」

ルウ子は窓に映った自分の姿を見つめた。

首筋やむきだしの太腿に走る傷痕。それを一つ一つ確認するように触れていく。

「見ていて。あのときの世界、あのときの暮らし、絶対取りもどすから」

ノックの音がした。

ルウ子が入室を許可すると、隻腕の男が入ってきて口を開いた。

「局長。就職を希望する少年と少女がゲートに来ていますが、追いますか？」

ルウ子の肩書きはNEXA、国立エネルギー研究開発局の局長だ。なんで、いきなり『あたし』に訊くのよ」

通常ならば、人事部を通してからルウ子のもとへまわってくる話だ。

「申し訳ありません」

「ところで孫。前から気になってただけど、そのメガネ……なんか意味あんの？」

ルウ子はつかつかと孫に迫ると、男の顔をじつとのぞきこんだ。

男は局での仕事のときだけ黒縁のメガネをかけていた。度は入っていない。

孫はウツと身を退いた。

「そ、それですよ」

「どれよ」

「その眼力です。私のごとき凡人は、なんらかのフィルターを通さなければ、そのプレッシャーに耐えられないのです」

「ふーん」

ルウ子は孫の顔から目を離さない。

孫英次。NEXA 副局長、兼電力開発部長。組織のナンバー2である。かつては新政府の外務省にいたが、外交では飢餓問題は解決しないと悟って失望し、別の仕事を模索していた。科学省にいたルウ子と知りあったのはちょうどその頃だ。孫はルウ子が秘めていた構想に魅せられ、NEXA 発足に陰から貢献したのだった。

「ま、まだなにか？」

「別に。あんたが持ちこんだ話なら、とりあえず聞いとくわ」

孫は元地下賊を名乗る少年と少女の素性や志望動機について簡潔に報告した。

ルウ子は腹をかかえて笑った。

「あの絶境に一人で飛びこむバカがいたとはね……。バクってコ、

おもしろそうじゃない」

「少女のほうは捨てますか？」

「セツトのままでいいわ。男ってのはね、女の視線があるとよく働くものなのよ」

3月17日

昼下がりの晴天の下、バクとミーヤは新統京タワーを見上げていた。

地下にいた頃、この青白き塔を霞の彼方に何度か見かけたことはあったが、こんなに近くで見るのははじめてだった。

それは今から三十五年前（2012年）に完成した、当時世界一の高さを誇った電波塔だ。完成から数年はテレビ放送用アンテナや展望台として使われていたが、パワーショック時代（2016年）に入ると、無駄に背が高いただけの高層ビル群と同様、電化文明の墓標と化していった。その後、2030年に発足したNEXAは、放置されていたタワーと周辺の建物を改修、そこを総本部として活動をはじめた。

バクとミーヤは街角の配給の列に混じってその情報を得たが、それ以上のことはよく知らない。

「やあ、待たせたね」

すぐ手前の高層ビルの玄関から声がした。バクが蒸気船で同乗した隻腕の男、孫英次だ。この前は裸眼だったが、今日はメガネをかけている。

二人を連れてきた大男は持ち場へ帰っていった。

孫はバクに歩み寄った。

「来てくれるだろうと思っていたよ」

「たった一度会っただけで？」

「私はたくさん人に会っているからね」

孫は微笑むと、バクとミーヤを連れてビルの中へ入った。

バスケの試合ができそうなほど広大な一階ロビー。その中心に受付カウンターがあり、白い顔の女二人が会釈する。

バクが女の化粧顔を物珍しそうに見ていると、サングラスをしたスーツ姿の男女が現れ、バクとミーヤの背後に立った……と思った。いきなり暗闇になった。

「なんの真似だ！」

バクは目隠しを取ろうとしたが、男のこつい手がそれを阻んだ。

孫は言った。

「まあ、落ち着きたまえ。当局は高度な機密が多いのでね。正式な職員になるまでは、それで我慢してもらうよ」

バクが文句を言いかけると、孫が先に耳もとでささやいた。

「君はNEXT Aに入りたいのだろう？」

バクはひとまず彼らに従うことにした。

立っているだけで気分が悪くなる小部屋。短くベルがなる。シューという空気の音。ドアがスライドする。やけに足音の響く通路を歩く。何度か直角に曲がる。専門用語を交えた男女の熱い議論の前を通過。シリンダーをまわす音。錠が外れる音。ドアが二度スライドする。少し歩く。ノックの音。籠もった女の声。ドアが開く。三歩進む。ドアが閉まる。

「目隠しはもういいわ」

聞き覚えのある少女の声。

バクとミーヤは自ら目隠しを取った。

左右の壁には無数の本が敷きつまっている。左手は盾にも使えそうな分厚い専門書ばかり。『電』という文字を含んだタイトルの背表紙が多い。右手はどこで発掘してきたのか、少女マンガだらけだ。幅広の机の向こう、窓際に金髪少女の後ろ姿。

紺色のブレザー。挑発的に短いスカート。太腿の傷跡。そして一度見たら忘れられない左右の竜巻毛。まちがいない。バクを狙った

武警の男を一喝で蹴散らした、あの少女だ。

少女はくると向き直った。

「はじめまして。NEXA局長、橋本ルウ子よ」

バクは記憶をたどった。はじめまして……か。

ルウ子の双眸は、はなからバクに釘づけたった。

赤光りする左右の鰻がバクの双肩を焼いた。

「あ、えっと……俺、俺は……」

国立機関の最高責任者が高校生だと？ 理性では担がれたのかと頭に血が上っているのだが、感性では肩書き以上のプレッシャーを感じており、混乱したバクは自分の名前を思い出すことさえままならないでいた。

緊張するバクを見かねたのか、ミーヤが代わりに紹介した。

「彼はバク、名字はありません。で、あたしは……」

ルウ子はそこで遮った。

「あんたはいいの」

「……」

ミーヤはむつと口を尖らせた。

ルウ子は続けた。

「動機はわかった。でもね、ウチは一般企業みたいに、学力とか経歴とか人柄とか適正とかやる気だけで採用するほど甘くはないわよ」
「それ以外になにがあるってんだよ」

ルウ子は人差し指をびしとバクに向けた。

「失われた電気がどこへ行ってしまったのか。それを見つけてきなさい。そしたらあたしの権限で即採用したげるわ」

「そ……」

バクが不服を言いかける、と同時にミーヤが怒号砲をぶつ放した。

「そんなの無茶苦茶だよ！ それってNEXAの事業そのもの……」

「あんたには言っていない」

ルウ子はすかさずそれを撃墜した。

「ここに呼ばれたってことは、あたしにもテストを受ける資格が……」

「……」
「あんたはバクが合格したら合格、不合格なら不合格なの。これ以上無駄口たたくなら人体実験にまわすわよ！」

「……」

両手に拳を作り、屈辱に耐えるミーヤ。

バクはその片方にそつと手をかぶせ、話を続けた。

「ノーベル賞級の科学者たちがどんなに頭をひねってもダメだった。そんな噂を街で耳にした。採用するつもりがないなら、ハッキリ言ったらどうなんだ」

「しょうがないわね。じゃあ有力なヒントでも我慢したげる」

まともな教育を受けていないと知っていながら、いきなり世界最高の難題を突きつけ、しかもしょうがないからヒントで我慢してやるとは……傲慢を通り越して子供のイジメだ。

それでもバクはこの駆け引きに乗った。

「いいだろう」

「バク！」

ミーヤは驚きを隠せない。

「ただ、その……俺たちは今、住所不定で無職なんだ」

「あたしが指定した仕事を文句一つ言わずにやるなら、施設は自由に使っていいわ。ただし、試験期間中にかかった費用は後の給料から天引きよ」

「見習いの料理人以下だな」

「衣食住がそろってるだけでも、恵まれてると思いなさい」

「わかったよ。で、期限は？」

「期限？ そんなものないわ。死ぬまでこき使ってあげる」

ルウ子は目を細めると、高飛車な令嬢を真似た、いかにもわざとらしい嘲笑をふりまいた。

「上等だ！ 行くぞミーヤ！」

「あ、ちよっ、バク……」

バクはミーヤの手を引っつかむと、足早に局長室を出ていった。

孫は局長室に入るなり、ルウ子に言った。

「あんな無茶な採用試験など聞いたこともありません。二人はまだ大学さえ……」

「天才や秀才ならもう間にあってるわ。あたしが欲しいのは子供らしい発想なの」

「子供、ね」

孫はルウ子の女子高生ぶりをまじまじと見つめた。

十年ほど前のある日のこと。ルウ子はいったいどこで拾ってきたのか、パワーシヨック以前に存在していたある高校の制服を何セツトか手に入れていた。以来、彼女はその制服で出勤することにこだわっている。

「なによ」

「いえ、別に」

孫がはじめてルウ子を見たのは2027年、科学省を訪ねたときのことだった。あのときの衝撃は大きかった。いつから現役高校生を採用するようになったのかと、同僚に訊いてまわったほどだ。それから十八年たった今、ルウ子は当時と変わらぬ瑞々しい肌をしている。いったいどんな魔法を使えば、どんな靈藥を飲めば、そのような若さを保っていられるのか。孫は不思議でならなかった。

「ところで、おおしな大品発電所の改造計画はどうなってるの？」

「順調です。あと一週間もあれば、石炭用火発として稼働できます。ただし……電氣そのものを取りもどせればの話ですが」

「ひと言余計だわ」

「失礼しました」

「冗談よ」ルウ子はフツと眉を上げた。「仕事にもどって」

孫は一階へ降りると、手帳に目を通しながらガラス張りの玄関を抜け、そのままビル前広場を行った。

そこでふと、女の気配がして孫は立ち止まった。

「君か」

孫は手帳を懐にしまった。

広場の木陰に豊艶な女が一人たたずんでいた。和藤栄美^{わとうえいみ}。電力開発部に所属する直属の部下だ。

七年ほど前、孫はある科学雑誌に載っていた一つの論文と顔写真に目をとめた。女は民間の小さな研究所に勤める、三十前の才気ある新鋭だった。研究そのものはどうでもよかったが、孫は迷わず和藤をNEXAへ引き抜いた。

昼休みが終わって間もないせいか、辺りは一時限目の校庭のようにひっそりとしていた。NEXAの敷地は堅固なフェンスに囲まれている。市民街のような喧騒や人目とは無縁だった。

和藤は言った。

「浮かない顔ですね」

「たとえば、コップから蒸発した特定の水をすっかり元通りにしてみせよ……と言われたら君はどうする？」

「それは……」

和藤は視線を落とした。

春を告げるつむじ風が二人を煽った。

和藤の長いくせ毛が顔にからみつく。

孫は右手でそれを解いてやった。

「あの輝きを再び味わうことはできそうにないな。少なくとも、私の二十一世紀ではね」

孫は2000年生まれの子四十五歳。彼の人生は二十一世紀の繁栄や荒廃とともにあった。

「なら、現実的な『古い機械文明』のほうに力を入れたらどうですか？」

「すでに一度究められた技術では、世界をふり向かせることなどできんよ」

「ふり向かせる、ではなく、復讐……でしょ？」

和藤は孫に寄り添うと、あるべきものがないそのつけ根に手を触

れた。

「考えたことがないといえば嘘になる。だが、私は根っからの臆病者でね」

孫は口もとを緩めると、すつとメガネを外した。

「……」

「このまま電気のない世界が続くのならば、私はただ歳を重ねていくだけでよ」

「可哀想な人」

和藤は孫の首筋にそつと唇を寄せた。

「まあ、このままでも一つくらい、いいことはあるか」

孫は寂しげに微笑んだ。

4月1日

バクとミーヤはNEXAの敷地内にある宿舍で暮らし、タワー周辺の研究所群（旧ショッピングモール）に通い続けた。二人はまず基礎的な科学知識を得ようと所内の研究員たちを捕まえたが、彼らは担当する仕事のことで頭がいっぱいで、誰一人まともに取りあつてはくれなかった。

昼は自由をあたえられたが、夜は便所掃除の仕事が待っていた。

バクとミーヤはモップを動かしながら不安な胸の内を語りあつた。

このままでは本当に消耗品として、死ぬまでルウ子にこき使われかねない、と。

裏方衆の間ではダークな局内伝説がささやかれていた。焼却炉の周りの土が他とちがって白みを帯びているのは、そこに人骨の粉が混じっているからなのだという。

その日の夕方、バクとミーヤはタワー二階のラウンジで途方に暮れていた。

ボルトとアンペアのちがいさえよくわからない。夜の仕事は臭いしかつた。そんな話をしていたときだった。

柱の陰から見知らぬ女が現れ、いきなりミーヤの隣席に腰かけた。縁なしメガネに大人しげなボブ頭。年頃の日本人女性の顔を平均したような、どこにでもいそうな感じの女。

バクは正面のミーヤと無言の会話を交わした。

空席だらけだというのに、なんなんだいったい。

女は使いすぎたパンツのゴムのように緩みきった口調で言った。

「ごめんなさいね。彼らにも厳しいノルマがありまして、必死なんですよ」

女の名は松下^{まつしたけい}蛸。人事部からやってきたという。見た目は普通すぎるほど普通だが、中身の歯車は若干噛みあわせが悪そうだ。

それにしても、まるで現場を見てきたような物言いが気になる。

バクは言った。

「で、あんたはここへなにしに来た」

「え？」蛸はきょとんと目を丸くし、ほどなく我に返った。「ああ、そうでしたそうでした。私はこれからお二人の教育係を務めさせていただきます、松下……」

「名前はもう聞いた」

蛸は自分の頭をコチンと小突く。

「アハ……ハ……ハハ……」

なにもないところで転んだときのような、痛々しい繕い笑い。ずり落ちるメガネ。

大丈夫なのか？ この人。

ミーヤは訊いた。

「あたしたちの知りたいことを教えてくれるってこと？」

「あ、はい。局長はそのくらいのハンデはやってもいいだろう、とおっしゃっていました」

「意味わかんないよ！ いつから採用試験が真剣勝負にすり変わったワケ？」

「その……私のような末端では、詳しい事情はちょっと……」

蛍は首をすくめ、眉を八の字にした。

バクは蛍に気づかれぬよう、密かにぷつと吹き出した。

いちいちわかりやすいリアクションを取る人だ。

そこでふと、バクと蛍の目があった。

蛍は澄んだ瞳をまっすぐ向けたまま、首をくいとかしげる。

バクは直感した。少なくとも、イジメ要員とか刺客の類ではなさ

そうだ。それにしても……。

バクはつつつと視線を下げていった。

はじめて見たときから、その豊かな胸もとが気になってしかたがなかった。この飢餓の時代に、なにをどれだけ食ったらそうなるのかという疑問が半分。あとの半分は……。

「なに考えてるの？」

ミーヤは身を乗り出し、バクの顔をじつとのぞきこんだ。

「い、いや別に」バクはミーヤの小さな胸をちら見して、すぐ蛍にふった。「これからよろしく、先生」

7月14日

バクとミーヤがNEXAに転がりこんでから四ヶ月。

パワーシヨック時代に入ってから以来、人類が化石燃料を使う機会はずいぶん減り、地球温暖化の人為的な元凶はその影を薄くしていた。乱れていた気象は少しずつ回復していくにちがいない。学者でなくとも誰もがそう考えていた。

では、この異常な天気はどう説明してくれるのか。

早朝、みぞれが降った。梅雨が明けて暑さが本格的になろうかというこの初夏にだ。みぞれはやがて小雨に変わり、朝食が終わる頃には止んでいた。

バクの眼下には干涸らびた統京の街があつた。雨が降っても水を吸いこむ余地はなく、新しい命は何一つ生えてきそうにない。

バクの脳裏に昭乃の姿が浮かんた。「その街をしかと見よ。電化文明のなれの果てだ」とでも言いたいのだろう。こうして上から眺めてみると、その怒りが少しだけわかるような気がした。

ここは地上450メートル、かつて特別展望台と呼ばれていた新統京タワーの要所だ。現在は研究用の植物園となっている。朝の凍えそうな寒さとはうって変わって、室内は蒸し暑い。タワーから少し離れた区画に、大きな煙突を備えた清掃工場のような形の建物が見える。エレベーターの動力や温室の暖房はそこで生み出した蒸気でまかなっているのだろう。

今日は日曜日。蛍の授業はない。図書館めぐりも取り止めた。バクとミーヤは久々に朝から宿舎でだらすごしていた。忙しい日々の中にあつてこそ怠惰は満喫できるもの。ときにはこんなガス抜きも必要だ。

二人が小さな幸せに浸っていると、面接以来沙汰なしたったルウ子から、いきなり呼び出しがかかった。今すぐタワーのてっぺんに来いと言ふのだ。

使いの者が去った後、二人でさんざん文句をたれた。だが、独裁者ルウ子の「口答えするなら人体実験よ」には逆らえない。というわけで、こうしてはるばる天空へやってきたのだが……。

「ったく……そっちから呼び出しという遅刻かよ！」

バクはガラス張りの窓壁を蹴った。

強化ガラスはびくともせず、足が痺れるだけだった。

「でも、おかげでこうして……」

「うん？」

「いや、なんでもない」

ミーヤは顔を赤らめ、かすかに身をよじって下を向く。

「……」

バクはミーヤをじっと見つめた。

「な、なによ、人の顔じろじろ見て」

「ミーヤ。実は今まで言えなかったことが一つ、あるんだ」
「え？」

ミーヤは潤んだ瞳でバクを見上げた。

「風呂は毎日入れよな。フケが出てる」

「バカア！」

乾いた打撃音が一つ、密林に響いた。

「はいカットゥー！」

木々のすき間からにゅっとルウ子が見れた。

「て、てめえ……」

バクは腫れあがった頬を押さえながらルウ子に迫った。

ルウ子は鼻をならした。

「せーっかく氣い遣って待っててあげてたのに、十円芝居見せられただけだったわ」

「あんたの辞書に氣遣いなんて言葉はないだろうが！」

「あら、そんなことないわよねー？」

ルウ子はミーヤの肩に手をまわした。

「……」

ミーヤはうつむき、黙ったままだ。

バクは皮肉たっぷりに言った。

「それで、超多忙の局長様ともあろうお方が、用務員見習いごときになんの用ですかね」

ルウ子はそれに動じることなく、穏やかな顔で促した。

「まあ、すわんなさい」

二人は草の上に腰をおろした。

ルウ子は窓のほうを向くと、二人を背にしたままずっと押し黙っていた。

バクとミーヤも黙っていた。余計なことを言って火傷したくはなかった。

しばらくして、ルウ子は口を開いた。

「で、どうなの？　なんかいいことひらめいた？」

「……」

「そう……」ルウ子は肩を落とした。「あれからもう十五年になるのね」

十五年。NEXAが発足してからのことを言っているのだろう。

「日本で最高の人材を集めたわ。最高の研究設備もそろえた。最高のセキュリティを確保して、最高に集中できる環境をあたえた。それでも……電氣を取りもどすきっかけさえつかめなかった」

再び長い沈黙があった。

その間、バクはルウ子の後ろ姿から目が離せなかった。

短すぎるスカートの下から縞柄のパンツが見え隠れ……じゃなく、ルウ子が見た目通りの高校生だとすれば、十五年前といったら……。ちよつと待て。やつと立てるかどうかの幼児になにができるっていうんだ。

バクは言った。

「一つ、訊きたいことがある」

「なあに？」

ルウ子は背を向けたままだ。

「あんた、実際いくつなんだ？」

「いくつに見える？」

「十六」

ルウ子は低く言った。

「じゃあ、そういうことにしといて」

歳のことは聞かれたくない、か。ルウ子が普通の女ならばこれ以上追及すべきではないが、彼女は素顔以外のなにもかもが、現代の少女とは異質に思えてならない。

バクは質問を変えた。

「なら、その十五年前、あんたはどこでなにをしていた」

「今と同じよ」

「どこか矛盾を感じないか？」

「なにも」

ルウ子は手強い。当時はたしかに十六だった、とするなら今は三十一か。「童顔だから」「老けるのが遅いだけでしょ」「努力してんのよ」……なんとでも言える。だが、バクにはわかっていた。同年代間にしかわからない直感とも言つべきか。ルウ子は明らかに十代の少女なのだ。

バクはそれまでの疑問をふまえてよく考え、一つの仮説に手をかけた。

「思っただけどさ、この世にかけられた呪いって、パワーショック以外にもあるような気がするんだ」

「！」

ルウ子の肩がぴくつと跳ねた。

バクは立ち上がった。

「きつとなにか大事なことを見落としてる。パワーショックの第一日目……電気が失われたまさにその当日その時間。教科書的な歴史のことじゃなく、あんた個人の話をしてくれないか？」

「その他大勢とたいして変わらないわ」

「いいから早く」

ルウ子はようやくこちらを向いた。

「その夜、あたしは高校の課外活動を終えて帰りの電車に乗った。少して、いきなり車内が真っ暗になったかと思ったら減速しはじめて、最後は止まってしまった。ここまでなら『ああ停電か』と誰もが考えるでしょ。でも、そのすぐ後、乗客のケータイや外を走る車まで沈黙したのよ。街灯が消え、ビルの明かりが消え、闇はじわじわと外へ広がっていった。まるでその電車が暗黒の震源であるかのように、すごく不自然な光景だったわ……」。

それから十四年たって、NEXAを興したあたしは記憶をたどり、パワーショックはやはりあの電車からはじまったと見るようになった。そこで、当時の車両の残骸を見つけて徹底的に調べた。でも、わかったことは何一つなかった。これでぜんぶよ」

「むう」

バクは草の上にあぐらをかいて腕組みした。

ミーヤは言った。

「頭丸めて座禅したほうがいいかも？」

「うるさいなあ」

バクはルウ子の姿をぼうつと見つめた。

ルウ子はたしか『高校の課外活動』と言った。パワーショックが
はじまったのは2016年。今は2045年だ。どんなに若作りを
しようたつて無茶がある。

バクは確信した。ルウ子の体は老いることを忘れている。ルウ子
の肉体的な時間は、パワーショックがはじまったまさにそのとき、
止まってしまったにちがいない。

「電車が停電になる前、なにか気になることはなかったか？ 些細
なことでもいいんだ」

「そうね……」

ルウ子は言うど、ブレザーのポケットに手を突っこんだ。二つ折
りのケータイを取り出し、せわしく開け閉めしたかと思うと、す
ぐにまたポケットにしまった。

考え事をするとき無意識にやる癖なのだろう。それはともかく、
ずいぶんと物持ちのいい人だ。三十年も前に使えなくなったケータ
イなんかなんのために……。

「そのガラクタは御守りかなんかか？」

「うん？ これ？」ルウ子は再びケータイを取り出すと、なにかを
思い出したのかぐつと目を見開いた。「あ、そういえば、ケータイ
でドラマの予約録画しようと思ったら、電池切れだったんだ。朝、
満タンにしたはずなのに」

「今なんて言った？ 電池がどうしたって？」

「だから、電池切れで……」

「それが電池切れじゃなかったとしたら？」

「なんでそうなるのよ。あたしのケータイが切れたのは、パワーシ

ヨックの前……」

「前じゃなくて、ゼロ秒後だったとしたら？」

「！」

ルウ子は身を固くした。やがて体中に微震がはじまり、ほどなく中震、激震となり、頭が大噴火した。

「どういうことよ！　ちゃんと説明しなさい！」

巨艦の砲声のような轟きだった。

バクはしばらくの間、髪が後ろ向きに逆立ったままよろめいていた。

ぶんぶんと頭をふり、故障した耳をたたいて、ようやく復帰。

「そのケータイはよく調べたのか？」

「測定機器一つ取ったって、電気が必要よ」

「そうか……じゃあ、ケータイはひとまず置いておこう」

「他になにがあるってのよ」

「その持ち主のほうさ」

バクはルウ子を指した。

「あたし？」

「自覚がないとは言わせないからな」

バクは微笑んだ。

「なんのことかしら？」

ルウ子は微笑んだ。

バクとルウ子は笑顔のまま、何分も睨みあった。

ミーヤは息を殺し、せわしなく二人を見比べている。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「ふう、まいったな……」

ルウ子は目を伏せ、うなじをぼりぼりかいた。

か、勝った……。

気づくとバクは、街角での殴りあいの後のように、全身汗にまみれ肩で息をしていた。

「まさか、自分が問題の核心かもしれないとは一度も考えなかったのか？」

「考えたわ。ついさっき」

その後のルウ子のスケジュールはすべてキャンセル。バクとミーヤは特務研究員としてルウ子の直下に就くことになった。

翌朝から、ルウ子の人体研究がはじまった。

7月15日

せわしなく行き交う白衣たちの中、薄桃色のガウンを着たルウ子は、取材に飽きた二流アイドルのような面で一人イスにすわっていた。

なにしろ電気が使えないため、分析できることは限られている。

身体検査、血液検査、体力測定、精神鑑定、催眠術にスピリチュアルカウンセリングにタロット占い、などなど。あれこれ試してみたものの、ルウ子は至ってありふれた人間だった。

7月16日

その日から、バクとミーヤはルウ子の全スケジュールにつき添うことになった。わからないときはとにかく観察せよ、というわけで会議中でも食事中でも入浴中でも読書中でも下痢をしているときでも、二人はルウ子についてまわった。デリケートな分野は同性のミーヤが専属となったが、ルウ子は観察者が偏ることに不満をもらしていた。

7月28日

ルウ子の観察がはじまって十三日目の深夜。

「あ、あの……ほ、ほんとに俺でいいのかよ」

バクは直立不動で寝室の出入口に立っていた。

「どっちかといえば、あんたのほうがひらめきがあるからね」

ルウ子は下着姿でベッドに横たわったまま、手招きしている。

ルウ子は家を持っていない。NEXA本部はすなわち、ルウ子の自宅だった。専用の寝室は局長室の隣にあった。

今日からバクはミーヤと代わり、一晩中ルウ子の睡眠をモニターすることになった。ミーヤは激しく反対したが、ルウ子の命令は絶対だ。

不規則に揺れるランタンの炎が本能の奥底をくすぐる。

バクは健康な男子として複雑な気分だった。過ちが起きたとなれば命が危ない。ただ見ているだけで一夜をやりすごす自信もない。

「な、なにがあつたって、知らないからな」

「なにがって、なによ」

「だから、その……俺、男だし……」

「あ、そっか。その検査はまだだったわね。なんなら、今試してみる？」

ルウ子はブラのホックに手をかけ、肩紐をするりと外す。

バクは思わず後ずさるうとしたが、閉めたばかりのドアがそれを阻んだ。

「ま、待て。こ、こここ心の準備が……」

そしてルウ子は胸を露わに……とはならず、別のブラが出てきた。ルウ子は外したほうをちらつかせた。

「防刃下着よ。ほら、あたしって超VIPだし」
「バクはほっと息をついた。」

ともかく、皮一枚かぶっていてくれればひとまずお互い安全だ。そう思った矢先……ルウ子は本命まで脱ぎだした。

「お、おい！」

「寝るときは外すものなのよ」ルウ子は今度こそ胸を露わにすると、二枚目のブラを床に放り投げた。「そんなところに突っ立ってないで、ちゃんと観察しなさいよ。じゃ、おやすみ」

ルウ子は布団をかぶった。

バクは額に手をやった。

この人の脳は醗酵しすぎて本物の味噌になってしまったにちがいない。中身はオバサンなんだ。理性ではそう言い聞かせていても、下半身はなぜか熱を帯びている。少女と熟女が混在して……。バクは金縛りにも似た半夢半実感に襲われた。

「まるで拷問だな」

バクはそうつぶやくと、寢床のそばにある丸イスに腰かけた。

ルウ子は早くも寢息を立て、寢返りを打ちはじめた。

掛け布団が乱れる。

バクはふるえる手でそれを直す。

「なんでこんなことしなきゃならないんだ……」

なんでここで我慢しなきゃならないんだ。

二つの本音が錯綜する。狸寝入りだったらまずい。安全なほうを表に出しておく。

やがてルウ子の寝相は落ち着き、退屈な時間が続いた。

どこからともなく睡魔が現れ、バクの背中に取り憑いた。

慣れない環境を渡り歩き、疲れがたまっているのだろうか。大事な観察時間の最中に眠ったりしたら、噂の人間焼却炉の仕事にまわされかねない。

バクは両手で何度も顔を張った。

もう大丈夫だと思った三秒後、バクは睡魔のしなやかな指先から流れ落ちる、甘い汁をすすっていた。

2016年10月7日

「もう商品がないですって？　どういふことなのよ！」

行列の先頭、太った中年主婦がスーパーの店長らしき初老の男につかみかかった。

「も、申し訳ございません。なにしろ流通が完全に麻痺しております、飛行機も電車もトラックもまったく動かないというんです」

「定価の倍出してもいいわ。倉庫にはたんまりあるんでしょ？」

「倉庫も……空です」

ルウ子は先頭から少し離れたところにいた。

買い出しに來たオバ様たちの世間話が聞こえてくる。

「私はもう八軒まわったわ」「私なんかこれで十四軒目よ！」「日本中の商店から食品が消えてしまったって本当なの？」

号外を広げて議論を交わす近所の大学生たち。

『日本各地で航空機墜落事故。空港周辺で大規模火災発生も、警察消防は機能せず』という見出し。新聞はなんと手書きの原稿を刷ったものだった。

大学生たちの会話が聞こえてくる。

「官制センターが機能しないのはともかく、車一台動かないんじゃないでしょうもないな」「水面下でなにか恐ろしい企みが進んでるんじゃないのか？」「いいや。企みはすでに達成されたのかもしれない。人間を地獄に落としたいければ電気一つ奪うだけで充分さ」「流通を断たれたら都会はそれまでだな」「田舎に逃げて農家の世話にでもなるか？」「車も電車も動かないのにどうやって？」

ルウ子は列を抜けると、「早く知らせなくちゃ！」と家路に急いだ。

このままじゃ都会から食べ物が、なくなる！？

2016年11月9日

ルウ子は近所の公園にできた巨大な地域掲示板を見上げていた。近頃では紙の供給さえまならず、新聞まで止まってしまった。掲示板にはこう書いてある。

『日本は現在、深刻な食糧危機に陥っている。世界中を襲った未曾有の停電により、各国は目下、国内の混乱や暴動を抑えるべく内政に全力を傾けざるを得ない状況である。近代的流通は破綻し、海外の緊急援助も期待できない。政府はこの苦境を『不測時の食料安全保障マニュアル深刻度レベル2』に相当すると判断（レベルは0、1、2があり今回は最高レベル）、本日付で次に挙げる方針を適用するとした。

熱量効率が高い作物への生産転換（国民生活安定緊急措置法）。
既存農地以外の土地の利用。

食料の割りあて・配給・及び物価統制（食糧法）。

なお、農林漁業者に対する優先的な石油供給の確保（石油需給適正化法）については、寒冷地の冬季生活を考慮し、原油輸入先との国交回復まで保留となった』

ルウ子のそばにいた、栄養専門学校に通っているという女が口を開いた。

「法律とかはよくわからないけど、要するに日本の食料は敗戦直後みたいに配給制になって、昭和二十年代後半レベルのカロリー（一日あたり約2000キロカロリー）になるってことよ」

別枠のコラムにあった、三食の品目例は次の通り。

朝食……白米一膳、蒸かしイモ二個、ぬか漬け一皿。

昼食……サツマイモ二本、蒸かしイモ一個、リンゴ四分の一。

夕食……白米一膳、サツマイモ一本、焼き魚一切れ。

うどんとみそ汁が二日に一回、納豆が三日に二パック、牛乳が六日に一杯、たまごが七日に一個、肉は九日に一食……。しかも、これらは電気が使える時代に考案されたものであることを忘れてはならない。

普通ならここで悲鳴を上げたいところだろうが、ルウ子たちはちがつていた。この一ヶ月、爆発的な物価の上昇で、各家庭は財産のほとんどを食品につぎこまねばならなかったのだ。

ルウ子と栄養士の卵は手に手を取りあい……ほっと息をついた。ひとまず破産と餓死だけは免れた、と。

2017年10月1日

地域掲示板の記事。

『パワーショック』

世界中を混乱に陥れた謎の大停電は、本日をもって一周年を迎えた。科学者らは、この自然法則から逸脱した電気消失状態を『パワーショック』と命名した。ノーベル物理学賞受賞者、統京大学のA博士は「この世に謎と呼ばれるものが残っているのは、単に科学がそこに追いついていないせいだ、という考え方があります。私もそれを支持する一人です。でも、それは科学万能主義者の勝手な思いこみなのかもしれません」とコメント。世界随一の頭脳集団をもつとしても、原因究明の糸口さえつかめないでいる。

2018年2月10日

地域掲示板の記事。

『厳冬の試練』

豪雪地帯では配給の遅れが目立ち、栄養失調による餓死者が続出している。同時に燃料も供給不足で、森林の無差別伐採問題が表面化しつつある。

一方、都市部では遅配はないものの、人口密集地帯での強毒型インフルエンザの蔓延が脅威となっている。肺炎による死者は例年の十倍。栄養不足による抵抗力の低下が原因であることは疑う余地もない。また、昨年末から続く大寒波の影響か、てっとり早く燃える紙を求めた図書館襲撃事件が相次いだ。

2018年9月9日

地域掲示板の記事。

『飢餓闘争への序奏』

海外貿易の無期限凍結、春夏期の断続的な異常低温、南方からの巨大台風の連続、酷使した耕地の収穫能低下……国民の飢えは限界に達してきている。

地方では、都市から流れてきた暴徒による略奪が横行した。地方の倉が空になると、今度は『出稼ぎ』と称して、人の流れは都会へ逆流をはじめた。出稼ぎ者は徒党を組んで富裕層を襲撃。その争いはエスカレートを重ね、現在では奪った物を奪いあう弱肉強食のサバイバルに移行しつつある。全国各地で頻発する騒動に、警察はほとんど対応できず、社会の秩序は崩壊の一途をたどっている。

ルウ子は記事を読み終えると、人目を警戒しながら公園を立ち去った。

背中リュックには配給物資（これで最後かもしれない）がつまっているのだ。

無事帰宅したルウ子は、人気のないリビングに一抹の不安を覚え

た。急ぎ足でキッチンへ行くと、扉が全開となった冷蔵庫が目に入った。名ばかりの冷蔵庫には、あらゆる手段を講じて手に入れた保存食を溜めておいたのだが……。

どこからか鉄のような臭いがした。

キッチンカウンターの裏をのぞくと、ルウ子は手にしていたリュックを取り落とした。

ルウ子の瞳は渴ききっていた。

どこでもない一点を、ただ見ていることしかできなかった。食卓のイスに腰かけたまま、夜が明けるまで。

翌朝。

両親の亡骸を庭に埋めると、ルウ子はシャベルを土に突き立て、空を見上げた。

雲一つない青。

「こんな世界はまちがってる。なのにどうして、空はいつもと同じなの？」

2019年X月X日

今日も人を一人殺した。たった一つの豆缶のために。

どうしても空腹に耐えられなかった。

真新しいセーターを着た、同じ年くらいの少女だった。

2020年X月X日

林檎を持っていた老婆を背中から刺した。

卑怯などという言葉は死に絶えて久しかった。

力んだせいか狙いが外れ、致命傷には至らなかった。

老婆は林檎を取り落とすと、ぎこちなくふり返った。

目があった。

老婆はなぜか微笑んだ。そして肩に刺さったナイフを引き抜くと、自ら胸を突いた。「あとを頼みましたよ」と言い残して。

不可解な自決にひどく戸惑った。あの目は俗人のものなんかじゃなかった。何千何万という人生を背負ってきた者のそれだ。

老婆の最期の言葉。林檎を口にしながら、その真意をずっと考え続けた。

剥ぎ取ったシミだらけのトレンチコート。ポケットをまさぐると、冷たくてギザギザした感触があった。

コートの袖を犬のように嗅いだ。ほどなく場所を探りあてた。

ロウソクに火を灯し、暗がりのほうへ一段また一段と下りていく。蛆の温床に何度も足を取られそうになる。慣れ親しんだ臭気はかえってクセになる。いびつな白い器の中からきれいなやつをつま先でシュート。

無粋なノックに応じる者はない。

ギザギザを差しこみ、地下室のドアを開ける。

正面に保存食料の山。半年分はある。

収納を開けると、黒ずんだ毛布が積んであった。あとはなににもない。

部屋の壁には、正装した政治家たちが整列する写真が一枚。その中にあの老婆の姿があった。

他のスペースは殴り書きばかりだ。人類を襲った悲劇を嘆く言葉で埋め尽くされている。

その中の一行に目が止まる。

『あのと時の世界、あのと時の暮らし、絶対取りもどしてみせる』
「！」

とうに涸れていたはずのものが、埃だらけの床にこぼれ落ちた。

「あたしなんかに未来を託して、ほんとによかったの？」

写真の中の老婆は微笑んでいた。

2021年X月X日

「やっぱ神様は悪いこと、ちゃんと見ているのね……」

ガード下の壁にもたれかかり、赤く染まった腹を押さえながら独り笑った。

霧がかった視界にふっと人影が湧いた。若い男のようだ。

シャツのボタンが一つまた一つと外されていく。

今さらなにをされたってかまいやしない。でも……せめて最後くらいは優しく、して……。

目が覚めると、薄汚れたベッドの上にいた。

かすかな消毒剤の臭い。空の褐色瓶。針のない注射器。書類の散乱。微風。窓枠しかない窓。他にめばしいものはない。

腹をさわった。傷口が縫ってある。

ジャリジャリと、ガラスを踏みつけるような音が近づいてくる。

蝶番だけが残った部屋の出入口に、白衣の若い男が現れた。

男は無精髭面を見せるなり、ため息をついた。

「ここに残っていた物はもう使い果たしてしまった。あとは自力で生きのびるんだね。じゃあ私はこれで」

男は出ていこうとして、ふと立ち止まった。

「君は悪くない。悪いのは……フフ、よそう」

「あ、あの、名前……」

ルウ子は言いかけたが、男は行ってしまった。

* * *

2045年7月29日

バクは丸イスにすわったままハツと目を覚ました。

恐ろしく鮮明な夢だった。それにしても、記憶にないことがなぜ自分の中に……。

さっとカーテンを開け、朝日に目を細めながら辺りを見まわすと、パンツ一丁で眠るルウ子が目に入った。

「し、しまった！」

任務失敗。だが、肩を落としている場合ではない。

バクはしゃり玉から落ちかかったネタのようになっていた布団を引つつかんだ。

「ん……うつ……」

少女のうめき声に、バクはふり返った。

ルウ子は毛穴という毛穴に汗の玉を光らせ、顔をしかめながら、胸の下から太腿にかけて無数に走る傷痕を次々と押さえていった。

バクは布団から手を放すと、ルウ子の顔のそばへ行って様子を見守った。

あの夢はルウ子の記憶を遡ったものにちがいない。昨日の自分と今日の自分とでは、ルウ子は別人だった。自分も似たようなことをやって生きてきた。なんだか急にルウ子のことがわかったような気がした。

夢見の時間が終わったのか、ルウ子の寝顔が穏やかになった。

たまらなくなつたバクは、ルウ子に唇を寄せていった。

ルウ子の目がカッと開いた。

「！」

バクはさつと飛び退いた。

怒声もなければ物も飛んでこない。

バクは目をこすった。

ルウ子は眠ったままだ。錯覚だったのか？

反射的に逃げたのは、犯行を見られたからというより、喪失の恐

怖にかられたからだだった。一番大事なものを失ってしまいそうな、真っ黒な予感だった。

ルウ子が寝返りをうち、バクに背を向ける形になった。

それまで腰があつた場所に小物が埋もれているのを、バクは見つけた。

「寝るときまで離さないのか……」

ルウ子がいつも持ち歩いている、ピンク色のケータイだった。よく見ると表面が淡く光を放っている。

気になったバクはケータイを手にとった。

するとケータイはバクの手をさつとすり抜け、元いた場所に舞いもどってしまった。

「な!？」

バクは驚くと同時にルウ子の背中を見た。

仕掛けがあるようには見えないが……。

バクは何度もケータイを手にとってみた。結果は同じだった。ルウ子とケータイは強い磁力のようなもので引きあっている。完全に密着していないところを見ると、磁石ではなさそうだが……。ともかく、裸のままではまずい。

バクはルウ子に布団をかけ直した。

数分後……ルウ子は絶叫とともに目覚めた。

「ンアアアアッ!」

がばと上体を起こす。

「ハッ……ハッ……」

肩を激しく上下させながら、眼球がこぼれんばかりに目を剥き、自分の手を不思議そうに見ている。

「だ、大丈夫か？」

「あたし、なんか言ってた？」

「い、いや……」

バクは思わず目を逸らした。

「そう……」

ルウ子は目を伏せ、背中中の張りを緩めた。

半身裸をさらしていても、相変わらず気にする様子はない。
慣れなのか、バクもそこに違和感を感じなくなっていた。

「悪い夢でも見たのか？」

「心配しなくていいわ。朝の日課だから」

ルウ子は汗で首筋にからみついた巻き毛をもとにもどしていった。

「日課！？ あんたは、あんなものを毎日……」

「あんなものって？」

「いや、なんでもない」

飢餓地獄を生きのびるためとはいえ、ルウ子は容赦なく人を殺していった。今はきつとその報いを受けているのだろう。それを日課だと言う。彼女は自分のせいで死んでいった者すべての魂を背負って生きていくつもりなのだ。

ルウ子はベッドを出ると、カゴに用意してあったバスタオルでせつせと汗を拭いていった。

バクはそんなルウ子を横目で見ながら肩を落としていた。

ルウ子がなにもかも引き受ける太陽なら、俺はたった一人さえ満足に照らせない欠けた月。器がちがいすぎる。

バクは地下にいた頃、地上人の命を二つ奪った。それが今でも肩に重くのしかかっている。

ルウ子がいつものブレザー姿になると、バクは部屋にミーヤを呼んだ。二人には今朝の夢のことは伏せ、不思議なケータイの話だけをした。

ルウ子は閉じたケータイを掌に乗せ、二人に見せた。

「実は何度もなくしてるのよ、これ。でも、知らない間に手もとにもどってるの。栄養不足で頭がイカレたのかと思ってたけど、そうじゃなかったみたいね」

ルウ子が寝ている間にあつた淡い光は今はない。

ミーヤは言った。

「このケータイになにか秘密がありそうですね」

「だとすれば……」

ルウ子はケータイを開くと電源キーを長押しした。なにも起きない。

すべてのキーを一通り押した。うんともすんともいわない。

ぜんぶいつぺんに押した。沈黙を保ったまま。

「ちえ」

ルウ子は諦めたのか、乱暴にケータイを閉じた。

バクは一つ提案した。

「試しに誰かにかけてみたらどうだ？」

「電源が入らなきゃ意味ないわ」

「そうかな？ 歴史の流れはもうマトモじゃないんだ。意味がないってことにもう意味がないかもしれない」

ルウ子は指先を顎にあてて考えこんだ。

「屁には屁を。非常識には非常識をってことかしら」

ルウ子はぷりつと尻を突き出す。

「……」

バクはあえてツツコまなかった。

「ま、ダメもとでやってみるわ」

ルウ子はケータイを開くと、誰かの電話番号を押しはじめた。

頭の三桁までは順調なのだが、その先で手が止まる。何度かやり直したがやはり止まってしまふ。

ルウ子は首をかしげる。

「はて？」

「どうかしたのか？」

「忘れちゃった」

ルウ子は苦笑した。

二十九年間のブランクはあまりに長すぎた。無機的な数字の記憶などとうの昔に風化してしまい、今や彼女は実家の番号さえ思い出せない。

それがよほど悔しかったのか、ルウ子はヤケを起こした。

唯一思い出せる番号、『自分自身』にかけたのだ。仮に今、通信できる状態だったとしても、ケータイが『電話』である以上、それはまったくの無駄な行為といえた。

「バカね」

ルウ子はふつと息をつき、ケータイを閉じようとその背に手をかけた。

そのとき。

それまでなにも映っていなかった画面に、いきなり猫の画像が現れた。

「な!?!」「あっ!」

バクとミーヤは同時に声をあげた。

「あ……入っちゃった」

ルウ子は呆けていた。鍵も扉もない無敵の金庫を、馴染みのまじない一つで偶然開けてしまった泥棒のごとく。

猫はロシアンブルー似の雑種だった。ソファに寝そべったまま気怠そうにこちらを見ている。

「うわ、生意気そうなお」

ミーヤはちらとルウ子を見る。

「誰かに似てないか?」

バクはちらとルウ子を見る。

ルウ子はそれにかまわず、今になってようやく驚きと動揺を露わにした。

「い、いったいなにがどうなってんの?」

「ああ、とうとう封印を解いてしまったか」

どこかで子供のような声がした。響きの悪い不自然な音質。

「誰だ!」

バクは辺りを見まわした。

寝室に他人の気配はない。

「……」

ルウ子はケータイを握りしめ、画面を凝視したままフリーズしている。

「どうした？」

「し、しゃべった……動いた……アルが……」

「アルって？」

「うちで……飼ってた……猫」

「ま、驚くのも無理はないよね」

画面の中でアルは大あくびをした。

あまりの不条理さにショックを受けたのか、ルウ子はそれからしばらく言葉を失ったままだった。

科学常識にまだ疎いバクが、代わりにアルに迫った。

「どこに隠れている。早く正体を見せろ」

「ここにいるって」

アルは前肢で自分の顔を二度指した。

「なかなかよくできた連続写真だな」

「人形アニメじゃないってば！」

アルは自分の素性を相手に理解させるためだけに、二時間以上も費やした。

アルは『特斯拉』という電気の精たちの代表だった。実際にはアルの姿を借りた『何者か』なのだが、人の言葉では表せない名だというので、以後もアルと呼ぶことになった。

電気の伝わりを陰から仲立ちする。彼らにできることはそれだけだった。音でいえば空気や水にあたるものだ。彼らは人知れず神々からあたえられた役目を日々果たしていた。

地上に人間が増え、技術革新が進んでいくと、彼らにかかる負荷もどんどん増していった。彼らは大きなストレスを感じていたが、仕事をサボることは許されていなかった。

不満は募っていった。そして2016年のある日、それはピークに達した。地球全体にまんべんなく散っていた彼らは、その瞬間を

境に制御を失って一気に爆縮し、ある一つのケータイに押しこめられてしまったのだった。

理解に苦しむ話だが、バクたちはひとまずそこまでは信用することにした。

アルは話を続けた。

「信じられないことはさらに続いた。一ヶ所に集まったボクらは、それまでにない能力を獲得してしまったんだ」

電気の精たちは、ケータイのスイッチ一つで、地上に分散したりケータイに凝縮したり、自在にできるようになった。ただ、彼らにとって残念なことに、スイッチを操作するにはパートナーの存在が必須だった。

彼らのパートナーは宿主、つまりケータイ主のルウ子だった。

アルはルウ子を憎らしげに見つめ、続けた。

「せめてもの救いは、スイッチの秘密を伝えられたのがボくらだつてことさ」

ミーヤは訊いた。

「その秘密を解いてスイッチをオンにすれば、また電氣が使えるようになるの？」

「そうだろうねえ」

アルは他人事のように言った。

バクは立てたコインをそつと指でつつくように訊いた。

「その秘密を教えて欲しい、と頼んでも無駄なんだろうな？」

「そうだろうねえ」

アルはコインが倒れるまで、ただ目で追っただけだった。

「ん？ ちよつと待てよ？」バクは眉をひそめた。「パワ―ショットが続いたのはつまり、テストランが地上から消え、ケータイの中に閉じこめられたからなんだよな。そのときケータイはオフだった。今、俺がアルと話してるってことは……」

アルは目を釣り上げ、ガツと牙を剥いた。

「そう！ もうある人が実行しちゃったんだよ！ まさか……ま、

さ、か、自分自身の番号にかけちゃうマヌケな人がいるなんて、予想の宇宙の彼方だった！」

並の人間なら生涯気づくことのない秘密。まったくバカげたことさえ一度は光を当ててみよう、というひねくれ根性が、この偶然を引き寄せたのだ。

「マヌケで悪かったわね」

ルウ子は顔を赤らめ、そっぽを向いた。

きっかけはともかく、テストランは器を飛び出し世界中に散った。

つまり、発電は可能になったということだ。

「これであんたの願いが叶ったじゃないか」

「世界を飢餓から救えますね」

バクとミーヤはルウ子に笑顔を送った。

「長かった……本当に」

ルウ子は素直に感慨にひたっていた。

「えー、お喜びのところ誠にアレんだけど、残念なお知らせがあるよ」

アルは得意げに目を細めた。

「な、なによ」

ルウ子は不安げな顔をアルに近づけた。

「ボクらテストランには二つの大きな属性があつてね、人間界の言葉でいえば『天』と『地』とに分かれるんだ」

『天』は太陽エネルギーから直接生まれた電気の伝わりを、『地』は地上のエネルギーから生まれた電気の伝わりを、それぞれ仲介する者たちなのだという。発電という観点で見れば、前者は太陽光発電を、後者は火力や水力など長らく人類を支えてきた発電を、彼らは陰から支えていたことになる。

ちなみに、『人』にあたるマイナーな存在もあり、その者らは生体内の電気に関わっていた。幸いなことに、彼らは今回の事件ではまったく影響を受けなかった。マイナーなんだから取るに足らない話なんだろう、と考えるのは早とちりだ。なにしろ、地球全生物の

滅亡という一大事を免れたのだから。

アルは天属性の代表だった。彼が統べるテスランの存在だけでは、太陽光発電しかできないことになる。

それを知ったルウ子は怒鳴った。

「なによ、あんたちつとも使えないじゃない！」

「そんなこと言われたってボクのせいじゃないしね！」

アルはそっぽを向いたが、なにかを思い出したのかすぐに続けた。
「あ、それともう一つ。得たものがある代わりに、ボクらは自由に飛びまわるための『翼』を失ってしまったんだ。もう、陸おかの上を這うことしかできないよ」

「まったく扱いづらいコたちね」

テスランたちはもはや、空を飛ぶことも地下に潜ることもできず、砂のように地を這い砂丘のように積もるしかなかった。つまり、発電を再開したければ、この島国の中でこっそりやるか、大陸に持ちこんで各国の協力を得るか、選択を迫られることになる。

ルウ子は迷うことなく前者を取ると言い放った。わが国は飢餓闘争の激化によって旧政府が倒れて以来、海外との国交がなかった。政治の問題がからんでややこしくなる前に、まずは実用可能かどうか国内で試しておくべきだというのだ。

それはいいとして、アルの存在だけでは、ルウ子がめざす『2016年当時の電化生活の再現』からは程遠かった。絶対的に電力が足りない、というより、ほとんど役に立たないと言ってもいい。日本各地にある太陽電池パネルは耐用年数をすぎているか、あるいは天災や暴動のせいで破損したものばかりだった。

安価でかつ短期間に電力を回復できるのなら、飢餓問題も早期に解決できるだろう。そのためには、どうしてもアルの片割れを手に入れる必要があった。

ルウ子はアルに迫った。

「アル、協力してもらおうよ。そいつの居場所を教えなさい」

「お断りだ」アルは背を向けた。「人間なんかは電気を使わせたら、

ロクなことにならない。あんなストレスはもうたくさんだよ」

ルウ子は思索に耽る詩人のような、遠い目つきで言った。

「地球って…… おおらかに見えて実は繊細にできてるのよねえ」

「う……」

「電気が外に伝わってくれないと困る生き物だっているはずよねえ」

「くぬ……」

アルは爪を立て、前肢をふるわせ、そして虚空を切り裂いた。

最後は首を縦にふった。

「お昼がすんだら、すぐに会議よ」

ルウ子はケータイを閉じ、さっそうと部屋を出ていった。

「さて、ここへどうやって渡るのが問題なのですが……」

孫は赤チヨークを取ると黒板に手をのばし、『赤ヶ島^{あかがしま}』という文字を丸で囲った。

会議室では、ルウ子、バク、ミーヤ、NEXAの幹部らがイスを扇形にならべて一つの黒板を囲んでいた。

アルの片割れは、統京の南350キロに位置する小さな離島にいるらしい。船は調達できるというのに、NEXAの古参たちは、マフィアに長年悩まされてきた刑事のような渋い顔つきでうなづいた。

話が進まないの、新参者のバクには事情がわからない。左隣にすわるミーヤも同様であろうと、退屈のぎに話しかけようとしたのだが……。

ぷいっ！

ミーヤはそっぽを向いてしまった。

どうも彼女はルウ子の寝室を出てから機嫌が悪い。気に触るようなことを言った覚えはない。夢の中でつながったことを、こっそり打ち明けただけなのだ。

ルウ子はニヤけながら、二人の摩擦をうかがっていた。

「あのね……」

ルウ子は左隣にすわるバクに耳打ちした。

ただ、ゴニヨゴニヨゴニヨとしか言わない。

「なんだよ。ちゃんと見えよ」

バクは小声で返した。

「えー、どうしよつかない。バク、怒るかもしれないし」

ルウ子は悩ましの顔で上体をくねらせた。

「俺が怒るような話なのか？」

「実はね……」

ルウ子はちらとミーヤを見ると、すばめた唇をバクの耳もとへ近づけていった。

バクをつま先に激痛が走った。

「っ！」

重要な会議中に暴れるわけにもいかず、バクはその場で口を押さえて悶絶した。

すまし顔のミーヤと目があう。

ミーヤは「バーカ」という口真似。

女どもの考えることはよくわからない。

「そこ！ 真面目にやりなさい！」

孫の一喝に、バクとミーヤは小さくなった。

「孫の言うとおりよ。大事な話の途中なんだからね」

ルウ子は担任の威を借る委員長のように追い打ちをかける。

孫はせき払いした。

「局長もです」

「……」

ルウ子は手にしていた資料で顔を隠してしまった。

孫は続けた。

「話にもどりましょう。赤ヶ島への足はある。問題は……離島連盟です。彼らを説得しない限り、領海に入ることすら叶わない」

ルウ子は目を伏せた。

「ま、無理でしょうね」

本土と離島との関係は、ルウ子の執念さえ凍らすほど冷えきっていた。

パワーショックの混乱や被害を最も回避できた土地。それは離島地域だ。離島はもともと海の幸に恵まれており、過疎化で人口が減っていたことも加わり、飢餓とは縁遠かった。便利という言葉は死に絶えたが、必要以上に望まなければ自然の恵みだけで充分に生きていった。

パワーショック時代に入って数年後、本土は飢餓闘争の激化によって無政府状態に陥り、弱肉強食のサバイバルがはじまった。本土の食料事情がいつそう疲弊してくると、暴徒の魔の手は離島にも広がっていった。豊富な海洋資源に目をつけたのだ。

ある日、本土難民を装ってやすやすと島に入った暴徒の一団は、疑うことを知らない島民を片っ端から殺していった。島側も反撃に出たが、相手はルールなき戦場を生き抜いてきた強者どもだ。その島は一昼夜にして人口の半数を失った。島人たちは玉砕も覚悟したが、村長が故郷を捨てる決を下し、この惨劇の生き証人として事件を語り伝える道を選んだ。

こうした『離島事件』が各地で相次いだことをきっかけに、島々は独自の連盟を組み、本土との決別を宣言した。

バクは孫に訊いた。

「こっそり忍びこむっていう手はないのか？」

孫は首を横にふった。

「離島の周りでは、近海最強を誇る海軍が昼夜網を張っている。彼らの猛勇に比べたら、海賊などかわいいものだ」

『離島海軍』は領海外でのふるまいにはいっさい干渉してこない。

しかし、ひとたび境界線を無断でまたごととすれば、古代遺跡の罠のごとく容赦がなかった。

ミーヤは言った。

「海上警察は動かないんですか？」

「これはもはや政治的な問題だ。双方の外交努力に期待するしかない

い」

孫は手にしていたチョークを専用の引き出しへ乱暴にしまった。

「あーあ。おもしろくなってきたと思ったのにな」

バクは頭の後ろで手を組み、大あくびした。

これで司会（孫）のひと言があれば、今日の会議はおひらきだろ
う。

そんな雰囲気を、ルウ子は一掃した。

「ちよつと待って。あたしはお手上げなんて言っただ覚え、全っつ然ないわよ」

孫はため息をついた。

「局長……」

「あたしはね、通常の方法じゃ無理、と言っただけ」

「は？ それはどういう……」

ルウ子はそれに答えず、バクとミーヤに言った。

「もうわかったとは思うけど、大雑把に言えば離島連盟はコミュニティーの海バージョンってところよ。幸い、離島とコミュニティーは交流があるみたい。そこでよ……」

「そこで？」

二人は同時に訊いた。

「富谷の高森昭乃に協力を依頼するの。あのコ、親善使節として離島に何度か渡ってて顔が利くらしいのよ」

「！」

バクはイスごとひっくり返りそうになったが、どうにかこらえた。
昭乃……あの昭乃が？ それにしてもなぜ、ルウ子は秘境の女戦士のことにとこれほど詳しいのか。

「待ってください、局長」孫は反論をはじめた。「たしかに双方は同じ自給自足社会ということもあり、協力関係にあります。ですが知っての通り、コミュニティーは離島の陸上版のようなものです。彼らが我々の話に聞く耳を持っているとは思えません」

「そうね」ルウ子はあっさり認めた。そして、含みたっぷりの笑み

と熱い視線をバクに送った。「そこでよ」

「お、俺!？」

バクは自分で自分を指した。

「あんた、昭乃と仲いいのよね？」

「別に仲がいいってワケじゃ……」

「そう？ 真っ昼間から息荒くして、身をすりあわせていたそうじゃない？」

「それは武術指導でちよつと……ってなんでそんなことまで!」

「コミュニケーションは人の出入りが極めて少ない閉じた世界。どうやら、ルウ子は懷に優れた札をカード隠し持っているようだ。

「バク……」

ミーヤは潤んだ瞳でバクを見つめた。

「な、なんだよ」

「知らない」

ミーヤは席を立つと、足早に部屋を出ていった。

ルウ子はそれを楽しげに目で追う。

「青春だねえ」

「俺、なんか悪いことしたか？」

「ちつとも」

ルウ子は首を横にふった。

「じゃあ、あいつはなんであんなに怒ってる」

「それはこれからあんたが学んでいくことよ」

「教えてくれたっていいだろ？」

「ダメよ。あのコに悪いもの」

「わけわかんねえ!」

バクは頭をかきむしった。

「それはともかく」ルウ子は人差し指をびしと突き出した。「バク。あたしの代理として高森昭乃と接触し、離島への活路を開きなさい」

7月30日

「……？」

「……！」

蒸気機関の轟音が車内での会話を困難なものにしている。

NEXAが用意した蒸気自動車は、荒れ放題の湾岸道路を疾走していた。

車はトラックを改造した試作品だった。荷台にはボイラーと炭水箱。顔を煤だらけにした老機関士がせつせと釜に炭をくべている。本来ならば彼が運転をつとめ、若い助手に重労働を任せるはずだったのだが……。

助手席にバク、真ん中にミーヤ、そして運転席には……。

バクは身をよじって怒鳴った。

「なんであんたがついてくるんだよ！」

「あに？ あんだって？」

ステアリングを握る竜巻頭の女は耳に手をあてた。

「バクに任せたくせに、どうして局長本人がついてきたんですかって！」

ミーヤが通訳した。

「あたしには、あんたの骨を拾う義務があるのよ！」

「……」

バクはため息をついた。

期待してるんだかしてないんだか……。この難局を乗り切れば一躍幹部への昇進もあり得るだろうが、このままでは名誉の殉職で二階級特進がいいところだ。あのカタブツ昭乃がそう簡単に首を縦にふるとは思えない。NEXAの名前を出したとたん、滝のように矢が降ってくるに決まっている。

結局、これといった妙案が浮かばないまま、車はもう富谷関の麓につけていた。以前に道路を塞いでいた崖崩れはすっかり直っていた。会議が終わってすぐ、ルウ子が土木屋に急使を飛ばしたらしい。

堤上では横一列にならんだ弓隊が待ちかまえていた。その中央に警備隊長、高森昭乃の姿。昭乃は腕組みしてこちらの出方をうかがっている。

バクは一人で車を降りると、ダムへ向かっていく道を終点まで歩き、堤底の少し手前で立ち止まった。

警備隊の表情がにわかに険しくなった。

昭乃は興奮する弓隊を片手で制すと、叫んだ。

「環境破壊集団が我々になんの用か！」

「一つ頼みがある！ 大事なことだ！」

「電化文明復活を諦め、一週間以内に組織を解散すると、その命をもつて約束できるなら話を聞こう。三分だけ待つ！」

「変わってないな！ あんたのダイヤモンド頭は！」

「おまえの減らず口ほどではない！」

「そのおかつぱをブリリアントにカットすれば、もっと輝くんじやないのか？」

「貴様……」

昭乃はさつと弓をかまえ、バクに狙いをつけた。

バクはこれ以上の挑発を思いとどまった。今は任務中なのだ。昭乃をからかうためにはるばる富谷までやってきたわけではない。

バクはちらとふり返り、車内の様子をたしかめた。

ルウ子はステアリングに手をかけ、こちらを睨んだままなにか言っている。ミーヤはルウ子の腕にしがみつき、必死に説得しているように見える。まずい。なんらかの成果を見せなければ轢き殺すつもりだ。

バクは昭乃を見上げた。

「解散はない！ せめて会談だけでも開かせてくれ！」

「あと二分！」

「俺に後退は許されていない！ 頼む！」

「我々にも譲歩は許されていない！ 恨んでくれるな！」

昭乃らに射抜かれるか、ルウ子に轢かれるか、進退窮まった。ど

うすればいい、どうすれば……。

思考回路がオーバーヒートしたバクは、思い描いたばかりの生シナリオを、火を通さないまま実行した。

「どのみち命はない！ そのお腹にいる、俺の子によろしく伝えといてくれ！」

バクは昭乃に向けて顎をしゃくった。

弓隊はいっせいに昭乃に注目した。

昭乃は野焼きの炎よりも赤くなると、裏返った声で叫んだ。

「ね、ねね根も葉もない嘘を言うな！ 毒でも食らったか！」

「名前はもう決めたのか？」

バクは微笑んだ。激戦地への配属が決まった夫が妻を見納めるときのような目で。

弓隊の男たちは狼狽えた様子で独白をはじめた。

「俺、隊長にだけは手を出すまいと思っていたのに……ケダモノめ……」「ぼ、僕の永遠のアイドルを……ゆ、許せない……」「寝こみを襲って孕ませるなど……万死に値する！」

かかった！ バクは心の中で拳を突き上げた。警備兵どもは老いも若きも昭乃一筋。憤るあまり誰かが矢を放ってくれば、時間を守らなかったと、昭乃の生真面目さにつけこむことができる。

さて、どこから撃つてくる……。

先走る兵を見極めようと、バクが堤上を見上げ直したときだった。

「な！？」

十本の矢が同時に放たれていた。

バクは身を翻して逃げ出そうとしたが……。

「ぐー！？」

一本の矢が背中に突き刺さり、バクはどうと倒れた。

「！」

上気していた昭乃の顔からさっと血の気が引いた。

昭乃はよろけるように身近の若者に歩み寄ると、胸ぐらをつかみ上げた。

「まだ三分たっていない……なぜ……なぜ約束を守らなかった」
「は……ぐ……」

若者は昭乃の背後に閻魔でも見たのか、怯えきって声にならない。
昭乃はそこでハツとして、他の隊員たちに命じた。

「バクを診療所に運べ！」

「しかし隊長……」

隊員たちは顔を見あっている。

「命令だ！」

一方、ミーヤは車を飛び出すと、転げるようにしてバクに駆け寄った。

バクの背中に赤い地図が広がっていく。

「バク！」

ミーヤは刺さった矢の柄に手をかけるも、大出血を怖れたのかパツと手を離し、その場にへたりこんでしまった。

隊員たちがダムの壁を降りてきて、バクとミーヤの周りに群がった。

「バクにさわるな！」

ミーヤは吠えた。わが子を守らんとする山猫のごとく。

「出血がひどい。時間がないんだ！」

隊員たちは三人がかりでミーヤを引つpegすと、残りの二人でバクを堤上へ運んでいった。

ミーヤはバクの名をひたすら叫び、絶壁のタラップを伝う者たちの後を追った。

嵐のような騒ぎが収まると、いつの間にか昭乃が道端に立っていた。

ルウ子は車を降り、昭乃につめ寄ると、いきなり頬を張った。

「……」

昭乃は顔を背けたまま、なにも言わない。

「なんとか言ったら？」

昭乃は晩夏の蝉のように歯切れ悪く言った。

「……今は……とにかく、中へ」

7月31日

矢は急所をわずかに外れ、バクは一命を取りとめた。だが、手術後の衰弱がひどく、一週間は絶対安静となった。富谷には限られた薬草しかなく、麻酔作用を期待できるものは少なかった。バクは手術中もその後も、激痛のあまり何度も発狂しそうになった。ミーヤは毎晩徹夜でバクの手を握りしめ、ひたすら励まし続けた。バクはその間ほとんど記憶がなかったが、ミーヤの手がどれほど自分を安心させるものだったか、それだけはこの手がしっかり覚えていた。バクは虚ろな意識の中で思った。

ミーヤ……おまえが誰かと幸せをつかむ日まで、俺は死んでもこの手を離さない。

8月3日

その日、ルウ子と富谷の長老衆は議事小屋で会談を開いた。

NEXAは赤ヶ島の調査を希望しているが、本土の民を真つ向から敵視する離島連盟はこれを拒絶するであろう。そこでルウ子たちは富谷の人間になりすまし、連盟の信頼を得ている昭乃をガイドとして、社会見学という形で渡島したい。

このルウ子の無茶な提案に対し、長をはじめとする長老衆は口をそろえて猛反対した。調査の目的以前に、第一、なぜコミュニティが環境破壊に最も貢献しそうな者に協力しなければならないのかと。

その意見にルウ子是这样答えた。

「人類を救うための豊富な知識を持っていながら、秘境に閉じこも

ってばかり。そんな連中なんかに、環境破壊がどうのなんて言われる筋合いはないわ。結局あんたたちのやってることは、ただの自己満足。悪政と戦うのが怖いのか、でなければ面倒くさいのよ。そもそも今は、環境が云々とか言ってる場合じゃないでしょ？ わが国の窮状を少しでも案じているなら、NEXAに協力しなさい」

ルウ子の挑発的な言葉に感情論をぶつける者もいたが、多くは難しい顔を突きあわせて揉めだした。ルウ子の話にも三分の理はあるが、それしきのことで動く我々ではない、というのが大方の意見だった。

論戦はその後も続いた。十数人の論客に対し、ルウ子はたった一人。それでも彼女は一時もひるむことなく応戦し、終了時刻が近づいたと知るや、口の端をキリツと上げて一気にまくしたてた。

「協力できない？ あっそう。じゃあ、バクを殺しかけたあの矢はどう説明してくれるのかしら？ あのコは完全に丸腰だった。警備隊長はこっちの判断に三分間あたえたと約束した。富谷の武人って、私怨ごときで君主の使いを撃ち殺す人種だったのね。野蛮よねー。コミュニケーションってそういうところだったの。あっそお。あたし誤解してたわ」

「ち、ちがう！ 我々は……」

末席にいた昭乃がすくと立ち上がった。

「われわれわぁ？」

ルウ子はくると手首をまわして耳に手をやった。

「いや……」昭乃は口ごもった。「この前の一件は私の指導力不足のせいだ。責任は私にある」

「なら話は早いわね。バクが完治次第、赤ヶ島へ……」

ルウ子が言いかけると、昭乃が遮った。

「それは」昭乃は長老の面々と一瞥を交わした。「別のことで償いたい」

ルウ子は左肩にかかる竜巻毛をバツと払った。

「うちの情報力をナメてもらっちゃ困るのよねえ！ NEXA提供

のスクープ記事、読んだことない？ あ、新聞取ってないから知らないっかー」

「微力ながら、我々も情報収集は怠っていない。それくらいのことには私も耳にしている」昭乃は唇をぐつと噛みしめた。「今回……だけだからな」

「そんなにシリアスになりなさんな。ブツを見つけたらすぐに帰るから。悪の組織に荷担した、なーんて深刻に悩むほどのことじゃないわ」

ルウ子の無礼な態度に、長老衆が「冗談じゃない！」と大騒ぎするも、長が「全国のコミュニティーに恥をかかすわけにはいかん」と諭し、ルウ子の提案を渋々受け入れたのだった。

8月7日

意識を取りもどしたバクのもとに、ルウ子がやってきた。

ルウ子はなにも言わずニカツと歯を見せ、親指を突き立てた。

バクはベッドで横になったまま、弱々しく親指を見せた。

「トラブルをそっくりチャンスに変えちまうなんてな」

「それがあたしの仕事だもの」

「つたく、その自信はどこで売ってんだよ」

「ところで、その……あのね……」

ルウ子はおもいおもと身をよじると、横を向いた。

「な、なんだよ」

ルウ子はちらとバクに目を流し、さつとまたもどした。

「追いつめればなんとかなると思ってた」

バクの力量を過信し、轢き殺さんと脅したことを詫びたいのだから。

「壁に言い訳したってしょうがないぞ」

「う、うるさいわね！」

「そのつもりはなかった？」

「あたりまえでしょ！」

「じゃあ、ちゃんと謝れよ」

ルウ子は正面を向き一步前に出ると、顔を引きつらせた。

「クツ、キツ……」

「……」

バクは必死に笑いをこらえた。

努力は認めるが、慣れないことを前に緊張しすぎている。

「ご、ご……」

「ご？」

「ごめんな！」

ルウ子はぶんと頭をふり下ろした。

鈍い音がした。

額に手をやり、歪めた顔を上げるルウ子。

「さい？」

「……」

バクは激痛のあまり声も出なかった。

ルウ子の頭突きはバクの胸を伝い、ふさぎかかっていた背中
の傷口を圧迫していたのだった。

「つ、つもりじゃなかったのよ。つもりじゃ」

ルウ子は苦笑いを見せつつ後ずさり……。

空の食器でいっぱいワゴンを尻で突き倒し……。

戸口にいたナースを盆の薬湯ごと突き飛ばし……。

病床小屋から逃げていった。

「あ、あんにやろう……」

バクはそれから高熱を出し、五日も余分に寝こむはめになった。

第四章 マスター・ブレイカー

9月2日

統京湾を疾走する一隻の小帆船があつた。

全長十メートルの中型ヨット シーメイド 号は、昭乃がはじめて離島へ渡ろうとした際に、知りあいの漁師からもらい受けたものだ。海に行く船だけに磯臭さはしかたないところだが、それを差し引いても、どこことなく生臭い感じの船だつた。

シーメイド は船尾デッキに凹みがあり、そこが操縦席となつてゐる。舵を握るのは艇長スキッパーの昭乃。向かいに乗組員クルーのミーヤが腰かける。クルーはバクと二人で交代制だ。訓練期間が取れず、二人あわせてやっと一人前といったところだつた。

コクピットの前方には船室キャビンがある。入ってすぐ小型キッチン（ギヤレー）があり、ロングソファが向かいあつ居食兼用スペースがあり、その奥の突きあたり……。

収納扉の前でルウ子は壁鏡と格闘していた。

ルウ子の目立ちすぎる容姿と肩書きは離島連盟にも知れ渡つてゐる。思い切つた変装が必要だつた。ルウ子は金色のダブル竜巻毛から一変、黒髪の少年のような姿になつた。ヘアメイクは出航に間にあつたが、服の選考がまだだつた。

バクはロングソファの端に腰かけ、ルウ子の華奢な後ろ姿に見入つてゐた。

こうして無駄な武装を取り除いてみると、なにかこう、包んでやりたくなるような頼りない背中だ。老いを忘れた体を授かつたとはいえ、あんなか細い双肩でこの国の過去と未来を背負い続けて無理が出ないわけがない。ある日突然、ルウ子は線香花火のように潔く燃え尽きてしまふんじゃないか……。そんな不安にかられた。

バクの沈思はそこで乱された。

ルウ子が後ろ向きに放り投げた割烹着が、バクの顔を覆い隠したのだ。

バクはそれを引つつかむと、衣装で散らかった手前のテーブルに放った。

野良着にツナギに作業着に迷彩服にオヤジジャージ。なにやら倒錯系コスプレ大会の様相を呈してきている。衣装は富谷の民からかき集めてきたものだ。

下着姿のルウ子。鏡にバクが映っていても気にもとめない。それよりもショーツのズレのほうを気にしている。

鏡越しにバクと目があうと、ルウ子はふり返った。

「なに？ 履きたいの？」

「履くか！」

「じゃあ、なんだってのよ」

「あんたには男に対する恥じらいとか恐怖とかないのかよ！」

「ああ、そういうこと……」ルウ子は頭をぱりぱりとかいた。「ずつと前に、置いてきたまんまになってるわ」

「置いてきた？ どこに？」

「捨てられたガレージとか橋の下とか、いろいろよ」

「なんでまたそんな人^{ひとけ}気のないところに……」

「人の目があつたら作業に集中できないじゃない、『お互い』」
「！」

バクは目に入った衣装をさつと手にした。動揺を悟られぬよう無理をしたせいで、鼓動が高鳴っている。

あるときよぎった破滅の予感、そういうことだったのか。もし、あのまま眠れる裸のルウ子に触れていたら俺は……。

一瞬、目頭に熱いものがこみ上げた。

ルウ子の過去には、誰も深入りすべきじゃない。誰も。

バクは衣装をまさぐりながら、ふと上に目をやった。

壁の小窓に昭乃とミーヤの顔があった。二人は身をかがめて頬をすりあわさんばかりに顔を寄せ、無言でキャビンの様子をうかがっ

ている。

昭乃はバクと目があうと、さっと姿を消した。

ミーヤは物憂げにこちらを見ていたが、一人になったと気づくと、あわてて昭乃に倣った。

結局、ルウ子は事務服姿に分厚いフレームのメガネを装着、という出で立ちに決まった。

その日の夜は風で、ヨットは停滞していた。

バクは一人見張りを任され、コクピットの暗がり立っていた。開け放しのスライド式ハッチ。キャビンの仄かな明かりと、ソファで語りあう女たち。

あのメンバーでまともに会話が成立するのはミーヤの存在があつてこそだ。ルウ子も昭乃も、ミーヤを中継して話をしている。

ミーヤは笑顔をふりまく。

昼間の憂鬱そうな顔はどこへ行ってしまったのか。

「ミーヤ。おまえのこと、よくわからなくなってきた……」

9月3日

シーメイド は統京湾を抜け、ひたすら南へ進んだ。その先には、九つの有人島をはじめ島々が南北に縦列する、伊舞諸島がある。離島連盟の東の玄関だ。

ヨットが領海に近づくと、朝霞の向こうに海軍らしき船影をいくつか認めた。さらに近づいて海図上の境界に差しかけると、三本マストの帆船がこちらへ寄せてきた。富谷と連盟とはすでに書簡で話がついており、彼らに張りつめた様子はない。ヨットと帆船は平行にならぶと、互いに帆を下ろし錨を海へ投じた。

バクと昭乃がデッキで待っていると、帆船の船室からジャージ姿の厳つい男が出てきた。

虎髭をたくわえたその男は、昭乃に目をとめるなり、親しげに声をかけた。

「よう昭乃、久しぶりじゃねえか」

昭乃は男のふくれた腹に目をやった。

「大村さん、ずいぶん暇そうな腹だ」

大村はたるんだ腹の肉をつまみむと大笑した。

「ダッハッハ！ 相変わらず手厳しいな。近頃は平和すぎて吞んではかりよ」

男の名は大村猛。おおむらたけしそこらの漁師となんら変わらない風貌だが、これでも離島海軍の一将である。

「そんなことでは変装した工作員の潜入を許すぞ。味方にも少しは注意を払わないとな」

昭乃が言ったのと、ルウ子がキャビンから出てきたのとは、ほぼ同時だった。

ルウ子に続いたミーヤが、はらはらと気を揉んでいる。

昭乃はそれを横目に見ながら愉快そうに目を細めた。

一方、事務服姿のルウ子は、なに食わぬ顔でメガネをふきふきしている。

昭乃はむつと眉をひそめたものの、瞳が正面を向いたときにはもう、いつもの仏頂面にもどっていた。

ささやかな抵抗も、通用したのはミーヤだけのようだ。『NEX A局長・橋本ルウ子』の風貌はよほどインパクトが強かったのだろう。そこから少しでもズレがあると、誰も本人だとは気づかない。「他ならねえ昭乃ちゃんの忠告だ。ありがたく受け取っておくぜ。なあ？」

大村がふり返ると、船員たちは鼻の穴を広げて激しくうなずいた。バクは思わず空を仰いだ。

彼らといい富谷の警備隊といい……。見た目はともかく、あの行きすぎた武人肌の性格を知らないわけでもないだろうに。

昭乃の生まれ持った色香に、大村はすっかり緩みきった顔で話を

続けた。

「で、社会見学したいってのがそのガキどもかい？」

「ああ。二、三日迷惑をかけてしまうが……」

「しかしよう、なんでまた一番ちっぽけな赤ヶ島なんだ？ 見学なら七丈島しちぢょうじまのほうがガイドもいるし、見所も多いし……」

「ああ……それはその……」

昭乃の目が泳いだ。

すかさず、ルウ子がすまし顔で代弁を務める。

「えー、富谷コミュニティーといたしましては自然のままの土地が一番多く残っている島が最も見学に適しているだろうという結論に至り赤ヶ島を希望させていただいておりまして島を二度訪問した高森先輩の正確無比な記憶を頼りに我々独自の趣向を凝らした地図を作製いたしましたのでガイドのほうもご心配には及びません」

大村はぼかんと突っ立っていた。

「な……」そこで正気にもどった。「なーるほどな。にしても、若けえのにすっかりした嬢ちゃんだ。いい後輩を持ったなあ、昭乃」

大村は朝日に向かって笑った。

「ま、まあな。やかましくて困るくらいだ」

昭乃は引きつった笑顔でルウ子の肩に手をやった。

「……」

ルウ子はメガネの縁に手をやり、ふつと口もとを緩めた。

9月4日

赤ヶ島。伊舞諸島の最南端に位置する、人口わずか四百ほどの小さな島である。地図で見ると雫のような形をしており、尖ったほうが北を差している。

シーメイドが領海に入ってから島南部の港につけるまで、まる一日かかった。なにもない海（たまに小さな島はあったが）ばかり

見ていたせいか、長い航海に不慣れな昭乃以外の三人は、遠いところへ来てしまったのだ、という旅情とも旅愁とも言えぬ思いを顔に浮かべていた。

一行は船を降りると、昭乃を先頭に、海沿いの縦断道路を一時間ほど北へ歩いた。崖路を行けば無数の海鳥たちが縦横無尽に舞い、山路を行けば小さき営みを見守る原始の森が広がっていた。この島では人間のほうが脇役だった。

北の岬に着くと、昭乃は皆に向かって両手を広げた。

「ここは理想郷と言ってもいい。すべてが大いなる循環の中でまわっていて、無駄なもの、ゴミになるものなど一つもない」

「あの城壁は無駄なものに入らないのかしら？」

ルウ子は海岸をきれいに縁取っている石垣を見渡した。

離島連盟は結成して間もなく、本土民の襲撃に備えるべく、諸島を次々と要塞化していった。この赤ヶ島も例外ではなかった。

昭乃は力無く手を下ろした。

「もし……世界がこの島だけだったなら、どれほど素晴らしいか」それはバクが感じた富谷の印象と同じだった。

「わかってないのね」ルウ子はイラついた顔で言った。「じゃあたとえば、天の悪戯で世界がこのちっぽけな島だけになったとするわ。食べものや資源は海に求めれば豊富にある。暮らしが豊かになれば自然と人口が増える。でも、土地はここしかない。建物は二階から三階になり十階になり、いずれは超高層マンションが建つようになる。それでも足りなくなる。森や山を削ってまた建てる。そしていつしか第二の統京になってる。この巨大天空都市で暮らしていくには、水一杯飲むもうとするだけでも、どうしたって文明の、電気の手が必要……」

「そんなことにはならない！」

「ならない？ ホントに？」

「互いの目が行き届く小さな社会では、どんな愚行もすぐに正せるものだ」

「ふーん。ところで富谷の若者たちって、豊作が長く続かないように密かに『儀式』をするっていうじゃない？」

「な！　なぜそれを……」

昭乃は腹痛をこらえるような顔になった。

「村が豊かになれば人口が増え、やがて共生社会が維持できる限界に達する。すると人口が減るまでの間、夫婦はたとえ適齢期であっても子作りを禁じられる。自然保護を謳っている連中が、自然の摂理に反することをやってる。これって正さなくてもいいことなのかしら？」

「我々は大地とともに生きる道を選んだ。自然を破壊するくらいなら、その宿命を受け入れたほうがマシだ」

「あんたはまだ女になってないから、そんなことが言えるのよ」

「どういう意味だ」

「女になれば、わかるわ」

昭乃は胸に弾でも食らったようにうつとなった。

気持ちを立て直したのか、昭乃はくいと顔を上げた。

「富谷のやり方が万人にとって正しいかどうかは、私にもわからない。だが、少なくともこれだけはたしかなことだ。電気には魔性が宿っている。人の欲望に巣くって本当に大切なものを破壊していくだけだ」

昭乃はバクに歩み寄り、肩に手をまわした。

「惑わされるな、バク。ルウ子^{あれ}は電気さえもどつてくればそれでもう満足なのだ。緑の大地が砂漠になろうと毒の空気に包まれようと、それ以外のことはどうでもいいのだ」

「……」

ルウ子は表情を作らず反論もしない。

ミーヤは昭乃に言った。

「そんなにルウ子さんを責めないで。ルウ子さんは電気を取りもどしたい一心だけで人生のなにかもを犠牲にしてきた。他のこと考えてる余裕なんかなかったんだよ」

「数知れぬ尊い命のことか？」

どこで調べたのか、昭乃はルウ子の過去を責めた。

ルウ子はメガネを外し、昭乃を直視した。

「あの日止まってしまった、あるべき時の流れを取りもどすことができたなら、あたしを煮るなり焼くなり、皮を剥いで悪党博物館に展示するなり、好きにすればいいわ！」

「そんなもの、建てるまでもない！」

ルウ子と昭乃は、天地も裂けんばかりに激しく睨みあった。

小さな地震があった。

揺れが収まると、ルウ子は険を緩めた。

「ま、なんにしても、今は今のことを考えましょ。あんたも責任ある立場なんだから、一度決めたことを前にぐずぐず引きのばさないの。いいわね？」

「クッ……」

昭乃は斜めにうつむいた。

バクたちは来た道を少しもどり、島北部の小さな集落に足を踏み入れた。そこから少し行つた山裾の林の縁に、島の頂へ通じる登山口がある。アルの片割れはその頂にいるらしい。

今にも崩れそうな古い平屋の民家が道沿いに連なっている。その中のある軒先を通りすぎようとしたとき、庭にいた老婆が一行を呼び止めた。

バクは緊張した。バレたか？

老婆は言った。

「疲れとるようだよ。休んでいきなされ」

バクとミーヤは顔を見あわせた。

信用していいものかと、バクが皆に相談を持ちかけようとしたとき。

「ありがとうございます。お世話になります」

ルウ子は疑うことも遠慮もなく、厚意に甘えた。

一行は用意された和室で荷を解いた。その最中、バクは不用心な決断についてルウ子を責めたが、いっさい耳を貸そうとしないので、しつこくつきまとって口撃を加えていった。

ルウ子はそんなバクをひと言で黙らせた。

「世の中はね、敵と味方だけで成り立つてるワケじゃないのよ！」
あるときはNEXAのトップとして、あるときは女子学生として、またあるときは飢餓地獄のサバイバーとして、ルウ子はあらゆる種類の人間を見てきている。

直感。それは持つて生まれた才能よりも、経験の積み重ねが決定的にものをいうらしい。バクは早く大人になりたいと思った。

老婆の言うとおり、一行は慣れない船旅で疲れていた。

夕食後、ルウ子は布団を敷いて横になると、五分もしないうちに寝息を立てはじめた。

それを見ていた昭乃は、「男なら弁えろ」とバクを部屋から追い出した。

バクは部屋を出るとき、捨てゼリフを吐いた。

「拳は男前のくせに、そういうことは別なんだな」

「……」

昭乃はさつと障子を閉めた。

するとミーヤは昭乃の前を素通りして、隣部屋へ移っていった。

昭乃はそれをとがめはしなかった。むしろ、微笑をもってそれを見送った。

その部屋は、昭乃とルウ子の二人きりとなった。

ルウ子は口からかすかによだれをたらしながら熟睡している。

昭乃はルウ子のすぐそばに正座した。懷に手をやり、隠していたナイフを抜く。

「バク、おまえの批判はまちがっていない」

昭乃は持ち手をふり上げた。

「ん……」

ルウ子は顔をしかめる。

「！」

昭乃は思わず手を止めた。

ルウ子の顔中に汗の玉が湧き出していく。

「利き銀行券なんてもうたくさん……」「十円しゃぶっても銅臭いだけだし……」

などと、わけのわからない寝言を言いはじめた。

暗殺の気配を察したわけではないようだ。

昭乃は聞き耳を立てた。

* * *

蝉の声なのか、耳鳴りなのか……。どっちでもいいけど、もっとボリウム絞ってくれない？

誰も使わなくなった郵便局。無惨に壊されたATM。

防犯用ミラーに映った自分。出来の悪いミイラがなんか睨んでる。地べたにすわって装置に寄りかかる。

額面入りの紙きれはもうたくさん。プレーン。汗ひたし。昆虫サンド……。いろいろやったけど、続けられる味じゃあないわね。

ふと、鼻がひくついた。

かすかな甘い匂い。これは……。干し柿。工場が動いてた時代の加工品。持っているのは若い男。風上のビルの陰にいる。

この辺はくまなく漁ったのに。どこで見つけたんだろう。

どうでもいい。そんなこと。だって、もう、それは、あたしの……。

正気を取りもどすと、歩道に男が一人横たわっているのを認めた。幾筋にも分かれた赤い支流が緩い坂道を下っていく。

「ああ、ひっつかまえて、在処を吐かせるんだっ……」
頭を小突いた。

でも、明日になるともう、今日のことは忘れてしまってる。刺したことも、刺さずにすます方法があったと省みたことも。

誰もいない高架下で干し柿を頬張った。

目眩がした。その甘さに酔いしれるよりも先に、味覚そのもののメーターがふりきれてしまった。久しく触れてなかった芳香にあたったのか、鼻の粘膜がひりひりする。ついでに耳もおかしくなった。頭上でガタゴト電車が通りすぎる音。

いったいいつまで待てば、エアコンの効いた部屋で見もしないテレビをつけケータイをいじりながら冷蔵庫から取り出したアイスをお腹が下るまで食べまくれる日がやってくるのだろう。

涙は出なかった。代わりに鼻水をすすった。

しまった。鼻づまりは嗅覚を鈍らせる。

「！」

人の気配にふり返ったときはもう遅かった。

飛びかかってくる大きな影。

為す術もなく歩道に転がされる。

六本の青臭い手が衣服を剥いでいく。

果実が露わになる。

荒げた息。血走る目。

正面の手が熟しかけの果実をつかもうとした、そのとき。

すべての手が凍りついた。

生唾が三つ、喉の奥に流れ落ちた。

正面のふるえる手が、そっと果実を包み直していく。白き大地の上を縦横に走る、赤き山脈に注意しながら。

「ご、ごめん……なさい。まちがえました！」

悲鳴と足音がいつせいに遠ざかっていった。

握っていた手を開く。キラリと光る銀色の欠片。

『作業』を諦めてくれたおかげで、こちらも『作業』せずにすんだ。

……。お腹の干し柿がなかったら、ちがう運命だったかもしれないけど

* * *

9月5日

「ハッ!？」

昭乃は正座のまま目覚めた。

窓の外はもう白みがかっている。

「同じ夢を、私も見ていたのか？」

ルウ子が日課と称していたのは、これのことだったのか。時を奪

われたルウ子は、あんな苦い夢を、果てしなく……。

「クソッ!」

昭乃はナイフをふり下ろした。

刃はルウ子の耳をかすって枕に突き刺さった。

「もう少しだけ、時間をやろう」

「あれか」

バクは朝日が照らす山頂に目をやった。

ゆっくりとまわり続ける白い風車。木々のすき間からプロペラの上半分だけが見える。

ルウ子は手にしていたケータイに話しかけた。

「あんたの片割れはたしかにあそこなのね？」

ソファに横たわるアルは、前肢をなめながら言った。

「そうらしいね」

「ところで、そいつもあんたみたいな猫の姿なの？」

「さあね。パートナーの趣味次第じゃないの？」

それからしばらく山道を行くと、低木に囲まれた草深い広場に登りつめた。

遠目にはおもちゃのようだった風車。今は開いた口を塞ぐのに苦勞する。

バクたちは風車を横目に、古びた二階建ての施設に足を向けた。

そこは風力発電の研究所だった。電氣が使えなくなっただけなら誰も通っていないはずだと、宿の老婆は語っていた。離島の民は自給自足生活の維持に忙しく、たいした眺望もない山頂に遠足するような暇人などいなかった。

見たところ、施設の一階は職場で二階が宿舎のようだ。一階はどの扉も窓もブラインドも閉め切つてある。人の氣配はない。

バクたちは錆びかかった外階段を上がつた。

二階は玄關らしきドアが三つならんでおり、アパートのような造りだ。

「ん？」ルウ子の鼻がひくついた。「奥から生活のニオイがする」

ルウ子はだつと通路を駆け、ターゲットの前に立つや、ノックもせずにドアノブを引っ張つた。

金属棒が二度抵抗した。

ルウ子は鼻をならすと、ついてきた者たちに予言した。

「本土からの逃亡者が隠れてるわ」

「なぜわかる？」

バクは訊いた。

「離島の暮らしに鍵なんか必要ないもの」

そのとき、さつとドアが開き、手斧を持った白髪頭が吠えた。

「なににきたー！」

バクとミーヤと昭乃は反射的に飛び退いていた。

ルウ子だけは何事もなかったように老人と相対している。

「ブツを取りにきたわ。隠しても無駄よ」

「わ、私はなにもやっていない」

「諦めなさい。証拠はあがつてんのよ」

「私はむしろ……被害者なのだ」

「は？ なんのこと？」

「離島事件にはいっさい関わっておらん！」

「そうじゃなくて！」ルウ子は地団駄を踏んだ。「ああもう、自分で探すから！」

ルウ子は一步踏みこんだ。

「く、来るな！」

老人は目を剥き、手斧をふり上げる。

「待った！」

バクがそこに割って入った。

刃はバクの鼻先一センチのところまで止まった。

バクはハツとした。体が勝手に動いてしまった。まだ死ねない体だというのに。

「どきなさい」

ルウ子はバクの背中をぐいと引っ張った。

「な！？」バクはかっとなった。「礼ぐらい言ったらどうなんだ！」

「この男に人殺しの根性なんかないわ。そんなことも見抜けない役立たずなら、今すぐ泳いで帰ってもらうしかないわね！」

「根性はなくても手もとが狂うことはあるだろ！」

「そのときはそのときよ」

「強がんのもいい加減に！」

バクが平手を上げたとき、ミーヤがその肩にすつと手をのばした。「ルウ子さん。そんなに焦らなくても……」

ミーヤは二人をなだめると、拳動のおかしなケータイについて老人に尋ねた。

老人は思いあたる節があるのか、手にしていた斧を玄関の壁に収めた。

作業服が妙になじんでいる。仕事がないときでも着ているのだろう。根っからの職人といった感じた。

「入りなさい」

老人は言つて、奥に姿を消した。

バクは目配せしてミーヤを引きとめ、ルウ子と昭乃を先に行かせた。

「ミーヤ。俺……」

ミーヤを一人にさせないと約束しておきながら、他人のために身を擲つような無茶をした。その言い訳をしようとしたのだが、どう言えばいいのか、急にわからなくなってしまった。

「気持ちにはわかるけど、もうちょっと冷静にね」

ミーヤは微笑むと、足早に部屋へ上がっていった。

バクは独り言った。

「自分でもわかんないのに、なんでミーヤがわかんだよ」

部屋はがらんとしていた。紙切れで散らかった事務机、古びた理工学書がならぶ書棚、折りたたんだシミだらけの布団、電気回路の残骸が山盛りの段ボール箱が一つ。物らしい物といえばそれくらいだ。

老人は机に収まっていたイスに腰かけると、バクたちを畳にすわらせた。

「私は平賀源蔵。^{ひらがげんぞう}お嬢さんの言うとおり、逃亡者だ」

平賀に妻子はなく、自称仕事人間。2016年の大停電当時は電力会社の技術顧問をしていた。パワーショックに入ってしまったことは本土で配給生活を送っていたが、旧政府が倒れ治安が悪化したことを機に赤ヶ島へ逃亡。事情を話して島人の世話になろうと思っていた矢先、難民を装った暴徒による例の『離島事件』が各地で起きた。「本土者とわかれば、もはやなにを言っても命が危うい。私は住む場所に困り、山をさまよっていたところ、この放棄された研究所を見つけたというわけなんだ」

平賀が話をしめくくると、すかさず昭乃が口を開いた。

「無駄と無駄。同類はよく引きあうというが、本当だな」
バクは頭にきた。

「爺さんのどこが無駄だ！」

昭乃はため息をついた。

「まったく、出来の悪い生徒だな。そんなに私の補習を受けたいか？」

「悪いが遠慮しとくぜ。頭突きの王者になっても自慢にならないんでな」

「なんだと！」

立ち上がるうとする昭乃に先んじて、平賀は言った。

「君の言うとおりだ。私は無駄なところか、存在自体、有害な人間だ。島にとつても、世界にとつてもね」

「そこまでは言ってない」

昭乃はどかっとすわり直した。

と同時にルウ子がすくと立ち上がった。

「世界にとつても、つて言ったわね。その偉そうな神経はどこから来るのかしら？」「私はこの山に籠もり、パワーショックの原因を考え続けてきた。これは電気の問題だ。世界屈指の電力会社にいた私には、解決する義務があると思った」

「それで？」

平賀はふつと疲れた顔をした。

「四半世紀かけてわかったことは、ただ一つ。自分はこの世に何一つ影響をあたえられない、ということだけだった」

ルウ子はいっぴくなく穏やかな顔を見せた。

「そんなに落ちこむことないわ。あたしのブレインたちもお手上げだったから」

平賀は偉そうに語るメガネ少女に怪訝な顔を向けた。

「ルウ子さん、と言ったね。あなたはいつたい……」

「実はあたし、NEXAのトップ張ってんの。ミーヤ！」

「は、はい」

ミーヤは組織の概要を手短に語った。

「……」

平賀は難しい顔のまま聞き入っていた。

ルウ子は眉を段にした。

「あら、あんまり興味なさそうね」

バクも意外に思った。平賀は時機到来と目を輝かすものとばかり……。

平賀は低く言った。

「そんな大事なこと、私に話してもよかったのかね？」

四人は息を凝らした。

バクは老人を睨め上げた。

「あんた、まさか……」

平賀はバクを一瞥すると、明るく言った。

「それでブツというのは、これのことですかね？」

平賀は作業服のポケットから青いケータイを取り出すと、ぽいと床に放り投げた。すると、ケータイは物理法則を無視して平賀の手もとに舞いもどった。

「パワーショックがはじまったあの晩のことだ。会社に状況を聞こうと私はケータイを手にしたのだが、これがうんともすんともいわない。頭にきた私はケータイを床に投げつけた。するとこれだ。無論、停電事件との関わりを疑った。だが、電気を失った電気屋はあまりに無力だった」

「……」

バクは一気に疲れた。てっきり平賀は、ルウ子一味を売る代わりに島民として認めてもらうつもりなのかと思っていた。

一方、ルウ子は老技師との駆け引きを楽しんでいるようだった。

「ところで先生、お歳はいくつ？」

平賀は遠い目をした。

「六十から先はもう忘れてしまった」

「とぼけてもダメよ。あたしの見たところ、リアルで九十六、七つてところかしら？ 会社を定年退職して技術顧問になった。それから数年して急に歳を取らなくなった。ちがう？」

「な、なぜそれを……」

「そんな怖い顔しなくてもいいわ。あたし、こう見えても2000年生まれよ。んで、原因はコイツらしいの」

ルウ子は懷からケータイを取り出し、広げてみせた。

緊張しているのか、画面の中のアルは写真のように固まっている。

「！」

平賀はガッツと立ち上がった。

「さっそくだけど先生、そのケータイ、起動してもらっわよ」

「う、うむ」

平賀はルウ子に言われたとおり、自分自身の電話番号を押した。

画面に明かりが灯ると、彼は異境の新奇術に狼狽える老賢者のような顔になった。

「こ、こんなことがあつていいのか……」

ケータイが起動すると、ケージの穴から顔を出すマウスの画像が映った。

マウスの名はニコ。平賀に動物を飼う趣味はなかったが、友人が勤める研究所を訪ねた際に、箱の中で孤立していた一匹が妙に懐くので、つい持ち帰ってしまったのだという。

「詳しいことは後で話すわ、先生。その前に、ごたーいめーん」

ルウ子はアルを、平賀のニコと向きあわせた。

アルはぎこちない笑みを浮かべた。

「や、やあ……ニコ」

「運がなかったわね。転がりこんだところが、マヌケ女のオモチャだったとは」

ニコはかぶりをふった。

「……」

ルウ子の額にびきつと青筋が走った。

アルは島へやってきたことについて言い訳をした。

「その……抵抗はしたんだけどね。彼女、口が上手くって……」

「いいんじゃない？ 私は電気があつたほうが、早く問題が解決し

てくれる気がするわ」

そこにミーヤが割りこんだ。

「あ、あの、お取りこみ中のところアレなんだけど、先生が……」

平賀は立ちつくしたまま、真っ白な灰になっていた。

無理もない。ただの遺影にすぎなかったはずのニコが、いきなり人間の生中継のようにふるまったのだから。

しばらくして平賀が蘇生すると、バクはこれまでの経緯を語った。技術畑の平賀は『テスラン』の存在という、科学理論から逸脱した話になかなか納得しなかった。悩んだ末、彼は暗黒物質ダークマターを一つの例に挙げた。直接観測はできないが、そこにあるとしなければ辻褄があわないもの。宇宙にはそういう謎が山ほどある。テスランもその類であろう。平賀は自分に言い聞かせるように語っていた。

ニコは地属性、つまり地球由来の電気の伝わりを仲介する者たちの代表だ。彼女を起動したことで、長らく続いていたパワーショック時代に幕が下りようとしていた。

平賀は興奮した様子で部屋を飛び出し、階段を駆け下りていった。バクたちも階下へ急いだ。

一階は風力発電の研究室（兼管制室）だった。フロアの大半は研究区画だ。職員用の机、プロペラ式や垂直軸式風車の模型がならぶ実験台、電力や力学関係の資料が収まった書棚などがある。

官制区画はというと、部屋の奥の隅つこの二畳ほどのスペースに、一人用ロッカーのような色形の制御盤と監視用のデスクトップパソコンが一台あるだけ。これで充分だった。

窓の外では風車の白い羽根が勢いよくまわっている。

平賀はすでに準備を終え、制御盤の前に立っていた。

バクたちが見守る中、平賀はスイッチを一つ入れた。

三十年の眠りから目覚めた計器針は、二度三度と身ぶるいして立ち上がった。いった。

「おおお……」

平賀はふるえる手を手で押さえつける。

やがて計器針は右四十五度のあたりで落ち着いた。

風速は十メートル毎秒。出力値が定格に達する。試験運転は成功だ。

ルウ子は壁際に走り、蛍光灯のスイッチを一つ一つ入れていった。

「電気よ！ 電気がもどってきた！」

手に手を取りはしゃぐ、電化文明世代のルウ子と平賀。

「……」

一方、若い三人は声もなく驚いていた。

太陽やロウソクの炎とはまったくちがう、白々とした光。科学が作り上げた血管に、今、電気という名の血が通ったのだ。

バクはその雪のような白さに寒気を覚えた。

試運転を終えると、ルウ子は平賀に声をかけた。

「平賀源蔵。本日付けであなたをNEXTAの特別技術顧問に任命します。異存はないわね？」

いきなりの抜擢に平賀は顔をひきつらせた。

「い、いいでしょう。望むところです」

「正式な辞令は本部に帰ってからね」

ルウ子は満足そうに微笑んだ。

平賀はそばにいたバクに耳打ちした。

「君のボスはいつもこんなに唐突なのかね？」

「そうなんだ。神経回路の長さが他人より短いらしい」
びたん！

ピンクのケータイがバクの頬に張りついた。ルウ子が投げつけたのだ。

「な？」

バクは共感を求める。

「なるほど」

平賀は苦笑を返した。

ケータイは空中をふらつきながら、ルウ子の手もとへ帰っていった。

た。

ルウ子にケータイを開くと、アルは前肢でおでこを押さえていた。

「あ、あんまり乱暴に扱わないでくれよ……」

「念のために聞いとく。ケータイを壊したらあんたたちはどうなるの？」

「ボクらがこの器に閉じこめられたとき、器自身もすっかり性質が変わってしまったみたいだよ。たぶん、爆弾を落としてもびくともしないだろうね」

「ならいい」

「よくない！ もの言わぬ機械とはもうちがうんだ！」

「はいはい、悪かった悪かった」

ルウ子は面倒くさそうにケータイの背中をさすってやった。

ニコを手に入れたバクたちはさっそく本土へ帰ることにした。

平賀は荷物を取りに二階の自室へ上がっていった。

バクたちは風車のそばで彼を待っていた。

ルウ子は帰京が待ちきれないのか、今後の構想を一人口にしていく。

「やっぱり火力が使えるのは大きい。発電所の整備しといて正解だったわ。問題は燃料よね。外交が冷え切ってる限り、化石燃料の輸入は期待できないし……。となると、炭坑の再開発が急務ね。なんといつても発電は火力よ」

それまで石油や天然ガスや原子力に頼っていたものを、石炭一手でまかなおうというのだ。発電所一つならともかく、それが全国に広がったらどのようなことになるのか。

アルとニコは、ルウ子のケータイ画面を半分に割り、通信で議論を交わしていた。

「ああ、この緑でいっぱいのが国が煤だらけになってしまつよ」

アルはごろんと横になった。

ニコは言った。

「そんなのたいしたことないわ」

アルはむくと頭をもたげた。

「そうかな？」

「自然に任せておけばいいのよ。人間が勝手に自滅することも含めてね」

人間に協力的かと思われたニコだが、あれは皮肉だったようだ。リュックを背にする平賀がケータイ片手にやってきた。

「耳の痛い話ですな、局長」

平賀は耳の裏をかいた。

「……」

ルウ子は黙ったまま、広場を取り巻く木々の揺らめきを見つめていた。

「局長？」

「ううん。なんでもない」

ルウ子は目を伏せると、ふっと息をついた。

「ところで昭乃はどうした？」

バクは新しい事実のことで頭がいっぱいで、メンバーがそろっていないことに今ようやく気づいた。

「あれ？」

ミーヤは左右に首をやった。

「まーったく、いつまで拗ねてんのかしら」

ルウ子は一人、施設の裏手へ足を運んだ。

昭乃は裏庭で気ままに咲く野花を見つめていた。

ルウ子は両手を腰にあてて言った。

「なーに黄昏れてんのよ。帰るわよ」

「……」

「あたしらを無事帰還させるまでが約束でしょ？」

「なにかを燃やしてまた地球を汚そうとする。作った電気でまたなにかを壊そうとする」

「そういうことはね、電力で食糧危機を救える見通しが立ってから議論すべきことよ」

昭乃はキツとルウ子を睨んだ。

「それでは遅い！一度ふくらみはじめた人間の欲望は、爆発して自ら滅ぶまで止まらない」

「将来そうなったとすれば、それははじめっから人類の宿命だったのよ」

「そうはさせない！今ここでおまえを倒せば、歴史を変えられる！」

昭乃はナイフを抜いた。

「フフ……あなたにあたしは殺せない」ルウ子は丸腰のまま昭乃に歩み寄っていく。「あたしの背中には何億もの命がかかっているもの」

「フン！愚か者の命など、いくら集めようと虫一匹にも値しない！」

ルウ子は立ち止まった。

「差別……するわけね？」

「命を助けるためなら、腐った腕は切り落とすだろう？おまえたちはその腕のほうだ。まずは私が執刀してやる！」

昭乃はルウ子の胸もとめがけてナイフを突き出した。

達人の早業に、ルウ子は為す術がない。

昭乃はルウ子を貫いた。

ルウ子はがくと首をたれた。

一筋の風が吹き抜ける。

昭乃は低く言った。

「今のは最後の警告だ。電気のことには生涯忘れると誓え。即答なら許す」

「……」

ルウ子はふるえていた。

昭乃はルウ子の脇の下からナイフを引き抜いた。

ルウ子は顔を上げると、こらえきれずにククと笑った。

「優しいのね。見かけとおんなじで」

「！」

昭乃は真っ赤になって歯がみし、切っ先をふるわせた。

「どうしたの？ あたしは警告を無視したのよ？」

「人の厚意を！」

昭乃は今度こそとばかりに、持ち手の腕をぐつと引く。

と、何者かが昭乃の二の腕を捕まえた。

「隙だらけだな。昭乃らしくないぜ」

「バク！？ 止めるな！」

昭乃は腕をぐいと揺する。

バクの手は離れない。

「な！？」 昭乃は見張った瞳をそこに向けると、カクと脱力した。

「その力……」

「俺がいきなり超人になったわけじゃない。昭乃、あんたの問題だ」

「ク……」

昭乃の持ち手が開いていき、ナイフは草間に紛れた。

「俺が知ってるモグリ医者は、腐りそうなところも最後まで諦めなかった。その姿を見ていた患者も最後まで病と戦った。治った奴はなにかが吹っ切れたように、それまでになく元気になった。ダメだった奴も、現実を受け入れて見ちがえるほど強くなった。今の世の中に肝心なのは、そういうことなんじゃないのか？」

「……」

昭乃は再び腕を揺すってバクの手を外すと、ざくざくと草むらの向こうへ去っていった。

バクとルウ子は顔を見あわせた。二人はあえて昭乃を呼び止めなかった。

NEXAの四人は山を下りた。

港に着くと、一行はシーメイドのデッキに女を一人認めた。

昭乃は帆をいじりながら、しかめっ面で言った。
「なにをばやばやしている。さっさと帰らないと連盟に怪しまれるぞ」

9月7日

昭乃は統京の港でバクたちを降ろすと、富谷をめざし一人海路を帰っていった。昭乃は航海中いつさい無駄口をきかなかったが、別れ際、一つだけ言い残した。

「電気など無いままのほうがよかった。そう思うときが必ず来る。必ずな」

9月8日

NEXA本部にもどった一行は、赤ヶ島の調査報告会を開き、そこでアルとニコを紹介した。会議室に集まった各部門の代表者たちは、人間の力では認識できないという、テスランの存在をなかなか信じようとしなかった。そこでルウ子は議論の場を、統京の西湾岸にある大品発電所へ移すことにした。百聞は一見にしかずだ。

9月9日

ルウ子はバクとミーヤと平賀を引き連れ、発電所に出向いた。大品火力発電所。かつては電力会社が管理していたが、今は研究用としてNEXAが所有している。外交回復の見こみは薄いと判断したNEXAは四年の歳月をかけ、この発電所を国内でまかなえる石炭仕様に改造した。あとは電気の源が見つかることを祈るばかり

だった。

副局長であり電力開発部長でもある孫は、管制棟の玄関で一行を出迎えた。

「発電試験の準備はすでに整っています。ところで、その……」孫は平賀の手もとでたたずむニコに目をやった。「そんな小さな器の中に、地上のほとんどすべての電気を操る力が宿っているなど、未だに信じられないのですが……」

「別に信じなくてもいいわよ。そのほうが悩みが少なくてすむわ」ニコは赤い瞳を細めた。

「う……」

孫は苦手な食材を前にしたときののような顔つきになった。

彼もまだ、アルやニコのような非科学的存在を受け入れられないようだ。

「と、とにかくやってみましょう」

三十分後。

所内の照明がいつせいに輝いた。カバンの底で眠っていたu・p^{ポッド}は三十年前のダンスミュージックをならし、空調はダクトにたまった埃を吐き出し、資料室に展示してあった裸のエンジンはうなりをあげた。これまでは同じような手順を踏んでも、うんともすんともいわなかったものばかりだ。

アルとニコが本土にやってきて、世界は一変した。特に地属性ニコの人類に対する影響力は計り知れない。火力や水力をはじめとするほとんどすべての発電方式は、ニコの如何にかかっているのだ。

ルウ子とアル、平賀とニコは、人の手に負えないほど強い引力で結ばれており、完全にユニット化していた。二組のユニットは、いわばこの世の電気の大元締めである。テスランのふるまいはともかく、見た目上、スイッチ一つですべての電気がオンオフするところは、配電盤の遮断器によく似ていた。

ルウ子はこのユニットを『マスター・ブレイカー』と名づけた。

平賀は技術顧問としてニコとともに発電所に残ることになった。ルウ子はアルとともに本部へ帰っていった。バクとミーヤは特務研究員の任を解かれ、付き人兼ボディガードとしてルウ子に同行した。

9月21日

平賀源蔵が四半世紀ぶりに本土の土を踏んでから二週間がすぎた。平賀は大品発電所で充実した日々を送っていた。彼の豊富な経験と知識をめぐって、あちこちの部署で引つ張りだこなのだ。その一方で、彼は連日ニコの小言を浴びていた。

その日の午後。

平賀は休憩室で一息ついていた。

職員たちは皆忙しいようで、今はニコと二人きりだ。

平賀がソファに腰かけるなり、本日のニコの小言がはじまった。

「電気なんか作ったって、愚かな使い道に浪費されるのがオチね」

「私の目の黒いうちは、そうはせんよ」

「あなたはずっと黒いままじゃない」

「……」

「？」

「そのことなんだが……」

平賀は立ち上がると、さっと窓を閉め、ドアに鍵をかけ、ソファにすわり直した。

「一つ教えてほしい。私や局長から時を奪ったのは、君たちなのか？」

「私たちじゃないわ。私たちをこんな風にした、あなたたちでしょ？」

「いつもながら容赦の欠片もないな……」

ニコたちが能力を獲得したときの副作用なのだろう。平賀はそう

考えていたが、実際のところ、真実は誰にもわからなかった。

歳を取らなくなったことは、短い目で見れば喜ばしいことだが、その先には重大な落とし穴が待っている。

平賀は問わずにはいられなかった。

「私には、死は許されていないのだろうか？」

「病気をしたことは？」

「パワーショック時代に入ってから、まったく。一度も」

「ま、老衰や病死は諦めるにしても、物理的に破壊すればなんだつて死ぬでしょ？」

「それもそうだ」

平賀はほっと一息ついた。

いつの日か、世の中を知りすぎて心が壊れてしまっても、自分で命日を決められるということだ。ただ、気がかりなことが一つあった。

「運悪く、私や局長が死んだ場合、君たちはどうなるのだ？」

「スイッチをオフにしたときと同じことが起きるわ。そして、次にケータイを起動した人が、私たちの新たなパートナーになるのよ」

「番号は？」

「そのまま引き継がれるわ」

「なら、誰かに伝えておかなくてはならんな。ええと番号は……あれ？」

平賀は首をかしげ、腕組みした。

「あきれた。自分の電話番号よ？ 私を起こすときに一度思い出してるじゃない」

「若さを永遠に保てるといっても、六十八ではな」

平賀は笑うと、思い出した自分の番号を確実に暗記すべく、何度か紙に書いたり暗唱したりした。

9月25日

幹部会議が終わり、ルウ子は席を立った。

会議室の出入口で控えていたバクとミーヤは、すかさずルウ子の両脇を固めた。

ルウ子はぐいっと二人を押しつけた。

「そんなにベタベタされたら、暑苦しいわ」

マスター・ブレイカーの存在を政府に報告するか否かで、会議はいつにも増して紛糾した。NEXAが手にした力のスケールがあまりにも大きすぎて、これから起こる事の予測がつかないのだ。

バクはルウ子を睨みつけた。

イラついているのはわかるが、こっちだって真剣にやってるんだ。幹部の連中さえいなければ、噛みついてやるところなんだが……。

ダークな思念に感づいたのか、ルウ子はバクを睨み返した。

ミーヤがそこに割って入る。

二人が互いにそっぽを向くと、ミーヤはため息をついた。

「こんなときに限って副局長が欠席だなんてね」

孫は政治や経済、広報面などのこみ入った問題を収める能力に長けていた。

一方、ルウ子は責任感の強さやタフな精神力、達者な口においては組織のトップとして申し分ないものだったが、実務面では特に優れているわけではなかった。

孫は発電所で問題が起きたといって会議を急遽欠席した。大きな問題ではないが、部下に任せるにはいささか支障があるというのだ。発電所の者がそれをルウ子に直接伝えに来た。電話はまだ復旧していない。新たに導入した本部の無線は、部品の一部に不備があったらしく、すべて故障していた。

幹部たちが去り、部屋にはバクとミーヤとルウ子の三人だけとなった。

バクはルウ子に訊いた。

「マスター・ブレイカーのこと、新政府には教えないのか？」

「その前に、独立を考えてるわ」

「独立？ 民間の団体になるってことか？」

「そうよ。手はすでに孫が打ってある」

「……」

「なんでそこまでする必要があるのか、って今思ったでしょ？」

「政治のことはよくわからないな」

「先生とニコが政治家なんかに渡ることになったらどうなるか……。そういうあんたみたいのを、クソ難しい名前の法律作って巧みに騙して、自分らだけは権力も豪邸も欲しいままにできるよう、国のシステムを作っていくのよ」

「そんなの、今も昔もたいして変わってないんじゃないのか？」

「だからよ！」

ルウ子が叫んだとき、会議室の出入口に女が現れた。電力開発部の和藤栄美だ。

ルウ子は言った。

「あら、和藤。発電所そうちの問題は解決したの？」

「万事順調です」

和藤は笑顔で言った。

「で、なにがあつたわけ？ 詳しく説明してちょうだい」

「聞こえませんでしたか？ 私は万事順調だと言ったのです」

和藤は懷から拳銃を抜くと、銃口をルウ子に向けた。

すると、和藤の両脇から戦闘服の男たちがなだれこんできて三人を取り囲み、いっせいに銃をかまえた。

それには目もくれず、ルウ子は笑顔を返した。

「ほーん。謀反ってワケ？」

「いえいえ、ちょっとした人事異動ですよ」

黒光りする銃身。ニコの目覚めは発電所だけでなく、長らく沈黙してきた雷管まで蘇らせてしまったようだ。

ルウ子はわざとらしく辺りを見まわした。

「孫はどこ？ あいつが首謀者でしょうに」

「よくわかりで」

「そりゃわかるわ」ルウ子は笑った。「あんたを使いによこしたんだから」

「黙りなさい!」

和藤は撃鉄を引いた。

「で、あたしをどうしたいワケ?」

「ケータイの電話番号、教えていただきますしょうか。従っていただけるなら、『局長の名において』、命だけは保証しますよ」

「なるほど、そういうこと……」

ルウ子はパズルが解けたと言わんばかりに、何度となくうなずいた。

ルウ子と和藤は見つめあった。

十秒、二十秒、三十秒……。

ルウ子は息一つ乱さない。

一方、和藤は唇の先を次第にひくつかせていった。

和藤が目配せすると、兵隊たちはバクとミーヤの後頭部に銃口を突きつけた。

「選択の余地などないはずよ」

「フフ」

ルウ子は唇の左端をきゅっと上げ、いびつな笑みを浮かべた。部下の命など装甲板くらいにしか思っていない非情な司令のごとく。

「……」

和藤は銃口をふるわせた。

怒りに任せてトリガーを引けば、アルの秘密は永久に闇の中だ。

ルウ子はふっと笑みを消した。

「殺したのね?」

「!」和藤は腑に落ちないという顔で銃口を下げた。「本部に缶詰だったあなたが、なぜそれを……」

「いったいなにがどうなってんだ!」

バクが怒鳴ると、和藤は平賀とニコが交わした密談の要点を語っ

た。

二人の会話はすべて盗聴されていたのだ。

和藤に笑顔がもどった。

「休憩室を出た後、平賀は自分の犯したミスが世界を脅かしかねないと、機密を口にしたことを自室で反省していたわ。先生はお疲れのようだったから、よく眠れるよう素敵なお香を焚いてあげたですよ」

バクはようやく事件の展開が読めた。

契約の秘密を知った孫は、平賀をガスで毒殺。パートナーを失ったニコは、自動的にスイッチがオフとなり眠りについた。すかさず、孫は聞いた話の通りニコを起動し、新たな契約を結んだ。本部の無線が壊れるよう手を加えたのも、孫と和藤の仕業なのだろう。二人の連絡用だけを残して。

ルウ子は言った。

「ニコが先生に話したように、あたしもアルから同じことを聞いたわ。そのときから、いつか誰かがやるんじゃないかと心配だった。あたしは先生のピンチを予感していながら多忙に負け、本部へ異動させることを怠った」ルウ子はうなだれた。「あたしの一生の不覚よ」

和藤は言った。

「もう一度だけ言っわ。ケータイの番号を教えなさい」

ルウ子は顔を上げた。

「誰を撃つても同じことよ。あたしの口からはなにも出てこない」和藤は苦笑した。

「さすがは他人の人生を土足で踏み越えてきただけのことはあるわね。ま、番号の件は保留にしておきましょう」和藤はルウ子を指した。「橋本ルウ子。本日をもってあなたを局長の任から解きます。そして引き続き、名誉顧問として私たちの活動を陰からサポートしていただきます」

「まわりくどい言い方はやめなさいよ」

「そうですね。要するに、あなたは予備^{リザーブ}です」

ルウ子とアルが関わる太陽光発電は、今の段階では未知数だ。資源枯渇などの非常事態に備えて確保しておきたいのだろう。

和藤は続けた。

「従っていただけないなら、今度は本当に二人を殺^やりますよ？」

ルウ子は伏し目でふつと微笑み、そしてノーツとのびをした。

「働きづめだったから、しばらく休ませてもらうわ」

和藤は退屈そうにため息をついた。

「孫^{あのみこ}の言^{こと}ったとおりの結果になったわ。それにしても、ずいぶん丸くなったものね」

「……」

ルウ子は知らん顔だ。

「せいぜい脳味噌にカビが生えるまで休むといいわ。連れて行きなさい！」

二人の戦闘員がルウ子の腕を取った。

「待ちなさい！」

爆撃のようなルウ子の一喝に、厳つい男たちはハツと手を放した。

「バクとミーヤの解放が先。下手な真似したら……こうよ！」

ルウ子はそばにいた男の腰からさつとナイフを奪うと、切っ先を自分の喉もとに向けた。

その据わった目に、和藤は息を呑んだ。

「い、いいでしょう。二人とも、さつさと出ていきなさい！」

ルウ子は二人に最後の辞令を下した。

「バク、ミーヤ。本日をもって君たちを、解雇します」

バクは部屋を出る瞬間^{とぎ}、ルウ子に一瞥をくれた。ルウ子は敵に捕まったというのに、なぜか肩の荷が下りてほっとしたような、場違いな表情をしていた。地下の狩人が現役を退くとき、よくそういう顔をしたものだ。バクはそれが気がかりでならなかった。

NEXAの敷地を囲むコンクリート壁沿いの道を、バクとミーヤ

はあてもなくうつろっていた。壁の高さは十メートルほどあり、道路の向こう端へ寄らないと内部の様子はほとんどわからない。

「クソ！」

バクは壁を蹴った。

「バク……」

ミーヤはバクの二の腕をそつとつかんだ。

「ルウ子の仕事がこれからってときに、孫の野郎、なにを企んでやる……」

「儲けを独り占めにする気かな？」

「……」

バクは長大な城壁の向かいに立ちならぶ、朽ちかけたビルの一つに目をやっていた。

「どうしたの？」

「走れ！」

バクはミーヤの手を引くと、近くの路地へ駆けこんだ。

間一髪、バクが蹴ったばかりの壁に矢があたって跳ね返った。

二人はでたらめにひた走り、ビルのすき間を縫っていった。

追っ手や待ち伏せはなかった。敵は一人のようだ。

バクは見通しの悪い路地に入ると足を止め、壁にどつともたれかけた。

「ハアハア……危なかった」

ミーヤは両膝に手を置き、肩で息をしている。

「ハアハア…… 武警かな？」

「ちがうな。俺たちはもう地下賊じゃない。これでも三十分前まではNEXAの職員だったんだ」

「じゃあいったい……アツ！」

ミーヤが路地の奥を指すと、バクはそちらに顔を向けた。

それまで誰もいなかった袋小路に、黒ずくめの大男が立っていた。袋小路を形作っている三方の廃墟を含め、この界限は高いビルが密集している。見つかるはずは……。

バクは視線を上げていった。

屋上からだ！？

バクはさつと身を起こしてミーヤをかばうように立った。

黒ずくめは腰の左右からナイフを引き抜いた。

この男……どこかで……。

バクの脳裏に一年前の記憶が駆けめぐった。

「あ！ あんたは……」バクは男を指した。「俺とニツキを狙い撃ちした……」

ミーヤはバクの脇へ進むと、怒りに声をふるわせた。

「未来ある子供たちを……お腹に赤ちゃん……いる子だっていたのに」

バクはうつむき、拳をぐつと握った。

「そうか……百草せんせいが言ってたのは、こいつのことだったのか」

男は冷えた溶岩のようだった表情をかすかに崩した。

「今は後悔している。賊狩りはもう、二度とやらん」

「なら、それはなんの冗談だ」

バクは男の手もとに向けて顎をしゃくった。

「……」

男はじれったいほどゆつくりと、ナイフを鞘に収めていった。眉間に幾筋もの溝が走る。淀んでいた瞳が揺らぎ、淀み、揺らぎ、そしてまた淀んだ。刃が半分収まったところで男は手を止めた。

「すまん」

男は二刃を放った。

バクとミーヤは動けなかった。男の迷いが災いした。

と、ここでバクの時間感覚がいきなり何百倍にも延びた。

ナイフは少しずつ、だが確実に迫ってくる。

ちくしょう！　せめてミーヤだけでも……。

気持ちだけは百万回身を挺したのだが、手足にかかる重力は百億倍だった。

諦めかけたそのとき、バクの脇をにゅっと草色の影がすり抜け、

視界の前方へ割りこんでいった。影はやがて人の形となり、敵の姿を遮った。

と、ここで現実の流れにもどった。

「お、おまえは……」

男の顔を覆っていた溶岩に亀裂が走った。

つぎはぎ迷彩服の女は、左右の指先だけでナイフを受け止めていた。

バクは思わず叫んだ。

「昭乃！」

ミーヤが続く。

「どうしてここに？」

昭乃は二人を背にしたまま言った。

「おとといのことだ。石林の中でひと際高くそびえる塔に、黒い稲妻が落ちる夢を見た。それがどうしても忘れられず、偵察に来てみたらこれだ」

「昭乃……綺麗になった」

男は昭乃のことを、身内を懐かしむような目で見つめている。

昭乃の目つきは、縄張りを見まわる鷹から、物憂げな少女へと変わっていった。

「熊楠先生。なぜ黙って出て行ったのですか！ どうしてこんな人殺しの仕事なんか……」

「今語ることはないにもない」

「先生！」

「……」

「どうしても話していただけないのですか？」

「……」

「言葉がダメなら……」
先ほど受け止めたナイフを両手に、昭乃は胸もとでさつと腕を交わすと、地を蹴った。

銀光の対が男の首をはねようとしたとき、男は女の持ち手にひた

と手を触れた。

二刃は空を舞って地に墜ちた。

女はハッとして飛び退く。

熊楠は大喝した。

「自惚れるな！」

「ク……」

昭乃は傷ついた顔になった。

「おまえの命はもう、おまえだけのものではない。私のことはかまうな。それから、皆に一つ忠告しておく。NEXTAには……二度と関わるな」

熊楠は高く跳び上がると、窓枠のわずかな出っ張りを伝い、あっという間にビルの屋上へ躍り出た。

「先生！ 私、本当は……」

熊楠の姿はすでになかった。

昭乃は天を仰いだまま、枯れ木のようになってしまった。

乾いた風が路地へと吹きこむ。壊れた窓、崩れた壁、すき間というすき間が共鳴しあい、不気味なオーケストラを奏ではじめた。

バクは少しためらってから昭乃に声をかけた。

「その…… また借りができちゃったな」

「……」

昭乃は小さく首を横にふるだけだ。

彼女の頭の中は今、再会の喜びと、変わり果てた師への戸惑いと、砕かれた自信のことδειいっぱいなのだろう。

昭乃はため息をついた。それを境に、いつもの警備隊長の顔になった。

「私とおまえとはなにか因縁があるようだ」

「『因』は余計だろ？」

「そう思わせたいのなら、村でしっかり働くんだな」

「え？ だって俺は……」

「私にあたえられた暇はあと半日しかない。遅れるな！」

昭乃は路地を駆けた。

仲間も住処も失ってしまったのだから、一も二もない。バクとミ
ーやは、疾風船^{はやてふね}が放った浮き輪にしがみつくなかった。

第五章 救出作戦

2046年1月15日

NEXAの局長更迭から四ヶ月。

ルウ子はある廃刑務所に囚われていた。ルウ子の独房は、伝染病患者用の隔離小屋の一室で、本舎からは離れた森の縁の草深いところにあった。

コンクリートの壁。頑丈な鋼鉄扉と鉄格子。傭兵隊による二十四時間体勢の見張り。

脱獄を諦めたのか秘策を練っているのか、獄中のルウ子は見張りに不気味がられるほど大人しかった。口数はほとんどなく、一日中粗末なベッドに寝転がって、鉄格子越しの冬空があるいは灰色の天井ばかり見ていた。

この日もルウ子はいつも通り、昼間から寢床に横たわっていた。

「ああ退屈」

画面の中のアルはルウ子の眼前で大あくびした。

「……」

ルウ子は人形のように無反応だ。

「そんなんじゃ、いざってときに動けないよ？」

「……」

「たまには絡んでくれよ」

「……」

「まだ、あの和藤とかいう女の言ったこと、気にしてるのかい？」

「！」

ルウ子の目がようやくアルの方へ流れた。

……よかったじゃないですか。電気復活の夢が叶い、なおかつその身が人様の役にたつのですから本望でしょう？ あなたはここで

過ちの記憶に苛まれながら、NEXAとわが国を陰から永遠に支え続ける。それがあなたに課せられた真の償いなのです。では、ごきげんよう。（鉄扉の閉まる音）……

「あいつの言ったとおりよ。あたしはこういう機会を待っていたのかもしれない」

ルウ子はいっしょか、悟りきった僧のような顔になっていた。

「本当にそれでいいのかい？ この国は結構ヤバイ道を行こうとしてるよ。欲望の種が一点に集まったようなものだからね」

「……」

「神様が自分にあたえた役目はもう果たしたから、後のことは知ったこっちゃないってワケかい？」

「……」

「まーた、だんまりか。困った人だ」

アルが再びあくびをしようと大口を開きかけると、「ふえつくしよ！」と、それはくしゃみに変わり、口の中から紙切れが一枚飛び出した。

アルは引力のある肉球で二つ折りの紙を開いた。

「あ、ニコからメールだ。なにになに？ 孫の恐るべき構想を耳にした。この男は日本の電力網を復活させた後、海外から見捨てられていることを逆に利用して、世界で唯一の科学大国に発展させようとしている」アルは目を細めた。「フフン。なんだかんだいって、気にかけてるんじゃないか」

興味を誘ったのか、ルウ子は再び沈黙を破った。

「そういうこと……臆病者のあいつらしい復讐ね」

「復讐？ なんでもた……」

「あいつがなんで左腕をなくしたか、知りたい？」

「ぜひ知りたいね」

「……」

「……」

「やっぱやめとくわ」

「ええーっ!？」

ルウ子は物憂げなお嬢様風に言った。

「今日はお話したくない気分なの」

「なにが『今日は』だよ。最近じゃあ珍しく口きいたクセに」

ルウ子はあつさり演技を止めた。

「チツ……しょうがないわね。あいつは栄養失調の母親を食わせるために、自分で自分の腕を切り落とした。看病もむなしく、母親は死んじゃったけど。以上」

「それだけ？　いつ、どこで、どういう状況でそうなったのか、とか……」

「それだけ知ってれば充分よ」

アルは食い下がった。

「母親が飢え死にしたらいいで、あんな大それたことを企むとは思えないな！」

「じゃあ、一人っ子の母子家庭だったとしたら？」

「そりゃまあ、唯一の身内を亡くしたのは辛いだろうけど……」

アルはまだ不満そうだ。

「その飢餓を生んだ原因が海外にあったとしたら？」

「む……」

「混乱の時代を生き抜き、新政府の外務省に入ったあいつは、わが国の飢餓に関する真実を知った。たしかに当時の世界は、自国の混乱を治めるのに必死だったけど、大陸内での相互援助はあった。それに対し、日本はかつての友好国にさえ徹底的に無視される始末だった」

「ま、食べ物も資源もない島国じゃあ、存在するだけ無駄って感じかね」

「どんなに努力を重ねても外交は通じる気配すらなく、わが国は世界地図から消えたも同然だった。旧態依然の現政府を廃したとしても、国内だけでのやりくりには限界がある。もはや政治ではこの地獄を覆すことはできない。そう悟ったあいつは、ふらふらと科学省

のあたしのデスクへやってきた。『この前はトンデモ構想だとバカにして悪かった。もう一度はじめから、君の話を聞かせてくれないか』って、二年先輩のあいつは深々と頭を下げたのよ。で、NEXAが起ち上がったってワケなんだけど……あれ？ あ、だから、もし海外からの食料援助が少しでもあつたら、あいつの母親は生きのびたかもしれないってことよ」

ルウ子は話していくうちにだんだんと熱が入り、いつの間にか余計なことまでしゃべっていた。

「改めて聞くよ。ルウ子はこの先、どうしたい？」

「気が変わったわ。償いのかたちは他にもあるはず。まずは、ここをどうやって出るか考えるのよ」

1月16日

バクとミーヤは、昭乃の計らいによって、富谷コミュニティで暮らすことになった。バクは牧場の仕事、ミーヤは食料庫の管理に就いた。

昭乃がなぜ二人を誘ったのか、長老衆がなぜ入村をとがめなかったのか、疑問は尽きなかった。外界であつたことを特定の村人以外には語るな、という条件をつけてきたところを見ると、俗世間の生きた資料として利用価値があると考えていることだけはたしかなようだ。パワーショックが終わり、時代は大きく変わるうとしている。長らく文明を遠ざけてきた彼らも、今度ばかりは敏感にならざるを得ないのだろう。

その日の夜。バクたちは宿舎の談話室に集まり、三人だけで薪ストーブを囲んだ。

NEXAから逃れてきて以来、バクは囚われたルウ子のことをずっと気に病んでいた。

バクはなんとしてもルウ子を助けたいと、一人熱弁をふるった。
「ルウ子はあるな性格だが芯は曲がってない。正しいレールに乗せることさえできれば、この国を救える逸材の一人だと俺は思う」

「……」

昭乃は黙ったままストーブの鉄蓋を開け、薪を足した。

空気の爆ぜる音。

ミーヤは言った。

「でも、どうやって助けるの？ どこにいるかもわからないのに」

「探すんだ」

「どこを？」

「日本中を」

「バク……」

ミーヤは駄々っ子に困り果てたような目でバクを見つめた。

「新生NEXAが手にした力とはとても大きくない。その気になれば、天下を取ることだって夢じゃない。連中の企みを挫こうとするなら、ルウ子のようなリーダーシップは欠かせないはずだ」

「そうだとしても、闇雲に動いたって奴らの兵隊に捕まるだけだよ」
「……」

バクは口をつぐんだ。

ミーヤの言うとおりだった。それにしても……。

バクはちらと昭乃を見た。

宿敵ルウ子の話題だというのに、昭乃はただ、炎の揺らめきを見つめるばかりだ。

近頃の昭乃はらしくない行動が目立つ。自主トレをサボっているのか、筋肉が痩せ、体が一回り小さくなったように感じる。道場では、筋がいいとはいえまだ十四の少女に危うく敗れそうになった。それも同じ相手に三度もだ。警備の交代時間に遅刻することもしばあった。たとえルウ子の居所がわかったとしても、昭乃がかつての精彩を取りもどしてくれない限り、NEXAの傭兵には太刀打ちできそうにない。

バクは頭を抱えた。ふとミーヤを見た。目があった。一つ手を思いついた。

「あ！」

「え？ な、なに？」

どぎまぎするミーヤ。

バクはそれに答えず、昭乃にふった。

「昭乃。一つ頼みがある」

「……？」

昭乃は虚ろな目をバクへ流した。

「明日からミーヤを鍛えてくれないか？ あんたの補佐として」

「ミーヤを？」

昭乃は眉をひそめた。

富谷の警備隊は以前より数がそろうようになったが、実質的な指揮官は相変わらず昭乃一人だった。隊員たちは忠実だが、監督者には向いていない（それは昭乃もこっそり認めていた）。隊の実力を維持するには、昭乃に次ぐ指揮官を最低でも一人は育てる必要がある。というのがバクの主張だ。

昭乃のスランプ。原因はよくわからないが、少なくとも過労気味であることはたしかだった。昭乃が立ち直ってくれない限り、味方に引き入れるも救出作戦もクソもない。

ミーヤはバクと目があうと、コクとうなずいた。

「昭乃さんが欲しいっていうならあたし、やってみます」

「まあ、ミーヤならいい線行くとは思うが……」

昭乃はあまり乗り気ではないようだ。それでも自分のバックアップはやはり必要と感じたのだろう。のそと立ち上がると、ミーヤに告げた。

「明朝六時、富谷関堤上。遅れるなよ」

昭乃は重い足どりで部屋を出ていった。

2月3日

今後、三ヶ月に一度実施するという定期検診。その初回の日がやってきた。

まめな検診といい、栄養バランスを考え抜いた食事といい、鉄壁の監視体制といい、ルウ子はある意味、絶滅危惧種並の扱いを受けていた。

錠が外れる音がして鋼鉄の扉が開くと、トランクと折りたたみイスを携えた、白衣の男が入ってきた。白髪混じりの頬髭。足が悪いのか片足を少し引きずっている。医師はトランクから聴診器を取り出し、イスを広げると、ベッドにすわるルウ子の正面に腰かけた。簡単な問診を終えると、上の着衣を脱ぐように言った。

ルウ子がシャツを脱ぎ捨て、ブラのホックに手をかけたときだった。

医師はさつとふり返り、鉄扉に開いた小さな穴を睨みつけた。

「これでは患者が緊張して正確な診断ができない！ 窓を閉めたまえ！」

小窓の蓋がパツと閉まった。

医師は鉄扉の小窓と鉄格子つきの窓にガーゼを貼りつけると、それぞれのそばに一つずつ、小さなオーディオスピーカーのようなものを置き、ルウ子に微笑みかけた。

「ノイズキャンセラーですよ。三十年前の代物ですがね。周波数は人の声にあわせてありますが、万能とは言えませんが……」

医師は人差し指を口にあてると、再びイスに腰かけた。そして、今一度ルウ子の傷痕だらけの体を眺めると、小さくうなった。

「これはまた……」

聴診が滞りなく終わると、医師は水銀式の血圧計を用意した。

ルウ子は裸のまま左腕を差し出す。

医師は怪訝な顔をした。

「もう着てもいいんですよ？」

「あ、そうなの？」

ルウ子は面倒くさそうにブラだけをつけ、改めて腕をのばした。

「……」

医師はさらに言いかけたが、変わり者なのだと諦めたのか、そのまま患者の二の腕にカフを巻きつけた。聴診器を肘窩^{ちゅうわ}に置き、ゴム嚢をスコスコやると、ルウ子はちよつとだけうつとりした。

測定が終わると、医師はたわいもない世間話をはじめた。話はすぐに脱線し、彼は自分のことを語った。

「実を言うと私、以前は賊や難民たちの中で仕事をしていたんですよ。ただ、その、どうも私は疫病神のようで……。流れ着いた先々で診療所を開くと、決まって数年もしないうちにその地が滅んでしまふんです。そして私は放浪をくり返すばかり。だが、本物の神様は私を見放しはしなかった。河川敷のバラック街が強制撤去となり、その跡地で一人途方に暮れていたところ、ある若い女性が声をかけてくれたんです。渡された名刺には、NEXAの人事部とありました」

「人事部……」

「戸籍の復活を保証するから専属の医師をやって欲しい、というのが私は二つ返事で応じました」

「まさか蛍のやつ……」

ルウ子はつぶやいた。

「？」

「ところで先生」ルウ子は半裸のまま医師の顔をじつと見つめた。

「さつきから気になってたんだけど、あたしらどっかで一度会ったことない？」

「はて……私はこれまで何万という人を診てきましたからね……」
医師はルウ子の凝視に耐えかねたように視線を落としていき、「む……これは」と眉をひそめた。

「うん？ ああこれ？」ルウ子は腹の傷痕に手を触れた。「昔、包丁でやられたのよ。因果応報ってやつね。出血がひどくてもうダメ

つてとき、胡散くさそうな白衣の男があたしをさらってつたの」

「驚いたな。この術痕は……」医師は指先でそこをなぞった。「私のだ」

「え？」

「そうか、あのときの……」

「じゃあ、先生はあのときの……」

医師は苦笑した。

「その胡散くさい男は私だよ。うん？　ちょっと待てよ？」医師は笑みを消すと、ルウ子の幼顔をまじまじと見つめだした。「たしか、君はそのとき高校生くらいだったはず……」

「……」

ルウ子はぎこちない手つきでシャツの袖に腕を通すと、のそのそとボタンをかけていった。

「まいったな……」医師は目頭に手をやった。「患者をまちがえるなんて、私もモウロクしたものだ」

「別れ際、先生は言ったわ。君は悪くないって」

「！」

医師は手をどけ、眼をまなこかつ開いた。

「ハンパな意識の中で一度顔を見ただけ。名前も聞きそびれた。会いたくても探しようがなかったわ」

「そ、それじゃあやっぱり……いや、でも、それなら君は今、四十代のはず……」

「実はね……」

ルウ子はケータイを開くと、アルを医師に紹介し、加齢が止まったことの経緯を語った。

医師は頬髭をさすりながら、片時もアルから目を離そうとしない。「そ、その……AIプログラム、ではないんだよね？　君は」

アルは目を細めた。

「ま、疑いたくなるのも無理はないよ。君らにとっては、サンタクロースの実在を信じると言ってるようなもんだからねえ」

ケータイに宿った精霊モドキ。永遠の少女。

医師はそれらを交互に見つめ、そして微笑んだ。

「今年の暮れからまた、大きめの靴下を一つ用意しなければならんようだ」医師はそこでハツとして膝を打った。「そうだ名前……。

百草だ。百草林太郎」

「橋本ルウ子よ」

「知っているとも。世に出回っている写真とちがっていたから一瞬、おや、とは思ったんだが……」

ルウ子は一度少年のような短い黒髪になったが、あれから少しのびて、今はできそこないのプリンのようだ。

「いや、もつとも、あの独特の竜巻ヘアを何度も目にしておきながら、自分の患者だと気づかないなんて……常識とか先入観ってやつはまったく……」

百草は頭をかいた。

ルウ子はむつとして言った。

「竜巻って……バクみたいなこと言わないでくれる？　いつくら注意しても聞かないんだからあいつは」

百草は身を乗り出した。

「バクだって！？　バクを知っているのか？」

「あら、知りあいだった？　ちょっと前、地下賊上がりの子供を拾ったのよ。バクとミーヤ」

「そうか……生きてたか。そうかそうか……」

百草は目尻を皺だらけにして何度もうなずいた。

「ちょうどよかったわ、先生。一つ、お願いしたいことがあるの」

ルウ子は百草に耳打ちした。

百草は話が進むにつれて眉間の谷を深くしていき、やがて出発前夜の宇宙飛行士のような顔でため息をついた……かと思いきや、一転して派手な苦笑いを見せると、うなじをぼりぼりかいた。

「いや、まいったなあ。やっと定職を得たと思っただが……」

「無理にとは言わないわ。下手をすれば命はない」

「いいや。是非やらせていただくよ」

「おい、いつまで待たせる気だ！」

男の籠もった怒鳴り声。

百草は立った。

ルウ子も立った。

「先生……」

ルウ子は百草の胸もとに頬を寄せた。

百草はにっこり笑うと、ルウ子の頭をそつと撫でた。

5月10日

富谷では山藤の花が満開を迎えようとしていた。その矢先にどつと雪が降り積もり、農民たちは天を仰いだ。電化文明が遺した環境破壊の爪跡は薄れるどころか、逆に白く冷たい膿を出しはじめている。

昭乃のもとで修行していたミーヤは先月、十六歳を迎えた。武術の腕はまだまだ頼りないが、指揮官としての早成ぶりには目を見張るべきものがあつた。地下時代にチームの軍師的役割を担っていた経験が生きたのだ。地下人の狩りは、地上人、武警、敵対する賊、刻々と変化する街の状況に対応しなければならない。また、規律を嫌う荒っぽい少年少女たちを説き伏せる必要もあつた。要害の内側でぬくぬくと育った連中を動かすことなど、ミーヤにとっては造作もないことだつた。

昭乃は指導をはじめてわずか四ヶ月で、ミーヤを副隊長に任じた。

その日、富谷関下にボ口を纏った醜い男が現れた。手足は使い古しの針金のように細曲がり、頭の半白髪はまだらに脱け落ちている。男はバクかミーヤがそこにいたら呼び出して欲しいと言っている。堤上にいた昭乃は男を警戒した。

「『また』地下賊の難民か？」

昭乃が警備隊に入る前のある日、富谷の守人たちは、元地下賊を名乗る難民の一団と対峙した。富谷側は掟を理由に受け入れを拒否。その後起こった悲惨な事件は、村人たちの間で今でも語り草となっている。

昭乃は人知れずつぶやいた。

「あんなことさえないければ、あの人は……」かぶりをふる。「もうすぎたことだ」

当時の難民は狩人としての誇りを捨て、そろって土下座までする有様だった。だが、今度のボロは気迫がちがう。棺桶に片足突っこんでいるくせに、眼光だけは異様な輝きを放っている。

昭乃は迷った。ひとまず副官のミーヤを呼ぶことにした。

あのボロを追い払えば、私はきつと後悔する。男を見たときからそんな予感があった。

十分後。

堤上に現れたミーヤは男を見るなり、ぱっくり開けた口を両手で押さえた。

「も、百草先生！？」

「……」

ミーヤの姿を認めた百草は、微笑みながらなにかつぶやくと、その顔を保ったまま雪の上にどつと倒れた。

5月17日

黄泉の国へ通じる跳ね橋。

男はその手前にいた。一步踏み出す。

橋は目にも止まらぬ早さでせり上がった。

男は口を開きかけた。

今度は来た道がすべり台のように傾斜していった。

男は這いつくばってそれに耐えた。

傾斜はどんどん増し、垂直に近づいていった。

それでも男は耐えた。

女たちのため息が聞こえた。

男がハッと顔を上げると、視界はいきなり二つの右足の裏でいっぱいになった。

男は悲鳴をあげながら、光の原へすべり落ちていった。

バクとミーヤは、百草が一週間ぶりに目覚めたとなると、さっそく病床小屋へ駆けつけた。

百草はベッドで横になったまま、かすれた声で言った。

「ルウ子君の監禁場所を教える」

「な！？　なんで先生がそれを……」

バクが言いかけると、百草は遮った。

「その話は後だ」

ルウ子のいる刑務所は、統京湾をはさんだ対岸の半島にあった。

見た目には山林に埋もれた廃墟でしかないが、そこらじゅうに武装した精鋭が潜んでおり、正攻法での救出は極めて難しいとのこと。

「なんでそんなヘンピな所なんかに……」

「一つは、NEXAの秘密を探る者の裏をかくためだろう」

「もう一つは？」

「形としてはルウ子君は『重病による長期療養のため、局長の座を孫に譲った』ことになっている。だが、局長が替わったといつても、職員の多くはそのままだ。生半可な隠し場所では、ルウ子君との接触を許す恐れがある」

「ルウ子が突然いなくなった理由^{わけ}、誰も疑ってないのか？」

「そこまではわからんが、不穏な動きがないところを見ると……」

「消された？」

「おそらくな」

孫のやり方に異を唱える者は、いずれ同じ運命をたどるのだろう。

そうしてNEXAは、孫の野心を叶える道具としての純度を高めていくのだ。

「なるほど。連中の事情はともかく、相手が少数精鋭ってことならこつちには好都合かもな」

「ほう？ その心は？」

「富谷にはシャチみたいに凶暴な女がいてさ」

そのとき、バクの頭上に燃えさかる隕石が落ちた。

「あれ、仕事じゃなかつ……」

バクは頭を抱えたままその場にダウンした。

昭乃は言った。

「続けてくれ」

百草はうなずくと、ルウ子から聞いた孫の陰謀を語った。

昭乃は一瞬拳を固くしたものの、環境破壊者に見せるいつもの露骨な怒りは鳴りをひそめていた。

百草は最後に一つ、ニコからの最新情報をつけ加えた。

「NEXAは別の場所に新しい独房を準備している。それは爆撃さえも通じない、核シエルターのようなものらしい」

完成予定日は今月の末。あと二週間しかない。

バクは言った。

「昭乃、助けに行こう」

昭乃は冷たい目をバクへ流した。

「なぜ？」

「なぜって……」

しまった。昭乃を復調させること一本に心を砕いてきたせいで、まだそこまで頭がまわっていなかった。

バクは齒切れ悪く言った。

「立場や思想はちがうが、志は同じ、っていうのじゃダメか？」

「志？」

「さっきの話、孫の企みを聞いてあんたはどう思った？」

「……」

昭乃は首をかしげる。

「聞いてなかったのか？」

「そんなことはない」

さつきから昭乃は呼びかけに反応するだけで、自分からはなににも言い出そうとしていない。

イラついていたバクは声を荒げた。

「どうしたってんだ！ 昭乃」

「……」

「孫の帝国ができあがっていくのを黙って見ているつもりか？」

「……」

「この国を科学の塊にしてしまってもいいのか？」

「……」

「次の世紀には、森や野原って言葉はもう辞書にないかもな」

「……」

「なんとか言えよ！」

「仕事にもどる」

昭乃は足音一つ立てず、すうつと部屋を出ていった。

その重力を感じさせない動きに、バクは言葉を継ぐことができなかった。

一方、ミーヤは百草の容態を心配していた。

「ところで、先生はなぜそんなひどい目に？」

「ああ、それは……」

百草がルウ子を検診したのは二月。なにもなければ数日で行けるところを、実に三ヶ月も要してしまったのは、ルウ子と接触した百草に厳しい監視がついたからだだった。百草は一瞬の隙を見て監視の目を逃れると、真冬の野山で凍え死にそうになりながらも、ときには鹿のように逃げ隠れ、ときには狐のように食いつなぎ、関東を大回りしてきたのだった。逃走の失敗は世界の絶望を意味する。百草の気力を支えていたのはその一心だった。百草が迷うことなく富谷へやってきたのは、NEXAをクビになったバクたちは必ず昭乃を

頼るだろう、とルウ子が予言したからだった。

百草の話を聞いていたバクはミーヤに言った。

「先生の苦勞を水の泡にはしたくない。俺たちでなんとかするぞ」

5月18日

夜明け前。

バクとミーヤはこっそり宿舎を抜け出し、取水塔跡へ足を運んだ。ずっと前に塔が崩れて環状列石のようになった場所。その中心に剥き出しとなった取水口があった。管の真ん中に昇降用の丸太が突き出ている。

バクとミーヤはうなずきあった。

バクが丸太に飛び移ろうとしたとき、背後から声があった。

「おまえたちごとくでは、百人そろえたって犬死にだ。私が行く」
木陰から出てくる昭乃を、月明かりが照らした。

バクは言った。

「どういふ風の吹きまわしだ」

「せめて森や野原という言葉くらいは後世に残したい。そういうことだ」

本気で言っているとは思えないが、本気で動くつもりはあるようだ。動機はともかく、そのずば抜けた戦闘力を取りもどしたのなら救出のチャンスはある。

「この借りは必ず返す」

「気にするな。あの女には言い足りないことが山ほどあるからな」

「と、言いたいところだが」

「？」

「一人じゃあ行かせないぜ」

バクは取水口を背に両手を広げた。

「足枷がつくのはゴメンだ。二人とも帰って寝ている」

昭乃はバクをどかそうと手をのばした。

バクは踏ん張った。

「いいや。あんたがちゃんと作戦を全うするか、見届けないとな」

「どういう意味だ」

「今のあんたは壊れかけの筏さ。潮の流れ次第で、どこに消えるかわかったもんじゃない」

「フン。私もナメられたものだ」

バクと昭乃の睨みあいはいしばらく続いた。

昭乃はふつと息をついた。

「しかたない。おまえが掟の厳しさに耐えきれず、脱走したことにしよう。私は三日でもどるとミーヤに告げ、おまえを捕まえに追いかける。そういう手筈でいいな？」

「なるほど……いいだろう」

バクは昭乃の策に乗った。

昭乃ほどの人物が無断外出するには、それに見あう事後報告が必要だ。昭乃にとってバクは、戦力にはならずとも口実のいい材料にはなる。それにミーヤを残していけば、富谷の守りがガタ落ちする心配もない。

バクは念のためミーヤにたしかめた。

「それで、いいよな？」

ミーヤは小さくうなずいたものの、暗い顔でうつむいた。

「でも……」

「でも？」

ミーヤはバクの両手を取った。

昭乃はさつさと丸太に飛び移り、取水管を降りていった。

ミーヤは黙ったまま、なかなか手を放そうとしない。

「行かないと」

バクは小さな手をそつと解ほどいていき、昭乃に続いた。

バクと昭乃は川沿いの道を歩いて下り、やがて河口に出ると、近

くの小さな漁港に足を向けた。棧橋に見覚えのあるヨットがあった。
シーメイド 号……バクたちが赤ヶ島へ行ったときの船だ。

ルウ子は港の対岸に見える小さな半島の山中に囚われている。陸路ではかなりの遠まわりになる。無敵独房の完成まで時間がない。

バクと昭乃は迷うことなくヨットに乗りこんだ。

棧橋を離れたのはいいが、いつこうに港が小さくならない。

バクは反りのない帆を見たり、黒板のように平らな海を見たりと、落ち着きがなかった。

昭乃は灰色の空を見上げて低く言った。

「すわっている。半刻も待てば動く」

バクは艇長の指示に従い、昭乃の向かいに腰かけた。

風が吹くまでやることなく、バクは思いを巡らせた。

昭乃はなぜ、敵同然のルウ子のために命を懸ける気になったのか。真の敵は別にあると理屈ではわかっているはずだが、あの気性がそう簡単には変わるとは思えない。

バクはどうしても訊きたくなった。

「昭乃……富谷を出た本当の理由はなんだ？」

「……」

昭乃は湾岸一帯をぼうつと見つめている。

「ルウ子を助けたいわけじゃないんだろ？」

「……」

バクは昭乃の横顔を見つめた。

ふとした瞬間に見せる寂しそうな顔。大地に身を委ねるおおらかな人々の中にあつてそれは、白衣についた油染みのように目につくものだった。

バクは昭乃と再会して以来、あえて触れずにいたその名を口にしていた。

「熊楠……って奴のことか？」

「！」昭乃はウツと息を呑んだが、すぐに苦笑を見せた。「おまえごときが気づいたのなら、隠している意味はもうないな」

「……」

バクは口をキツと結び、侮辱に耐えた。

昭乃は熊楠にまつわる過去を語った。

「熊楠くまくすかずま一摩は天才だった。弱冠二十一にして十余の武術を究め、中でも『千載一弓せんざいいっきゅう』といわれた彼の弓は、『あの男が生きている間に富谷に近づこうとするような奴は、なにも知らないか、そうでなければただのバカだ』と賊の頭目どもに言わしめるほどだった。

私は彼の道場ができたその年、七つで弟子入りした。病気がちだった体を鍛えるだけのつもりが、十年たってみると、私の稽古相手はもう師範である彼しかいなくなっていた。彼は『私を越えてみせろ』と、さらなる鍛錬を課した。私はそんなことより、二人で気持ちよく稽古できる日々がずっと続いてくれれば、それでよかった。頬をかすかに赤らめる昭乃。

なぜかバクも顔が熱くなった。

「要するにその……稽古とか関係ないんだろ？」

「それに気づいたときはもう、彼はどこにもいなかった」

「……」

「私が十七になって間もないある日のことだ。彼が富谷関で下界を見張っていると、ボ口を纏った一団が近づいてきた。元地下賊を名乗る難民だった。地域の抗争に敗れ、飢え果てるのを待つしかなかったところに、この地の噂を聞きつけ、最後の望みをかけてやってきたのだという。」

彼は難民の苦悩を憐れみ、長老衆にかけあうべきか迷っていた。よく見ると、難民の半数は年端もいかない子供で、うち数人は餓死寸前だった。なによりも子供が好きだった彼は感傷的になり、長老衆を強引に集めて話しあった。長老衆は自然と共生する社会の脆さを説いた。生態系を守りたければ許容人口も守らねばならない。正論だ。彼は『せめて子供たちだけでも』と切り返した。長は首を横にふった。『一度でも前例を作ってしまうえば掟の意義が薄れる。耐えてくれ』と。彼はそれでもしつこく食い下がった。長は事を収

めるべく、彼に対し、外部との接触を固く禁じた。

彼は長の監視のもと、谷底の川辺で次々と餓死していく子供をただ見ていることしかできなかった。最後の子の死を見届けたその日、彼は密偵から報告を受けた。飢えに耐えかねた難民たちが、最初で最後の戦いを挑もうとしていると。それを迎え討つべく作戦会議の招集があった。彼は警備隊長でありながら、体調不良を理由に姿を現さなかった。警備隊は隊長不在ながらも、一糸乱れぬ矢の雨で難民を滅ぼした」

バクは昭乃を睨んだ。

「あんたも弓を取ったのか？」

「警備隊は十八にならないと入れない。そういう掟だ」

「ちよつと待てよ。俺は十六で……」

「おまえの身分を保証したのは誰だ？」

「そ、そつか……」

バクはほつと息をついた。

「その後、彼は消息を絶ち、富谷に帰ってくることはなかった。子供の死に心を痛め、仕事を放り出したことはまだいい。その気持ちは私にもわかる……」

「どうしてあんたになにも告げず、出ていったのか……」

「親しくはしていたが、所詮、私のことは弟子としてしか見ていなかったのかもしれない。だとすれば……」

昭乃は斜めにうつむいた。

バクは待った。

昭乃は顔を上げた。

「だとすれば、それもしかたがない。だが、どうしても解せないことが一つある。その理由を聞くまでは、私は死んでも死にきれない。内容次第では……」

昭乃の目もとが般若面のように強ばっていく。

バクは思わず身ぶるいした。

言葉を飲みこんだせいで、心に過大な負荷がかかっている。昭乃

は嘆いているのだ。自分の思い人が、賊とはいえ、罪なき子供を故意に虐殺したことを。事件の噂は富谷にも及んでいる。

そんな思いを秘めていたとは……これは作戦どころではないかもしれない。

「一つ、念を押しておきたいことが……」

「わかっている。約束は守る。あの女に二度も笑われてたまるか」

「まさか……はなから片道切符のつもりだったのか？」

「だから同行を許した」

「くあ、やられた！」

バクは頭を抱えた。

すべては昭乃の手の内にあつたのだ。道理で手筈がいいわけだ。お膳立てはしてやるから、ルウ子はおまえ一人で連れて帰れ……ということだ。

昭乃の予報通り、風が吹いてきた。

シーメイド は対岸めざして走りはじめた。

「隊長！ 岸からヨットが一隻、こちらに向かってきています！」

望楼の男は甲板に立つ熊楠を見下ろすと、そう報告した。

統京湾の口には海堡かいほうという、その昔統京を戦火から守るために築かれた軍事用の人工島がいくつか遺っている。

二隻の巡視船 みさき と くりはま は、その朽ちかけた海上要塞跡の陰で辺りを監視していた。

熊楠は みさき の欄干に身を寄せると、手にしていた双眼鏡を目にやった。

「遠いな。逃亡者かどうかはまだわからん」

黒ずくめの長軀の横、火炎のように赤髪を尖らせた男が口を開いた。

「出やがったな」

獲物を前に気が急くのか、男は短弓をかまえ、彼方のヨットに狙いをつけている。

彼らの主力装備は小銃なのだが、海上は二コの影響下になく雷管が反応してくれない。本土から少しでも離れるときは、従来の武器を持ち出すしかなかった。

「なぜそう思う？」

熊楠は訊いた。

「わかるもんはわかんだよ」

赤髪は煙たそうに上官を睨め上げた。

「海賊の勘というやつか」

「元海賊だ。言葉に氣いつけな」

熊楠は双眼鏡を下ろすと、氷瀑の一筋のような視線を部下に突き刺した。

「氣をつけるのは貴様だ、シバ。私は孫局長ほど寛大ではないからな」

シバは顔をひきつらせ、半歩後ずさる。

「さ、さっきのはナシだ。あんたとやりあう氣はねえよ」

「賢明だ」

シバは船室へ引き下がっていった。

熊楠は再び双眼鏡を目にやると、小さく舌打ちした。

「バカめ……二度と関わるなと言ったはずだ」

しばらくして、望楼の男は続報を告げた。

「クルーは女と少年です！ 女は初見ですが、少年は元職員のバクと思われます！」

「拿捕しろ！」

熊楠が叫ぶと、二隻の巡視船は煙突からもおつと黒煙を吐いた。

海堡の左右の岸から姿を見せる二隻の船。

バクは声をあげた。

「なんかやばい感じだ」

二匹のバカでかい海ネズミどもは、シーメイドの船首と船尾をそれぞれ押さえてやろうと、全速力で向かってきている。

スキッパー

バクは艇長からの指示を待っていた……が、昭乃に動きはなかった。舵から手を放し、蒸気船の片割れをぼうつと見つめている。

「どうしたってんだ！ 昭乃！」

「……」

「この仏頂魔神！ 鉄骨頭！」

「え？」

昭乃はそこで我に返った。素早く帆を逆に孕ませ、方向転換をはかったがもう遅かった。

二隻はあつという間に シーメイド をサンドイッチにした。速度をヨットにあわせ、『川』の字を作るように並走している。

両船あわせて十余名の兵たちがいつせいに短弓をかまえると、みさきの船中央にいた赤髪の男が停船命令を告げた。

昭乃は帆を下ろし、バクは錨を海に投げる。

二隻が機関を止めて同様にすると、シバはバクを見て笑った。

「てめえか。立場がわかってねえ、『バカ』ってガキは」

「バクだ」

シバは昭乃に言った。

「女。面はいいが運がなかったな。NEXAの秘密に関わった奴は生かしちゃならねえんだよ」

「……」

昭乃はすつと短剣を抜く。

シバは兵に命じた。

「討てい！」

「やめておけ！」

船室の入口から声があがった。

みさきの甲板に立つ黒ずくめの男を見ると、弓兵たちはそろってかまえを解いた。

「矢など百本あっても役には立たん。その女は私の一番弟子。倒すことができるのは師である、この私だけだ」

「なんだと？」シバは師弟を見比べると、ククと低く笑った。「こ

「いつあ、おもしろいことになってきやがった」

「船首^{バウ}を空ける」

熊楠が指示すると、そこにいた三人の兵士は引き下がっていった。すると昭乃はバクをひょいと抱え上げ、みさきの船首へ一跳びして、バクを下ろした。

バクはキツと昭乃を睨みつけた。

女の体からは冷たいものが昇華している。

些事に腹を立ててる場合ではなかった。バクは舳先の突端のほうへ避難した。

熊楠は昭乃に近寄ると言った。

「こんなところでなにをしている」

「先生……」

昭乃は訴えるように男を見上げる。

「……」

熊楠は失望しきったように女を見下ろした。

「考え直してください。あなたは人殺しを生業にできるような人じゃない！」

「組織にとって不都合な者を消す……。所属が変わっただけで、やっていることは昔から同じだ」

「ちがう……ちがう……」

昭乃は激しくかぶりをふった。

「私はもうおまえが思っているような男ではない」

熊楠はシャツと短剣を抜くと一歩進んだ。

昭乃は二歩退いた。

熊楠は進む。昭乃は退いて退く。間合いは少しずつ広がっていく。昭乃は小さくかぶりをふりながら、なおも退こうとするがもう後がない。バクを巻きこむまいと逆に半歩出る。

「先生……」

「昭乃。自分が正しいと思うのなら、私を倒してみせろ」

「……」

昭乃は抜かない。

「それもいいだろう」

抜き身の剣をロウソクのように胸もとにかかげると、熊楠はすつと歩き出した。

「なぜ子供たちを虐殺したのですか？」

「！」熊楠は立ち止まった。「知っていたか……」

「あなたがどんな職に就こうと勝手です。でも、子供ばかり選んで殺していたことだけは、どうしても解せません。難民の子に情けをかけた人のやることじゃない。いったい、あれからなにがあったというんです！」

「なにもありはしない。あの事件がすべてだ」

「わからない……全然わからない！」

「だが、もう子供を殺す必要はなくなった。輝ける未来の偉大なる指導者、孫英次局長がこの飢えた世を救ってくださるのだ。私はそれを一日でも早く実現するために戦う」

「あんな不義の男を信じるなんて……壊れてる……あなたの心……」

「なんとでも言う方がいい。ではいくぞ！」

熊楠は床を蹴った。

昭乃はついに剣を抜いた。

二人は互いに百もの連なる分身を生み、千もの突きをくり出していった。

牽制のなす幻影なのか、それとも実体の軌跡か。あまりの速さに誰も目がついていけない。神々の戦いを前に、舐先のバクも船央のシバも生唾を飲みこんだ。

散っていた幻はやがて一点に集まっていき、激しいハウリングを起こした。

五分と五分。

昭乃はすかさず脚をふり上げる。

熊楠はさつと飛び退き、蹴りをかわした。

「昭乃……あれからわずかな期間でよくそこまで鍛えた」

「以前のあなたなら、私は今の一閃で果てていた」

「私が衰えた、と？」

「いいえ。私が強くなったのだとしても、あなたの背中がほんの少し近づいただけ。なのに、なぜです？」

「私の知ったことではない」

「知りたいですか？」

「死刑囚の説教などいらぬ！」

熊楠がグツと剣を突き出すと、昭乃は渾身の力でこれを払い上げた。

男の短剣は宙を舞い、海に消えた。

「バ、バカな……」

「あなたは完全に狂気の底へ堕ちたわけじゃない。今のがその証拠です」

「どういう……ことだ」

「それは……」

昭乃が答えようとしたとき……。

戦いに気を取られていたバクはわが目を疑った。両船の全弓兵が射的体勢に入っていたのだ。

熊楠め、どこまでも卑劣な……いや待て、ターゲットがちが……。

「一摩さん！」

昭乃は敗北に消沈する男を肩で突き飛ばした。

不意の一撃に、熊楠は受け身を取るしかなかった。目の前で立ち尽くす女をふと見上げると、男は言葉を失った。

「！」

昭乃の背中には、矢羽の花が咲き乱れていた。

口から赤いものがもれ出し、主を失った人形のように膝が折れてゆく。

すかさず熊楠は女を抱きとめた。

「なぜだ！　なぜ私をかばった！」

昭乃はふるえる手で男の頬に触れると、ふつと微笑んだ。

「よ、かった……いつもの……一摩さんのか、お……」

昭乃の手はすべり落ちていった。

熊楠はぎゅっと目をつぶり、昭乃の胸もとに顔をうずめた。やがて顔を上げると、誰にともなく叫んだ。

「貴様ら、なんの真似だ！」

「計画が予定通りに進めば、いずれあんたは組織を裏切ることになる」

船室の屋上から声がした。シバは満足げに目を細め、こちらを見下ろしている。

兵士たちは二の矢をつがえる。

「まるで確定しているような言い方だな」

「さっさと消すつもりだったんが、さすがは狂犬の中の狂犬、まともなやり方じゃあ手も足も出ねえ。だが、その女を見てからあんたは変わった。邪魔は入ったが結果オーライ、女が残っても厄介だからな」

「なにが狙いだ！ 孫はなにを企んでいる！」

「なーに」シバは眉を段にした。「ちよつとした工事をやるだけさ」

「ちよつとした工事を押し進めるためなら、ちよつとした犠牲には目をつぶるといわけか」

「人聞きの悪い口は塞がねえとなア！」

シバがすつと片手を挙げると、兵士たちはいつせいに矢を放った。血の匂いをかぎつけた一角の獣たちは風を切り、手負いの二獅めがけて殺到する。

彼らは見事しとめた！ 薄汚れた甲板を。

シバは誰もいない船首を見下ろしたまま、かすれ声をふるわせた。「そ、それは……ナシだろ……」

熊楠は シーメイド のデッキに立っていた！ 育ち盛りの少年と手足たらしした女を軽々と両脇に抱えて。

女を抱え上げ、少年を引つ捕まえ、甲板を蹴り、二人を一瞬放して前から迫る矢を手刀で裁き、再び二人を捕まえ、ヨットのデッキ

に着地する。シバの肩の筋肉が動きはじめてから、すべての矢がむなしく果てるまでの間に、熊楠はそれらをすべてやってのけたのだ！

熊楠はバクを放すと海原に目をやった。

「君は泳げるか？」

「あ、ああ……」

バクは生返事を返すのがやっとだった。矢筈から紅色の汁を滴らす女の屍から目が離せない。

「ここで死にたくなければ、私についてこい」

「え？」

バクが聞き返す間もなかった。

熊楠は昭乃を抱えたまま駆け出すと、激しいしぶきを上げた。

闘神といわれた男の真の実力を知ってすくんでいるのか、シバは追跡命令を出せないでいる。熊楠を追う視線の先には、台座のような形の小島があった。

「クソ！ どうにでもなれ！」

バクは熊楠を追い、潮風の中へ舞った。

バクは小島の砂浜までどうにか泳ぎ切った。ずぶぬれの体を起こし、来た海をふり返る。追っ手はやってこない。

砂浜にいくつか足跡が残っている。先に上陸したはずの熊楠の姿は見あたらない。足跡を目でたどると砂浜はすぐに終わり、島の奥へ続く坂道があった。道の左右には大きな岩が立ちはだかつていて、島の様子がよくわからない。海岸に家らしきものはない。無人島なのだろうか？ 島の内部へ入る道はその坂一本しかなさそうだ。

ひとまず熊楠を捜そうと、バクは一步踏み出した。すると岩陰から蓬髪の小男が現れ、さつと短弓をかまえた。

小柄ながらも筋骨はたくましく、どこか古代北欧の戦士を思わせる風貌だ。

疲れ切っていたバクは、両手を挙げるしかなかった。

「なあんだ。シバじゃねえのか」

髭がちな男は弦の張りを緩めた。

「シバ？ あの赤髪がどうかしたのか？」

バクは手を下ろした。

「傭兵の落ちこぼれにや関係ねえ話よ。十秒だけ待ってやる。帰るな」

「俺は傭兵なんかじゃない！」

「あんだと？ てめえ、蒸気船のほうから来たじゃねえか」

「俺が来る前にあと二人いただろう？」

「ああ、あれはいいんだ」

「奴こそ傭兵だ！」

「細けえことはいいんだよ！ ほれ、あと一秒」

男は再び弓をかまえた。

「待ってくれ！ せめて……墓ぐらいは建てさせてくれ」

「墓だあ？ 誰の？」

「く、熊楠の……」バクはぶすつと横を向いて言った。「女のだ」

「ああ、そいつなら今、し、しゅじゅちゅ、しじちゅ」男は舌打ちした。「手術中だ！ ヒュー、やっと言えたぜ」

「手術？」

死体に手を加えても、それは解剖としかいわない。ということはある。

「生きてるのかっ！」

バクは猛猪も逃げ出す勢いで小男に迫った。

「！」

小男がとつさに右手を放すと、矢はバクの左頬をかすめた。

バクはかまわず小男の襟もとをつかんで、体ごと持ち上げた。

「昭乃はまだ生きてるのかって聞いてんだ！」

小男はじたばたした。

「女は……てめえの……なんだってんだよ！」

「……」

「は、放しやがれ……」

バクが手を放すと、小男は咳きこみながら言った。

「又シが執刀してる」

「又シ？」

「終わるまでは誰にも会わねえとよ」

「なら……熊楠に会わせる」

「奴はてめえのなんだ」

「仲間の……」

バクはそこまで言っただけだった。

心の中の相容れない東西が激しくせめぎあっている。

「仲間の？」

「……仇だ」

小男は二ツと歯を見せた。

「ついてきな」

二人は坂道を上っていった。

小男はタチと名乗った。タチはこの小島……黒船島くろふねじまにアジトをかまえる海賊『ペリー商会』の幹部だった。正確には彼らは自らを賊とは呼ばず、『海の掃除屋』と称していた。

黒船島はかつて、旧日本軍の要塞として機能していたことがあった。苔生した石造りの兵舎や弾薬庫、砲台跡、煉瓦造りのトンネルなど、遺跡があちこちに残っている。ペリー商会にとってこの要塞跡は格好の盾だった。旧来の武器でここを正面から攻め落とそうとするなら、敵の数倍の被害は覚悟しなければならない。海上警察や他の海賊はこの島を素通りするしかなかった。

バクはタチの話を聞いて納得した。NEXAの連中が追ってこないのは、そういう理由わけもあったからなのだろう。

土壁を石組みで固めた切通しを渡り、残響が残響を呼ぶ不気味なトンネルを抜けて少し行くと、もう反対側の崖だった。黒船島はドーム球場がせいぜい五つ入るかどうかの広さしかない。波しぶきが舞う崖を背に山道を上ると、密林のすき間から山頂広場が見えてき

た。広場の中心には背の高い矢倉がそびえ立っており、芝地の隅には丸太小屋が一軒あった。そこが又シの家だ。

小屋の壁際に、大きな体を紙くずのように丸めて頭を抱える男がいた。

隙だらけだ。地下仲間の恨みを晴らすなら今しかない。

バクはナイフの柄に手をかけ、ぐつと握った。それだけだった。千載一遇の機を自ら手放した。手放すしかなかった。

バクに気づいた熊楠は小さく頭をもたげた。

「期待はすると言われたよ」

「なぜ俺たちを助けた」

「昭乃が私に微笑みかけたあのとき、ようやく互いの思いを知った。自分が犯した過ちの大きさを知った。私は富谷を出るべきではなかった」

「富谷を出たのはいい。子供好きのあんたがなぜ、子供を狙った？」

「難民の子の餓死は私に深いトラウマを残した。それが災いした。子供の餓死が子供殺しへつながったと言っても、他人には理解できない。そのときはそれが正しいと思ってやっていた」

「そんな答えで納得すると思ってるのかよ！」

バクは熊楠の胸ぐらをつかみ上げた。

「病んでいたから許されるなどとは思っていない。抵抗はしない。君の好きなようにすればいい」

「なら……」バクは手を放した。「祈れ」

「？」

熊楠はしばし呆けていたが、やがてうつすら微笑んだ。

「祈ろう。昭乃と運命をとものにできるなら、それ以上望むことはもうなにもない」

バクと熊楠はそれからひと言も口をきかなかった。真上にあった太陽が空を赤く染めるまで、二人は待ち続けた。

玄関のドアレバーが傾くと、男たちの首はさっと反応した。

作務衣姿の老人が腰をたたきながら出てきた。大きくのびをし、

汗にまみれた禿げかけの白髪頭をかく。

どこが皺でどこが目鼻なのかよくわからない。しかし、どこかで……どこかで見たような顔だ。

「又シ先生！」

熊楠は老人に駆け寄った。

又シはぶつきらばうに言った。

「期待はするなと言ったはずだ」

「そう……ですか……」

熊楠はうなだれた。

「昭乃……」

バクはあふれ出すもののなすがままだった。残ったものは悔いばかりだった。

「汚れた祈りでは通じなかったか」熊楠は腰のナイフを抜くとバクに手渡した。「殺^やつてくれ」

「……」

バクはナイフを手にしたものの、今はなにをする気にもなれなかった。

又シは二人に背を向けた。

「不幸な娘よ。死んだほうがマシだったと、言い出さなければよいがな」

「え？」「それはどういう……」

バクと熊楠は同時に訊いた。

「一摩よ。おまえはあの娘がどうなろうと、すべてを受け入れると言ったな？」

「はい。たしかに言いました」

「偽りはないか？」

「ありません！」

「では、入りなさい」

書斎と寝室を兼ねたような居間を横切り、客間のドアを開く。

客間とは名ばかりで、実際は病室と診療室を混ぜたような部屋だ

った。入ってすぐ、壁際の棚に診察器具や手術道具、薬草箱などが
ならんでいる。奥に粗末なベッドが二つ。向かって右は平らで、左
は盛り上がっている。

昭乃だ。全身包帯まみれとはいえ五体満足につながっている。一
見ただけでは又シの言った意味がわからない。

又シは患者に布団をかけると口を開いた。

「命はどうか取りとめた。それだけでも奇跡に近い。ただ……頸
椎のダメージがな……」

「……」

熊楠は眉間の険を緩めつつ、きゅっと口もとを引きしめた。

バクは又シに言った。

「俺にもわかるように言ってくれ」

「つまり……この娘は生涯、寝たきりだ」

5月19日

熊楠は昭乃の看病に徹したいと、客間に籠もりつきりだ。

バクには時間がなかった。こうしている間にも、新しい独房の建
設は着々と進んでいる。昭乃が倒れた今、代わりが務まる戦士は熊
楠しかない。だが、熊楠はとも戦えるような精神状態ではなく、
バクも彼への憎悪を鎮めることなど当分できそうにない。ペリー商
会をアテにしてみたが、タチは首を横にふった。たいていの賊は目
先の利でしか動かない。折れたバットをかかげて、何年か後に価値
が跳ね上がるのだと力説しても、相手がその道の素人ではむなしい
だけだ。

バクは又シの家を後にした。坂を下り、トンネルを抜け、石壁の
切通しを渡っている途中、アーチ型の横穴が点在する場所で立ち止
まった。

旧兵舎（今は海賊たちの住処）の前で、タチが待ちかまえていた

のだ。

夕チは壁に寄りかかったまま言った。

「行くのか？」

「ああ」

「死ぬぞ？」

「そうだな」

「おめえ、バカだろ？」

「かもな」

「送ってやるよ」

「え？」

「たいして泳げもしねえくせに、どうやって半島へ渡るつもりだったんだ？」

「あ……」

「やっぱバカだ」

夕チは大笑いした。

二人は切通しを抜け、続く坂道を下っていった。

バクは海賊でなければ又シの関係者でもない。今回は特別に滞在を許されたが、次回はなないと考えたほうがいい。又シと熊楠、そしてペリー商会。彼らをつなぐ線が未だに見えないのだが、そういう疑問は今のうちに解決しておくべきだろう。

それについて訊くと、夕チは語った。

「又シと熊楠がなんでダチなのかは、俺たちがここをアジトにする前の話だからよくわからねえな。又シはただ『難破した船にただ一人生き残った少年を手術したことがある』としか言わねえんだ。

で、又シは俺たちの襲来にもびくともしなかった唯一の先住民よ。立ち退かねえなら殺^やっちゃうかってことになったんだが、ボスはジイが医者だと知ると、仲間の怪我人病人を全員治療できたら共存を考えてやろうと言い出した。するとジイは、末期に近い、見捨てるしかなかった奴まで見事治しちまった。以来、俺たちはジイを又シと呼び（島主の意らしい）、隠居に干渉しねえ代わりに、重

病人だけ診てもらうようになったのさ」

又シのメス裁きはたしかなものだった。彼がどこで生まれ、どこで学び、どんな経緯で島へ渡ったのか。又シは語ろうとしないし、海賊たちも訊こうとはしなかった。又シは又シ。それで充分だった。バクにはもう一つ、気にかかる関係があった。

「そういえば、シバがどうか言っただけじゃなかったか？」

タチは虚空を睨みつけ、ぼうぼうの髭をなで下ろすと、言った。

「奴か……あれは俺たちが賞金首にしている海賊の一人よ。もう十年以上前のことだ。当時、奴はまだ青臭い^{あおくせ}ガキで、縄仕事かパシリしかできねえ下っ端だった。そう、元は仲間だったのさ。犬みてえに素直なガキだと思っていたんだが、これがとんでもねえジャックナイフよ。ある日、俺たちは湾上で新手の海賊と一戦交えたんだが、奴はその最中、いきなり寝返りやがった。足し算もできねえ頃から奴をシゴいてきた五人の首を土産にな」

「でも今は……」

「そうよ。奴は逃げやがった。陸の組織^{おか}の兵隊になっちまった。だが、奴は海で生まれた男だ。海岸をウロチョロせずにはいられねえ。そこを討つ。俺様の手でな」

タチは見えない弓を引いてみせた。

高い崖の谷間を一気に下ると、砂浜に出た。

バクは眉をひそめ、今来た道のほうへ顎をしゃくった。

「港はあつちじゃないのか？」

「バカヤロウ。ガキ一人送るのに、何十人もこき使えるわけねえだろ？」

「ああ」

バクは納得した。

彼らの帆船は最小のものでも三十人の水兵が要る。一人や二人で操作できるようなヨットとは、大きさも複雑さも桁がちがった。

タチは大きな岩の裾に空いた穴蔵へ入っていった。しばらくすると、海草の化け物のような黒い塊をかついでこちらへもどってきた。

「これでシコシコやりな」

タチは足踏みポンプをバクに放った。

「泳ぐよりはマシか」

バクはしかたなくポンプを踏み、ゴムボートをふくらませていった。

「なにしろ二十年は使ってねえからな。いつ破れるか……」

「……」

バクは足を止めた。

タチは笑った。

「ギャグだよ、ギャグ。闇市成金から分捕った新品だ」

昼すぎに踏みはじめて、形になったのは日が沈む間際だった。実はそのギャグとやらは二段構えで、ポンプのほうが二十歳だったのだ。バクは汗だくになりながら、電動製品に満ちた（できれば詐欺師のいない）未来社会に思いを馳せた。

ボートが完成して二人でいざ出航というとき、岩陰から男が現れ、波打ち際に近づいてきた。

バクは黒ずくめを睨め上げた。

「なにしにきた」

「それに乗ってどこに上陸するつもりだ？」

「最短距離に決まってるだろ」

熊楠はため息をついた。

「まったく……敵を知らないというのは、本当に恐ろしいことだな」

「な、なんだよ」

「そこは傭兵隊の秘密基地だ。シバのような一級の戦士がゴロゴロ控えている。君は女の顔を拝むことすらできんだろ」

「……」

「バクを頼む。そう言われたよ。寝言だがな」

「……」

バクは目を背けた。

「私を恨みたい気持ちはわかる。だが、今の君にとっては必要な人間のはずだ。私は半島の地理と警備の弱点を知っている」

「……」

「私のことは盾と思って、使い捨ててくれればいい」

「ふざけんな！ あんたは昭乃に命を拾ってもらったんだ。それを忘れるな」

熊楠は胸に手をやった。

「肝に銘じよう」

夕チは二人をボートに乗せると、夕闇に煙る半島めざして漕ぎ出した。

5月20日

ボートは半島の東に突き出た岬を迂回し、真夜中、細長い浦の中へ入った。

流されたのか、それとも沈んでしまったのか、港には船一つない。かつて湾岸一帯を苦しめたという台風や震災の爪跡はごくわずかなもので、沿岸の住宅地や埠頭の設備はしっかり原形をとどめている。にもかかわらず、人の気配がまるでない。あるのはかすかな波の音だけだ。

ボートが岸壁に近づくと、バクと熊楠はコンクリートの地面に飛び移った。

「生きてたらまた会おう」

夕チは笑顔を残し漕ぎ去っていった。

二人は明かりも地図もないまま、いきなり歩きはじめた。

古代より要衝とされてきた港町は、山がちで道が複雑に入り組んでいるというが、ここもその例にもれず、手ぶらで一人歩きできるような素直な道筋などなかった。しかも通りには街灯一つ点っていない。それでも二人は暗闇の迷路を惑うことなく進んだ。バクが目

を務め、熊楠がナビを務める。それで充分だった。

バクは浦に入ったときから感じていたことを口にした。

「本当に誰もいないな。ここでなにがあった？」

熊楠は言った。

「少し前、この半島で重い伝染病が流行った。進行は遅いが致死率が高いという説明を受けた住民は皆、薬が確保できる土地へ移っていった。空になったこの地をまるごと押さえたのが、新生NEXAだ」

「まさか病気を流行らせたのは……」

「たしかな証拠はない」

「なんにしたって、ここはNEXAの庭じゃないか」

「心配するな。庭師はまったく足りていない」

急成長を続けるNEXAは人材登用に苦労していた。至宝を収めた土地を守るには、信用のおける兵隊でなくてはならない。緊急でかき集めた雑兵ではダメなのだ。NEXAは広大な土地を手にしたが、警備面で確実に押さええてあるのは半島へ通じる陸路と、ルウ子が行われている刑務所とその周辺だけだった。

そういうわけで、しばらくの間は会話の声に神経を尖らせる必要はなかった。

バクは最も憎むべき男の一人とパートナーを組むにあたって、どうしても知っておかなければならないことがあった。

バクは前置きもなく切り出した。

「なんで子供を虐殺したのか、話してもらおうか」

「よかるう」

元地下賊を名乗る難民の子供を、心ならずも見殺しにしてしまった。そこまでは昭乃から聞いたとバクは言うので、熊楠はその後のことを語った。

「最後の子の死を見届けたその日、私は密偵から報告を受けた。飢えに耐えかねた難民たちが、最初で最後の戦いを挑もうとしていると。長老衆はそれを迎え撃つよう私に命じた。なにもかもが嫌にな

った私は、作戦会議を仮病で欠席すると、密かに故郷を後にした。

それからしばらく放浪を続けたが、子供たちが飢え死んでいく姿が私の頭から消えることはなかった。どうすれば人が、子供が飢えずにすむのか……私は寝ても覚めてもそればかり考えていた。出口なき悲観のループをめぐっているうち、歪んだ妄想に取り憑かれるようになった。

そもそも食料に対して人が多すぎるのだ。だったらもっと人口を減らせばいい。老人は放っておけばいずれ死ぬ。重要なのは……子供を生ませないことだ。そう考えた私は、近い将来に子供を増やす可能性のある『子供』を殺し、人口が増えるのを未然に防ごうとした。

そうはいっても、罪無き市民を殺せば当然裁かれる。私は合法的に子供を殺す方法を探していた。やがて私は武術の腕を買われて武警の一員となった。対賊専門のスナイパーに抜擢された私は陰で狂喜した。生かそうが殺そうが、賊は記録の上には存在しない人間。私はためらいもなく、賊の子供を狙い撃ちしていった」

「武警は狂犬だけでなく、子を食らう鬼まで飼っている。噂には聞いていたが、あんたのことだったのか……」

「子供を殺すたび、私の矛盾した発想は単純化していった。『子供を殺してやれば、子供は飢えないのだ』と。君を狙った頃は多少の理性を残していたが、地下賊掃討作戦の辺りではもう、私は暴走したロボットのようにつけられない状態だった」

「……」

人口が減ることで腹が満たされる子供がいる。殺されたことで飢える必要がなくなった子供がいる。その子供から将来生まれるはずだった子は未来に存在できず、したがってその子も苦しむことはない。熊楠の壊れた心は、それぞれ異なる意味をもつ『飢えない子供』の区別がつかなくなってしまったのだろう。

「それでも、私の渴いた心が潤うことはなかった。苦悩の日々は続いた。やがて、以前から私の腕に注目していたという男が個人的に

訪ねてきた。孫英次。NEXAのナンバー2だ。孫は少し会話を交わしただけで私の悩みを見抜き、私のやり方では飢餓問題は解決しないことを説いた。そして奴は言った。『私に手を貸してくれば、君の悩みは一気に解決するだろう』と。孫はNEXAがマスター・ブレイカーという究極の電源スイッチを手にしたことを、私に打ち明けた。それ一つでパワーショックが解決するなど、にわかには信じがたいことだった。そこで孫は私をある場所に案内した」

バクは言った。

「大品発電所」

熊楠はうなずいた。

「奇跡の光景に打ちのめされた私は、たちまち孫の信者となり、武警を辞してNEXAへ転職した」

熊楠はそこで話を終えた。

二人はしばらく黙ったまま歩き続けた。

巨人の霊園のごとき無人団地を抜け、渴ききった高速道路を横切り、山裾の森からいよいよ刑務所のある頂をめざそうというとき。

バクは立ち止まった。

「それでも、俺はあんたを許すわけにはいかない」

熊楠も立ち止まった。

「わかつている」

「それでも、俺はあんたと組まなければならない」

「そのようだな」

「同時に二つのことは、俺にはできない。俺には……できない」

「君にとって一番の望みはなんだ？」

「一番の……望み……」

望みはいくつかあるが、なにかこう、表彰台のてっぺんだけがぽっかり空いている感じがしてならなかった。

「わからなければ二番でも三番でもいい。それを叶えるために私と組まなければならなしとしたら、君は進むか、それとも退くか？」

バクは熊楠を見上げた。

「……」

熊楠はバクを見下ろした。

「……」

バクは右手を差し出した。

「ルウ子を助けることができたなら、地獄で再会するまでは、あなたのことを忘れていてやる」

熊楠も右手を差し出した。

「君は地獄へなど行けないさ」

二人は握手を交わした。

バクと熊楠は藪をかき分けながら深闇の野山を登っていった。道無き道の強行軍は、バクたちから貴重な時間とスタミナを奪っていた。刑務所のフェンスが見えた頃にはもう夜が明けてしまっていた。

熊楠は大木の陰から刑務所の様子をのぞくと、眉をひそめた。

「妙だな。気配がない」

バクはうなずいた。

「本当に兵が伏せてあるのか？」

「私があそこの警備に関わったときは、そうだったのだが……」

「畏か？」

「だとしても、獲物を捕らえるにはそれなりの人数が要……ハッ！？」

熊楠はさつと身を翻した。

バクもつられて後ろを向いた。

誰もいない。木々と笹藪があるだけだ。

当代最強の戦士の顔がこわばっている。

「私の背後を取るとは……」

「シバか？」

「ちがうな。まるで邪念がなかった。こんな相手ははじめてだ」
しばらく待ってみたが、もう誰かに見られている感じはなかった。

バクと熊楠は笹藪の中に身を伏せ、門のほうへ這っていった。刑務所のフェンスは錆びつき、ところどころ倒れていた。

その気になれば、どこからでも侵入できそうなものだが……。

小鳥の朝歌……枝葉の小波……羽虫の逍遥……。

静かすぎる。

バクはささやいた。

「ルウ子はまだ新しい独房に移されてしまった？」

「前例のない工事だ。十日も工期が縮まるとは思えんな」

「じゃあなんで誰もいないんだ？」

「ううむ。緊急で増援を要する事件でもあったのか……」

「とにかく、調べるなら今のうちだ」

フェンス越しに刑務所の平たい施設が連なっており、そのすき間、敷地の奥に一つだけぽつんと離れて立つ小屋が見える。

「あれだ」熊楠は小屋を指した。「さっきの妙な伏兵がいるかもしれない。私から離れるな」

バクと熊楠は壊れたフェンスめがけて走った。荒れ放題の獄舎と職員宿舎を横目に、雑草だらけのグラウンドを横切り、森の縁の草深いところまできた。

コンクリート造りの小屋がある。その周りに戦闘服姿の男が何人が倒れている。

バクは言った。

「こいつら……NEXAの傭兵だ」

「血の臭いがしない」熊楠はうつ伏せの男を調べた。「眠っているだけだ。ガスを吸わされたか、あるいは……」

「そんなことより、独房だ！」

バクは熊楠に見張りを任せ、小屋の鉄扉を引き開けた。

中に入ると短い廊下があった。右側の壁に、入口よりも重厚そうな鉄扉が三つならんでいる。

手前の二つは開けっ放しだ。

向かいあう三段ベッド、ロッカー、武器弾薬、わずかに汁が残っ

た食器の重なり、散らかったトランプ、ヌードのポスター、床に転がる死体……ではなく死んだように眠った男ども。争った形跡はない。

奥の一つは閉まったままだ。

バクは突きあたりまで進み、鉄扉の正面に立った。

釘か刃物の先で削ったのだろう。雑な字でなにか書いてある。

『鍵は後ろです』

バクはふり返った。見上げると採光用の小窓があり、その枠に鍵束が置いてある。

「バカにしゃがって」

手にした鍵束を床にたたきつけようとして、途中でやめた。

三番目の部屋の鍵を探って鍵穴に差しこみ、鉄扉を手前に引く。

「え？」

バクは思わず首を突き出した。

正面の窓際。ジャージ姿のルウ子がベッドに横たわっている。意識はないようだ、血色は悪くない。

バクは駆け寄ってルウ子に声をかけた。反応なし。揺さぶった。

反応なし。頬を指でつついた。

するとルウ子は顔をしかめた。

「んうん……そのスルメ……あたしの……」

ルウ子はバクの人差し指を探りあてると、満足そうにしゃぶりはじめた。

バクは一瞬のぼせたが、なんとかこらえた。

「ど、どうやら暗殺や拉致が目的ってワケじゃなさそうだな」

ルウ子の待遇は想像していたよりは悪くなかった。服やシーツは清潔であり、虐待を受けた様子もない。独房の隅には、他の部屋にはないシャワールームまで設置してある。

ブーン！ ブーン！

ルウ子の脇の下でなにかがふるえる音。

バクがその腕を持ち上げると、ピンクのケータイが下敷きになっ

ていた。

救出してやろうとケータイを手にとると、それはするりと抜けてルウ子の腹の上にびたつと引つついた。

「そういえばそうだった」

そのままケータイを開くと、画面にアルが現れた。

「ふう、まいったまいった。ボクは開けてくれないと話ができないんだ」

「いったいここでなにがあった？」

「なにがって……なにかあったのかい？」

「知らないのか？」

「うーん、普段よりは静かな夜だとは思ってたけど？」

「傭兵連中がみんな眠らされていたんだ」

「そうかあ。じゃあ、ルウ子もそうなのかな？ 昨日の夕食の後からずつと眠ったままなんだ」

「犯人の狙いがよくわからないな」

「天然なんだよ、きつと」

バクはルウ子の頬を何度か張った。反応なし。罵詈雑言。反応なし。

「だめだこりゃ」

バクはケータイを閉じると、ルウ子を引き張り起こして背負った。するとルウ子は急に笑みを浮かべ、なにやら寝言を口こもった。

「ん……んふ……うれしい」

ルウ子はいきなりバクの首筋に口づけした。

「な！？」バクはびくつと首を反らした。「にしゃが……る？」

「……」

ルウ子は寝息を立てたままだ。

「と、とにかくここを出よう」

戸口で待っていた熊楠は、ルウ子を目にすると眉をひそめた。

「どういうことだ？ どうぞ持ち帰ってくださいと言わんばかりだな」

「まあいいさ。これが畏だとしても、あんたが来たのは想定外だったろうよ」

「いや、そうでもなさそう、だ！」

熊楠はバクの顔面めがけて投げナイフを放った。

「！？」

刃はこめかみのすぐ横の虚を切り裂いた。

頭蓋を割らんばかりの衝撃音。

欠けた刃が跳ね返ってきて、バクの足もとに落ちた。

破裂音の残りカスがおんおんと響く。

バクがなにか言いかけると、熊楠は小屋のコンクリート壁を指した。

くすんだ金色の粒がめりこんでいる。熊楠が軌道を変えてくれなければ即死だった。

熊楠は森に向かって声を張りあげた。

「やめておけ！ シバ！」

二発目は熊楠の頭上をかすめた。

熊楠は動じず「あそこか」と言ったが早いか、緑の中に消えていた。

千切れた若葉が何枚か風に舞った。

一分ほどして熊楠はもどってきた。

「畏ではなかったようだ」

シバはなんの仕掛けも誘いもなく逃げ去っていった。廃刑務所はシバの担当外だ。動物的な勘が、男を私的な偵察に駆り立てたのだらう。

バクはルウ子を背負い直した。

「じゃあ、いったい誰がこんなことを？」

「兵隊が目覚めると面倒だ。まずは山を下りよう」

バクたちは浦の廃港をめざした。

夕暮れ。

廃港まで降りてきたのはいいが、この先の足がない。

バクと熊楠は開け放しの倉庫に隠れ、これからどうしたものかと相談をはじめた。

そこでようやくルウ子が目を覚ました。

「はれ？ あたし……」

奥の木箱の上で身を起こし、せわしく辺りを見まわすルウ子。

「やれやれ。起きたか」

「バク！？ あんたなにしてんの？ こんなところで」

「なにつて……助けにきてやったんだろうが」

ルウ子は寄ってきた男たちの姿をざっと眺めると、眉をひそめた。

「たった二人で切りこんで、かすり傷一つもらわず、連中を壊滅させたワケ？」

「いや、その……それがどうも謎だらけで……」

バクが横目を流すと、熊楠が続けた。

「我々が来たときにはもう、決着がついていた。まるで手柄を我々に譲ったような、奇妙な感じだけが残っていた」

「あんた誰？」

ルウ子は訊いた。

「元NSF……ネクサシックレットフォース NEXA 秘密部隊の熊楠だ」

「いいや。富谷の元警備隊長、そして昭乃の師匠さ」

バクが訂正した。

「ふうん」ルウ子は熊楠の顔をまじまじと見つめた。「昭乃のダイヤモンド頭は師匠譲りってわけね」

「……」

熊楠はノーコメント。

「ふん？」ルウ子はふと辺りの匂いを嗅ぎはじめた。やがて、倉庫の出入口近くに放置してあるフォークリフトに鋭い視線を送った。

「出てきなさい！ いるのはわかってるわ！」

「アハ……ハ……ハハ……」

車の陰から若い女がひょいと顔を出した。

直毛気味の長い髪というだけで、狐顔でも狸顔でもなく、メガネもかけておらず、他に特徴らしい特徴がない。誰だっけ……。

バクは小首をかしげた。

一方、熊楠はルウ子の動物的な嗅覚に驚いているようだった。

そのぎこちない笑い方……バクはやっと思ひ出した。

バクとミーヤの元教育係、松下蛭だ。

「せ、先生！？　なんでこんなところに？」

「もう隠しててもしょうがないわね」ルウ子は蛭の素性を明かした。

「表向きは人事部の平局員だけど、本当はあたしの陰の従者なの」

蛭はルウ子専用の特別諜報員だった。その存在は私費で雇ったルウ子本人しか知らない。諜報員といっても、蛭は熊楠のような超人ではなく、孫のような才知も、昭乃のような美貌もない。何度会ってもすぐに忘れてしまいそうな、地味な女だった。ただ、逆にそれは地域や組織に溶けこむことを得手とさせた。ルウ子が富谷の事情に通じていたのはそういうわけだった。

「もしかして、連中を眠らせたのって……」

バクが訊くと、蛭は縁なしメガネをかけながらコクとうなずいた。

「私は傭兵隊の補給係に紛れ、刑務所を守る方々に食事を配っていました。兵士たちの夕食に睡眠薬を入れたのは私です」

ルウ子は虚空を睨んだ。

「んん？　じゃあなんであたしまでぐつすりコロリだったワケ？」

蛭は木箱に腰かけるルウ子に駆け寄ると、ぺこぺこぺこ頭を下げた。

「す、すみません！　ごめんなさい！　申し訳ありません！　どれがルウ子さん用の食事だったか、わからなくなってしまっ……」

こんな危なっかしい人物を、ルウ子はよくも従者に採用したものだ。

「しかし妙だな」今度は熊楠が眉をひそめた。「救出作戦の選択肢は無数にあった。我々はこの廃港に上陸し、過去の情報だけを頼りに、一夜で山を駆け上がる強行軍を選んだ。迅速だがリスクも高い

選択だ。君はあの夕闇の中、ゴムボートが島を離れたのをたった一度見ただけで、それを確信していたというのか？」

「あ、いえ、その……はい」

蛍は遠慮がちに肯定した。

「みんな先生の仕業だったのか」

バクは驚きと尊敬をこめてかつての教師を見つめた。

「も、もう先生じゃないから、蛍でいいですよ」

蛍は照れながら、荷物を置き去りにしてしまったと、錆びたフォークリフトのほうへ歩んでいった。

バックパックを背負った蛍が車の陰から出てくると、なにを思ったか、初対面のはずの熊楠が一人、彼女のほうへ近づいていった。

すれちがいざま、二人は低く言葉を交わした。

「『あれ』は君だったか。なるほどいい従者だ」

「私にできることは、『それ』だけですから」

熊楠はそのまま倉庫を出て行く。

「どこへ行くつもりだ」

バクが呼び止めると、熊楠は背を向けたまま立ち止まった。

「昭乃の世話だ。私一人なら船はいらん」

「待てよ。俺たちも一緒に……」

「ダメだ」

「なんでだよ」

「君は海賊をやりたいのか？」

「それは……」

バクはうつむいた。

黒船島で暮らすということは、すなわちペリー商会に入ることだ。又シの旧友である熊楠だけが特別に、見習い看護師として隠居の供を許されていた。

「私は残りの人生すべてを昭乃に捧げたい。もう君たちと会うこともないだろう」

「一線から退くっていうのか？」

「さらばだ！」

熊楠はだつと駆け出し、夕日に染まる海のほうへ消えていった。昭乃はもう、彼なしでは生きていけない体なのだ。

バクは男を追いかけることなく、女たちに言った。

「これからどうする」

蛍は言った。

「ひとまず、富谷へ逃れましょう。この苦境を覆すにはどうしても拠点が必要です」

ルウ子は腕組みすると言った。

「足はあるんでしょうね？」

「別の倉庫に小さなヨットを隠してあるので、ご案内します」

倉庫を出て行く蛍の背中を見送りながら、バクはルウ子にぼそと言った。

「タイムマシンでも持つてるんじゃないのか？ あの人」

「欲がないと、いろんなものが見えるらしいわね」

「さて」

蛍を見失わないよう、バクが追いかけようとしたときだった。

バクの背に、がばとルウ子が抱きついた。

「！」「バクは硬直した。「ルウ子？」

「よく……来てくれた」

ルウ子はバクの羽交いを外側からぎゅっと締めつける。

バクは肘をたたんでルウ子の腕に手を添えた。

「あんたがいないと退屈だからな」

「バカ」

ルウ子はバクの背中に額をコツンとぶつけた。

「……」

「……」

「どうしたんですかー？ なにか問題でもありましたか？」

蛍の声が近づいてきて、倉庫の出入口にひょいとメガネ面が現れた。

「！」

二人はバツと離れた。

「？」

きよとんとする蜩。

ルウ子はバクにふった。

「あ、あー、そういうえば昭乃はどうしたの？ 世話って？」

「そっか……ルウ子たちは知らないんだっとな」

バクは昭乃を襲った悲劇を短く語った。

ルウ子は無言で目を伏せ、蜩はひたすら涙した。

富谷に帰れば当然、昭乃の失踪について疑われる。だが、今のところ他に逃げ場所はない。この先のことを考えると、バクは吐き気がしてきた。

5月21日

「バク！ よく無事で……」

富谷関の堤上。ミーヤは欄干から身を乗り出し、雨上がりに日差しを受ける花のような笑顔を見せた。

それに対し、他の兵士たちの表情は険しい。

無理もない。本来ここにあるべきなのは、昭乃が脱走犯の首根っこをつかんで闊歩している姿なのだ。富谷の人々にとって昭乃の失踪は、滝の逆流よりもあり得ないことだった。

バクは谷底で声を張りあげた。

「俺が悪かった！ 俺の居場所はやっぱりここしかない。今やっとそう気づいたんだ！」

ミーヤは自分の立場を思い出したのか、そっけない口調で言った。
「脱走は第一級の重罪です。特別な恩赦がない限り、自首をしても許されるのは命だけ。それでもかまわないというのですね？」

「ああ。血に飢えた外の世界なんかより、檻の中で暮らしたほうが

全然マシさ！」

「それで……その……隊長はどうしました？」

「知りたいか？」

「当然です」

「話すには一つ、条件がある」

バクが短く口笛を吹くと、百メートルほど下手の崖の陰からルウ子と蛭が現れた。堤に向かって歩いてくる女たちを指し、バクは言った。

「あの二人を中でかくまってくれ」

ざわつく兵士たち。

「あれ、橋本ルウ子じゃないのか？」「なんか前と雰囲気ちがうけどな」「敵を二度も中に入れるバ力がどこにいる」

「……」

ミーヤの視線は、堤上堤下を行ったり来たりと落ち着きがない。

誰かが呼んだのか、ミーヤは急に後ろをふり返った。一つうなずき、すぐに向き直る。

「今日はこれから、長老衆がそろって富谷関の視察に来ることになっています」ミーヤは堤上の端にある小屋を指した。「そこで話しましょう。ただし、こちらからも条件があります。その二人をかくまうか追い出すかは、内容次第です」

「いいだろう」

ほどなく数人の兵が壁を伝って谷底へ降りてきた。彼らは三人から武器を没収し、手枷足枷をつけ、三人まとめてロープで縛ると、堤上で控えている仲間に合図を送った。堤上の兵たちは、まるで材木を扱うかのように人間の束を釣り上げていった。

「昭乃は……死んだ」

開口一番、バクは言った。

長をはじめとする長老衆、ミーヤ、警備兵たちは言葉を失った。卒倒して小屋の外へ運び出される若い兵もいた。

ルウ子と蛭は、バクの大嘘に驚きの色を隠せない。

バクはかまわず続けた。

「昭乃はある男をかばって全身に矢を浴びた」

白刷毛のような眉をした、富谷の長が口を開いた。

「ある男とは？」

「傭兵だ」

「もったいぶらんで、ちゃんと話さんか」

「男はNEXTAの傭兵隊長だった。そいつはある陰謀によって味方の矢で殺されかけた。昭乃との決闘の最中にな」

「その男の名は？」

「熊楠一摩」

「！」

富谷の者たちは、昭乃の凶報にも劣らぬほど驚愕していた。

兵士たちはささやきあう。

「まだ生きていたのか……」「狂犬すら避けて通る殺人機械だったとか」「子供ばかり狙っていたらしいぜ？」「隊長はなんであんな奴のことを……」

バクは続けた。

「きっかけを作ったのはこの俺だ。俺は囚われとなったルウ子を助けたいがために、昭乃をそのかして外に連れ出した。死刑以外ならどんな罰でも受けるつもりだ。その代わり、ルウ子と蛭はここに置いてやってほしい」

「恥を知れ！」「貴様の問題だ！」「女どもは関係ねえだろ！」

富谷衆から怒声が飛ぶ。

長は派手な咳払いをしてそれらを制した。

「あえて筋の通らぬことを言うからには、それだけの理由^{わけ}があるの
だろうな？」

バクはうなずくと、マスター・ブレイカーとパワーショックの關係について語った。

長老衆はその話に半信半疑だ。彼らはひそひそと議論をはじめた。

もしそれが事実だとすれば、ルウ子が権力者の手に渡することは富谷にとって、否、地上の全生命にとって好ましくないことである。だが、その話を裏付けるものがいったいどこにあるのか、と。

長老の一人が言った。

「文明を拒絶しているとはいえ、我々は科学について無知なわけではない。その、アルとかいう不可思議な存在を見ぬうちは、何一つ信じるわけにはいかんな」

ルウ子は口もとを緩め、そばにいた若い兵に手枷を見せた。

「とりあえず、ブラン中からケータイ出してくれる？」

若者は真っ赤になりながらも言うとおりにした。

「あっ！」

するとケータイは若者の手をするりと抜け、ルウ子のもとへ舞いもどった。

騒然。

「じゃあ次。開けてみて」

若者は女の胸もとに吸いついたケータイを慎重に開いていった。

中身は二十個の平たいキーと、猫の静止画だった。

若者は画面に顔を近づけていく。

と、アルは音量MAXで咆哮した。

「グワラアアアアー！」

「うああ！」

若者は腰を抜かした。

生まれて初めて猫を目にした室内犬のような怯えっぷりだ。

「彼がアルよ」

ルウ子が得意げに胸を突き出すと、アルは得意げに素性を語り出した。

長老衆はしかめ面でささやきあった。

ルウ子は魔女にちがいない……と。

どうやら彼らは、アルそのものの存在は信じておらず、ルウ子が妙な術を使って幻影を生み出しているにすぎない、と考えているよ

うだ。それは無理もないことだった。見慣れているバクでさえ、ときどきそう思いたくなるのだから。

やがて長は言った。

「バクのほうは後日、裁判にかける。連れて行け！」

すかさずミーヤが言った。

「待ってください！ 昭乃さんは自分の意志で行くと決めたんです。私はそのとき二人と一緒にいました。だから、これはたしかなことです！」

「おまえが嘘を言っていないと、誰が証明できる？」

ミーヤは魂を抜かれたような声で言った。

「防衛の全権を託した者の言葉を……信じないというのですか？」

ミーヤはその後もし下がつたが、長老衆は聞く耳持たなかった。所詮、彼らにとってミーヤは余所者の助っ人でしかないのだ。

長老衆は口々に言った。

「かつての師を慕っていたとはいえ……」「大敵をかばって命を落とすなど、論外じゃ」「あれはバクの作り話だ」「バクに謀殺されたのだ」

彼らはある意味、昭乃のことを人間扱いしていなかった。彼女も一人の女であることを、この政治家たちは忘れてしまっている。

兵士たちはバクを連行していった。

ルウ子と蛭は、世に災いをもたらす魔女とその召使いとして、厳重な監視のもと、富谷で管理することになった。

6月24日

もしかしたら昭乃は帰ってくるかもしれない。一縷の望みをかけ、裁きはのびのびとなっていたのだが、それに加えて村で唯一の医師が急逝、台風による川の氾濫、山賊の襲撃と凶事が相次いだため、バクの裁判は予定よりまるひと月も遅れて、その日ようやく行われ

た。

富谷では長老会議も裁判も討論会も、大勢による話しあいはずべて『議事小屋』を使うことになっていた。そこは議事堂や法廷というよりも学校の教室に近く、演壇と演台が一つずつと、イスを壁に寄せて『コの字』状にならべただけの簡素なものだった。今回の場合は、演台の正面が傍聴席で、そこから向かって左が長老衆、右が被告の席だった。弁護人は存在しない。自分のことは自分で守るしかなかった。

裁判長は空位だった。十年以上前から、適任者がいないという理由で長が代理を務めることになっている。裁判官は彼ただ一人だ。裁判長席につくべく、長が演壇に上がろうとしたときだった。

傍聴席から声があがった。

「権力が集中しすぎている！」

百草林太郎。病で急逝した老医師に代わり、今月のはじめから正式に富谷の医師となった。まだ衰弱から立ち直ってはいないものの、百草は車椅子を持ち出して裁判に臨んだ。

百草はその叫びを皮切りに、三権を独占する長老衆を痛烈に批判しはじめた。

傍聴していた村民の多くは百草を支持。不当な裁判だと騒ぎ出した。

気さくな性格の百草には味方が多かった。長老だと臆してしまうが、彼ならちよつとした悩みでも気軽に相談できると、村での評判を上げていたのだ。

村民たちの声。

「長老以外に裁判の務まる賢者なんかいたっけか？」「百草先生がいるじゃろ」「先生を出せ！」「公平にやれ！」

長老衆は村人たちの騒ぎに負け、臨時の裁判長に百草を指名した。百草が壇上の中心にすわると、ようやく裁判がはじまった。

バクは富谷の絶対的守護神ともいえる昭乃の立場を充分に理解しておきながら、このたびのような所業に及んだ。長老衆は、侵入や

脱走と、バクは今回が初犯ではないことをしつこく強調した末に、当然死刑であると言いつつ放った。それに対し、バクはひと言、裁判長に判断を任せるとだけ口にした。

百草は長老衆に言った。

「バクを死刑にすれば、昭乃君の後釜にミーヤを据えることは絶対に叶いません。よく考えてみてください。兄を殺された妹が、仇の地を命がけで守ろうとするでしょうか？ 二人は真の兄妹ではないが、絆の深さは肉親以上のものがある。かつて同じアジトにいた私の実感です。ミーヤまでいなくなってしまうたら、いったい誰が富谷の防備を取りまとめるのでしょうか」

すると長老の一人が叫んだ。

「賊上がりの裁判長など笑止！ 裁判ははじめからやり直した！」だが、他の長老たちは互いに見あうだけで言葉がなかった。百草の発言はそれほど効いたのだ。昭乃の後継者問題は切実だった。

結局、長老衆は条件つきで、死刑の要求だけは取り下げることにした。バクは絞首を免れる代わりに、富谷からは永久追放となった。ただし、ミーヤが新たな警備隊長となって生涯ここで暮らすというのが絶対条件だ。

ミーヤは迷うことなくその条件をのみ、富谷に骨を埋める誓いを立てた。

バクは明朝、富谷を出なければならなくなった。

夜遅く。

石造りの空き倉庫に放りこまれたバクは、藁山の上で眠れぬ夜をすごしていた。

天窓から差しこむかすかな星明かりを雲が隠していく。

バクは目を閉じた。

「俺の役目はここまでか」

錠が外れる音がして、鉄扉が少しずつ開いていった。

バクはあわてて身を起こした。

「あ、起きてた？」

入ってきたのはミーヤだった。ミーヤは後ろ手に扉を閉めると、戸口に立ち止まったままじっとバクを見つめた。

「な、なにやってる。見張りはどうした？」

「外の両脇に立ってるよ」

「は？」

「大丈夫。ちゃんと話、ついてるから」

長老衆は賊上がりのミーヤを疎んじていたが、村人たちは昭乃の妹分として彼女を密かに可愛がっていた。判決はもう覆ることはないが、牢番たちは二人の気持ちを酌んで、ミーヤの錠破りに目をつぶったのだった。

ミーヤは続けた。

「ルウ子さんから話は聞いた。どうしてあんな嘘ついたの？」

「そつとしといてやりたいからさ。富谷は昭乃に頼りすぎるからな」

「そつか……そうだね」

それから二人は、お互い黙ったまま目をあわせられずにいた。しばらくして、ミーヤがつぶやいた。

「あたしはたぶん、一生ここから出られない」

「メシだけはちゃんと食べよ」

そつけないバクに、ミーヤは暗い顔でうつむいた。

「バクは……いいの？」

「なにが？」

「もう会えないかもしれないんだよ？」

「そうだな」

「その前にしておきたいこと、ないの？」

「しておきたいことって……」

バクは首をかしげた。

「もういい！ バクなんか誰もいない地の果てで、のたれ死んじゃえ！」

ミーヤはバクに背を向けた。

バクはミーヤの細い背中を見つめながら思った。

もう二度と会えないのか。もう二度と……。

ミーヤとのつきあいはもう八年近くになるが、お互い見えなくなるほど離れることは滅多になかった。狩りのときはもちろん、食事のときも遊ぶときも寝るときさえも、ミーヤはいつもバクのそばにいた。それが当たり前だった。ミーヤの存在を意識したのは、昭乃に捕まって富谷に軟禁された、あの時期がはじめてだった。

空気のような存在……とはよく言うが、そうじゃない。

彼女は水だ。

「！」

全身に電光が駆けめぐった。

バクはすくと立ち上がると、ミーヤを背中から抱きしめた。

「悪かった。俺はまだ自分の本当の気持ちと向きあってなかった」

「……」

ミーヤはバクの腕にそつと両手を添えた。

「ミーヤ。おまえは砂漠の水だ。見える所に置いておかないと気がすまない」

「！」

ミーヤはぎゅつとバクの腕を握りしめた。

「でもな、どうしても……その……ダメな理由があるんだ」
わけ

「え？」

ミーヤはするりと体をまわしてバクを見上げた。

「あれはミーヤを拾った日のことだ」

バクは八年前の話をした。

「その日、俺が属していた狩人チームは、配給品発掘品をおたからごっそり抱えた一団を見つけた。先輩たちは逃げまどう獲物を巧みに路地へ追いこんでいった。逃げ道を失った地上人たちは命乞いをした。

俺はまだチームに入って間もない駆け出しで、先輩の仕事を見ることが最大の務めだった。骨組みしか残ってないビルの支柱の陰で、連中が食料を分捕られていく場面を見守っていた。俺のそばには先

輩が一人ついていたが、予想以上の収穫があつたらしく、リーダーに呼び出されていった。『その柱、絶対さわんな』ってひと言残してな。

解放された地上人たちは、恨めしい顔を残して路地を出ていったが、たつた一人だけ残つて抵抗を続ける奴がいた。まだ七つか八つくらいの女の子だ。その子は奪われた米袋にしがみつき、先輩の一人と揉みあつていた。そこに女の子の両親が駆けもどってきて、娘を引きはがそうとした。女の子はそれでも抵抗を続けた。キレたリーダーは、その子を腹ごと蹴り飛ばした。それを見た俺は思わず前にのめり、支柱に肩をぶつけてしまった。

家畜の悲鳴みたいな音がして、鉄骨の雨が路地に降りそそいできた。俺たち狩人は素早く逃れたが、女の子は両親とともに瓦礫の下敷きになった。狩りを終えた先輩たちは、獲物の死には目もくれず去つていった。だが、俺はそこからどうしても動けなかった。瓦礫の山に近づいて、できる限り鉄屑をどけていった。潰れた死体が出てきた。じつとしていれば、こんなことにはならなかった。俺が……殺したんだ」

バクはそこで口をつぐんだ。

ミーヤは心配そうにバクを見つめる。

「バク？」

「狩人の掟では過失での死は問われない。それは知っていた。だが、俺のルールの中にそんなものはなかった。罪の意識に苛まれ、俺は泣いた。そのときだ。どこからか子供のうめき声が聞こえてきた。死体の下。さっきの女の子だ。俺は折り重なる二つの体をどうにかめくつた。その子は奇跡的に頭の小さな傷だけですんでいた。俺はその子を揺り起こした。頭が痛いと言ったが、意識はしっかりしていた。そこまではよかった」

「……」

「女の子はそばにあつた死体を見ると、ひどく怯えて俺にしがみついてきた。死体が誰なのか、その子にはわからなかったんだ。顔は

それほど崩れてなかったのにな。女の子は自分の愛称以外、なにも思い出せなかった。その名はミーヤ、おまえのことだ。俺はミーヤを孤児にしまった。責任を感じた。だから、地下に連れて一緒に暮らすことにした」

そして……ミーヤの記憶はついにもどることはなかった。

「ふうう……………」

話を聞き終えたミーヤは長い長いため息をついた。

「もうわかっただろう？俺はおまえの仇なんだ」

「バクのせいじゃないよ」

「俺にできるせめてもの償いは、おまえを守り続けていくことだった。おまえが誰かと幸せをつかむ、その日まで……………」

「……………」

「悔しいが……俺の役目はここまでだ」

「責任とか役目とか……そんなのどうでもいい」

ミーヤはふくれ面をした。

「ミーヤ……………」

「必ずまた会うつて約束して」

「……………」

「会えなければ、あたしは一生幸せになれないよ。さ、どうする？」
バクとミーヤは見つめあった。

「約束する」

二人は唇を寄せあい、藁山の上で身を重ねた。

その頃。黒船島。

又シは患者の世話を熊楠に任せ、居間の寢床で熟睡している。今のところ入院患者は昭乃しかいないため、夜の客間はいつも二人きりだった。

熊楠は油の切れかけたランタンの替わりを持つべく、席を立った。ベッドの昭乃は瞳をかすかに流し、それを見ているだけだ。

神経をやられて肩から下はぴくりとも動かないものの、もとは強

靱な体ゆえに、昭乃の傷の回復は驚くほど早かった。ただ、意識のほうが一っしっかりせず、なにか言ったと思っても意味が通らないことが多かった。

熊楠は微笑んだ。

「安心しろ。私はもうどこへも行かない」

部屋を出ようとしたとき、昭乃のすすり声が聞こえた。

「せつかく……せつかく願いが叶ったのに、こんな体じゃ……」

熊楠はハツとしてふり返った。

「昭乃！　いつから正気に……」

「食事だつて、着替えだつて、手洗いだつて風呂だつて、一人じゃなにもできやしない！」

「私に任せておけばいい」

「せめて一摩さんの手で……逝かせてください」

「バカなこと言うな！」

熊楠はランタンを脇に置くと、ベッドへ駆け寄り、少し細った昭乃の手を取った。

「おまえはまだ若い。治らないと決まったわけじゃない」

「死にたいんです……」

「不自由な体はたしかに辛いだろう。だが、それでもまだできることはある」

「そういうことじゃない！」

「じゃあなんだ！」

「……」

昭乃は顔を真っ赤にして齒がみすると、ぎこちなく顔を背けた。

「すまない……」

熊楠はうなだれた。

昭乃は潰れきった浮き袋から最後の空気を絞り出すように言った。

「あなたにだけは……醜い姿をさらしたくなかった……」

「私は気にしていない」

「嫌なものは嫌なの！」

「そうか……すまなかった」

熊楠は昭乃の手をそつと布団の中にしまった。介護を拒否されたことに落ちこんでいる暇はなかった。明日あさつてにでも自分の代わりを見つけなければならぬ。又シは腰が悪く、床ずれしそうな患者を持ち上げることなど到底できない。島には女に飢えたケダモノしかいない。さて、どうしたものか……。

熊楠が難しい顔をしていると、昭乃はほそと言った。

「ごめんなさい」

「うん？」

「一摩さんしかいないことはわかってます」

「でも、ダメなのだろう？」

そのときランタンの燃料が切れ、部屋は闇に包まれた。

「私があなたに溶けてしまえば……少し、楽になれるかもしれない」

「！」

熊楠は息を呑み、さつと床に目を落とした。

昭乃は顔を背けたままだ。見つめられたわけでもないのに、そうせずにはいらなかった。

「心が病んでいたとはいえ、私は子供に手をかけた男だ」

「一緒に稽古していた頃の一摩さんにもどってくれた。私はそれだけで充分です。犯した罪は、あなた個人だけの問題じゃない」

「いや、あれは私の……」

「もし、富谷の村が世界のすべてだったとしたら、あなたは同じような罪を犯したでしょうか？」

「……」

「一緒に考えましょう。子供を死なせない世の中のこと」
「昭乃……」

熊楠は昭乃の頬に手をやり、顔をこちらへ向かせた。

女は瞳を閉じ、男は唇を寄せた。

その夜、ランタンの替えはもう必要なかった。

6月25日

バクは朝日に目を細めながら、富谷関のトラップを降りていった。警備兵たち、バクと親しかった農夫たちが、堤上でそれを見守っている。

バクが谷底に降り立つと、松葉杖を携えた百草が川辺の道端で一人待っていた。

見送り衆の中にミーヤの姿はなかった。藁の上で目覚めたとき、バクはすでに孤独だった。

バクは百草と別れの握手を交わした。

「先生。ミーヤのこと……頼みます」

「私の目の黒いうちは病気になどさせんよ。そんなことより、これから先どうするつもりだ？」

「……」

バクが返答に窮していると、何者かがトラップを伝う音が聞こえた。

「バーカ！ 一番大事な人を忘れてるわよ！」

ルウ子は数段を残して「とう！」と飛んで、科学忍者隊のように着地した。

「ひどいですよう。私たちを置いて……テテテ」

続いて蛭だ。口を開いたばかりに足が疎かとなり、最後の段を踏み外してすっ転んでいた。

魔女と召使いは終身、地下室に閉じこめておくはずだった。ところが、二人の会話を聞いていた牢番が、長老衆にその内容を伝えると状況は一変した。ルウ子とアルは、富谷とNEXTAの戦争の種になりかねない。そう判断した長老衆は、今朝になって急遽二人を追放することにした。

バクはそれを担当の牢番から聞いていたが、ルウ子たちを迎えに

は行かなかった。頭の中は一面、最果ての荒野だった。今は誰とも関わりたくなかった。

ルウ子は堤上に向かってひと言吐き捨てた。

「なーにが『ついでに出てってくれ』よ。失礼しちゃうわ!」

バクには一つ、はつきりさせておかなければならないことがあった。

「ルウ子。悪いが俺にとって一番大事な人は、あんたじゃないんだ」
「昨日まではそうだった。今日からはあ、た、し」ルウ子はいちいち自分を指した。「いいわね?」

「キヤー、いきなり告白ですか?」

丸めた両手を口もとに寄せ、赤面する瑠。

バクは二人を無視して百草に言った。

「じゃあ、先生。またどこかで」

バクは海へ通じる雑草道を一人歩いていく。

ルウ子は怒鳴った。

「勘違いしないでよね!」

「……」

バクは立ち止まった。

「もし逆転サヨナラを諦めてないんだったら、自分が今なにをすべきか、わかってるはずよ」

「……」

「……」

「……」

「……?」

バクは半身で怒鳴った。

「なにグズグズしてんだ!」

「な!」ルウ子は一瞬言葉を失ったが、すぐに続けた。「それはこっちのセリフよ! 自分の立場をハッキリ認めなさい!」

「どうか私を守ってください、って素直に言えたら俺も認めてやるよ!」

バクは二人を後ろに置いたまま、すたすた歩き出した。

「ま、待ちなさい！ コラ！ バカア！」

ルウ子はギャーギャーわめきながらバクを追いかけていった。

「えと、えっと……」

蛸は去っていく二人と百草を激しく見比べていたが、百草に深く一礼すると、たたたたた駆けていった。

減勢池（滝つぼ）の横に一人取り残された百草は、頭をかくて苦笑した。

「またどこかで……か。嫌なこと言うよなあ、まったく」

バクたちは川沿いをひたすら歩いて海岸に出た。それからどこへ行くべきか決めかねていたところ、近くの漁港にヨットを一隻見つけた。例の シーメイド 号だ。いったい誰が回収したのかと、三人が眉をひそめていると、老いた漁師が近くを通りかかったのでヨットについて訊いてみた。偶然にも老人は シーメイド を昭乃にやった、その人だった。

船はもともとは老人のものではなく、十数年前に統京湾を漂流していたところを彼が拾ったのだった。遺留品の特徴からおそらく船主は離島の者で、本土へ渡る途中、事故かなにかに遭ったのだろう、というのが仲間内での有力な説だった。ともかく縁起が悪いということ、拾った船はすっかり塗装し直し、名前も新たに シーメイド 号とつけたのだった。

つい先日のこと、老人はまたもや湾を漂流していた シーメイド を拾ってしまった。所詮、小手先の業では縁起の悪さは消えなかったと、漁師たちは回収した船を近々部品取りのために解体するつもりだった（バラせば悪運が分散するともいうのか）。

バクは縁起など、食うに困らない者に限った迷信だと決めつけていた。せっかくの足を解体されてはまずい。どう説得すべきか相談しようとしたところ、女どもの姿がなかった。

二人は桟橋にいた。

蛭が シーメイド の脇でしゃがみこみ、船体を調べている。

ルウ子はバクを呼んだ。

「ちよつと来て！」

バクは老漁師を連れて栈橋に出た。

蛭は老人の許可を得てデッキに上がると、すぐさまキャビンへ入っていった。

「この傷…… やっぱりそうだ！」

蛭の籠もった声。

「？」

バクとルウ子は顔を見あわせた。

蛭はしばらくガサゴソと中を漁ってから出てくると、老人に言った。

「この船は私の父のものです。解体を取り止め、私に返していただけませんか？」

「……」

老人は答えず、小指の先を使って耳の穴をほじりはじめた。

ウミネコが一羽、シーメイド のマストに止まった。なにやら興味深げに栈橋を見下ろしている。

老人は指についた垢をふつと吹き飛ばすと、言った。

「一つ、訊いてもいいかね？」

「はい」

「この船の本当の名を……」

「第18 幸助丸（こつすけまる）です」

「む！」老人はしわくちやの臉を見開いた。「それは改装に立ち会った者しか知らんはず……」

蛭は船を降りると、どこから発掘したのか、錆びた六分儀を老人に手渡した。

老人はすり減った刻銘を見ている。

「私のです。最後の航海では父のを使っていたので、これは私の宝箱にしまつてあつたんです」

老人は六分儀を蛍に返した。

「船主の娘が現れたのではしかたあるまい。なにをしでかす気かは知らんが、ま、幸運を祈っとるよ」

老人はそう言い残して、どこかへ去っていった。

ルウ子は瞳に好奇の星々をまたたかせて蛍に迫った。

「訊きたいことが山ほどあるんだけどお？」

「え、えと……」

蛍は後ずさる。

ルウ子は迫る。

蛍は後ずさる。

ルウ子はさらに迫る。

蛍はさらに後ずさ………れずに棧橋から海へ落ちた。

バクが手を貸して蛍を救出。

ルウ子はため息をついた。

「なぜ船が要るのか。今日はそこまで我慢しとくわ」

「す、すみません」蛍は濡れた顔を手で拭くと、続けた。「NEXAは万が一の脱獄に備えて、事前に対策を立てていました。ルウ子さんの捜査網はすでに展開中と見るべきでしょう。相手は諜報の口です。陸続きに逃げてもいずれ嗅ぎつけられる。私たちはすぐにも本土から脱出すべきです」

バクは言った。

「本土を出たつて、俺たちの居場所なんかないだろ？」

蛍は険しい顔で言った。

「なければ作るまで！ です」

「どうやって？」

「わ、私に任せてください！」

「お、おう……」

バクはそれ以上なにも訊けなかった。

蛍の周りの背景がもうもうと陽炎に揺らぐ反面、瞳の奥は一面の霜。あと一つでもなにか刺激をあたえたら、ショートしそうな感じ

だった。

バクはルウ子を見た。

ルウ子はうなずいた。

今は蛭に従うしかなさそうだ。

その頃。NEXA本部、局長室。

「大品に続く発電所なんだが」孫は革張りのイスに腰かけると、ノートパソコンの画面に日本地図を映し出した。「全国の放置発電所を同時に修復して、いちどきに電力網を復活させようと思ってね」

「それはまた、大きく出ましたね」

和藤は孫の背後から寄り添い、首筋から胸もとへ腕をまわした。

「世界は日本を見捨てた。そのおかげでわが国は飢餓地獄を味わったわけだが、実は悪いことばかりじゃないんだ」

「国家機密を守ることがたやすくなった？」

「その通り。問題はむしろ国内のほうにある」

孫は右手で和藤の艶やかな腕をさすった。

「新政府の干渉が入る前に、NEXAの絶対的優位を固めたい、と」

和藤は孫の頬に頬をすり寄せた。

「せっかくの『授かり物』だ。有効に使わないと罰があたるよ」

「悪い人ね」

「我々を見捨てた連中ほどじゃないさ」

「きつと平賀先生もわかってくれるわ」

二人は唇を重ねた。

和藤は訊いた。

「発電の利権を独占して、海外経済を破壊することは考えないので
すか？ そうなれば世界の貧窮は本格的なものに……」

孫は目を伏せた。

「私が一番恐れているのはね、人の恨みを買うことなんだよ。敵を増やせばそれだけ、維持すべき力も大きくなる。巨大な星の寿命が短いのはなぜか、考えたことはあるかね？」

「なるほど……」

和藤は何度も小さくうなずいた。

「世界はわが国に固い鎖を張ってくれた。我々はその中で大人しく技を磨いていようじゃないか」

「それがあなたのささやかな復讐……なのですね？」

「どうしてもその言葉を使わねばならないのなら、そういうことになるかな」

「あら？ この星印はなんですか？」

和藤はパソコン画面のある一点を指した。

「ああ、それが。修復の目処はついているんだが、一ヶ所だけ、このままでは機能を果たせない場所があつてね」

和藤は印のそばに書いてある問題点を見て、微笑んだ。

「簡単じゃないですか。穴を一つ、埋めるだけのことでしょ？」

「そう。簡単なことだ」

「でも、さっきの言葉とは矛盾しませんか？」

「なあに。電気を否定するような人間など、現代社会にとっては存在しないのと同じだよ」

第六章 宮根島と黒船島

6月26日

シーメイド は昨夜のうちに統京湾を抜け、この日の午後、離島連盟の領海に近づこうとしていた。ヨットはそれまで順調に航海を続けてきたが、領海の境を目前にして浮標ブイのように動けなくなってしまう。天候も風も申し分ないはずなのだが、肝心の艇長スキッパーがキャビンの隅っこで一人縮こまっているのだ。

ルウ子は「あたしが言っと、あの子は身を滅ぼしてでも従おうとするから……」と、バクをキャビンへ送り出し、自身は見張りとしてデッキに残った。

蛍は床の上で膝を抱えたままふるえていた。

バクはその隣にすわった。そこまではよかったのだが、なにか言えばかえって傷口を広げてしまいそうで、なかなか声をかけられずにいた。蛍の顔ををちらちらとうかがいながら、どうしたものかと悩んだ末、バクは手を動かした。蛍の片腕ほどをすうつと下へなでいき、連結器のように固く組んでいた手を解いていった。

すると蛍はその手をぎゅうと握り、ようやく口を開いた。

「ごめんなさい……私、ルウ子さんを守るって誓ったのに……」

「その……どうしても嫌なら、引き返してもいいんだぜ？ 誰にだって触れられたくない過去はある」

「ううん」蛍はかぶりをふった。「島には必ず行きます。少しだけ時間をください」

蛍は故郷の宮根島みやねじま……この先にある伊舞諸島の一つ……を出たときの話をした。

「今からちょうど十二年前のことです。私はそのとき十六。漁師の一人娘です。離島連盟に加入して以来、宮根島の人々は大きなトラブルもなく、穏やかな日々をすごしていました。ところがある日、

港近くの倉庫にあった大量の加工魚肉が忽然と消えたんです。それまでの数年、不漁と不作が続き、島の食料備蓄は底をつきかけていました。

『誰かが独り占めにしたにちがいない』……どこからともなく、そんな噂が広がっていききました。島の周囲は要塞化されていて、海では離島海軍が警戒の網を張っています。外部からの侵入はほぼあり得ない。疑いの目はまず倉庫の管理者に向けられました。狭い島ではなにも隠しようがなく、彼らはシロでした。次は船の所有者です。大きな荷を外に持ち出せるのは海軍か漁師しかない。海軍の人たちは一人の漁師を疑っていました。朝靄に紛れ領海の外でなにか捨てているのを見たとき。

そこで私の父は正直に名乗り出ました。倉庫から加工食品の一部を持ち出し、無人島に捨てたのはたしかに自分であると。でもそれは、病気に汚染された禁漁区域のものだと気づいたからです。父は力説しました。『こういうミスは稀にあるし、故意じゃないこともわかってる。だから不問にしたかった。問題のない食品にはいっさい手を触れていない』と。

それでも、海軍は執拗に父を攻撃しました。決め手の証拠……大量の無害な食品が見つからないにもかかわらず、犯人は父に決まっているというんです。とはいえ、彼らに島民を裁く権限はなく、その後は表立って干渉してくることはありませんでした」

蛭が一息つくと、バクは言った。

「危ないところだったな」

「いいえ。問題はここからです。海軍が去った後、島人たちは松下家との関わりを避けるようになっていきました。特に学校はひどかった。島の学校は小さく、全員が顔見知りです。そんな環境で無視され続けることは、多感な年頃だった私にとってなにより耐えがたい苦痛でした。絶海の孤島に一人取り残されるほうがまだよかった」「逃げ道はなかったのか？」

「はい。転校しようにも学校は島に一つだけ。退学して独自に勉強

を進めようとしても、通信教育などは存在せず、島に存在する書物のほとんどは学校の図書館の中でした」

「……」

「富谷と同じ理由で、離島の人口規制は厳しいものです。火山が噴火するか疫病でも流行らない限り、他の島へ移住することはできません。両親は私の将来を考え、離島連盟を出る決意をしました。出航の日のことを思い出すと、今でも胸が痛くなります。船には卑劣な落書き。背中に浴びる島民の罵声……」

蛍はそこで息をつまらせ、両手を胸に重ねた。

「だ、大丈夫か？」

バクは蛍の背中に手を添えた。

「す、すみません……」

蛍は息を整えると、話を続けた。

「船はやがて統京湾に入りました。松下家の悲運はここまで。漁師としてどこかの海岸に潜りこめばきつとうまくやっていける。本土の戸籍がないから学校へはやれないけれど、島に比べたら自習する機会はいくらでもある。三人でそんな話をしていたときです。気がつくとも三隻の帆船がこのヨットを包囲していました。海賊です」

「ああ……」

バクは話の結末がなんとなく見えてきた。

「逃げ場がないと察した両親は娘、つまり私の命だけは助けてくれるよう海賊の船長に嘆願しました。船長は『約束は守ろう』と言って、そばにいた赤髪の少年に目配せした。そして……」

蛍は両手で顔を覆う。

「蛍？」

蛍はその手をどけると、水浸しの顔で叫んだ。

「少年はこちらの船に飛び移ると、長刀を抜き、いきなり両親の首を切り落としたんです！ 私の目の前で！」

「……」

バクは蛍の肩をしっかと抱いた。

蛭は泣きすすりながらも、続けた。

「少年には罪の意識の欠片もない。むしろ誇らしげに、刀についた血を拭っていました。私はあまりのショックで泣くことも叫ぶこともできず、気を失ってしまった……。ふと目を覚ますと、そこは海賊たちの船室。私は磔にされ酒宴の中心にいました。たしかに船長は約束を守った。でも、それは海賊特有の屁理屈だったんです。船長は私を人身売買にかけようとしていました。若く豊満な女は高く売れると」

バクは怒りと蔑みと諦めの念をこめ、言った。

「それが海賊だからな」

「やがて船員たちは酔いつぶれて寝てしまいました。でも一人だけ、途中で酒宴を抜けた者がいました。赤髪の少年です。彼はこのチャンスを待っていました。『孕ませて商品価値を下げたらその場で処刑だ』という船長の厳命など無視して。私は両親の死と体を弄ばれた屈辱に耐えきれず、舌を噛み切ろうとしました。そのときです。海のほうから少女の怒鳴り声が聞こえました」

「ま、まさか……」

「はい。ルウ子さんです。『こら、そこーっ！ 調査の邪魔！』と」

「ルウ子の奴……」

偶然の一致なのか、それとも演出なのか、そこがよくわからない。「一度は捨てようとした命。私は残りの人生をルウ子さんに捧げることにしました」

かくして蛭はルウ子の陰の従者となった。

壮絶な過去と真正面から向きあってみせた蛭。バクは彼女に大きな拍手を送ってやりたい気分だった。だが、同時に大きな不安も生まれていた。蛭はたった今、持ちあわせの精気を使い果たしてしまったのでは？ そんな状態でこの先に待ち受ける難関に立ち向かえるのか？

蛭はほんのり頬を染めて言った。

「その……バク君。ちよつとだけ……いいかな」

「え？」

バクがきょんとしていると、蛭はいきなりバクの胸に顔をうずめた。

「！」

バクはのぼせた。

少ししてそれが落ち着くと、蛭の背中にそつと腕をまわした。

二人はしばらくそのまま寄り添っていた。お互いどこを見えるというとも、なにを話すということもなく。

やがて蛭はすぐと立ち上がり、照れ笑いを浮かべた。

「えへへ。チャージ終了です」

「あ、あの……」

バクは一つ釘をさそうとした。

「わかってます。ごめんなさい。ありがとう」

蛭は微笑むと、駆け足でキャビンを出て行った。

バクはそれを目で追いつつ、ふっと口もとを緩めた。

「ま、いつか……」

離島連盟の領海に入って間もなく、辺りを警備していた武装帆船が近づいてきた。船長らしき虎髭男が巨大なメガホンで停船命令を告げる。離島海軍の一将、大村猛だ。

デッキにいたバクは、せつせと帆を引き下ろしていく。

大村はニヤと黄ばんだ歯を見せた。

「誰かと思えば、昭乃の子分の……」笑顔が消え、眉をひそめる。

「あー、なんてったつけ？」

「バクだ」

「そうよ、バクだ。昭乃は元気か？」

「ん……ああ、それなりにな」

「隣の変ちきりんな頭の嬢ちゃん」大村はルウ子に目を移すと、首をかしげた。「どっかで見たことあるんだが……」

「髪がのびたのよ」

ルウ子は黒縁のメガネをかけてみせた。

中途半端な長さの竜巻毛に、白黒どっちつかずのプリン頭。ルウ子は往年の輝きをすっかり失っていた。

「ああ、昭乃の後輩の……」

大村はそれだけ言っ、と忘れをこまかすようにガハハと笑いをふりまいた。

そのとき、バクの陰からひょいと蛭が顔をのぞかせた。

大村はメガホンを取り落とした。それに気づかないまま蛭を凝視している。

「あ、あんたは……」

「松下の娘です」

「な、なにしに帰ってきた。復讐か？」

「復讐？ 復讐されるようなことをしたんですか？」

「あんたらを……島から追い出す形になっちゃった」

大村の額や頬が汗で光りはじめた。

「私の父は潔白です。汚染された食品を持ち出したのはたしかに父ですが、それ以外の健全なものは他の誰かが……」

蛭がそこまで言ったとき、大村の部下の何人かがさりげなく弓に手をかけた。

それを見たバクは、後ろ手にナイフを抜いた。

「バク君、待つて……」

蛭はささやくと、大村に向き直った。

「他の誰かがやったことにまちがいはない。ですが、私が今日帰ってきたのは、真犯人を突き止めるためではありません」

海の戦士たちは顔を見あっている。

大村は訊いた。

「どういう、ことだ？」

「一つ、お願いがあります。なにも訊かず、私たちを宮根島に入れてください」

「そ、そんなことは俺の一存じゃ決められ……」

「……」

蛭は瞬きもせず、大村の目をじっと見続けた。波のせいなのだろうか。横綱のように腰の重そうな大村が一瞬よろめいた。少なくともバクの目にはそう映った。

「わかった。俺に任せろ」

6月27日

バク一行は驚くほどあっけなく、宮根島の新たな家族として迎え入れられた。大村の取り計らいだけでそうだったわけではない。蛭の父は真犯人ではないと、島人たちは薄々感づいていた。一度できあがってしまった松下家を忌む島の空気。自力ではそれをふり払うことができず、最後には一家を島から追い出す形にしまった。松下親子が島を去ってから、島人たちはそのことをずっと気に病んできたのだった。蛭の両親が海賊に殺されたと知ると、人々は泣き崩れた。

6月30日

バクたちは近隣住民の協力を得て、火山の麓に広がる林の中に丸太小屋を建てた。集落へ行けば蛭の実家が残っているのだが、もともと古い上に十二年間も無人だったせいで傷みがひどく、倒壊の危険があった。いったん壊して建て直す手もあったが、重要な作戦会議中に「白菜余ったから食べなされ」などと、婆さんに勝手に入っ

てこられても困る。かくして、バクとルウ子と蛭は、人里離れた閑居で再起を図ることになった。

8月20日

なにしろここは離島の山の中である。

本土の情報から疎くなるという心配は常にあった。電気が豊富な環境では、恐ろしいほどのスピードで時代が変わっていくものだ。一年前の湧水が今日の大河。パワージョック以前は、そんなこともさして珍しいことではなかった。

バクたちは毎日のように作戦会議を重ねた。その内容はたいいてい、孫とルウ子の戦力差についての議論だった。孫は政治家を裏で操って莫大な予算を取りつけ、全国に支部を設け、傭兵軍団を有し、コンピューターまで扱いはじめた。一方、こちらは利用額に上限のある地域通貨、味方はまだ三名のみで、手持ちの刀剣しかなく、計算機といえばそろばんだ。

これでは最初から勝負にならない……と思われたが、バクたちには一つだけ救いがあった。アルとニコだ。

ニコは孫の目を盗んでは、アルにメールを送っていた。メールといても、アルとニコの間でしか通じない独特なやり取りなので、NEXAは情報が漏れていることなど知る由もなかった。ただし、ニコがメールを送信できるのは、孫がケータイを閉じている時間に限られていた。メール作成時にどうしてもその画面を消すことができず、バレルの恐れがあるというのだ。孫は好奇心が強いのかそれとも疑っているのか、よほど邪魔にならない限りケータイを閉じようとしなかった。

それでも、ニコからの新しい情報は断続的に届いた。

NEXAは産業遺産と化していた全国の放置発電所を修復し、電力網を整備しはじめた。その裏では、国勢情報を海外にもたらそうとする不穏分子たちを徹底的に消していった。孫は内に秘めていた構想をついに実行に移したのだ。世界が日本を思い出したときにはもう、埋めようのない文明の差ができあがっているというわけだ。

構想が実現すれば、たしかに日本は豊かになる。その一方、他の国は相変わらず不便や飢餓や争乱に満ちた苦難の時代が続くことになる。世界の人々は一国で利便を貪る日本を非難するだろう。とはいえ、すでに築かれた千尋の壁を前に手も足も出ない。人々はかつて日本を見捨てたことを、幾世代にも渡って後悔し続けることになる。

これが孫の『ささやかな復讐』の全貌だ。億万の飢えた目に見つめられながら、一人ぶくぶく太っていくことなど、孫本人はともかく、まともな国民であれば耐えられるわけがない。バクたちは怒りにふるえた。

このように、遠く離れていても敵情を把握できるのは有り難いことなのだが、それは強化していくNEXAと、相変わらずの三人との、較差の広がり进行を思い知らされることでもあった。

バクたちに残された最後の希望……離島連盟。

果たしてバクたちは、強力な海軍を擁する連盟を動かすことができるのか？

2047年1月6日

バクたちが宮根島にやってきてから半年がすぎた。

離島連盟の住民は、本土の情勢にあまり関心がないようだった。

連盟はコミュニティーと同様、本土や外国にいつさい頼らない自給自足社会なのだが、富谷とは決定的にちがう点があった。離島と本土を隔てる海洋だ。そこを縄張りとするのが近海最強を誇る離島海軍。この理想郷が内外から脅かされる心配は、今のところ皆無といってよかった。

バクたちは親しくなった島人たちを公民館に集め、NEXAの脅威について何度か説いた。島人たちの反応は冷ややかなものだった。日本が恨まれようが世界が飢えようが、自国の問題は自国で解決し

てもらいたい。自分たちは島の環境や生活を維持することで精一杯なのだ、と。それは島人の総意といっても過言ではなかった。

バクたちは講演をするたびに落ちこんだ。この半年、NEXAの暴挙を阻止するための作戦は何一つ煮つまっていない。仲間を増やさないことには、現実的な作戦の立てようがなかった。

その日の夜。丸太小屋。

ランタンを据えたちゃぶ台を囲み、三人が討論しているときだった。

アルが大きなくしゃみをした。ニコからメールが入ったのだ。

内容を読み終えたルウ子は、すくと立ち上がってケータイを閉じた。

いつもと空気がちがう。

そう感じたバクは、すかさずルウ子に言った。

「ニコからのメールは隠さない約束じゃなかったのか？」

ルウ子は人差し指を立てた。

「ルールの第一、忘れてないでしょうね？」

「NEXAに関わる事件が起きたときは、問答無用」

つまり、黙ってリーダーの指示に従えということだ。

「よろしい」

ルウ子はケータイを開くと、画面に映った文章を二人に見せた。

「！」

バクは全身の毛穴から体中の水分が抜けていく感覚に襲われた。

「ああ……」

蛍は両手で顔を覆った。

「嘘だ」

バクは画面から目を逸らした。

ルウ子は低く言った。

「認めたくないのはあんただけじゃない」

「嘘だ」

「でも、ニコは孫が受けた報告をそのままこっちに流してる」

「嘘だ」

「良くも悪くも信頼できる情報源なのよ」

「嘘だ」

「バク……」

「嘘だ」

バクはすくと立ち上がると、戸口のほうへ足を向けた。

「あそこはもう、あんたの知ってる場所じゃないのよ」

「……」

バクはふり向きもせず、ドアノブに手をかけた。

「バク！」

バクはドアを開ける。

するとルウ子は壁にかかっていた短槍をさっと手にした。

それを見ていた蚩は叫んだ。

「ルウ子さん！ な、なにを……ああああ！」

1月5日

ニコのメールがバクたちに届く前日。富谷関。

堤上にミィヤ率いる警備隊。堤下にシバ率いる傭兵軍団。片や弓、片や小銃をかまえ、二つの勢力は対峙していた。

軍団の後方に立つ赤髪の男は、谷底で地鳴りをあげた。

「黙ってそこを譲り渡すんなら、住民の安全は保証してやるぜエ！」

隊の中央に立つおさげの女は、天空で雷鳴をあげた。

「ふざけるな！ ここは我々の土地だ！」

「土いじりがしてえンなら、別にそこじゃなくたっていいンだろ？」

「水没していた土地を一から耕し、村民を養えるだけの豊かな土地にするまで、いったいどれ程の苦労があったか。あんたにはわからないでしょうね！」

「わかんねえなあ」シバは笑った。「まったく、困んだよなあ。あんたらがどいてくんねえと、何万つつう国民様が迷惑するんだがなあ！」

「何万のためなら、二千の民はどうなってもいいっていうの？」

「そんなこたア言つてねえ。あんたらがキツイのはほんの二、三年さ。あとは万事NEXA様にまかせときゃ、昔はそんな苦労もあつたなアつて笑つて語らせるようになる。お互い賢く生きのびようぜ！　な？」

「外道の犬ごときとなれあう筋合いなどない！　今すぐ立ち去れ！」
シバは声をひそめて笑った。

「クク……若いな」

シバは部下の男に目配せした。

男は銃口をミーヤに向け、小銃のトリガーを引いた。

ミーヤは透明な盾をさつとかかげ、これを跳ね返した。

かつての機動隊が使っていた防弾盾だ。こういうこともあるかと、ミーヤは部下を定期的に闇市へ送っていた。長老衆の目を盗んでのことなので、こういった文明武装は数えるほどしか集められなかった。

「総員……」

ミーヤは失意に沈んだ声で命じかけた。

隊長がこれでは、味方の士気に関わる。

ミーヤは自分で落とした影をふり払うように叫んだ。

「迎え撃て！」

戦力は正規兵に農民が加わった富谷勢が十倍以上勝っていた。それにもかかわらず、富谷関での攻防は互角だった。なにしろ弓対銃だ。威力差は言うまでもない。三十メートルという壁の高さを活かし、むしろ富谷勢のほうが『健闘』したといえる。

だが、富谷関下に陣取ったシバ隊は陽動にすぎなかった。山に入った別働隊が例の取水管、つまり間道を見つけ出して内部へ侵入、

小銃を乱射して刀剣の守備兵を圧倒した。さらに居住地区へ押し入り、長をはじめとする長老衆を人質に取った。急所を突かれた富谷の民は戦意喪失で総崩れとなり、長は全面降伏を申し出た。

NEXA軍は富谷の全住民に即刻退去を命じた。

富谷の生き残りが土地を去っていく中、ただ一人広場の中心に残された者がいた。ミーヤだ。彼女は『NEXAの寛大な条件を聞き入れず、多くの住民の命を奪った』という罪で、シバが死刑を宣告した。

磔にされたミーヤは、葬列のように沈んだ富谷の民を悲しげに見送っていた。

退去の列はミーヤの哀れな姿を目にしつつも、一糸乱れることなく富谷関のほうへ続いていた。不服を言えば即銃殺だと兵士たちが脅していたのだ。

長蛇の末尾が広場の彼方に霞んできた頃、ミーヤの正面にいた五名の小銃隊がかまえた。

シバは隊の背後に歩を進めると、言った。

「なにか言い残すことは？」

ミーヤは頭をたれたまま言った。

「バク……ごめん……あたし、約束守れなかった」

「殺れ！」

小銃隊はいっせいにトリガーを引いた。

1月12日

「さてどうしたものか」

ペン先のように尖った岬の先端。みぞれがちらつく中、百草は一人腕を組み、白い息を吐いた。

海の方こう手の届きそうなところに、バイエリアの象徴、ミライマークタワーが見える。かつては観光やビジネスで賑わったらしい

が、現在は家を失った地上人のスラムマンションと化していた。不法居住ではあるが賊ではないので、新政府は問題を放置していた。船があればそこまで三時間とかからないはずだが、あいにく海岸には和船一つ転がっていない。

富谷を追い出された村人たちは、運を天にまかせて日本各地へ散っていった。集団でいても食料が確保できないのだ。自分のことは自分でなんとかするしかなかった。

行き先を考えている最中、百草は背後に人の気配を感じた。

「手を挙げな！ それからゆっくりこっちを向け」

男の声に百草は従った。

小柄ながらも頑強そうな、蓬髪の男が短弓をかまえていた。

百草は臆せず言った。

「海賊か。残念ながら私は今、なにも持ちあわせていない。住んでいた村が滅ぼされてしまったのでね」

「海賊と一緒にするんじゃない。ペリー商会だ」

「いずれにしても、私にはなにもない。この干からびた肉でも食うかね？」

百草は微笑むと、片方の袖をまくった。

髭がちな男はかまえを解くと、真顔で言った。

「あんた、医者だろ？」

百草は笑みを消した。

「なぜわかった？」

「匂いだ。あんたからは又シと同じ、消毒の匂いがする」

「又シとは？」

「あの島が見えるか？」

男は対岸の少し手前にある、海面のわずかな隆起を指した。

「黒船島……君たちのアジトだろう？」

「又シの隠居は俺たちが守る。又シは俺たちの治療をする。仲間じゃないが、島には欠かせねえ男だ。そいつが病で倒れちゃった。長くはねえと、又シは自分で診ている。そこでだ」

「ペリー商会は彼の後継者を探している、と？」

「話が早いな」

百草はため息をついた。

「もう誰かの後任はたくさんだよ」

「嫌とは言わせねえ」

男は再び百草に狙いをつけた。

「一つ忠告しておこう。こんなことは過去に何度もあった。限界集落、バラック街、地下賊アジト、コミュニティー……私はそのたびに後任を引き受けてきた。だが、私が就いた土地はことごとく数年で滅んだ。私は筋金入りの疫病神なのだ」

男は急に威勢をなくし、うめくように言った。

「そのよ……麻薬^{ヤク}をよ……切らしちまってよ……」

百草はそれだけで男の言わんとすることがわかった。この男は又シとやらを、せめて苦痛だけでも……と思っていたのだが、仲間どもが快楽のために使いきってしまったのだ。

男は弓を放り出すと砂地に正座し、頭をたれた。

「頼む」

男の頭や肩、太腿にシャーベットの山ができあがっていく。

潮が満ちてきて、男の膝下を冷たく濡らした。

それでも男は地蔵のように動かない。

百草は負けた。

「死んでも医者はやらないと決めていたんだが……」そこで長いめ息をつく、急に笑いがこみ上げてきた。「私のあらゆる細胞に仁術をすりこんだ、かつての師を呪いたい気分だよ」

男は顔を上げた。

「来て、くれるのか？」

「百草林太郎だ」

百草は手を差し出した。

「タチってんだ」

タチはその手を取って立ち上がると、海のほうへ合図を送った。
ペリー商会の帆船が近づいてきた。
百草とタチは黒船島へ急いだ。

百草が又シの家に駆けつけたとき、タチの労もむなく、又シはすでに危篤だった。

ベッドの周りでは、ペリー商会の蔵つい面々が肩を落としている。
百草は意識なかばのしわくちやの老人を見て愕然とした。

「先生！ 孫先生じゃないですか！」

「だ、誰だ……その名はとうの昔に捨て……」

又シはむせながら片目を開けた。

「私ですよ！ 百草です！」

「ああ、忘却小僧か。教えたことを片っ端から忘れおって……」

「一番大事なことだけは忘れてませんよ」

「ならばよろしい。医師としての建前はな」

「えっ？」

「小僧、家庭は持ったのか？」

「二度ほど」

「過去形か」

「子を作る間もなく、妻は二人とも疫病で……」

「その二人は最期、笑顔だったか？」

「は、はい……」

「ならば万事よろしい」又シは微笑んだ。「身内すら幸せにできんようでは、赤の他人を救う資格などない」

「おっしゃる通りだと思います」

「実はな」又シの笑みが陰った。「情けないことに、言った当の本人がそれを守れておらん。これから起こるであろう災いは、すべてこの私が発端なのだ」

話し疲れたのか、又シは苦しそうに目を細めた。

「それはどういふ……」

「私の本名を言ってみろ」

「孫登馬先生です」
そんとうま

「NEXAのトップは誰だ？」

「孫……えっ！？ まさか……」

「良い医師は育てた。だが、家庭は疎かにしてしまった。それが……心残り……だ」

又シはそこで息を引き取った。

葬儀の後、百草は黒船島の二代目『又シ』を襲名した。

1月20日

百草は海賊の医者となり、又シの家を引き継ぐことになった。

悪徳ペリー商会の片棒を担ぐ形になってしまったのは甚だ不本意だが、片足引きずった人権のない老人では、孤独にさすらっていても野良犬の餌になるだけだろう。悪党に落ちぶれたことに悩むより、今はともかく昭乃のリハビリだ。わが師はサジを投げたが、諦めるのはまだ早い。

客間のドアを開けると、昭乃は寝床で退屈そうにしていた。百草は昭乃を車椅子に寄せ、広場を散歩することにした。

冬のただ中だというのに、厚着では汗ばむほどの陽気だ。いったい何時になったらこの天候不順は収まるのだろう。それはともかく、昭乃は私の訪島以来、目があうたびにになにか訊きたそうな顔をしていた。一方、私はこの一週間『又シ』をめぐる騒動で多忙を極めていた。処理すべき問題はおおかた片づいた。今日は話すのにいい日和だ。

百草は車椅子を止めると、口を開いた。

「なぜ私一人だけがこの島にやってきたのか。そう訊きたいんだらう？」

「！」

昭乃はさつと首を横に向けた。

さつとふり返りたかったのだろぅが、その体では無理だ。

百草は手押しハンドルから手を放すと、昭乃の正面にまわった。

「それを話す前に一つ訊きたい。私の助手はどこへ行ってしまったんだ？」

「私、夢を見ました」

「夢？」

「日の出の方角にあるどこかの谷が、洪水で水浸しになるんです。水浸しというより、湖か」

「……」

「それがなにを予知したもののなか、私はどうしてもたしかめたくて、彼に様子を見に行ってもらったんです」

「富谷へ、かね？」

「はい」

「熊楠君のことはバクから聞いているが、それらしき男の姿は見かけなかったな」

「きつとなにかトラブルを抱えているのでしょうか。そのうち帰ってくると思います」

「わかるのかい？」

「彼の闘気はほとんど衰えていません。大丈夫です」

昭乃は寝たきりとなってから、五感以外の感覚が発達するようになったという。ただ残念なことに、キャッチできるのは熊楠の気だけだった。

医師としては信じがたいものがあつたが、万能ではないところが逆に信用できそうだと、百草は思った。

「ともかく、無事なら結構」

「心の準備はできています。知っていることを教えてください」

百草はバクとルウ子の追放から富谷の滅亡までを語った。

昭乃は怒りや沈痛の面持ちをときどき見せたものの、彼女にして

は落ち着いた様子で聞いていた。

「村人の多くは生き残った。それだけでも救いです。彼らはたくましいから、土さえあればきつと、どこででもやっつけていける」

「うむ。私もそう思いたい」

「それで……その」

昭乃は口ごもった。

「うん？」

「ミーヤは一緒じゃなかったんですか？ 地下の頃からの仲なんでしょう？」

「……」

百草は背を向けた。

「……」

昭乃は百草の背中を目で射る。

百草はこらえきれず、空を仰いだ。

「処刑されたそうだ」

「！」

昭乃はがくと気を失った。

1月22日

寝息を立てる昭乃を背に、百草は降りしきる雪を見つめていた。

昭乃はあれからまる二日も眠り続けている。熊楠の歪みきつた過去は愛の力で受け入れたが、自分の身代わりに誰かが命を落としたことには耐えられなかったのだろう。それが赤の他人ならまだしも、ミーヤは自分の可愛い妹分であり、弟分のバクにとってはこの世のどんな物事にも代え難い、まさに掌中の珠といえる存在なのだ。

百草は窓ガラスにゴツと額をぶつけ、声を殺してむせび入った。
「すまん……バク」

4月11日

富谷陥落の報から三ヶ月。

バクは未だ悲しみの深海に沈んだままだった。ルウ子にやられた足の槍傷はすっかり癒えたにもかかわらず、バクは寢床から起き上がることもままならなかった。

蛍がどんなに言葉を尽くして慰めても、バクはいつさい聞く耳持たなかった。日々小屋に引きこもり、「生きる意味がなくなった」と口にするばかり。彼が夢見る飢餓なき未来社会とは、ミーヤが健在であることが第一前提なのだ。

バクから目を離すな。ルウ子の厳命があった。

蛍はなにをいってもその指示を優先した。

小屋には縄も手斧も鎌もあり、外に出れば断崖から火口まである。バクは歩きまわる気力さえないようだが、しばらくの間はむしろそのほうがいい。下手に元気づけても、もどったエネルギーを負う方向にしか使わないだろうから。

今、彼に必要なのは、励ましても薬でも本土の情報でもなく、穏やかにすぎていく時間だった。砂の城に閉じこめられた小さな囚人を救うためには、城が崩れぬよう少しずつ少しずつ砂をすくっていいしかない。

一方、ルウ子は小屋から遠く離れた畑で一人汗を流していた。バクが倒れて以来、ルウ子は普段の三倍働かなければならなかった。

離島連盟は富谷コミュニティーとちがって完全なる共同社会ではない。なんでも金で解決というわけにはいかないが、一文無しというわけにもいかない。土地も漁業権もない、イレギュラーな新参者がこの島で生計を立てていくには、農家や牧場でバイトするか、あるいは漁師の下で働くしかなかった。

こうしている間にも、孫は着々と計画を進めている。孫がなぜ富

谷を狙ったのか、ルウ子にはわかっていた。あそこは元々は水力発電所なのだ。昨日のニコの報告によれば、NEXAはダムの際に空いていた穴を埋め、谷に水を張っている最中とのこと。電力網の復活はルウ子の悲願でもあったが、住民を強引に追い払って農村を水没させたり、日本でしか発電できないのいいことに『逆鎖国』に甘んじていようなど、到底許せるものではない。

ルウ子は持っていた鍬を足もとの黒土に突き刺し、青すぎる空を仰いだ。

「こんなことしてる場合じゃないのに……」

ルウ子は堆肥や家畜にまみれ、好機をただ待つことしかできなかった。

バクは光届かぬ海底に伏し、心の梁をきしらす水圧をひたすら受け続けた。

蚩はバクの看病に疲れ、高熱で倒れることもしばしばあった。

三者三様、それぞれの歯がゆい思いに苦しむ日々は、それから実に二年も続いた。

第七章 離島連盟

2049年4月11日

バクは来月で二十一を迎えようとしていた。

ミーヤのことは一日たりとも頭を離れることはなかったが、体を蝕むほどの憂鬱さは時とともに薄れていった。いつまでもルウ子一人に働かせるわけにはいかないと、今年の正月から、バクは蛍とともに農畜のバイトに復帰していた。

その日、三人がちゃぶ台を囲んで朝食を取っていると、ニコから新たな一報が入った。

NEXAはついに日本の電力網を復活させた。

わずか二年……ルウ子が局長の頃に二十年はかかると見こんでいた事業を、孫はわずか二年で達成してみせたのだった。

国家的な大工事が進んだ裏には、常に孫の策謀の系がからみついていた。孫はこの事業を進める裏で、マスコミの掌握に全力を注いだ。ここ数年の間に新聞社の重役が相次いで入れ替わったり、有能な記者の『事故死』が頻発したのは、彼の手によるものだった。配給の不足や不公平をめぐり、政府と国民の間には積年の軋轢があつた。孫は情報を巧みに操ってこの摩擦をさらに煽り、電気の復活に期待する国民を片っ端から味方につけていった。

NEXAの独走を批判する政治家がことごとく落選し、あるいは買収され、あるいは消されていくと、この国の舵輪はもはや孫英次の思うがままだった。

その日、孫は記者会見で語った。

「パワーショック。それは我々人類に対し、言語道断の苦悩をもたらしてきました。これほどわけのわからない、これほど腸をねじ切られるような災いが、過去数百万年の人類史にあったでしょうか？」

しかし、そこから学ぶことはあつたのです。食糧自給率は四割に、エネルギー自給率に至っては一割に満たなかった日本。世界がわが国を内心ではどういう目で見ていたか、この間の号外記事でよくわかりいただけたと思います。

逆鎖国？ 望むところじゃないですか。我々だけが再び電気を手にした。彼らとはちがうのです。孤独を悲しむ必要はありません。我々日本国民は、科学文明の正当な継承者として、神々に選ばれたのですから」

この会見の内容が海外で報じられることはなかった。NEXAはこの国に忍びこんでいた諜報員やジャーナリストなど、あらゆる不穏分子の完封に成功していた。

ニコのメールを読み終えたルウ子は、頬張っていた米粒とともに怒声を発射した。

「戦時中よりタチが悪いわ！」

「……」

バクは迷惑そうな顔で、顔中にくっついた米粒を一つずつ口にしていた。

蛭は言った。

「高速の情報網は大衆を洗脳しやすいけど、同時に抑止もかけやすい。孫が電力網の復活を段階的にやらなかったのは、テレビやネットの普及を徹底的に遅らせたという狙いもあったんでしょね」

「チツ……」

ルウ子はそれから寝るまでの間、ぶつぶつと解読困難なつぶやきをくり返し、終始不機嫌だった。

ニコのメールはその後久しく途絶えた。電力事業が一段落して、NEXAの活動が安定期に入ったのだ。彼らがほころびを見せない限り、バクたちは動きようがなかった。

晴耕雨読。バクたちはひたすらそうして時節を待った。

2050年6月10日

国内の電力復活から一年と二ヶ月。

NEXA本部に衝撃が走った。

日本の様子を映した写真が、世界中の新聞にでかでかと載っていたのだ。

NEXAの暗殺者はたしかに、国内に潜伏していた不穏分子を完封した。だが、執念は相手のほうが一枚上手だった。彼らは自分の命さえ囿にして、証拠となる資料をそれとわからぬ形で自国に送っていたのだった。

7月17日

電気はついに極東の地で蘇った。科学的に納得できない事情はともかく、まずは国交回復であると、列強諸国は我先にと密使の船を送った。これに対しNEXAは、巡視船や沿岸の砲台などをもって外国船をことごとく追い払った。

その日、NEXA本部に一つの報告が入った。海外に潜入している諜報員からだ。日本の鎖国姿勢に危機感を募らせた列強諸国は、『地上で唯一の発電国となったのをいいことに、科学文明帝国による一極支配の野望を抱いている』と日本を悪役に仕立て上げ、制裁に向けて軍備を整えはじめているとのことだった。

自室でそれを知った孫は、珍しく怒気をこめて言った。

「今まで日本をないがしろにしてきたくせに、電気があるとわかった途端にこれだ！」

「局長……」

和藤は不安げな瞳を孫へ流した。

「核弾頭の開発を急がせてくれ」

日本国内には原発由来の核燃料が密に残されていた。戦艦や要塞を一から造ることを考えたら、核ミサイルの開発などたやすい。

「……」

「心配するな、栄美。第一、わが国は直接誰かに迷惑をかけたわけではない。従って彼らには他国に攻めこむだけの理由がそろわない。それでも、権力にのぼせ上がった愚か者はなにをしかすかわからない。だから万が一に備える。それだけのことだよ」

ニコはこの会話を密かに録音し、翌日、隙を見てアルに送信した。

7月18日

バクたちの焦りは頂点に達しようとしていた。

孫は構想を練り上げた当初、核開発など予定していなかった。外国が日本を忘れている間に技を磨き、充分に力の差を見せつければ、大袈裟な兵器など必要ないとさえ口にしていた。だが、日本の実態は海外に知られることとなり、孫の『ささやかな復讐』のシナリオに大きな狂いが生じはじめた。このまま問題を放置しておけば世界中との開戦もあり得る。とはいえ孫の言うとおり、日本は隣国を侵略したわけでも宗教的対立があるわけでもない。諸国首脳が世論を納得させるだけの大義名分を探している間は、睨みあいが続くだろう。だが、ケンカは意外と些細なきっかけで起こるもの。一時たりとも油断はできない。

ルウ子は手にしていた鎌を丸太小屋の外壁に突き刺し、孫の愚行を嘆いた。

「あんの腐れ納豆、本気で勝てると思ってるらしいわ!」

バクは言った。

「勝てるもなにも、戦争なんか起こらないだろ？」

「わかってないのね。ヤバイ兵器を隠し持っているらしいってだけで、たしかな証拠もないのに平気で戦争しかける国だってあるのよ。そいつらがどれほど世界を迷惑させたことが……」

「それでも、孫には核きりふたがある」

「マスター・ブレイカー最大の弱点、忘れたの？」

「弱点……あ！」

バクは手を打った。

たとえ長距離ミサイルを開発したとしても、ニコの影響下、つまり本土上空にあるときしか制御できないのだ。

蛭は開戦した場合の日本の未来を仮想した。

「わが国には負けしかありません。海上で現代兵器を使えない以上、物量に勝る列強は難なく日本各地に上陸を果たすでしょう」

「上陸した何万もの兵がいつせいに首都へなだれこみ、この国はっ！」「ルウ子は壁に刺さっていた鎌を引き抜くと、蛭が手にしていたキュウリを奪い、これを真つ二つにした。「はいおしまい！」

バクは草の上に落ちたキュウリの片割れを拾い、そのまま頬張った。

「クソ……どうすれば孫を倒せるんだ……」

「リスクは高いですが……」蛭は北の空を見上げた。「離島の首脳陣に本土の現実を見せ、海軍に動いていただく、というのはどうでしょうか？」

「現実？」

「ニコさんによれば、NEXAの兵器生産は大電力と送電効率を考慮し、主に統京湾岸で行われているとのこと。海の上からほんの一部でもいいんです。その恐ろしい光景を見たらえれば、島人の心に変化があるかもしれません」

7月23日

バクたちは離島海軍の将、大村猛に『統京湾岸調査団』の結成を提案した。日本の『鎖国返し』に列強が色めき立っているという話に、大村は乗ってきた。離島海軍の中には遠洋調査隊という小さなチームがある。航海先で知りあった、国境や肌の色を越えた海の男同士の交流によって、海軍は海外情勢に多少は通じていた。

大村はバクたちに言った。

「それは連盟としても無視できねえ問題だ。離島は正式に日本から独立したわけじゃねえからな。大戦に巻きこまれんのはゴメンだ。俺がジジいどもに話をつけてやろう」

あくまでも離島の安全を中心に据えた考えだが、この際、協力が得られれば理由はなんでもよかった。

7月27日

その日、宮根島で伊舞諸島地区だけの臨時会議が開かれ、各島の首脳陣から一人ずつと、バク一行と大村、計十三名の調査団を送り出すことが決定した。

7月31日

統京湾での偵察を終え、母港で船を降りた調査団に言葉はなかった。

8月5日

「NEXAがいかによべえ連中か、それはわかった。だが、各島に散らばる兵力をあわせても三千に満たない小勢が、政府をも手なずけちまった巨人相手にいつたいなにができるってんだ……ってのが、ジジイどもの言い分よ」

大村は口をへの字にしてだらしなく両手を挙げた。

大村は隣島で開かれた連盟本会議に出席し、ついさっき宮根島に帰ってきたところだった。

先日の調査団の報告を受け、会議は紛糾した。独立宣言。列強との交渉。他国への移住。無為静観。様々な意見が出た。NEXA討伐派はごく少数だった。海戦ならともかく、現代兵器で迎え撃たれる上陸戦は自殺行為である。というのが大方の批判だ。

「根性なしめ！」

バクは棧橋に転がっていた空の木箱を蹴り壊した。

大村はバクをなだめた。

「まあそう言うな。あんたらと島の民じゃ、生きてきた環境がちがすぎる。血路を開く、なあってことはほとんど経験してねえからな」

「海軍だけでもなんとかならないのか？」

「なると思うか？」

「聞いてみただけだ」

バクが下を向くと、大村はぼそつと言った。

「ただし、民が動けというのなら、動く」

8月6日

離島連盟には、地区人口の八割分の『署名血判』を持つてくれば、その地区の海軍は独自の判断で動いてもよいという、有事における超法規的な例外が存在した。

その日バクたちは、単純に数を稼ぎたいという理由から、伊舞諸

島最大の島である雄島^{おしま}へ渡った。

島の人間関係は都市の人々とちがって濃密であり、人数が集まれば批判が批判を呼んで、それだけ保守的になってしまう。その経験からバクたちは、一軒また一軒と、しらみつぶしに民家を訪ね歩くことにした。

一行はNEXAの脅威を説き、海軍をもつて彼らを討つべきであると、署名血判の必要性を訴えていった。

現実には厳しかった。誰一人として耳を貸す者はなかった。千の言葉より一枚の絵、ということで軍需工場のスケッチや写真を見せもしたが、人々は「創作だ」「偽造だ」と一笑するばかり。果てしない空と美しい海と小さな大地しか知らない彼らにとって、世界でこれから起ころうとしていることは、想像力の彼方にあるようだった。ある民家でのこと。ルウ子が玄関をノックすると、引き戸が開くや砲弾のような拳が飛んできた。近所の噂を聞きつけていたのだろう。バクはとっさにルウ子をかばった。そんなことが何度か続き、バクの顔は最終ラウンドでマットに沈んだボクサーのようになってしまった。

それを見かねたのか、ルウ子は珍しく弱音を吐いた。

「バク……もう帰ろ」

バクはニヤと紅白まだらの歯を見せた。

「戦争になったらこんなもんじゃすまないさ」

それからすぐ、滝のように雨が降ってきた。

結局、その日の活動はそこで終了。

バクたちは港にとめてある シーメイド のキャビンで一夜をすごした。

8月7日

朝、雨が上がったのを機に、バクたちは活動を再開することにし

た。バイト先がくれた休みは二日間だけだ。全住民に説いてまわるのは当然無理である。だが、島民の性格上、ロコミというのはバカにならない。たった一人からでも、全体を揺るがす連鎖反応が起きる可能性はある。

身なりを整えたバクたちは、ヨットを下りて棧橋を歩いた。そして、埠頭に足を踏み入れようとしたときだった。

どこからともなく人が集まってきて、三人の行く手を塞いだ。

ルウ子は立ち止まると、微笑んだ。

「署名血判の件、興味を持っていただけたかしら？」

地元衆は互いに顔を見あっている。

誰が代表して答えるべきか、段取りができていないのだろう。

ほどなく群衆の後方で動きがあった。どよめく扇が二つに裂けていき、その間を槍を手にした禿頭が突貫する。

老人はルウ子に穂先を向けて叫んだ。

「出ていけ！」

続いて竹刀を持った婦人が進み、上段にかまえる。

「島に本土なんかの災いを持ちこまないで！」

ルウ子は山のごとく落ち着いていた。

「離島連盟が日本から独立したなんて、海外の連中は誰一人思っちゃいないわ。誰かがNEXAの暴挙を止めなければ、いずれこの国は滅ぶ。離島も例外じゃあない」

老人は衆に言った。

「騙されるな！ こいつらはな、海軍が出払った隙に島を乗っ取るうとしてるだけなのだ！」

「そうだ！」「海賊だ！」「殺し屋だ！」「要塞を造った意味を忘れるな！」

地元衆は手持ちの農具や漁具をかがげ、ルウ子につめ寄った。

ルウ子は一步も引かない。

「どうすれば話を聞いてくれるワケ？」

「出ていけと言っとうろうが！」

老人が銀光をちらつかせると、ルウ子は笑った。

「いい歳こいて恥を知らなさい。そんなものがなければ、女一人とも話せないの？」

「だ、黙れ、本土者！」

老人は女の喉もとめがけて槍を突き出した。

ルウ子は老人を見据えている。

「くぬ！」

老人は前足をざざとすべらせ踏ん張った。おそろおそろ槍を引いていくと、女の喉もとからツツと赤い筋が流れた。

ルウ子は老人を見据えている。

老人は持ち手のふるえが止まらない。

「ワシらは……ワシらはただ静かに暮らしていたいだけなのだ。頼む！」

老人は槍の握りを短くすると、穂先を自分の喉へ向けた。

「！」

ルウ子はカツと目を剥き、拳を突き出した。

間一髪……セーフ。

ルウ子は槍を手放すと、力無く言った。

「今日は……帰るわ」

8月23日

「ここに住み続けるのはかまわない。だが、他の島でトラブルを起こすことだけは勘弁してくれ」

その日、宮根島の長はバクたちに対し、向こう一年間の原則渡島禁止を命じた。

バクたちは雄島の事件の後にも二つの島を訪ねたのだが、すでに噂が伝わっているらしく、渡ったその日に限ってどの地区もゴース

トタウンだった。まるで姿を見られたら石にされてしまう、といったあわてぶりで、人々は窓も玄関もすっかり閉め切ってしまうのだった。

誤算だった。味方にするはずの島人たちから逆に疎まれ、肩身の狭い生活を強いられることになるとは。宮根島の人々が中立の立場を取ってくれなければ、バクたちの希望は完全に絶たれてしまうところだった。

バクたちは宮根島に引きこもり、ニコからの情報を悶々と待たねばならない日々が続いた。

9月3日

調査団の派遣からひと月。

離島連盟の姿勢は今後どうあるべきか。諸派の小競りあいだったものは、やがて三つの派に絞られていき、対立を強めていった。

一つは、離島の独立を正式に宣言して、もはや日本ではないことを国際社会にアピールし、戦火を回避しようという、独立派。

一つは、戦争などそう簡単に起きるわけがなく、余計なことはせず流れにまかせればよいとする、静観派。

一つは、独立も静観も無駄であり、海軍をもってNEXAを討ち鎖国を解除せんとする、討伐派。

前者二つが拮抗する多数派で、討伐派はバクら三人と大村をはじめとする一部の海軍関係者だけの小勢だった。

離島連盟の足並みはそろわず、バクたちの訴えは通らず、時間だけがむなしく過ぎていった。

その日の夕暮れ。山麓の丸太小屋。

台所の竈に火が入り、バクたちはせわしなく夕食の準備に取りかかっていた。

バクが釜の蓋を閉め、湯の温度を上げようと薪を手にしたときだった。

バクは薪を山へもどした。

「林に誰がいる」

「？」

ルウ子は青菜を刻む包丁の手を止めた。

「島人の気配じゃない。気をつける」

バクは壁にかかっていた手斧を取ると、勝手口の脇に身を寄せた。ルウ子は包丁を持ったまま、扉をはさんでバクの向かいに立った。蛭は壁に通してある細管に片目を近づけ、外の様子をうかがう。

「男が一人、木陰から出てきました……あつ！？」

蛭は手にしていたおたまを取り落とすと、膝をふるわせ、土間の上へあたりこんでしまった。

バクは蛭に代わつてのぞき穴から外を見た。

男の姿はない。気配も消えてしまった。

「密偵かもしれない。捕まえて吐かせてやる」

バクは勝手口から外に出た。

正面、島の中心にすわる『宮根富士』の裾野に夕日が沈み行こうとしている。

一歩踏み出すごとに、毛羽だった無数の黒い触手が迫ってくる。怖れることはない。夕暮れの疎林が影絵のように映っているだけだ。

なだらかな上り坂を少し行くと、島人たちが御神木と呼ぶ古樹が近づいてきた。樹齢五百年はあろうかという巨木。その幹には注連縄が巻いてあり、縄には紙製の稲妻が数本下がっている。古くなつたのか、そのうちの一本がちぎれて太い根の上に落ちていた。

嫌な感じだ……。

無数の羽音。

「！」

バクは身がまえた。

カラスの一族だった。

しばらくそこで待ってみたが、怪しい気配を再び感じることはなかった。

行ってしまったか……。

バクふつと息をつき、夕日に背を向けた。

そのとき、後ろでなにかが風を切った。

半身で飛び退くと、手前の若木にナイフが突き刺さった。

「誰だ！」

バクは神木を見上げた。

「雑魚のほう釣れちまったか」

神木の枝から人影が一つ舞い降りると、西日がその半顔を照らした。

傲りと嗜虐に満ちた目。火柱のように尖った赤髪。

「シバ！」

「調査団をくり出したのはマズかったなア、ボウズ」

シバの唇が左上がりに歪んだ。

「ク……尾行^{っけ}られてたのか……」

「ところで、橋本ルウ子は殺し屋でも雇ったか？」

「いきなりなんだ」

「あの殺気……一瞬^{ヤツ}熊楠かと思ったぜ」シバは真顔で言った。「てつきりそいつがかかると思って退いてみたんだが……。まあいい。ウォーミングアップぐらいにはなってくれよ」

シバは左右の五指をならした。

「ルウ子が目的か？」

シバはちらと歯を見せた。

「バカを治すイイ薬がそろったんだとよ」

「！」

それがなにを意味するか、バクにはすぐわかった。孫はルウ子を薬漬けにして忠実な操り人形とするか、あるいは電話番号を吐かせから殺してしまうか、いずれにしてもアルをNEXAのものにする

るつもりなのだ。孫はあれほどの権力を手にしていながら、なぜ役立たずのアルにこだわるのか。訊きたいことは山ほどある。だがその前に……。

「一つ、あんたにたしかめたいことがある」

「ほう？ 生意気だな」

シバの頬に走る爪でかいたような傷痕。海で遭ったときはなかった。

「富谷を攻め落としたとき、警備隊長を処刑したのはあんたか？」

「ああ！？」シバは片目を細めた。「なんで島に籠もってる奴が、んなこと知ってたんだ？」

「いいから答えろ。あんたなのか？」

シバは頬の傷痕を淫らな手つきでなぞると、笑った。

「イイ声で哭いてたぜエ」

「てめえ！」

バクは手斧をかまえた。

「そうこなくっちゃな！」

シバも短剣を抜いた。

怒りにまかせてバクが突進すると、シバはそれを軽くないした。バクはキツと向き直り、なおもがむしやりに斧をふるった。

シバは上体を左右や後ろに揺すってこれかわす。

勢いあまってバクの体が横に流れた。

シバはすかさずバクの小手を狙った。

バクはハッとした。斧の腹を盾に、かろうじてこれを受け止めた。形勢は逆転。シバは速射砲のごとく剣をくり出し、興奮から醒めたバクはひたすら受けにまわった。

シバのスピードに慣れてきたバクは、いつ攻撃に転じるべきかと思案しはじめた。

その矢先、シバの左手でなにかが光った……と思った次の瞬間。「ウッ！？」

バクは手斧を取り落とし、バランスを崩して尻餅をついていた。

シバは機を逃さなかった。バクの上に馬乗りになると、喉もとに切っ先を突きつけた。

バクはそこでようやく脚の痛みに気づいた。シバは手ぶらだった左手に、密かに二本の投げナイフを忍ばせていたのだ。一つは持ち手、もう一つは右脚を狙われた。

「さアてと、シヨーのはじまりだ」

シバはバクの太腿に刺さっているナイフの柄を、ぐいと横にひねった。

「うあああああ！」

「イイー声だア」

シバはオペラの聴衆のようにうつとりしている。

我に返ったシバは次の出し物にかかった。バクの左手を捕まえると、短剣で甲から串刺しに……。

「！」

シバはなかばで手を止め、ギロリと目を流した。

包丁を携えたルウ子と蛭が、シバに迫ろうとしていたのだ。

「ラストの噴水ショーには間にあったみてえ……」言いかけたところで、シバの顔から狂気じみた笑みが消えた。「なんだデメエは？」

シバの威にも、蛭は歩みを止めようとしなない。

「よくも……お父さんとお母さんを……」

あの温厚そうな蛭は見る影もなかった。その形相はまるで、激しい離脱症状にあえぐ薬物依存者のようだ。

「なんの話だ？」

「ゆ、許さない……」

「ああ、あんときの娘か」シバは卑猥な目つきで舌なめずりした。

「その魔女さえ来なけりや、俺様のもんだったのによ」

「こんな日が来るのをずっと待ちこがれてた」

「あの夜の続きをしてもらえる日をか？」

「……」

蛭は黙って一歩進める。

「このガキは許してやってもいいンだぜ？」

シバは左手でCの字を作ると、その中に切っ先を二度三度と挿入した。

蛭はそれでも止まらない。秘めていた怨念にその体に乗っ取られてしまったか、肩を左右に揺すり、呼吸をふるわせ、開ききった瞳孔で、ひたすら仇の男だけを見据えている。

「こ、殺してやる……」

蛭はついに必殺の間合いに入った。

「そうかい。誰も死なずにすんだのによ」

シバは蛭の手首めがけてびゅっと剣をふり上げた。
手練れの素早い迎撃に蛭は反応できない。

蛭の手首が飛ぶ寸前……。

「！？」

シバの手が動かなくなった。

バクが上半身をぐっと起こし、シバの腕をつかんでいたのだ。

バクは苦しげに片目を閉じ、かすれた声で言った。

「あんたの相手はこっち……だぜ」

「悪い悪い、忘れてたぜ」

バクの太腿で再び肉が裂ける音。

「ぐがあああああ！」

「バク！」

ルウ子の絶叫。

「はわっ！？」

正気にもどった蛭はよたよた後ずさり、腰から碎けた。

バクは痛みのみあまり、思わず本音をもらした。

「ク、クソ、早く沈みやがれ……」

「沈む？ なにがだ？」

シバは切っ先をバクの喉もとに返した。

「太陽さ」

「太陽？」シバは山に目をやった。「とっくに沈んでるじゃねえか」

夕日はすでに山の向こうに隠れているが、空はまだ明るさを残している。

「あと少し……もう少し……」

「？」

顔をしかめるシバ。

一番星がチカと光った。

「俺の時間だ」

バクはカッと目を見開くと、跳ね起きる勢いでシバを吹っ飛ばした。

「な！？ その脚、まともに立てるワケは……」

シバは狼狽えつつも、すぐに立ち上がって剣をかまえた。

バクは静かに宣告した。

「あんたの負けだ」

シバは片目で笑った。

「聞いたことあるぜ。稀にだが、地下賊ン中に闇のチカラが異常発達したガキが生まれるってな」

「螢の両親、そしてミーヤの仇」

バクは太腿に刺さっていたナイフを引き抜いた。

「チッ……プライベートタイムはここまでか」

シバがずっと手を挙げると、木陰から一人また一人と戦闘服の男が現れた。

「条件はフェアじゃねえとな」

シバは神木の枝へ跳び、二十人の傭兵軍団と素早く入れ替わった。一人高みの見物というわけだ。

「二人とも下がってろ！」

バクは右脚が壊れていることも忘れ、ナイフ片手に男どもの中へ飛びこんでいった。

9月6日

バクはうつすらと目を開けた。

そこは丸太小屋のいつもの寢床だった。

小鳥のさえずり。朝日が目を突く。

「あれ……俺……」

バクは体を起こそうとしたが、すぐに右脚を押さえて悶絶した。
シバに刺された場所が包帯でふくれている。

「ったく、無茶するわ。まる二日も寝こんでたのよ」

傍らにいたルウ子は、絞った手ぬぐいをバクの腫れ上がった瞼に
押しつけた。

バクはそのまま口を開いた。

「俺……」

「うん？」

「はじめて人を殺した……いや、厳密には二度目か」

「そう」

「あんな奴らでも、気持ちのいいもんじゃないな」

ルウ子はクスと笑った。

「あんたはまだ、免停にならずにすみそうね」

「メンテイ？」

「人間の普通免許よ」

「フ……そんなんじゃ笑えねえよ」

そう言いながらもバクの口もとは緩んでいた。

あの晩の記憶が曖昧だ。最後の一人を倒したところから先が、ど
うしても思い出せない。

バクは訊いた。

「シバは？」

「逃げたわ。部下を見捨てて」

「そうか……」

バクは再び眠りに落ちた。

ブーン！ ブーン！

ルウ子の懷で、アルがしゃべらせると体をふるわせている。
ルウ子は蜚を連れて小屋の外に出た。

ルウ子はケータイを開いた。

「なによ」

アルは上目遣いで言った。

「それがその……電話だよ」

「電話？ 誰から？」

「出ればわかるよ」

アルは自分の姿を消した。

スーツ姿の男の半身が映った。細筆で引いた傍線のような目がさらに細まる。いつものメガネはない。

『お久しぶりですね。元気そうでなによりだ』

「孫」ルウ子はため息をついた。「あんたはもう少し利口な男だと思ってたわ」

『その物言い……どうやらこちらの情報がもれているようですね』
「！」

ルウ子はしまったという顔で舌打ちした。

『フフ……そんなに気にしなくてもいいですよ。これからはむしろ知って頂きたいくらいだ』

「たいした自惚れっぷりね」

『それにしても、シバ君率いる精鋭がたった一人の青年にやられてしまうとは……。彼の能力を見落としていたことには、少しだけ後悔していますよ』

「そうまでしてアルを欲しがる理由はなんなの？ 太陽光しか扱えないアルに、決死隊を送るほどの価値があるとは思えないわ」

『ところがあるんですよ。今日明日のことしか見えていないあなた方では、一生導き出せない発想でしょうけどね』

「で、お次はどうするわけ？ 海兵隊を満載した艦隊でもよこす？」
『まさか。近海の王者を敵にまわすつもりなど毛頭ありませんよ。』

離島海軍にはこれから日本の海を守ってもらわねば」

ルウ子是不敵な笑みを浮かべた。

「あたしに時間をあたえたら、後悔することになるわよ」

孫も微笑んだ。

「それはお互い様でしょう？」

「フン！」

ルウ子はそっぽを向いた。

「そんな顔しないでください。あなたがそこに閉じこもっている限り、私には短い栄光はあっても勝利はない。いや、地上の誰にとっても勝利はないのです」

「どうということ？」

孫はその理由を語った。

「発電の大黒柱だった国内の石炭はいずれ尽きる。それにともない科学頼みだった国力も先細っていくでしょう。再び飢餓の底に落ちた国民は、わが国の資源の少なさを改めて痛感し、私の首を差し出して世界に救いを求める。そうなればニコをめぐり、一介の島国を脅すつもりで整えていた各国の軍備が、別の目的で行使されることになる。今度こそ第三次大戦のはじまりです」

ルウ子は不服そうに言った。

「ニコを分かちあうって発想にはならない？」

「あなたは人間というものをなにもわかっていない。私的な欲望を抑えられるのはほんの一握りの聖人だけです。パワーシヨックの襲来によって世界のつながりは希薄となり、国連は事実上消滅した。

そんな今、発電の全権が集中したユニット……マスター・ブレイカーをいったいどこで誰が管理するというのです」

「だとすれば、人類の運命はもう決まったようなもんじゃない」

「まだですよ。あなたが私に従っていただけののなら、最悪のケースは回避できます。わが国が圧倒的な科学力を維持できるうちは、誰も手出しはしない」

「アルには、それを長く叶え続けるだけの秘めた力がある？」

『あります』

「大陸でつながってる国々も、ある程度の資源や相互援助があるっただけで、決して豊かになつたわけじゃない。仮にあんたの話が正しいとして、アルを手にした後、他の国の不便や貧困はどうするのよ」

『知りません』

「は？」

『かつて彼らもそう答えましたよ。痩せこけた我々使節に向かつてね』

ルウ子は激しくかぶりをふった。

「くだらないわ」

『私もそう思います』

孫は笑顔で言い放った。

「……」

ルウ子はなにか言い返そうと口を開きかけたが、出てきたのはため息だった。「ま、島に引きこもっても、ロクなことにならないのはたしかなようね」

『従って、いただけますね？』

「……」

ルウ子は答えず、空を見上げた。

まぶしげに浮き雲を見つめていたかと思うと、登頂に失敗したばかりの冒険家のような顔になり、成果がなかったわけではないと慰める友人の顔になり、表情を消すと、キツと眉を逆立てて微笑んだ。「一つだけ作戦が浮かんだわ。結果の是非はわかんないけど、あんたのよりは全然マシよ」

『ほう、それは？』

「……」

ルウ子は肩をすくめるだけだ。

『それを成就するためには、私を倒す必要があるのですね？』

「そのようね」

孫は寂しげに微笑んだ。

『そうですね……。では、せめて良い舞台をご用意しましょう』

「信用の証しは？」

『この失った左腕に誓って』

孫は右手でそこに触れた。

「いいわ。鼻クソでもほじりながら待ってなさい」

ルウ子は孫の招待に応じた。

孫は現代最強の武装を脇に置き、ルウ子と対等の勝負をしようというのだ。

二人の打ちあいを見守っていた蚩は不安でならなかった。

孫は本当に約束を守るだろうか？

第八章 ルウ子の敗北宣言

9月30日

孫の電話から三週間余りたった。

その日の早朝。宮根島。

港の棧橋では、バクとルウ子が激しく揉めていた。

ルウ子が孫の招待を受けたと知って以来、バクはこの無謀な対決に反対し続けてきたのだが、ルウ子はいつさい聞き分けようとしなかった。

「奴がなんの策もなしに、あんたを迎え入れるわけないだろ！」

「あいつは最愛の母親に誓った。それでもあたしを騙すというのなら、あいつは自分の人生を否定することになるわ！」

いったいどこで薬を見つけた誰に依頼したのか、ルウ子の双竜頭はすっかり黄金の輝きを取りもどし、くたびれきっていたブレザーやスカートは真っさらも同然だった。そのせいか、表情や言葉の端々からは、かつてのみなざる自信がうかがえる。

ルウ子は立ちはだかるバクを避け、棧橋に控える シーメイドのほうへ歩みを進めた。

「待てよ！」

バクはルウ子の腕をぐいとつかみ、力ずくで引きとめた。

「放しなさい！ でないと……死ぬわよ」

ルウ子は腰の短剣を抜くと、切っ先をバクの鼻先に突きつけた。バクは動じない。

「ああ、やってみろ。やれるもんならな！」

「まだわかってないのね。あたしのこと」

ルウ子は低く言っと、バクの首めがけてびゅっと剣をふるった。そのとき、海のほうから男の声があがった。

「報告します！ 太平洋上に大艦隊発見！」

着岸を待ちきれない船長が、偵察船の甲板から叫んだのだ。

「俺のことわかってないようだな」

バクはわずかに削がれた黒髪を払い落とすと、白い歯を見せた。

「あの声がなければホントに死んでたわ」

ルウ子もちらと歯を見せた。

「いいや死んでねえ」

「いいや死んだ」

「何度でもかわしてやるさ！」

「今度こそ真つ二つよ！」

一方、蛭は虫歯を煩ったような顔で、二人の意地の張りあいを見守っていた。なにを思ったか、彼女はバケツに海水を汲むと、ぎゅつと目をつぶり……。

「報告です！」

と叫ぶや二人にぶちまけた。

きょとんと蛭を見つめるバクとルウ子。

蛭はひたすら頭を下げる。

「す、すみません！ 私にできることは、これくらいしか……」

ルウ子は空になったバケツを奪うと、蛭の頭にすっぽりかぶせた。

「フフ……さすがあたしが見こんだだけのことはあるわ。で、なに？」

「で、ですから外国の大艦隊が迫って……」

「それを早く言いなさい！」

ルウ子は短剣の腹でブリキのバケツをガンとたたいた。

「*！@ @*%？」

蛭は意味不明の声を発しながら、棧橋の上をふらつきまわった。

と、そこに大村が現れ、「こんなときになに遊んでやがる」とあきれ顔で蛭を抱きとめた。

離島海軍の全面協力の裏には、大村猛の存在があった。伊舞諸島の民衆は独立派に傾きつつあったが、海軍は方針を一転、討伐派に与した。その気になれば地球の裏側まで足をのばせる彼らは、各国

の不穏な動きに危機感を募らせていたのだ。

そしてついに、終末への齒車は動き出した。

離島海軍は数日前、太平洋上で第二次大戦以来の大艦隊を見つけた。一番乗りを狙っているのか、列強諸国の船は競うように集まってきた。幸い、その針路を塞ぐように二つの台風が暴れまわっており、艦隊は足止めを食らっていた。まさに神風だ。

ルウ子は剣を収め、鼻をならした。

「フン、やっぱ来たわね」

欲にかられた列強は世論を無視し、いつか必ずしかけてくる。制裁を口にはしているが、その実はマスター・ブレイカーを手中にしたいだけなのだ（彼らはその存在を知っているはずなのだが、ライバルを出し抜きたいがために、あえてそのことを極秘にしているのだろう）。ルウ子の読みはあたった。ルウ子は孫の招待を受け、シームイドでの上京を計画していたが、その一方、大村を通じて海軍にも出撃準備させておいたのだった。

こうなると日本の命運の如何は、孫だけでなく時間との闘いでもある。民の血判がどうのなどと言っている場合ではない。まずは一刻も早く孫を打倒し、戦争を回避する。その先のことはそのときだ。

ルウ子は足の速い海軍の船で上京することにした。

「作戦は『プランZZZ』^{ダブルゼータ}に変更。いいわね？」

大村は舶刀を華麗にふるってみせた。

「どうやらもう、あんたらに賭けるしかなさそうだな。護衛はまかしときな」

「あんたたちは船を出してくれればいいの」

「だがなあ……」

「こつちが約束守らないでどうすんのよ」

実際は、ルウ子と孫は言葉で約束を交わしたわけではない。だが、当事者以外の武装解除は二人の暗黙の了解だった。

大村は剣を収めると、笑った。

「あんたの肝っ玉は狂気そのもんだ」

「百回も死を覚悟したら、狂気だってもうお友達よ！」
ルウ子は両肩にかかる竜巻毛をパアンと払うと、大村の帆船が控える隣の棧橋へさっそうと歩いていった。

10月1日

離島船団は追い風に乗って北上し、その日の昼すぎ、統京湾に突入した。

ルウ子は護衛の船などいらないと言い張ったが、足を提供するのは海軍である。不満はあっても彼らの方針に従うしかなかった。船団は南北に散らばる島々を通過するたびに一隻また一隻と増え、結局、十隻という大所帯となった。彼らはその船倉に武器ではない『なにか』を隠し持っているようなのだが、軍の機密だと言って、バクたちには明かそうとしなかった。

バクは帆船 おみくら 臣蔵 の甲板に立ち、薄暗い空の下に広がる左右の半島を見渡していた。

しばらくの間そうしていたのだが、物々しい雰囲気はほとんど感じられなかった。軍用の艦艇は港で大人しくしている。戦車の姿も兵員輸送車が走る様子もない。NEXTAは約束を守っている、といえはそうなのだが……。

バクは首をかしげずにはいらなかった。

本土の姿が見えた頃からぽつぽつと降り出した雨は、列強艦隊との差を伝える警鐘のごとく、徐々に強まってきている。

日没まであと少し。

離島船団はいよいよ統京港に近づいた。

船室で控えるバクとルウ子は、丸窓をはさんで向きあい、雨の力ーテン越しに湾岸地帯を見つめていた。

今からちょうど五年前、バクが蒸気船から見た景色とはまるでちがっていた。壊れた工場や倉庫などどこにもなく、ゴミ捨て場で泣いているオモチャのようだった遊園地は見事に復元され、湾岸道路では自動車が行き交い、高層ビルの窓のあちこちに白い光の粒が点り出す。

ルウ子は感慨深げにそれらを見つめていた。

「元通りになってる。なにも……かも」

そこには、ルウ子が地獄の底で思い描いた『2016年の統京』があった。孫はルウ子の夢をルウ子の代わりに完璧にやってのけたのだ。

「あたしがずっとNEXAの玉座に居すわっていたら、これほどの復興はなかったかもね」

「才能があるからって、なにをやってもいいってわけじゃないさ」

バクは埠頭で待ちかまえる戦闘服姿の男たちに目をやった。

ルウ子は窓に背を向けた。

今にも泣き出しそうな項^{うなじ}がのぞいた。

「ルウ子……」

バクはルウ子の背中に寄ると、両肩に手をやった。

「そこじゃない」

ルウ子は腕を交わしてバクの両手をつかむと、ぐいと前に引き寄せた。

ルウ子の手はひどく冷たかった。

臣蔵 が接岸した。

バクとルウ子と蛭、招待を受けた三人だけが船を降りた。

甲板に立つ大村は、喉に魚の小骨が刺さったような顔で三人を見下ろしている。

埠頭ではNEXAの兵隊たちが二列に整列して道を作っていた。武装はしていないが、そこしか通るなと脅しているようなものだ。バクたちは雨に打たれながら列の間を行った。

その先には黒い高級車が待ちかまえていた。運転席のドアが開き、ピンクの傘がぱつと咲く。

スーツ姿の和藤は微笑んだ。

「孫がタワーの上でお待ちしています」

ルウ子はためらうことなく後部座席に乗った。

バクと蛭はしばし顔を見あわせ、ルウ子に続いた。

助手席は空いている。和藤にボディガードはない。

「少し、遠まわりますよ」

和藤は車を走らせた。

ルウ子と乗った蒸気自動車が野牛の大移動なら、こちらは池の上の鴨。ワイパーのこすれから隣席の息づかいまで、なんでも聞こえる。

バクが車の性能に感心していると、和藤が口を開いた。

「橋本ルウ子。あなたをここで捕まえ、薬でアルの番号を吐かせようと思えばいつでもできる。わかっていながら、なぜ島を出たのです？」

「……」

ルウ子は窓の外を見つめたまま黙っている。

「私には理解できない。自分からすべてを奪った者の言葉を信じるなんて」

「……」

「どんなに忠実な部下でも、上司の命令を必ず守るとは限りませんよ？」

和藤はちらとルームミラーに目をやった。ルウ子と目があう。

「フ」

和藤はアクセルを踏みしめた。

雨夜の街道をしばらく走り、坂を下っていくと、広々としたスクランブル交差点に出た。そこで信号待ちとなった。

「！」

バクは思わず窓にへばりついた。

和藤はその様子をミラーで見ていた。

「懐かしいでしょう？ バク君」

バクは『夜目』を細めながら、眩しすぎる街の様子を眺めた。

そこはバクのアジトがあった街だった。だが、懐かしさなど微塵も感じなかった。瓦礫がない、ひび割れもない、屍もない、そもそも闇がない。

交差点を行き交う傘の群れ。傘の下はどれもシミ一つないおろしたての服。

ガラスの壁の向こう側に集う少女たち。巨大なハンバーガー、山盛りのアイスクリーム。

これが、ほんの少し前までボロを身に纏い、一つの米袋一つの缶詰をめぐって血を流してきた人々の姿なのか。

街角には生ゴミの入った袋の山々。

車の窓ガラスに滴る雨水は不気味に黒ずんでいる。

脳裏に一つの記憶がよぎった。赤ヶ島を探索した帰り、昭乃はたしか別れ際にこう言い残した。

……電気など無いままのほうがいい。そう思うときが必ず来る。必ずな……

信号が変わった。

和藤は郊外へ車を走らせた。

住宅ばかりが密集する、ある私鉄の駅のそばで車は止まった。

それまでひと言も発せず、ぼうつと統京の街を眺めていたルウ子の顔が一変した。

「！」

和藤は自慢気に言った。

「懐かしいでしょう？ ルウ子さん。この街はひどく荒れていたのですが、パワーショック以前の写真や地図をもとに、街並みを再現してみました」

そこはルウ子が生まれ育った街だった。

ルウ子の手がすつと街へのびていく。その指先を、ガラス窓が

遮った瞬間、生命維持装置が切れたアンドロイドのように、ぱたと手が落ちた。

ルウ子の涙が頬まで伝ったのを、バクははじめて見た気がした。

和藤は続けた。

「あなたの望みはすべて叶った。飢餓や争いは消え失せ、街並みは蘇り、大好きなケータイさえも使えるようになった。あなたがこの世にしがみつ়理由はないはずです。ちがいますか？」

「……」

「アルの番号を教えてください。その代わり、我々NEXAは『初代局長・橋本ルウ子』の偉大なる功績を未来に語り継ぐことを約束します」

和藤はルウ子に引導を渡そうとしている。名は残してやるから死ねと言っているのだ。

ルウ子はそこでようやく口を開いた。

「悪いけど、答えはノーよ。しがみつ়理由、あんたたちが新しいのを作ってくれたから」

「！」

和藤は懷に手をやると、ふり向きざま、ルウ子に銃口を向けた。

ルウ子は微笑んだ。

「なかなかやんちゃな部下だね。上司の顔が見たいものだね」

「……」和藤は呼気をふるわせながら銃を収めた。「余興はこれでおしまいです。行きましょうか」

和藤がアクセルを踏もうとしたとき、バクは言った。

「ずいぶんと見せつけてくれたが、その余裕は諦めの境地なのか？」

和藤は前を見つめたまま言った。

「諦め？ なにを諦めるというの？ まだなににもはじまっていないわ」

「そうか……やっぱ知らないのか」

「？」

「明日の朝、何千何万もの軍隊が日本に上陸するんだ」

「プフ……」和藤は吹き出した。「なにを言い出すかと思えば。どんなに立派な軍備をそろえたとしても、戦争なんてそう簡単に起こせるものじゃないのよ坊や。どうせならもっと上手な嘘を考えてきなさい」

「できれば……嘘であつてほしいさ」

バクと和藤はルームミラー越しに見つめあつた。
せわしなく左右に揺れるワイパー。

和藤は油の切れかけたロボットのようになり、ぎこちなくふり返つた。

「本当……なの？」

「俺たちを本土まで送つてきたのは誰だつた？」

「離島海軍……が動いた！」

和藤はカツと目を剥き、あちこち懐をまさぐりケータイを探しあて、目にも止まらぬ速さで親指を動かして、孫につながると、熟練アナウンサーのごとき滑舌で状況を報告していった。

しばらくの間、和藤の単調な返事ばかりが続いた。
やがて孫のあるひと言が、和藤の声を上ずらせた。

「ほ、本気で言ってるんですか？」

「……」

「そう……ですか」

「……」

「はい、予定通りそちらへ向かいます」

和藤はそこで電話を切り、力無くシートに沈んだ。
バクは訊いた。

「孫はなにを企んでいる」

「……」

「おい！」

バクは和藤の肩をつかんだ。

よく見ると、和藤はむせび泣いていた。

「お願い……あの人を止めて……」

「孫はなんと？」

「乗りこんできた兵もろとも、首都を灰にすると……」

「孫は核を使う気なんですね？」

蛍が訊くと、和藤は素直にうなずいた。

「あの野郎……人の命をゲーム盤の駒だと思ってやがる！」

バクがそう叫んだときだった。

それまで賑わっていた街から急に人の姿が見えなくなった。

「こ、これはいったい……」

蛍はせわしなく辺りを見まわす。

和藤はその謎を明かした。

「甚大な災害が起きたとき、都民は地下シェルターへ避難する手筈になっているの。地下には都民を半年養えるだけの食料や物資がそろっているわ。でも、それは表の顔。実際は戦争に備えて、あの人が造らせたものよ」

バクは訊いた。

「都民はそれで本当に助かるのか？」

和藤はかぶりをふった。

「手筈はあくまで手筈よ。相手は数百万の都民。避難命令を発したからといって全員が従える状況にあるとは限らない。一パーセント…… たった一パーセントの人が逃げ遅れただけでも、数万の命が灰になる。あの人はそれを承知の上で核のスイッチを押そうとしているのよ！」

和藤はステアリングにもたれかかった。

「彼ね……たくさんお酒を飲んで私を抱くと、必ず『母さん』って叫ぶの……。あの人の人生、あの人の生き甲斐はもう、三十年も前に終わっていた……。私なんか……私の声なんか届くわけない……」

和藤は被災地のように乱れきった顔を上げた。

「死んだ人には絶対勝てないもの！」

ワイパーの音だけがしばらくあった。

ルウ子は言った。

「一つ、方法があるわ」

「え？」

和藤はふり返った。

「あたしをタワーに連れてくこと」

和藤は吃逆^{しゃく}りながら笑った。

「どっちが勝ったってダメじゃない……」

「じゃあ、このままここで灰になる？」

ルウ子はハンカチを差し出した。

和藤はルウ子の手をパアンと弾くと、アクセルを踏んだ。

四人を乗せた車は外門内門と二重のゲートをくぐり、低層のビルが立ちならぶNEXAの敷地をしばらく走った。

めざす新統京タワーは敷地のほぼ中心にすわっている。NEXAの中枢がある周囲の施設群とあわせてその区画だけが天高く突き出ており、他を圧する存在感を示していた。

和藤はタワーの麓で車を止めると、ダッシュボードの収納に拳銃を収めた。四人は車を降りた。和藤が三人を先導し、エントランスへ通じる階段を上っていく。入口の左右に控えていた丸腰の警備員たちはこちらを一瞥しただけだ。バクたちは一階ホール中央のシースルー型エレベーターに乗った。

和藤は最上階のボタンを押した。ほどなく、2016年当時にならぬ煌びやかな夜景が広がった。規則的に視界を遮る鉄骨。透き通った壁を流れ伝う雨粒。無数に散乱する光が明滅して、四人をつかの間の幻想に誘^{いざな}う。

ルウ子はふとつぶやいた。

「新統京タワー。この日本で一番高い建物を、NEXAの象徴に据えようと提案したのが、孫英次。そのときに気づくべきだったわ」
バクは鼻をならした。

「いかにも野心家らしい発想だな。この高みから見下ろす自分以外の人間は、みんなバカだと言いたいんだろ」

「そうじゃないのよ。そうじゃない……」

ルウ子は小さくかぶりをふった。

「じゃあなんで……」

バクが言いかけると、ルウ子は遮った。

「これだから男って面倒くさいのよねえ」

そのとき、ベルの音とともにドアが開いた。最上階だ。

外に出ると、思わず顔を歪めなくなるほどの蒸し暑さだった。足もとの淡い間接照明が、夜の植物園をぼうつと照らす。ここは地上450メートル、タワー完成当初は特別展望台と呼んでいた場所。そして、バクのひと言がきっかけでルウ子がアルの封印を解き、大河の流れが変わりはじめた場所でもある。

そこは以前とは少し趣がちがっていた。壁がガラス張りになっておらず、部屋が縮んでしまったような妙な圧迫感があった。

和藤は三人を引き連れ、外壁に向かって歩道を歩いた。四人はのっぺらぼうの扉の前で立ち止まった。扉は自動で開いた。一歩進むと、鬱蒼とした庭から一転、視界が180度に開けた。一面のガラス越しに雨の夜景。あとは絨毯と天井しかない。照明は暗いままだ。四人はドーナツ状の空間を半周した。

窓際で外を眺める隻腕の男が一人。孫はふり返ると、屈託のない笑顔で言った。

「やっと来てくれましたね。待ちわびていた」

電話のときは素顔だったが、今日は黒縁メガネをかけている。

「このバカが無茶するもんだからね」

ルウ子はバクの耳たぶを引っ張った。

バクはそれを手で払う。

「俺のせいだったのかよ！」

「あんたがまともに歩けない間、誰が食わしてやったと思ってるの！」

「じゃあ、シバの奇襲から守ってやったのは誰だ！」

二人が睨みあうと、蛍がそこに割って入った。

「こ、こんなときにケンカしなくても……」

孫は笑顔のままルウ子に言った。

「彼女の言うとおりだ。日本の命運を賭けようというときに、不謹慎ですよ」

「悪かったわね。十秒前までは、このマヌケを教育することのほうが大事だったのよ」

「フフ……」孫はメガネのブリッジに手をやった。「ま、いいでしょう」

「時間がないわ」ルウ子は短剣を抜き、切っ先を孫に向けた。「さっさと決着つけましょ」

「その前に、こんな危険を冒してまで私がアルに執着するのはなぜか。知りたくありませんか？」

「どうせ話したくてもしょうがないんでしょ？」

ルウ子は剣を収めた。

「テスランの属性が二つに大別されることは知つてのとおり。私が持っているニコは地属性。火力や水力など、手軽に電気を作れるのが長所です。ただし、多くの電力を生むには多くの資源に委ねなくてはならない。残念なことに、わが国は化石資源に乏しく、水力をはじめとする自然エネルギー利用に必要な国土もそう広くはない。そこで救世主アルの登場です。

天属性のアルには、無限の可能性が残されているのです。私はある大学の廃墟から発掘した、太陽エネルギー利用に関する資料を見て愕然としました。四国の形を想像してみてください。その三分の一の面積に太陽電池のパネルを敷きつめるだけで、日本の総発電量が半永久的にまかなえてしまうのです。すごいことだと思いませんか？」

「ふむ……なかなかおもしろい話ね」

ルウ子の瞳に一筋の光がよぎった。

バクはその話の裏にある真意を暴いた。

「要するにあんたは、永遠のエネルギーを手にして、永遠の命をもつて、永遠に世界を後悔させたいだけなんだろう？」

「フ」と笑っただけで、孫は再びルウ子に言った。「太陽電池の生産工場はすでに稼働している。原料の問題は技術的に解決できる見通しが立った。この難局やまさえ……この難局さえ乗り切れれば、飢餓も汚染もない永遠の楽園が築けるのです。今からでも遅くはありません。私に従っていただけるなら、お三方の身の安全は保証しましょう。屋上にへりを用意してあります。今なら統京が灰になる前に脱出できますよ」

「そんなことをしなくても、列強を帰らせる方法はあるわ」

ルウ子は短剣を抜いた。

孫は笑った。

「決闘で私を倒し、他の者にニコを引き継がせ、あなたと二人で大陸の中立国に逃れる。そして各国メディアに向け、マスター・ブレイカーの世界共有を宣言。目的を失った列強はすぐごと母国に引き返すより他ない……といったところですか」

「さすがね。わかってるじゃない」

「あなたはまだそんな甘いことを……」孫はため息をついた。「やはり、こうするより他ないようですね」

孫は懷から拳銃を抜き、ルウ子に狙いを定めた。

「汚いぞ！ 決闘なら同じ条件で勝負しろ！」

バクは怒鳴った。

「お母さんに誓ったことを忘れたんですか！」

蚩は潤んだ目で訴えた。

「母への誓い？ なんですかそれは？」

孫は肩をすくめた。

「え？ だ、だってあなたはたしかに、なくした左腕に誓って……」

「ええ誓いましたよ」

「ならどうして……」

「ああ、まだあの話を信じていたんですか。橋本ルウ子、あなたも疑うことを知らない人だ」

孫はいびつな笑みをルウ子へ送った。

「……」

ルウ子は黙したまま、孫を見据えている。

「母を食わせるために左腕を切り落とした？ まったくのデタラメですよ。仮に私が極度のマザコンだったとしても、そこまではやらないでしょう？ 私の左腕は生まれつきのものです。奇形ですよ。」

私はむしろ、こんな体に生んだ父や母を恨んでいた。実を言うとね、母を殺したのは私なんです。平時ならそんな勇氣はなかった。飢えというのはまったく恐ろしい……」

孫はかぶりをふった。

「ま、まさか親を食つ……」

バクは想像しただけで猛烈な吐き気がこみ上げた。

孫は爽やかに微笑んだ。

「ま、ともかく、はじめからないものになにを誓ったって無意味でしょう？」

「フフ……あたしの負けね」ルウ子は短剣を手放した。「電話番号は下着の裏に控えておいたわ」

孫はその細すぎる目を精一杯に見開いた。

「これは意外だ。不屈の人、橋本ルウ子ともあろうあなたが軽々しく敗北宣言とは。なにを企んでいるかは知りませんが、私を止めることなどできませんよ」

「なにを怯えているの？」ルウ子はすつと歩き出した。「勝負はついたのよ。さっさと撃ちなさい」

「と、止まりなさい！」

孫の銃口はひどくふるえ、狙いが定まらない。

「この期におよんで、なに？ 往生際の悪い」ルウ子は立ち止まった。

言っていることがあべこべだ。

「なぜだ！ あれほど生に執着していたあなたが、こんなことくらいで諦めるとは……」

「なあに？ あたしに死んで欲しくないワケ？」

「そ、そんなことは……」

「ならいいじゃない」

ルウ子は再び歩を進めた。

「止まれと言っている！」

孫はトリガーを引いた。

銃弾はあさつてのほうに消えた。

ルウ子は立ち止まり、ふと懐かしげな顔をした。

「あんたとはじめて語らったのはこの真下、タワー二階のラウンジだったわよね？　当時はまだ飢餓闘争が下火になって間もない頃で、カフェらしきものはそこしか営業^やってなかった」

「……」

「2016年のあの日あの時からやり直したい。あたしは窓際の席ですっばいコーヒーをすすりながらそう言った」

「……」

「その後、あんたはあたしの反対を言葉巧みに押し切って、タワーとその周りをNEXAの拠点にした。はじめは権力の象徴が欲しいだけだと思ってた。けど……」

ルウ子は雨夜の統京を見つめた。2016年と瓜二つの統京を。

「ごめんね。鈍くって。そういうの」

ルウ子は最後の一步を踏み出した。

かすかに頬を染めるルウ子の胸に、孫の銃口がめりこんだ。

「知っていたら、世界はこんな事にはならなかったかもね」

「ル……ルウ子……」

ルウ子は手のかかる子供を見るような目で微笑んだ。

「バカね……あんな嘘までついて。お母さん、雲の上で泣いてるわ」
「……」

孫は銃を下ろすと、そのままずっと手放した。

絨毯をたたく湿った音がした。

バクと蛩は吐息をつき、和藤は固く目をつぶり、そしてルウ子は両手を差し出した。

両手の行き先は黒縁メガネだった。

素顔になった孫。

ルウ子は改めて男の頬を包みこんだ。こわばる顔を引き寄せつつ、自らも唇を寄せていく。

そのときだった。

爆音とともに壁のガラスが激しく吹き飛んだ。

大きな風穴の前に、ロープを携えた黒ずくめの男が立っていた。なにが起きたのかすぐには理解できず、呆然とする五人。

真っ先に我に返ったバクは思わず声をあげた。

「熊楠！？」

蛸が続いた。

「引退したはずでは？」

「私は黒船島に骨を埋めるつもりだった。だが、ペリー商会はこの男に追われた」ずぶぬれの熊楠は孫を指した。「私は逃亡先で、昭乃とともにこの国の未来を案じていた。電力網が復活すると、昭乃の予言通り、かつてのような汚染と破壊がはじまった。人はパワーショックからなにも学んではない。ゆとりを手にした途端、目先の利益や快楽のことばかり考えるようになる。人間は少し飢えているくらいがちょうどいいのだ」

熊楠は拳銃を抜くと、銃口を孫に向けた。

「孫よ！ 電気は人の手に余るのだ！ マスター・ブレイカーは永久に封印させてもらう！」

ルウ子は両手を広げて孫をかばった。

「話はもうついたのよ。あたしたちはこれから大陸の中立国に逃れ、広く発電できるように働きかけるわ。これで世界のパワーショック問題もなかば解決よ」

「私の話を聞いてなかったのか？ かえって死の闇が広がるだけだ！」

「電気がないせいで飢えている人が、世界にはまだ何十億もいる。あたしはそれを見すごすことはできない」

「地球は人間だけのものではない。人は人だけの力で生きているわけではない。人を救いたければ、草一本虫一匹さえ疎かにしてはならんのだ」

「！」

ルウ子の瞳に光の筋がよぎった。これで二度目だ。

ルウ子はこらえるように笑った。

「なるほど……昭乃が選んだだけのことはあるわ」

「大罪を犯した私がここまで生きながらえたのは、この日のためだと思っている。頼むからそこをどいてくれ！」

「マスター・ブレイカーはここにもう一組あるわ」ルウ子は胸に手をやった。「手間が省けてよかったじゃない」

「君は今、自分の誤りに気づいた。それをどう扱うべきか心得たはずだ。それがわかった以上、君の可能性を絶つなど私にはできない。そこをどくんだ！」

銃声。

「クッ……」

熊楠は拳銃を取り落とした。手の痺れに顔を歪めている。

撃ったのは和藤だった。彼女は別の拳銃を隠し持っていたのだ。

「ぐずぐずしている暇はないのよ」

和藤は銃口を熊楠からルウ子へ流した。

「最初からルウ子を殺すつもりだったな！」

バクは怒鳴った。

「万が一敗れたときはそのつもりだった。けれど、彼は勝った。なのに……それなのに……」

女の頬に光の筋が走った。

そつと撃鉄を起こし、和藤はトリガーを引いた。

胸を押さえる手。指の間から赤いものが溢れ、ボタボタと床を濡らしていく。

苦しそうな息づかいは……孫英次のものだった。とっさにルウ子をかばったのだ。

「そんな……」

和藤は銃を手放すと、よろめく男に駆け寄った。

孫は女にどうと身を預けた。

「すまない栄美……自分で自分をごまかすことはもう……できそうにない……」

「ひどい……ひどすぎます……」

「そう……だな。私は……ひどい男だった」

「英次さん……」

「……」

「英次!？」

孫は白目を剥きかけたが、唇を噛んでこらえた。

「少し……風にあたりたい」

和藤は孫を風穴のそばへ連れて行った。

そこにいたはずの熊楠は、いつの間にかバクのそばに立っていた。

孫は雨の統京を眺めていた。

勢いを増す雨粒。地上の光たち。街は銀糸に包まれていた。

やがて、孫はルウ子に笑顔を向けた。

「死に満ちた世界でこそ生は輝くものです」

「えっ？」

「ルウ子……君なら……できる」

孫は息絶えた。

和藤の腕の中、謎めいた言葉を残したまま。

「孫!」

ルウ子は駆け寄ろうとしたが、すぐにためらった。

和藤の執念から生じた見えない壁が、ルウ子の行く手を阻んでいるのだ。

「英次……」

和藤は孫の唇にそつと唇を寄せると、勝ち誇ったようにルウ子を見た。そして、孫を抱いたまま風穴の向こうへ身を預けていった。

「和藤! ちょっと待……」

ルウ子はだつと駆け寄り、手をのばした。

あと一センチ……ルウ子の手は届かなかった。

ルウ子が四つん這いにうなだれると、遅れて他の三人が駆けつけた。

ルウ子を慰めようと、バクが口を開きかけたときだった。

廊下の間接照明がふわりふわりと消えていった。タワーのライトアップは下に向かって失われ、NEXAの施設群は黒のスポットを浴びた。闇のさざ波は次第に荒れていき、ついには怒濤となって光の国を呑みこんでいった。それはまるで、膨張するブラックホールだった。絶望半径はあつという間に地平の彼方を越えた。

なにもかも消えた。

残ったのは窓を打つ雨音だけだった。

バクはそつと手を差しのべた。

ルウ子はその手を取って立ち上がると、言った。

「あの夜と、同じね」

第九章 最後の戦い

ルウ子と蛭は非常階段を降りていく。手すりを頼り、足もとをたしかめながら。しんがりに熊楠。バクの姿はない。

エレベーターは使えなくなった。電灯もすべて消えてしまった。パートナーを失ったニコのスイッチが自動的に切れ、日本中に散っていた地属性のテスランたちが皆、青いケータイの中へ強制収容となったのだ。

一方、バクは夜目を活かしていち早く地上にたどり着くと、傘の下ですくんでいる職員たちを横目に、人工池のほうへ走った。

浅い池の底。孫と和藤の遺体。

突風でも吹き上げたのだろうか、驚くほど傷みが少ない。密着して落ちたはずの二人は、少し離れて横たわっていた。

バクは池に入ると、和藤の左手を持ち上げ、孫の右手に組ませてやった。

「俺にあんたほどの執念があれば、ミーヤは死なずにすんだかもな」
バクはうなだれた……が、すぐにかぶりをふると、孫のスーツを探って胸ポケットからケータイを取り出した。試しに開いてみたがニコは姿を現さない。真っ暗のままだ。

バクはケータイを懷にしまうと、タワーの非常階段口へ駆けもどった。

そこでルウ子たちと落ちあうはずだったのだが……バクは我が目を疑った。

NEXAの傭兵五人が出口を塞いでいたのだ。熊楠は女二人の盾となつて防戦しているが、この闇と豪雨のせいで思うようには戦えず、圧されっぱなしだった。

腑に落ちなかった。孫や和藤の手際とはどうしても思えなかった。が、今はそんなことを考えている場合ではない。

「ルウ子！」

バクが叫ぶと、ルウ子は声がしたほうに抜き身の短剣を放った。剣は弧を描いてアスファルトに突き刺さった。

バクは剣を引き抜くと、雄叫びを上げながら戦いの中へ突っこんでいった。

「オラアアアア！」

バクは一閃で五人すべて斬った。

闘神熊楠でさえ一瞬目を奪われるほどの早業かつ力業だった。

もう誰も失いたくない。その一心が闇の力を増幅^{ブースト}させたのだらう。叫声を聞きつけたのか、周りにいた影がこちらへ近づいてくる。

「ニコは確保した。はぐれるなよ！」

バクの声にルウ子たちはうなずく。

四人はゲートめざして突っ走った。

タワーの周囲に比べ、ゲートの警備は手薄だった。

バクは詰所に押し入るや三人を気絶させ、残る一人をロープで縛り上げた。

一味の中に熊楠がいるとわかると、その男はひどく怯え、すぐに口を割った。

停電のせいで開閉システムは機能しない。すべて手動でやるしかなかった。

バクは詰所を出て地面の鉄蓋を開けると、門番の言っていたハンドルを見つけた。

熊楠が駆け寄ってバクと代わると、男は機関車のごとく鉄輪をまわした。

巨大な格子門扉が横にスライドしていく。

そこを抜けて少し走ると、また同じ構造があった。

バクが外門の詰所に押し入っている間、熊楠が蓋下のハンドルをまわす。

犬の声が近づいてくる。

今度の門扉は一秒に一センチずつしか開いてくれない。待つ時間

がもどかしい。

先頭の犬が内門のすき間に鼻をのぞかせた。

外門が小さく開いた。二十センチあるかないか。

四人はそれぞれ、横に向けた体をそのすき間へ強引にねじこんだ。犬が吠える。兵隊も吠える。

バクたちはゲートを抜け、雨と風と暗闇の街へ駆け出した。

皮肉なことに、NEXAが発したはずの避難命令は、お膝元の街にはうまく伝わっていなかった。

オフィスビルの玄関や軒下はラッシュアワーと化していた。一寸先を怖れてとりあえず避難したのだろう。インストールした車を降りてボンネットを調べるのは若者ばかりだ。年長のドライバーは前か後ろにもたれかかり、なにを思い出したのか悲嘆に暮れている。

誰もいなくなった水浸しの歩道を、バクたちは走る。

「あっちだ」

バクは地下鉄口の一つを指した。

バクにとって地下は庭だった。訪れた地域の地下鉄口はすべて頭に入っているし、構内図と路線図を一度見れば、たいていの場所は迷わず行ける。

一行はバクを先頭に列車のように縦列して、階段を降り、改札を抜け、プラットホームから線路へ飛び降りた。

地上の人々は、不安や不満を口にしながらも行動は冷静だった。

それに対し、地下の人々は早くも理性の留め針^{ピン}が外れていた。闇雲に出口を探して人や壁に激突する者。メガネをなくした近眼者のごとく地べたを這いまわる者。暗所恐怖に悲鳴を上げる者。

凄惨な恐慌を背に、『責』と刻まれた巨石に押し潰されそうになりながらも、バクは心の中で人々に呼びかけた。

すまない……。朝までの辛抱だ。

バクたちは、大村と 臣蔵 が待つ港の最寄り駅をめざした。

線路を歩きはじめてすぐ、電車がトンネル内で立ち往生している

場所にぶちあたった。一行は六両編成の脇、幅一メートルもない退避空間に行く。車内で怯える人々。暗闇、密室、孤独……。重いトラウマを抱えてしまうかもしれない、と蜚が心配している。

それからしばらく、なにもない直線が続いた。

昂ぶりが引いてきたバクは、そこでやつと口をきく気になった。

「熊楠。孫との決闘のこと、なんで知ってた」

「うむ。実はな……」

熊楠は廃港でバクと別れた後のことを語った。

「私は昭乃の介護をしつつ、看護師見習いとしての日々を送っていた。といっても、患者は海賊ばかりだがな。そんなある日、昭乃が夢の中で富谷の異変を察知した。私はそばを離れたくなかったが、昭乃がどうしても言うので様子を見に行った。昭乃のそれは正夢だった。富谷はすでに滅んでいた」

バクはあえて訊いた。

「ミーヤの最期はどうだった？」

熊楠は一度ためらってから、口を開いた。

「私は見ていない」

「そうか」

バクはうつむいた。

熊楠は続けた。

「私が富谷からもどると、黒船島に大きな変化があった。又シが亡くなり、タチが拾った富谷難民が新たな又シとなっていた。百草先生だ」

「先生は無事だったか……」

バクはほっと息をついた。

「それからしばらくは安泰な日々が続いた。ペリー商会が重症患者を出さないでくれたおかげで、私と昭乃は二人きりの時間を満喫できた。やがて私たちは夫婦の契りを結んだ。だが……幸せは長くは続かなかった」

「NEXAか？」

「うむ。電力網の復活で人々の生活環境は向上した。そのせいで、今までは空気のように思えていたものが、黒煙のように目立ちはじめた。治安問題だ。孫は湾岸住民の不安や不満に応えるべく、海賊討伐を宣言した。有力海賊のペリー商会は真つ先に攻撃目標となった。

NEXA軍は苦手な海戦を避け、湾岸からの執拗な砲撃で黒船島を痛めつけていった。我々は一戦も交えることなく、残った船で逃亡するしかなかった。一隻、また一隻と沈められ、私と昭乃と百草先生が乗る帆船が最後に残った。砲台の射程からは逃れたが、今度は蒸気船団が待ちかまえていた。私は一緒に乗りあわせていたたちとともに矢で応戦した。四隻対一隻……数では圧倒的に不利だった。そこで私は望楼に上がり、敵の士官ばかりを狙い撃った。指揮官をすべて失った連中は、混乱を極めた末に追撃を諦めてくれた」

「昭乃が言ってたよ。あんたの矢は、まるで的のほうからあたりにいくように怖いってな」

熊楠は苦笑いして続けた。

「どうにか統京湾を抜けた我々は、これというあてもなく北へ逃げた。積んでいた清水が尽きようとしていたとき、連なる断崖のすき間に小さな港を見つけた。我々は商船を装って寄港すると、とりあえず港町にくり出した。

このまま逃避行を続けるべきかと悩んでいたところ、街角である男が私に声をかけてきた。私は驚かずにいられなかった。その男は富谷の生き残り、しかもお互いよく知る旧友だったのだ。彼はなにも訊かず、自分が暮らす山村に來ないかと誘ってくれた。私と昭乃は決断した。船には乗らず、その男についていくと。百草先生も同行を決めた。それともう一人、たちもだ」

「たちは根っからの海賊じゃなかったのか？」

「そのようだが、私の戦いぶりに惚れたから弟子にして欲しいと言ってきた。海賊からはいっさい足を洗うと」

「弓使いからすれば、あんたは神様みたいなものか……」

「そして我々は田之崎^{たのさき}という名の村に入った。そこには旧友の他にも三十人ほど生き残りがいた。昭乃や百草先生の無事に皆は涙したが、私一人だけは歓迎されなかった。故郷を捨てて殺戮に走ったのだ。昭乃の夫でなければ、私がその村で暮らすことは叶わなかったろう。私は人目を避けて小屋に籠もり、ひたすら昭乃の介護に尽くした。やがて、診療所を開いた百草先生から看護師をやらないかと誘いがあった。私は迷ったが昭乃が背中を押してくれた。私はしばらく村人に疎まれていたが、仕事を続けていくうちに少しずつ認めてもらえるようになった。

田之崎ではかつての富谷に劣らぬくらい、静かで平和な暮らしが続いた。だが、私の頭からは孫やNEXAのことがどうしても離れなかった。できることなら様子を探りたいが、私には昭乃がいる。仕事もある。そこで私は夕チを密偵に仕立て、統京へ送りこむことにした。

しばらくして、夕チは統京湾でシバを見つけた。巧みに海軍網を抜ける工作隊の後を尾行^{つけ}ていくと、その先は宮根島だった。君とシバの戦いには間にあわなかったが、決闘の話を耳にした夕チは、急ぎ私のもとへ帰ってきた。孫を倒すなら今しかない。そう判断した私はすぐに上京、潜伏し、奴が油断する機会を密かに待っていたというわけだ」

「なるほど……」

バクは熊楠や夕チの活躍に感心しつつも、一つの疑問が浮かんだ。「ところで、昭乃のことは放つといていいのか？ 寝たきりなんだろう？ 診療やつてる先生一人じゃ……」

「ああ、そのことなら問題ない。こうなることもあるかと、私の代わりとなる看護師を一人育てておいた。腕力に乏しいのが少々心配だが、昭乃は安心して身をまかせている」

「あんたの腕力を基準にされたら、そいつはたまらないだろうな」

10月2日

夜が明ける少し前、バクたちは埠頭にたどり着いた。

雨は小降りになっていた。

臣蔵 以下、離島船団は健在。列強艦隊の姿はまだない。

上陸作戦に巻きこまれぬよう、バクたちは急いで 臣蔵 に乗りこんだ。

一行の無事に一人号泣する船長大村。

バクは彼の耳もとで、行き先だけをそつと告げた。

雨上がりの朝焼けのもと、離島船団は湾を脱して外海に差しかった。

前を行く九隻はそのまま直進し、島への帰路に就いた。

一方、最後尾の 臣蔵 だけは取り舵を一杯にして、本土の東岸に沿って北上する航路を取った。

バクは 臣蔵 の船首に立ち、果てしない海原を眺めていた。

嵐は去ったが、海はまだ大きなうねりを残している。船室にいたほうは安全なのだが、どうもじつとしてられない。

速い潮に流されているのかそれとも風のせいか、岸からはだいぶ離れてしまつて目印になるものがない。大洋での単独行はひどく心細いものだが、離島船団の者たちのことを考えれば、それはまったくもって贅沢な悩みといえた。列強艦隊は伊舞諸島の南東方面から押し寄せてきており、両者が遭遇する可能性は高かった。軍の機密とやらの用はもうすんだらしく、船倉はすべて空なので、大きな騒ぎにはならないはずだが……。敵の大將が紳士であることを祈るしかない。

あれこれと思いをめぐらせていると、水平線上に黒い鋸のようなものが、一つまた一つと増えていくことに気づいた。

「？」

バクは目をこらした。

銃はどんどん増えていく。四つや五つなどではない。それらは頭に縮れ毛のようなものを一本ずつ生やしていた。十や二十……いや三十どころでもない！

望楼の男が叫んだ。

「敵だ！」

船員がどやどや集まってきて、手にしていた双眼鏡を目にやった。南方からやって来る艦隊とは国籍がちがっていた。その数、五十を超える。

離島海軍はその戦力のほとんどを領海内の警備にまわしている。

遠洋の索敵能力には限界があつた。

危険を避けたつもりが裏目に出たのか。いや、どのみちこうなる運命だつたのだ。

下を向いていると、熊のようなごつい手がバクの肩をがしとつかんだ。

「絶望すんのは死んでからにしろい」

バクはキツとふり返った。

船長の大村だつた。

バクは弱気を悟られたのが癪で、つい声を荒げた。

「死んじまつたら絶望なんかできねえだろ？」

「ダッハッハ！ それもそうだ」

豪快な笑いとは裏腹に、いつもの日焼けした虎髭顔は船酔い客のように色を失っていた。

考えていることはバクとそう大差はないようだった。だが、心の底になにか期するものがあるのだらう。絶対に生かして港まで届けてやる。そんな強い意志が熱風のように伝わってくる。

二人のすぐ後ろにいた細身の副長が大村に進言した。

「このままでは巻きこまれます。迂回しましょう！」

大村は副長の胸ぐらをつかみ上げた。

「ど真ん中だ！ そのまま真ん中を行けい！ 一ミリでも舵切りやがったら……殺す！」

大村の指示は狂気の沙汰かと思われた。

だがその読みはあたった。大村は海図ではなく風を読んでいたのだ。下手に逃げようとすれば乱気流に巻きこまれ、逆に航行の邪魔をしてしまうところだった。抵抗の意志ありと誤解されたらそれこそおしまいだ。

艦隊が近づいてくると、大村をはじめとする船員たちは、漁網を片手にいかにも不機嫌そうな顔で待ちかまえた。

列強の海兵たちは双眼鏡を手に、臣蔵の装備を焦がさんばかりに観察している。

臣蔵 は戦艦と戦艦の谷間を行った。

すれちがっている間も、海兵と『漁師』の睨みあいが続いた。

艦隊は何事もなかったように、ひたすら直進していった。

早々に船室に放りこまれたバクは、ルウ子とともに、丸窓から半分だけ顔をのぞかせ、物量にものをいわせる大艦隊を見送った。

ニコは蛸の胸の谷間、アルはルウ子のパンツの中で眠っている。

臣蔵 は一路、北をめざした。

10月3日

臣蔵 は無事、断崖の狭間にある武慈港の埠頭につけた。

船員たちに別れを告げ、バク、熊楠、ルウ子と渡り階段を降りていった。

蛸がそれに続こうとしたときだった。

「すまなかった！」

大村はいきなり土下座した。

蛸は大声にびくつとして、ふり返った。

「大村さん？」

「松下が死んだのは俺のせいだ。『あれ』は……俺がやらせた」
「顔を上げてください」

蛭は微笑んだ。

「……」

大村は伏せたままだ。

「大村さんがいなかったら、今の私たちは在りません。あなたは孤独だった私たちに手を差しのべてくれた。それで充分です」

「……」

大村は動かない。

蛭は笑顔のままふっと息をつくとき、明るい声で言った。

「ああ、そういえば」と手を打つ。「どうしてくれるんですか、大村さん」

「？」

大村は顔を上げた。

蛭は手を差しのべた。

「昨日の分で、お釣りを出さなければならなかったじゃないですか」

「す、すまねえ」

蛭と大村は固く握手をして別れた。

大村はいつまでも子供のように泣きじゃくっていた。

臣蔵 が島へ帰っていく。

バクたちは埠頭を後にした。

武蔵の港町は天も地も鈍色に煙っていた。統京のようなパニックこそないものの、色あせた商店街のそここでは、地元の人々が冴えない顔を突きあわせていた。

一行はそれを横目に、熊楠の案内で田之崎村へ向かった。最も近道なのは、廃線跡の半自然歩道を利用する三十キロの道程。バクたちは市街地を離れると、リアス式のうねった海岸沿いに走る線路の上をひたすら歩いた。

かつてはここを地元経営の短い列車が走っていたという。軌道、踏切、信号機、鉄橋、駅舎、プラットホーム……人の手が入らなく

なつた鉄道設備は潮風のなすがまま、あるものは赤茶けた砂に、あるものは雑草の肥やしに還ろうとしていた。

一行は五キロほど歩いたところで、早くも顔に疲れの色を浮かべていた。海沿いとはいえ数百メートル級の山脈の片側をばつさり切り落としたような地形だ。山がちな路線の勾配は、激動の二日間をすごしてきた三人にとってはきついものがあつた。

それを見かねたように、熊楠は「馬を連れてくる」と言つて線路から逸れ、山手の崖を野鹿のごとく駆け上つていった。

バクはそれを呆然と見送つた。とうに四十をすぎた男の脚力とはとても思えなかつた。

トンネルをいくつかくぐると、断崖のすぐそばに出た。左を見下ろせば絶壁と海。右を見上げれば急斜面と密林。崖崩れでもあつたのか、線路の左半分は地面がなく、剥き出しで、道幅は大人の身長分もなかつた。カーブのせいで視界が悪い。ここが最大の難所だ。

一行はバク、蛭、ルウ子の順で縦列し、線路の右側の砂利を慎重に歩いた。

列はすぐにちぎれた。バクが一人先を行き、蛭とルウ子が団子になつている。

断崖の高さに蛭の足がすくんでいるのだ。単独で敵地に紛れる度胸はあつても、こういうことはまったく別の次元にあるらしい。

「つたく！」

ルウ子は蛭の尻を足蹴にした。

「ひゃあ！」蛭はあわてふためき、その場に縮んで石になつた。「す、すみません……」

蛭が慣れるのを待つしかなさそうだ。

バクは立ち止まり、水平線に目をやった。

曇り空。海は風。鏡と化した海面は、どこまでも続く雪原のようだ。

これまでいろんなことがあつた。想い出を白いスクリーンに投影する。

上映が終わると、これからのことに思いを馳せた。

ルウ子は中立国に逃れるなどと言っておきながら、結局ここまでついてきてしまった。ニコを誰かに託す気配もない（蛭は単に持たされているだけだ）。あの大艦隊を実際に見て気が変わったのだろうか。

孫がルウ子に言ったという、厳しいひと言が脳裏をよぎる。

……国連は事実上消滅した。そんな今、発電の全権が集中したユニット……マスター・ブレイカーをいつたいてどこで誰が管理するのでしょうか……

孫が倒れ、ルウ子は黙し、欲望と破壊の時代は去りつつあるのかもしれない。人間という爆弾を抱えてしまった自然界にとっては、望むところなのだろうが……。では、これから飢えようとする国民や、すでに飢えている世界の人々はどうなるのか。人と自然……立体交差をくりかえす二つの道はいつどこで交わるべきなのか。悩みは尽きることがない。

顔にほのかな熱を感じ、バクはふと空を見上げる。

雲が薄まったのか、日輪のかたちを認めた。

視線を下げていくと、秋色に染まりかけた斜面の林が目に入った。枝葉のすき間に煌めく、銀の柳葉やないば一つ。

「しまった！」

バクはルウ子たちのもとへ駆けもどった。

間にあわない！

「アアアアッ！」

矢は蛭の太腿に突き刺さった。とっさにルウ子をかばったのだ。

「蛭！」

ルウ子はふらつく蛭を背中から抱きとめた。

「だ、大丈夫です……」

蛭は笑顔を見せるも、唇がひどくふるえている。

上から舌打ちが聞こえた。

バクはそれで正体がわかった。

「出てこい！ シバ！」

「油断したなア、ボウズ！」

赤髪の男が姿を現した。斜面の中腹、密林から突き出た太枝に立っている。

「今さらなんの用だ！ 孫は死んだ。NEXAはもう終わりだ！」

シバは尖った鼻先を斜めに上げた。

「知ってるぜエ！ 流浪の魔女一味が、お宝を持ち逃げしたことをなア」

ルウ子は言った。

「なるほど……タワーの周りで兵を指揮してたのは、あんたね？」

「フッ」シバは鼻で笑った。「さアて、今持ってるのは誰だ？ ン？」

シバは眼下の三人を見比べた。

バクは言った。

「ニコをどうする気だ！」

「知れたことよ」

螢は痛みに顔を歪めつつ、シバに怒りをぶつけた。

「電気があるうがなかるうが、他人が苦しもうが関係ない。永遠の若さを手にして、永遠に享樂の人生を続けたいだけ。あなたの頭の中身なんて、その程度よ！」

「ヘッ」

シバはまともに答えようとしない。

ルウ子は意地悪そうに言った。

「残念だったわね。孫が死んだ今、ニコの電話番号知ってるのはあたしだけよ」

「湾岸の発電所を漁っていたら、こんなものが出てきたんだがなア」シバは十一桁の番号が書かれた紙切れを見せ、それを読み上げた。「あ！」

バクとルウ子は同時に叫んだ。

ニコの前のパートナー、平賀源蔵は番号を覚えるため何度も紙に

書いていた。その処分が不完全だったのだ。

シバは高く笑った。

「そういうことだ。なに考えてんのか知らねえが、契約を済んだのは正解だったなア。素直によこしゃあ、助けてやってもいいンだぜ？」

もし誰かがニコと契約を交わしていたら、今頃三人はシバの『銃』で皆殺しだったろう。いや、どのみち奴はそうするつもりなのだ。シバとはそういう男だ。

「従うことないぞ」

バクは女二人をかばうように立った。

「やめとけよ。そんなヤワな盾じゃ突き抜けちまう」

「俺はただの盾じゃないぜ」

バクはゴールキーパーのごとく大きくかまえた。

「なら、試してやろう」

シバは矢を放った。

バクはそれを片手で払いのけた。

二の矢。

バクはそれも払った。

「ずっとそこでそうしてる。そのうち熊楠がもどってくる」

シバから笑みが消えた。

「ボウズ、逃げんじゃねえぞ！」

シバは矢を捨て、猛然と斜面を駆け下りた。

バクたちとシバは十メートルほどの間をおいて相対した。

「あんときはてめえに運^{ツキ}があつた。だが……」シバは天を指した。

「今度は俺様だ！」

厚い雲の彼方、日はまだ高いところにある。

「それはどうかな！」

バクとシバは同時に短剣を抜いた。

戦いの場は平均台のように狭い。進むか退くかだ。

シバは一步また一步と砂利の上に行く。

バクは動かない。

シバは歯を見せた。

「今度こそ噴水ショーにしてやるぜ！」

シバは獲物を定めた豹のごとく駆け、ヒュッと剣を突き出した。

バクはかろうじてこれを払う。

シバは打ちこむ。

バクは払う。

一方的な攻防がしばらく続いた。

シバは打ちこむ。

「諦める！」

バクは払う。

「まだだ！」

シバの顔に焦りの色がにじんでいく。熊楠との接触を怖れているのだ。

「そうかい！」

シバの左腕。手中に光るものがった。

シバは右で剣を打ちこむ。

バクはそこに剣をあわせる。

その隙、ナイフを放たんとシバは左腕を引いた。

来た！

バクはさつと頭を下げた。

その背後。

石を手にしたルウ子のジャンピングショット！

「ウッ！？」

石はシバの左手を直撃。一瞬動きが止まった。

「シバアアアア！」

バク、渾身の突き。

「……」

「……」

「……ク」

切っ先はシバの脇腹を貫いていた。

バクは剣を引き抜く。

シバは剣とナイフを手放すと、片膝を落とし、ゴロと横たわった。バクはシバの武器を拾うと、崖下の海へ投げ捨てた。

シバは赤黒くなつた腹を押さえ、かすれた声で言った。

「き、汚ねえぞ……いきなり助っ人……アリかよ」

「暗器使いのあんたに言われる筋合いはないわ」

ルウ子は赤茶けた手の埃を払った。

宮根島でシバを取り逃がしたバクは再戦に備え、先の連携撃をルウ子と打ちあわせておいたのだった。

それにしても、恐るべきはルウ子の集中力だ。ぶつつけ本番。風に暴れる小旗のごとく不安定なターゲット。一度きりしか通用しない戦法。その道のプロでも外しかねない場面だった。

バクは深く深く息を吸い、そして吐いた。

ともかく、決着はついたのだ。

「蛭」

バクは赤く染まつた短剣を蛭に差し出した。

「……」

片足引きずる蛭はルウ子にもたれかかると、力無くかぶりをふつた。

「仇はいいのか？」

「そんなことをしても、私の両親は喜びません。それにルウ子さんも」

蛭の言葉に、ルウ子はうなずいた。

「カラスの餌なんかほつといて、さっさと行くわよ」

バクは剣の汚れを太腿の間で拭うと鞘に収めた。

負傷の蛭をルウ子から引き受け、背負ったときだった。

地面が低く笑った。

「へへ」

「！」

バクたちは固まった。

シバは腹から赤いものを滴らせながら、ゆらりと立ち上がった。そしてなにを思ったか、右手で左手首をぐいと引っ張ると、肘から下が根こそぎちぎれて、刀の先端のようなものが露わになった。

シバの左腕は義手だったのだ！

「左腕コイツさえ失ってなけりや……あの細目野郎にこき使われることはなかった。奴は海でしくじった俺を拾い……戦車の試作にまわすはずだった大金を……この世界一精巧な義手につぎこんだのサ」

シバの息は荒いものの、まだ数太刀報いるだけの気力も血液も残っているようだ。

バクは螢を下ろしてルウ子に預け、さっと剣を抜いた。

「逃がさねえ……てめえら道連れだ！」

シバは叫ぶや、バクに襲いかかった。

バクは冷静だった。

腕では劣る。とにかく時間を稼ぐんだ。

シバの一閃。

バクはそこに刃をあわせた……。

「？」

……が、そこに光るものはなかった。

代わりに、バクの腹から赤いしぶきが飛び散った。

幻惑された！？ 牽制フエイントに引っかかってしまった！

激痛に目が眩む。体中の全感覚が裂けた一点に集まり、手足に力が入らない。

シバが立ち上がったのは、拷問に耐える訓練を受けたプロの戦士だからだ。その差が命取りとなった。

「死ねやあ！」

シバはバクの心臓めがけて刃を突き出した。

バクは動けない。

「バクウウウ！」

ルウ子と螢の絶叫。

……ひどいもんだ。

……残りの人生と引き替えに稼いだのが、たったの数秒とはな。

……こんなじゃ、あの世で『あいつ』にあわせる顔がない。

……そんなことないよ。

……えっ？

バクはそこで我に返った。

シバの全霊を賭けた突き……が寸止めのまま固まっている。

赤髪の男は尖った左腕を突き出したまま、おそろおそろ下を向いた。

鋭く隆起した左胸。その突端から赤水が噴き上げた。

「逃げ切れなかったのは……俺か」

シバはどうと地に臥し、そのまま果てた。

遮るものがなくなったその先には、弓を携えるタチがいた。

雑草のごとき蓬髪や髭はさっぱりして、今や別人だ。

タチは低く言った。

「裏切り者は生かさねえ。それが海の掟だ」

タチの背後に、二頭の馬を連れた大男が近づいた。

「そのセリフはこれで最後になるんだろうな？」

タチの肩がびくつと跳ねた。

「も、もちろんスよ師匠！」

「それより手当だ」

熊楠はバクと蛸の応急処置をすませると、三人をタチに預け、線路に咲いた一輪の矢羽のほうへ歩んでいった。

タチは意識なかばのバクを一人馬に乗せ、自身は女二人ともう一頭にまたがり、熊楠を待った。

熊楠はうつ伏せの男を見下ろした。

「孫を殺し、ニコをわが物にする機会は何度もあったはずだ。我欲の塊のような貴様が、義手一つの恩にこだわっていたとはな」

熊楠はシバを抱え上げた。

「海に還って出直してくるがいい」

亡骸は崖下の海に消えた。
二頭の馬は村へ急いだ。

10月4日

バクは病室で目覚めた。

秋の優しい西日が足もとを温めていた。

四人部屋。ベッドは一つ空いている。

正面に蛍の顔があつた。先に起きていたようだが、まだ目が一本線だ。隣のルウ子は無傷のくせにまだ泥眠している。

深手を負つてからのことは、なにかもつる覚えだった。坂道を登り切り、森を抜けると、小麦色の絨毯が広がった。はじめて見るのにどこか懐かしい感じがした。白衣の男となにか一言二言交わした。先生の顔は絞りたての真夏のＴシャツみたいだった。

思っていたより傷は浅かったのか、それとも先生の腕の賜物が、トイレくらいなら一人でも行けそうな気がした。

バクは布団をめくると、もぞもぞと起き上がり、スリッパをはいた。

病室は空気を入れ替えるためか、ドアを開け放してある。

廊下から女たちの声が近づいてきた。

「クツ、まだまだ……」

これは昭乃の声だ。すぐにも駆けて行きたかったが、急には動けない。

棒が倒れたような音。

「だめですよ、無理しちゃ。練習は三十分までって言われたでしょ？」

これは熊楠が育てたという新米看護師か？ それにしてもどこかで……。

「ダメ？」

「少女の目をしたって無駄です」

「！」バクはバツと立ち上がった。「イツツ……」

あまりの痛みに腹を押さえるしかなかった。

「一摩さんより厳しいな」

昭乃のため息。

イスがきしむ音。

車輪が床をする音。

病室の出入口に昭乃の姿が見えた。

昭乃はバクを見つけると微笑んだ。

「起きたか」

そこでぴたりと車椅子が止まる。

昭乃は続けた。

「あれからずいぶん苦労したそうだな」

「ま、まあな。っていうか昭乃」

「うん？」

「まさか……歩けるようになったのか？」

「夫と手を繋いで歩きたい。私はひたすらそれだけを願った。先生はよく言っていた。奇跡の決め手は医師の力ではなく」昭乃はぎこちない手つきで胸に手をやった。「『意志』の力にあっただのと」「それを言うなら」バクは頭突きの真似をした。「『石』みたいなガンコさじゃないのか？」

昭乃はしらっと目を細めた。

「おまえもそんなくだらんことを言うような歳になったか」

「ちよつと乗つかってみただけだって」

二人は笑った。

車椅子はなぜか止まったまま、それ以上進もうとしない。

昭乃はじれったそうにふり返った。

「なにをしている。恥ずかしいのか？」

「だ、大丈夫です」

車椅子の脇から白衣の女が現れ……。

ナースキャップを外し……。

おさげ頭を露わにした。

「おかえりなさい、バク」

「ミーヤ！ ゆ、幽霊じゃないよな？」

「さわってみる？」

ミーヤは歩み寄ると、潤んだ瞳でバクを見上げた。

バクは抱きしめた。

「ミーヤ……」

「バク……」

言葉も、ふるまいも、それで精一杯だった。

光が満ちてなにも見えない。

真っ白だ。

喜び、安堵、そして苦悩の記憶…… 昂ぶる三つの原色が一つに重なりあっていた。

白んでいた視界が少しずつ晴れていく。

二人は唇を重ねた。

それがあまりに長かったせいか、騒ぎで目覚めたルウ子が野次を入れた。

「世界を二人だけのものにしないでくれる？」

そこでようやく、バクとミーヤは我に返った。

ルウ子は続けた。

「ほつといたら、そのままそこでベッドインしそうだったわ」

二人はそろって赤い顔を下に向けた。

バクはミーヤに訊いた。

「処刑されたって聞いた。いったいどんな魔法を使ったんだ？」

ミーヤが口を開きかけたとき、廊下のほうから男の声がした。

「私はそんなことを言った覚えはないぞ」

白ずくめの熊楠が車椅子を押しながら入ってきた。

「は？」

「私は『ミーヤの最期は見えていない』と言っただけだ」

熊楠は事情を語った。

彼がそう言うのも当然だった。ミーヤを窮地から救ったのが彼自身なのだから。

「知ってて……黙ってたのかよ」

バクは大粒の雫を床に落とすと、ミーヤを再び抱き寄せた。

熊楠はあたふたと両手の平を見せた。

「す、すまん。言えば二度と口をきいてやらんと、昭乃に脅されていたのだ。君を村に連れてくるなら、どうしても驚かせたいからと」

昭乃は激しくかぶりをふった。

「ち、ちがう！ 私は百草先生に入れ知恵されたんだ」
そこへ百草が入ってきた。

「妙だな。私は熊楠君に相談を受けたんだが……」
むなしい責任のなすりあいだった。

なぜなら、そのときすでにバクとミーヤは……。

11月28日

バクとミーヤの再会から二ヶ月。

統京で情報収集を続けるタチから便りが届いた。

列強軍団は難なく本土上陸を果たした。孫と電気を失ったNEX A軍に戦う意思はなく、NEX A本部は無血開城となった。

『科学帝国日本』が世界支配の野心を抱いている、というのは軍拡のための建前で、彼らの真の目的はルウ子を読み切ったとおり、マスター・ブレイカーなるものをその手に、発電の利権を独占することにあつた。

軍人たちは母国と変わらぬ停電の国に戸惑っていた。諜報員が命がけで送った報告書や写真はいったいなんだったのか。調査隊の結成が急務だったが、上陸した国々の間で牽制合戦がはじまると、互いに身動きが取れなくなっていた。

そんなとき、世界中の新聞に上陸作戦時の写真が載った。

見出しは『大義なき侵略』

非列強諸国はおるか、出遅れた列強国までもが態度をがらりと変え、この事件を痛烈に非難した。侵略者のレッテルを貼られた国々の立場は悪くなる一方だった。

そして当月25日、ついに全軍撤収命令が下った。日本に駐留していた軍隊は、マスター・ブレイカーを手にするどころか、その存在の真偽さえ確認できずに母国へ引き返していった。

列強が日本上陸を果たして間もない頃、世界各地で離島海軍の船が目撃された。欲に目が眩んでいたのか、列強首脳はその報告を「些事である」と歯牙にもかけなかったという。

11月29日

その日の晩。バクと蛍の全快を祝い、近所の住民を集めて宴会が催された。

その席でのこと。

酔いのまわった蛍は、仲むつまじいバクとミーヤを物欲しそうに眺めていた。

「いいな……」

蛍は人差し指をくわえた。

「あなたには、あたしがいるでしょ？」

ルウ子はその指を取り、「はむ」とくわえた。

蛍はバツと身を引いた。

「えええええっ！？ ル、ルウ子さんて実は『そいう』趣味だったんですか？」

「バーカ！ あたしにはまだやることが残ってんのよ。自動的にあんなも道連れ」

「は、はあ……」

「それが一段落ついたら、オトコを探してあげるわ」

11月30日

ルウ子と蛭が忽然と姿を消した。

今朝、ミーヤが二人を起こしに宿舎の部屋を訪ねたとき、そこはすでもぬけの殻だった。

ミーヤは宿舎前に人を集め、搜索にあたろうとした。

そこに、一枚の紙切れを持ってバクが駆けつけた。

バクが酔いつぶれて眠っている間に、ルウ子が懷に忍ばせたよう
だ。

それはたった三行の短いメッセージだった。

死に満ちた世界へ行ってきます。

あんなたちも、生きのびてね。

ルウ子（with 蛭）

夕方、タチから便りがあった。

ふた月前の大停電以来、首都圏は混乱を極め、食料をめぐる争い
事が絶えない。

人々はそろって同じことを口にしていた。

「第二次パワーショックがはじまった」と。

エピソード

2057年5月6日

ルウ子と蛭が、バクたちのもとを去って六年と半年。

バクは二十九、ミーヤは二十七となった。

田之崎村の周囲にそびえる高い石垣。のどかな山村の風景はすっかり殺伐とした要塞に変わっていた。

孫と和藤の死後、大黒柱を失ったNEXAは一年もたたずに解体となった。NEXAとの癒着を深めていた新政府の権威も完全に失墜。中央政府に見切りをつけた地方はそれぞれ独自に政治を行うようになり、事実上、日本は四十七にも及ぶ小さな国々に分かれてしまった。

年を追うごとに偏りが増す天候。豊作凶作の年差や地域差は広がる一方だった。飢えが生じた地域の周辺には、必ずといっていいほど争いがあった。

国境に近い田之崎村は狙われるほうの立場だった。

その日もバクとミーヤは矢倉に立ち、石垣の周囲を監視していた。山賊なのか隣国の斥候なのか、怪しい人影が森の木陰にちらほらと見える。

東北の龍虎將軍と恐れられている、熊楠夫妻の目の黒いうちはまだいい。だがこの先、田之崎がいつまで持ちこたえられるか、わかったものではない。

バクは双眼鏡から目を離すと、言った。

「まるで戦国時代だな」

半年に一度くらいは同じことを口に出している。わかりきったことなのだが、言わずにいられないのだ。

ミーヤは言った。

「それでも、ニコと契約しなかったのは正解だったと思う」

「そりゃあ、そうだけどさ……」

大きな力を扱うにはそれに釣りあう抑制が必要だが、人の心の進化は科学の発展ほど早くはない。ミーヤの言葉が道理なのはわかるが、それでもバクは浅はかな望みを捨てきれなかった。人々が努力を惜しまなければ、人が飢えず破壊もない社会だって作れないはずはないと、心の底では信じていた。

それはそうとルウ子だ。六年以上も音沙汰なしとは、彼女にしてはあまりに大人しすぎる。手紙にあった『死に満ちた世界』とはいったいどこを指しているのか。孫の最後のメッセージを解読してそこへ渡ったのだろうか……。

矢倉の下から昭乃の声がしたので、バクは地面を見下ろした。

昭乃はリハビリを半年前に終え、有事に備えて日々武芸に励んでいた。もう一つの大事なことにも励んだらどうかと、昭乃は村人によく冷やかされるのだが、「子供に武器を持たせたくはない」の一点張りだった。

「タチから便りがあった。『チーム地球』の協力を得て、このたび統京に新たな政府が立つそうだ。先週、日本の四十七国の代表が集まり、国家統一を宣言した。戦国の世は終わりだ。首相も内閣もすでに決まっている」

「政府だったって、どうせまた綱渡りの半軍市政権だろ？」

「いや、今度のは案外しつかりしているようだ」

「ふーん」バクは一応は信じてやるという顔をした。「で、チーム地球ってなんだ？」

「さあな」

「さあな……って、どんな組織くらい書いてあったんだろ？」

なにを思い出したのか、昭乃は額にびきつと青筋を立てると、いきなり怒鳴りだした。

「ともかく、百聞は一見にしかずだ！ 来月、統京で世界同時中継による重大発表がある。おまえたち二人には、村を代表してそれを

見てきてもらっ」

「は？ 中継？ 発表？」

「たしかに伝えたからな！」

昭乃はどすどすと地響きをたてながら去っていった。

喜ばしい一報だというのに、いつたいなにが気に入らないというのか。

わからずじまいのまま、月日は流れた。

6月3日

「ナントカビジョンっていうのは……あれか？」

バクは新統京タワーの中腹、大展望台の壁面を独占する大きな平板を指した。

「東西南北に同じものが一つずつあるよ」

ミーヤは『統一政府』が発行したパンフレットを見ていた。

日はすっかり西に傾き、コンクリートの林を琥珀色に染めていた。集合時間は日没後とあり、バクたちはそれにあわせてタワー下へやってきたのだった。

タワー以外の旧NEXA施設群はすべて解体撤去され、そのスペースは広々とした公園になっていた。そこにはバクたちと同様、緊急中継の知らせを受けた地域の代表者たちが続々と集まってきていた。公園はタワーを中心としてすり鉢状の階段が広がる、太古の劇場を平たくしたような造りだった。

「この辺にすわるっか？」

ミーヤが言うと、二人は段差の上に腰を下ろした。

日が沈み、辺りが暗くなってくると、そこらじゅうにかがり火が灯った。

『あ、あー、きこえますかあ？』

突然、耳をつんざく大音量が響き渡った。女の声だ。

割れと残響が著しいその音は、明らかに生声ではなかった。

『えー、皆さま。誠に恐れ入りますが、カウントダウンをお願いします』

「なんだって？」

バクは思わず聞き返した。

『さん、にい、いちい……』

脳天気な独りカウントはそこで途切れた。

沈黙。

「？」

バクとミーヤは顔を見あわせた。

『えっ？ ご挨拶が抜けてる？ は、ひゃ、ごめんなさい！』

女はそばにいた男と台本の確認をはじめた。本人は声をひそめているつもりなのだろうが、その音は増幅されて、数万の耳もとにすつきり届いていた。

『えー、失礼しました。わたくし、チーム地球の報道官を務めさせていただいております、松下蛭と申します。さて、今日という日を迎えるにあたって私たちは、紆余曲折、意匠惨憺、粒々辛苦……ん？ つぶつぶ？』

ガサガサと紙をめくる音。

「け、蛭？ あの蛭なのか？」

バクは目をこらすが、遠すぎてよくわからない。

蛭はマイクを手にしたままさやいた。

『これ、なんて読むんでしたっけ？ えっ？ 時間が押してる？ 私のせいですか？ ひああ……』

薄い本がパシと閉じる音。

『えっと……と、とりあえずスクリーンをご覧くださいっ』
ざわつく聴衆。

「つたく、カウントダウンはどうなったんだよ」

バクが蛭の醜態を嘆いていると、ミーヤがスクリーンを指した。
「な、なんか映ったよ？」

真っ黒だった平面に、突如として砂漠の景色が広がった。

人々は画の内容よりもスクリーンの明かり自体に驚き、歓声をあげた。

バクはそれでようやく実感した。

そう、電気が復活しているのだ！

茫漠とした鳥瞰だった。どこまで行っても砂しかない。生き物などとても住めそうにない土地だ。日はまだ昇ってまもないようで、灼熱地獄というよりは、夜の間に冷えきった大地を焙っている最中といった感じだ。

バクは言った。

「あんなの映してどうしようってんだ？」

ミーヤが画面を指した。

「あれ、なんだろう？」

一ヶ所だけ極端にコントラストのちがう、黒光りする湖のような広がりがあった。

そこにカメラが寄っていく。

正体は太陽に顔を向けた無数のパネルだった。よく見ると、透き通ったドームが敷地をすっぽり囲んでいる。砂防用なのだろう。

カメラが地上に切り替わる。

巨大パネルの足もと。画面の右側から金髪の少女が現れた。

「あーっ！」

バクとミーヤは同時に叫んだ。

少女は一礼した。

『どうも橋本ルウ子です。一部の人は知らなかったと思いますが、三年前からチーム地球のカントクやってます。えっと……本日もちまして、すべての国と地域に電気が行き渡りましたので、ここに世界電力の復活を宣言します』

水を打ったような静寂。

バクもミーヤも、あまりに唐突の知らせに言葉がない。

ルウ子はなにも変わっていないかった。顔の左右に黄金の竜巻を装

備。紺色のブレザー。挑発的に短いチェックのスカート。瑞々しい太腿に走る傷痕。十二年前、NEXA所長室での屈辱の『初対面』。六年前、泡まみれのジョッキ片手に蚩とじゃれあっていた最後の晩写真の中から飛び出してきたのかと思えるほど、あのときのままだった。少なくとも見た目は。

バクはそれがうれしくもあり、少しだけ哀れにも思えた。
ルウ子は片手を広げた。

『そこにあるのはすべて太陽光発電のパネルです。知つての通り、太陽光は環境負荷が少ないクリーンなエネルギー。なるべく自然を壊さず、それまでどおりに電気を使えるのなら、それに越したことはない』

聴衆は聞き入っている。
ルウ子は続けた。

『みんな頭ではそれをわかつてる。でも国家とか人種とか宗教とか個人の都合とか、いろんなしながらみが邪魔してる。そこであたしは、何人^{なにじん}だろうと何教だろうと何歳だろうと長者だろうと一文無しだろうと、気持ちさえあれば誰でも参加できる『チーム地球』を設立し、このプロジェクトを取りまとめました』

「取りまとめた？ 脅迫したとか強制したのまちがいだろ？」
バクのツツコミにミーヤが苦笑いした。

『人材や物資は集まった。問題はパネルをどこに展開するかだった。そこで白羽の矢が立ったのが、砂漠。こんな死に満ちた世界に人を生かす種が隠されていたなんて、世の中まだまだ不思議なことだらけよね』

聴衆は見入っている。
ルウ子は続けた。

『で、そんなペラペラの板で世界の電気をまかなえるのかって？ 驚くなかれ、世界にある砂漠のうちの五パーセント。たったの五パーセントよ。そこにパネルを置くだけでいいの』
信じられないという聴衆の顔、顔、顔。

人類史上最大ともいえる大偉業を、クラスの委員長が教室で語ることのように、さらっと口にするルウ子。その陰でいつたいどれほどの苦勞があったのか、あの李すもてのような幼顔からはなにも感じ取れない。

ルウ子は断じて天才ではない。俗にいう学力で測れば（本人には悪いが）見た目どおりだ。それでもたった一人、たった一つの机からNEXAを興し、数々の挫折を乗り越え、ついには地球全体をホームグラウンドにした巨大な『チーム』まで作り上げてしまった。闇に埋もれた世の中に、まばゆい陽光を投じることができたその根底にあるもの。それは優れた論理でも山のような札束でもない。太陽さえ火傷しそうな『熱い心』だったのだ。

不意にルウ子は視線を落とした。

『ここで一つ、非常に残念なニュースがあります』
聴衆のざわめき。

『先日行った、史上最高性能の地球シミュレート実験で、あたしらが一番恐れていたことが確定的になった。今やそれを疑う学者はいない。どんな楽観主義者も、どんなへそ曲がりもよ。今後の発展を禁じ、現状の文明活動を維持したとしても、人間が遺した数え切れないほどの破壊分子の影響で、人類は……』

ルウ子はうつむき、声を沈ませた。

『あと三百年と保たないの。次のミレニアムは迎えられないのよ』
ざわめきがぴたりと止んだ。

ルウ子は顔を上げた。

『だけど絶望するのはまだ早いわ。人間には知恵がある。科学がある。科学の力で乱れた自然を良いほうへ変えていくことはできる。でもその前に一つ、変わるべきことがあるの。』

科学はこれまで、人を生かすためだけに在るものだった。だから自然とは真っ向対立するハメになった。環境に良かれと思ってやっていることでも、その環境っていうのは、めぐりめぐってみればみんな自分のため、人間の都合のため、種族保存のため。それは獣が

やっていることと一緒に。人間も獣だってことの証拠。

これまで、おおらかなるこの惑星は、人間がまだ獣であることを免じてくれていた。だけど、免許の有効期限はもう残り少ないらしいわ。しかも更新できないときてる。あたしたちは、これから一つ上級の免許を取るしかないのよ。

上級だからって怯むことはないわ。まずは、そうね……近くの山や塔のてっぺんから、自分の住んでいるところを見下ろしてごらんなさい。ただ、ぼーっと突っ立ってるだけじゃダメよ？ あたしがさっき報告したこと、人類はあと三百年しか保たないってこと、目の前の景色と重ねてみるの。きつと、あなたの中でのなにかが変わると思う。でも、それだけじゃあ間にあわないし、それどころじゃない人たちもいる。というわけで……」

ルウ子は満面の笑みを見せつつ、さりげなく片手を背中にまわした。

突如、すべての画面が暗転した。かがり火の仄かな揺らめきだけが残った。

バクは声をあげた。

「な、なんだ？ また停電か？」

ミーヤがくすつと笑う。

「ちがうよ。ルウ子さんがアレを……」

「ああ、アレね」

この放送は世界中に流れている。今この瞬間、各地で戦慄が走ったにちがいない。

画面は再び、砂漠とパネルとルウ子を映した。

『今後、世界電力の半分は、『地球のための』環境修復と『人間のための』飢餓救済に使うことにします。今日の話を踏まえてもなお、不服があるなら、カントクのあたしに直接電話しなさい。ただし、その前に一つ言うておくわ』

ルウ子は腰にぶらさげていた水筒の水を口に含むと、続けた。

『テレビ見たい。エアコンつけたい。部屋を明るくしたい。指先一

つ荒れない楽な暮らしをしたい。その気持ちはわかる。でもね、それは住むところがあってこそなのよ。生かしてもらえる大地があってこそなの。地球は人類の大家だつてこと、忘れて欲しくないの。それでも、どうしても贅沢を我慢できないっていうのなら……」

ルウ子はびしとカメラを指して叫んだ。

『それに見あう家賃を地球に払いなさい！』

続けて低く言った。

『あたしの言いたいことは、それだけよ』

聴衆から疎らな拍手があつた。それは徐々に会場全体に広がっていき、一人また一人と立ち上がり、最後にはその場の全員が立つて大きな歓声をあげた。

バクは拍手を続けながら言った。

「まったく、たいした人だよ」

ミーヤはうなずいた。

「かなわないよね」

『ゴホン。えー、最後に私事で恐縮ですが……』

「うん？」「え？」

二人は改めて画面を見つめ直した。

ルウ子はカメラめがけて突進すると、両手でがしっとフレームを押さえつけた。

『バク！ ミーヤ！ 戦いは終わったんだから、さつさと子供作つてこつちに一度連れてきなさい。砂の海ばかり見てたって退屈でしょうがないわ！ 以上。ルウ子でした』

ルウ子の特大の笑顔を残し、画面は暗転した。

「あんのバカ！」

バクは額に手をやり、ぐったりとうなだれた。

「……」

ミーヤはバクの背中の裾をツツと引っ張った。

「うん？」

バクは顔を上げ、ふり返る。

「……」

ミーヤは潤んだ瞳でバクを見上げるだけだ。

二人はしばし無言で見つめあった。

「わかったから、そんな目で見るなっ」

バクは笑いながら片手を差し出した。

ミーヤは笑いながらその手を握った。

そして、二人は家路についた。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172f/>

パワーショック・ジェネレーション

2010年10月8日11時16分発行